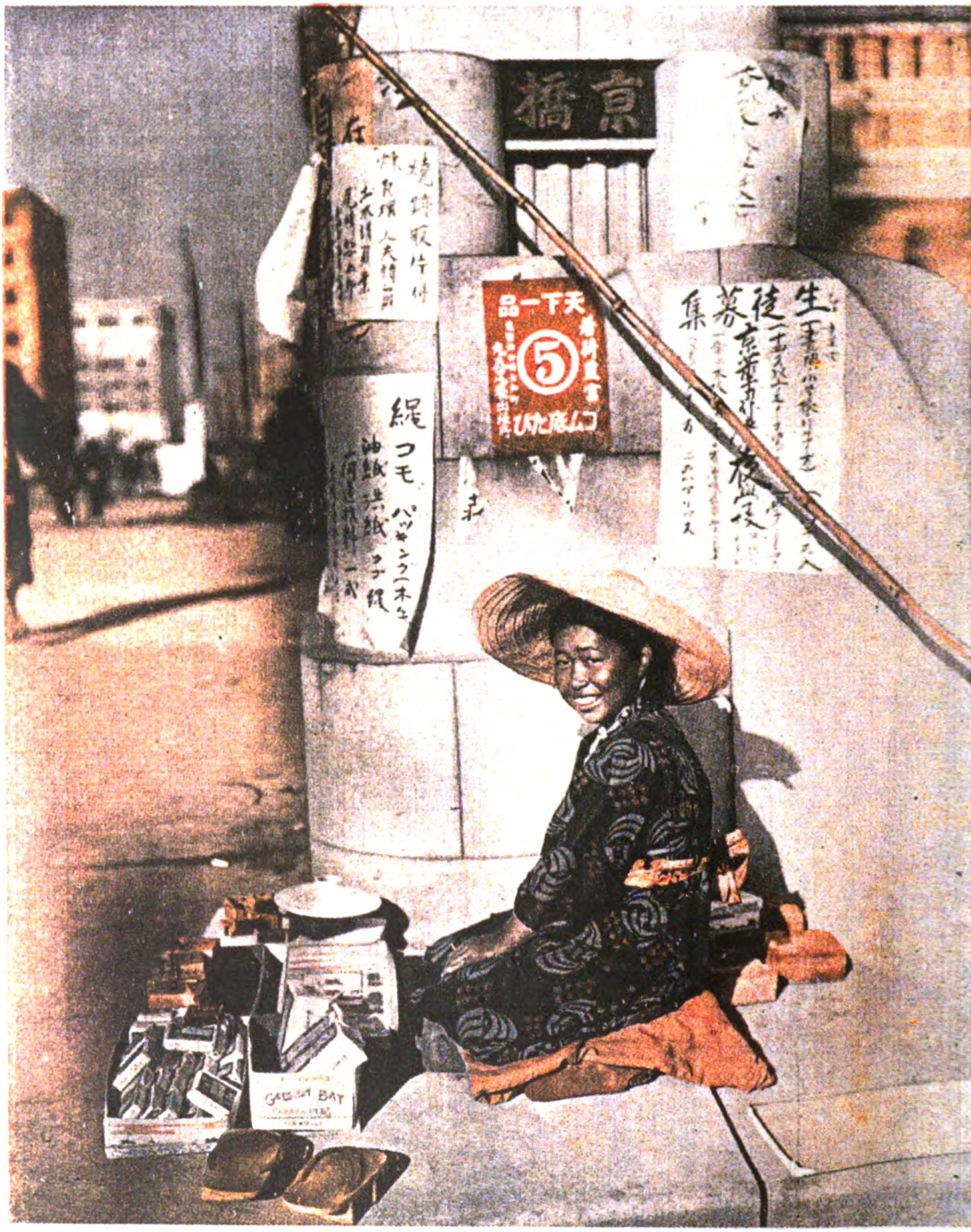
女性改造

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十二年十一月一日發行 大正十二年十月十三日印刷納本



第二卷第十一號

新東京號

感想文を募る

左の標題で感想文を募ります。新春にはそれにふさはしい情緒が動いて來ます。焼野の春にも若人の胸には美しい情調が惠ましく育つて行きます。過ぎこし方を振り返り、また來らんとする日を思ふとき　數知れぬなつかしい人生の愉悦や、心に泌みる哀愁が湧いてまゐります。その感じを思ひのまゝに、いつわりなく左の規定でかき送つて下さい。但し内容も表現も出來るだけ洗練されたものであつてほしい。原稿は新年號の本誌で發表します。

十一月廿三日が締切りです。

1. 感想　春宵戀を思ふ（四百字十枚以内）

2. 新年にふさはしい小話（四百字五枚以内）

尙ほ入選者は一枚一圓以上の薄謝を呈します。そして應募原稿は一切返却いたしません。

女性改造文藝係



女性改造　十一月號目次

女性改造新

見よ新春號の大偉觀を

男女關係の新標的

長谷川如是閑　千葉龜雄
平塚らいてふ　鷹野つぎ
佐藤春夫　久米正雄

男女關係の問題は殆んど行詰まつて來ました。その標的を新らしく何處に求むるかは大正十三年初頭の第一問題でなければなりませぬ。藝術家の新らしき立場より、そして新らしき婦人の立場より性道徳の目標を何れに求められたか。この六先覺者が各自の立場より徹底的論議を上下された一大議論は皆

新年號豫告

さんの行かれる道を明かに敎へています。新春雜誌界の讀みものとして此上なきものです。

童貞聖母……和辻哲郞

「肉交に於て女の尤も深い墮落がある、愛に於て女の最高なる昂揚がある、女が肉交を要求して、愛を要求しないことは、女が墮落を欲して高めらるゝを欲しないことを意味する。」と氏一流の哲學的立場から、一言一句滴るが如き名筆と、眞實を以つて最も高い意味の婦人解放を絶叫された名文であります。

其他、創作欄には久米正雄、武者小路實篤、宇野浩二諸氏の雄篇が登載され錦上更に花を添ゆるものがあります。

女性改造編輯部


明治神宮外苑のバラック



バラック圖書館の兒童室



上野の婦人救護團と哀兒



被服廠跡四十九日大法會



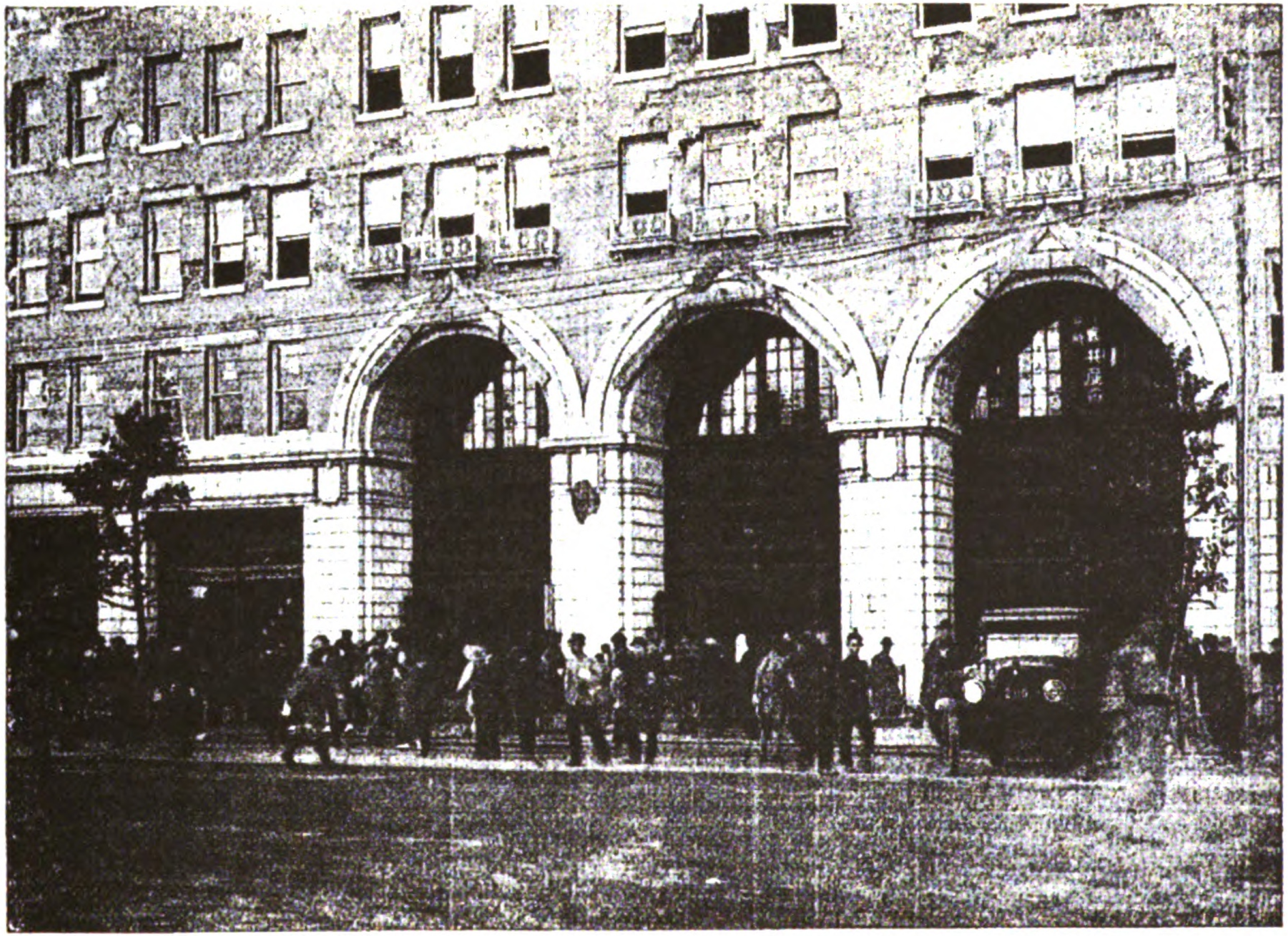
日本橋復興市街の瞰下



日比谷バラックの裏側



人足繁き淺草の仲店



新東京丸の内ビルヂング



死とその悲みに就て

柳宗悦

一

之はさゝやかな思想の贈物に過ぎない。だが私と共に今度の出來事に於て、悲しい思ひ出を持つ人々に捧げようとて書いたのである。私は此小篇を只理論の道を通じてはなしに私に與へられた一つの夢語りを以て書き起そうと思ふ。

千九百二十三年九月十九日の朝まだき、私は次の様な場面と次の様な會話とをはつきり夢みる事が出來た。

見ると一人の母が子供をかき抱いて、素足のまゝあはたゞしく逃れて來る。そうして路邊にあつたあの半跏する觀音の前まで走り寄つて、聲にふるえ乍らこう哀願した。

「觀音樣、觀音樣、追手が迫つて參ります、どうぞ私達をおかこひ下さい。」

「おう、それでは早く私の此經筒の中に匿れて下さい。」そう云はれて親子をすぐ誘ふとなされた。

だが母は尚も不安な面持ちを以て更に訴へをつゞけた。

「限なく搜す追手は、やがてそこをも見出すで御座いませう。私はこの兒を想ふて悲ふ御座います。」

「おゝ、それは私にも悲しい。」觀音樣はかく云はれて、こん度は母子の二人を自らの「悲み」の中に包んでやられた。

――こゝ迄夢みた時、私はその母が背めたと思はれる同じ溫さと柔かさと、そうして限りない安堵の悅びとを味ひ、その嬉しさに夢は破れた。敵はもう親子を苦める事は出來たい。なぜなら苦めれば苦めるほど、彼等を守護する溫い「悲み」の衣が彼等を厚く包むからである。短い夢ではあるが、私は今も此物語りを慕はしく思つてゐる。

私はその頃罪の問題に就て思ひ惱むでゐたのであるから、「追手」を罪の勢ひとも又は惡鬼の群とも考へ得るであらう。併し私は今その「追手」を「死」になぞらへ、死から脫得れない人間の運命が如何にして救はれるかに譬へてみたいのである。そうして神が私達の爲に注ぐ「悲み」の心に私達が如何に慰められ守られ、そうして死にすら破られない喜悅が如何に與へられるかを考へてみようと思ふ。

二

「私は神を信じる、だが彼の世界を認許しない。」ドストイエフスキーは彼の「カラマゾフ兄弟」の中に此言葉を挿んだ。許し難い矛盾ではあるが、犯し難い現實の言葉である。凡ての安逸な信仰は此句の前には力を持たない。それは彼の深刻な苦悶からしぼり出た言葉である。目前に悲慘な光景を見る私達は、如何に彼の句が眞實さを含むかを感じてゐる。此處に

現はれる矛盾は小さく醜いものではない。そこには偉大さがあり眞摯さがある。私は多くの信徒の小さな完全な言葉よりも如何に矛盾に於ても偉大である此句を慕はしく思ふであらう。容易な表現に於て樂天的思想を語るのは、彼に深き苦悶がないしるしだとさへ云ひ得るであらう。現世は無常な風から離れる事は出來ぬ。ソロモンが歎じた樣に空の空であるとさへ云ひ得るであらう。世は悲しさではないと誰が云ひ得るであらう。寂さと苦さとの絕えまない反復が吾々の一生を暗くしてゐる。現世の何處に常住なものを求め得よう。世を呪ひ世を厭ふ者の聲をそしる前に、私達は彼等に送るべき淚を用意せねばならぬ。如何に多くの此世の事は淚を待ちつゝあるであらう。愛憐の念に溫められずしては此世に活くる事が出來ぬ。淚なき思想をまことの思想と呼ぶ事は出來ぬ。

私は此非常時に於て、運命が何ものであるかを考へてゐる。古き問ひが新な切な問ひとして私達の前に開展する。私達の運命は豫期し得ない未來に托されてゐる。誰も次の瞬間を保證する事は出來ぬ。確實に保證し得る論據は一つだに手に握られてはをらぬ。只それは望ましき「見込み」に賴りつゝあるに過ぎぬ。巨大な自然に向ふ時、私達が占める空間と時間とは如何に意味淡く思へるであらう。私達が用意なきうちに死は私達に用意される。生きたいと思ひ生かしたいと希ふ心を自然は常に受けてはくれない。吾々の存在は宿命によつて定められてゐる樣にさへ感じられる。死は何ものをも顧慮せずに人と人とを別れさせる。誰も離別の苦みを味はずして一生を過ごす事は出來ぬ。而も一つの死は一切を暗からしめる勢ひをさへ伴ふのである。生きると云ふ事には苦むと云ふ事さへ意味されてゐる。

かくて死が何であるかと云ふ事は、生が何であるかと云ふ事に書き改められる。私達は此生死の問題から自由になる事は出來ぬ。だが私達は此世の苦悶が何を意味するかを顧みねばならぬ。顧る心を許されてゐる事を悟らねばならぬ。此苦から何が生れて來べきであらう。苦みに於てのみ苦みを殺さずそれを活かす術はないであらうか。私達は自然が私達に與へるものを疎かにしてはならぬ。それを見棄てる前に、その意味を尋ねゝばならぬ。かくする時私達は思ひがけなくも、深き

攝理がその苦みにさへ潜む事を見出すであらう。若し生と死とより起る問題がなかつたら、人類は「永遠」の問題に冷となつたであらう。無常なる事實は、常住なるものに私達を誘ふが爲ではないだらうか。それは私達を無限な世界へ繋ぐ機縁ではないか。深き宗教思想を省る時、それがいつも無常觀に發してゐるのを知る事が出來る。光ある信仰は、暗い問題の試煉を經由してゐるのである。苦みの中より生れでない悦びは、眞の悦びではあらぬ。かゝる悦びにどうして人類を慰め得る力があらう。だが一度それが涙によつて洗はれる時、それは人を希望に誘ふ。「此世界を認許しない、」此叫びを經ずして、どうして此世界を認許し得るであらう。絶望こそ希望の産みの母である。福音は悲哀への福音であつて、悲哀にそむく福音ではあらぬ。私達の安息は淺き保證によるのではない。その靜なる安息こそ、強く荒い苦みに鍛へられてゐるのである。安息は安逸ではあらぬ。眞の悦びは悲みなきび悦びではあらぬ。悲みを抱く悦びである。

三

死にし人々にとつては、殘る人々から贈られる涙が、どんなにか嬉しいであらう。果ない存在の記憶は只それ等の人々の心によつて守られてゐる。私達とても悲さや苦さがなかつたら、かくも切に故人を想ふ事は出來ないであらう。涙こそは記憶を新にしてくれる。悲さに於て、此世の魂と彼世の魂とが逢ふのである。死は苦しい出來事である。だが自然は不思議にも悲みの心を私達に與へる事によつて、此世の苦さを慰めてくれる。人は限りなき幾つかの惱みを嘗める。だが自然はその惱みを省る心をも與へてくれる。悲さや淋さの心が此世になかつたら、吾々の運命は如何ばかり殺伐なものであらう。自然は時として酷いが、同時にそれを償ふ溫さをも半面に忘れてはゐない。逝く者は默する、だが殘る者はその魂に向つて叫んでゐる。死す者の血は冷になるとも、弔ふ者の心によつてそれが溫められる。大きな同情を促す事なくして大きな苦痛が現はれる場合はない。充さるゝ事なき缺亡は此世に許されてをらぬ。

吾々はかくして次から次へと人情の緒を引いて此世の旅路を進んでゆく。併し人情には限りがあるとも感じられるであらう。そこには多寡があり强弱がある。いつかは忘却の幕に被はれる。出來事であるかもしれぬ。だが人間のみが死の淋しさを守護してくれるのではない。もう一つ他に永へに變る事なく慈憐の心を注ぐ者がある。その涙は限りなく、その悲さは終る事なく、その溫さは盡きる事がない。かゝる者が無常な私達の一生を守護してゐる。それは既に限りなき力であるから此世のものではあらぬ。私は愛としての神の心を語つてゐるのである。

多くの死は徒死であつたと思へるかもしれぬ。特に恐るべき此災害に際して、その死は酷く且つ哀れである。だがそれ等は神の愛から見逃される場合があらうか。その死が物哀れであればある程、神はその慈念を深めてゐる。神は人の苦しき訴へを待つてはゐない。待つよりも早くその苦しさに深き心を用意してゐる。悲む者は慰められると聖書は記した。而も悲む者の幸ひをさへそれは保證した。此言葉に誤りはない。神は凡ての死を彼の慈念に於て攝取する。悲惨な此世の無常の風に、虐げられる運命であると知れば知るほど、神は彼の心に於てその命數を守護してゐる。神は既に慰める事を用意せずして、人に苦みを與へる事を許してはゐない。人はあのマリアを涙ぐましきマリアとして畫いた。誰が云ひそめたのであるか、あの觀音を悲母觀音とさへ呼んでゐる。彼等は凡てもの想ひがちな風情ではないか。

多くの私達は此驚くべき秘密を知らないでゐる。私達が神を忘れる時も、神は私達を覺えてゐる。死に於て人々は屢々神を呪つてゐる。併しそれは神の心を知らないのである。この苦界を逃れ得ないからこそ、神は吾々の爲に救ひを常に準備してゐる。此世に於て最も深く神を讃美し得る時は、苦悶のさ中に於て與へられる。

生死の二は此世の事に過ぎぬ。神が私達の爲に設ける住家は永劫の住家である。死によつて私達は無常に終るのではない。無常な死によつて、常住な世界に移るのである。死は此世の出來事であるが故に、そこには多種があるであらう。或場合は平和であり、或場合は苦く酷いであらう。併し神は凡ての死を一種たる永劫の安息に攝取するのである。この死に

苦みや寂さが伴うほど、神に更は彼の完き慈念を準備する。彼は活かす事を約束せずして人間に死を許してはゐないのである。

死に旅する者は歸り路を持たぬと云はれるかもしれぬ。そうして凡ての者は歸る事なき此旅に出で行かねばならぬ。だがそれは此現世に歸らないと云ふ事に過ぎぬ。此世に於ける生活のほか何處にもまことの生活がないと誰が云ひ切るのであるか。私達は此死への旅を次の樣に云ひ改めねばならぬ。それは歸る事なき旅ではなくして、その旅が歸りの旅であると。人は此世が吾々の故郷であると思ふかもしれぬ。併しそうではなくして、此世こそ旅の家に過ぎぬであらう。吾々は往く旅に在るのではなくして歸る旅に在るのである。無常なものを越えて常住なものを慕ふのは、この秘義のまごう事なき現はれであらう。魂はいつも彼岸を慕ふ。無限を求めるとは無限に歸りたりき心を語るのである。神は私達に永劫な住家を與へる事なくして、それを慕ふ希ひを吾々に起させはしないであらう。此世に生れたのは、神に歸らんが爲に生れたのである。船は港に歸らうとて港を出るのである。死こそ歸り路の終りである。死に於て新な生への歩みが始まる。「吾れ等は活くるも死ぬるも皆主のものである。」

此信念にまさる死へのよき覺悟はあらぬ。「晨に道を聞くならば夕べに死すとも尚可である」孔子は敎へた。深い言葉である。神への信仰に於て、人は死に亂れない。吾等の心に悟入があるならば、即刻に死すとも尚幸ひである。天災に用意がないのではない、吾々に用意がないのが、凡ての苦悶の發生である。(一三・一〇・二〇)

國民性上の二疑問

千葉龜雄

一

世界審判の日を想はせるやうな九月一日からも、もう二箇月の月日は流れた。けふ此のごろの、底なしに澄み切つた藍瓶のやうな大空は、そして、叩けば音がしさうに靜まりかへつた碧空は、あの見るかぎりの世界を、鎔鑛爐に染めた日のあの大空と同じものであらうか。さちば自然といふものは、何といふ無邪氣で、殘忍で、氣がわりで、忘れつぽくて、暴虐で、しかもづうづうしいものであらうか。しかし、もしその大きな無慈悲な暴力の手に叩きつけられた人間達が、その日の恐怖本能から容易に立ち上ることが出來ないとしたならば、どこまでも暴虐な自然は、ますます得意氣に、その殘忍な冷笑を深めて行くであらう。またその盲目な暴力のあらびが、いかに弘大であつたとしても、單にそれを、測り知れない自然の意志だとしてもひたすらに畏怖するものがあれば、それは恐怖本能が自分でつくり出した、幻の影に共鳴するものに過ぎない。意志をもつものはたゞ人類である。自然ではない。かくしてけふこのごろの帝都人達が、必死にこびりついた當日の恐怖の映像を、深くその心理の中にひそめながらも、なほそれ以上の情熱と興奮をもつて、復興と新生の營なみに取りかゝつて居ることは、それでこそ、始めて、人類と時代の、ゆるぎのない力がそこにひそむことを思はせるのである。

一體が、悲哀と苦痛の記憶は、それが打擊された刹那が、いかに手ひどく、痛烈なものであつたにしても、たゞそれだけのもので、心理に占める領域を、それ以上に擴げはしない。單に量において擴がらないばかりではない。月日の立つに從つて、その質の濃さもだんだんと薄れて行く。なぜなら、記憶そのもの法則は、繰返しの程度によつて、その強さと弱さを定めるからである、なるほど世の中には、悲哀を深く噛

くみ、凝視することによつて、詩神を扶養して行く人々もある。詩人や藝術家がそれである。けれどもそれは例外である。多數人は、なるたけ苦しい過去を忘れようとする。だから力めてその記憶の再現をさけようとする。或ひはいはゆる甘い悲哀までに變型してまでも、せめてもの悲哀分子の直接刺擊をさけ、もしくはそれを薄らがせやうとする。

二

が、意識して、悲哀を薄らがせうとする直接の働きよりもより強く、間接にその目的を達せしめるものがもう一つ外にある。それは歡樂の記憶をもつて、悲哀の記憶のしめる領分を占領する作用である。

すべての生物は光りに向ふ。どんな生物が歡樂に向つて躍動しないものがあらう。裏海の盲魚と、もぐらもちを除くすべてのものは、みな闇にそむいて、光りに歡喜する本能をもつ。たとへばどんなにむごたらしい環境に陷つて居る人々であつても、それでさへ何ほどかの樂しい追憶を過去に持たない人々がこの世にあるだらうか。或はそのもつところの、わりあひに小さな悲しみの體驗を、大きな悲しみの前に對比し、そこに多少の慰めと歡びとを看出すことによつてさへも沙漠の綠泉を幻想するであらう。ましてや澤山の歡樂の記憶を過去に持つ人々にあつては、その記憶と印象を何んでも網膜の試驗臺上に再現して、どれほどでも擴大し、解剖しそれを理想によつて絕對の完全なものに仕上げて、その享樂にふけることをやめぬであらう。たとへば大震火前の東京市が、現に棲んで居た住民達にとつて、全く仕やうのない首都だと思はれ、そしられて居たにかゝわらず、一朝灰燼になりはてた今日においては、それが前に彈がいされた市民達によつて、さも世界に稀なやうな、完成文化の標本のやうに讃美されて居る。たとへばそこには「なくてぞ人は戀しかりける」流の、もしくは釣りおとした魚は大きい底の心理が、いく分か含まれてあるにしても、それよりも、悲哀に對照された場合の歡樂の印象が、實物よりも、ずつと誇大な容積をもつて人間心理におちかゝるところの、自然の錯覺の妥當性でなければならない。

悲哀と歡樂の二つが、人間心理に横はるところの、もつとちがつた本質は、悲哀は、それを人が記憶にすらも再現することをいとうにかゝわらず、歡樂は、單に記憶だけで享樂するに止まらず、更に進んで、それを現實の上に再現し、あくまでも昔日の歡樂を恢復しやうと渴望する、その努力にある。た

だ、個人でいへば年齢のちがひ、環境の差別によつて。また國民でいへば、國民心理と歴史的傳統のちがひによつて、その國民や個人やが、その各々の何れかに片よることは止むを得ないであらう。そして、その與へられた悲哀にうちのめされて、再び起つことを知らない國民と人類は、單に過去のみに執着するそれであるが、一方には、過去の歡樂を回想するにつけても、なほそれをより花やかに、現實と將來に再現しやうとする努力と情熱を持つ國民と個人がある。かれ等に取つてこそ、始めて高くめぐまれた光明があるのである。過去よりも現實に、現在よりも將來に、進み、信ずる國民と個人こそは即ちそれであらねばならぬ。そしてこの情熱は、そのもつ全部の過去の悲哀の氷點を、またたく間に、その歡喜の熱度でもつてとかし去つてしまう。即ちわれ等は、現在の東京市民において、明らかにこの心理の片影を認めることが出來るのである。云ふなかれ、生きねばならぬのは人類の約束だ。東京市民はこの場合において、生き死にの土たん場に追ひ詰められたものだ、どんなにしたつてかかる途に踏み入る外は無かつたのだと。つまり勇敢に、進一歩、この途に大踏歩するかいなかに、歡樂と光明の、幻影におどるものと否との差別があるのだ、もし東京市民が將來に絶望するならば決してから勇敢には起たなかつたであらう。そこに滅びるか、生きるかの差別があるといふのである。

三

けれども自分は、そこに復興心理の片影をみとめるとは云つた。全部を認めるとはいはない。なぜなら、今日は單に首都を復興することが問題ではない。いかに首都を新生し、復興するかが問題なのだからである。そして、いかに首都を復興するかは、要するに、それを復興する市民の本質が、いかに成り立つて居るかまでに還元される。その本質の完成が充分に見きわめの付かない限りは、單に無條件をもつて首都復興の將來を謳歌され得ないのは自然な話である。

といふのは、われ等はかの大震災といふ偶然の、しかし未曾有の大變災においてわが國民性、もしくは首都民性といふものの奥を、思ひもかけずにすつかり覗かせられたからである。そして、この思ひがけない偶然によつて、好むと好まぬにかゝわらず、最も正直で深刻な國民性の眞實に　いやでも應でも觸れさせられ、直面させられたからである。すると或ひは抗辯するであらう。非常時をもつて常時を律することは出來ない。偶然の現はれをもつて、平時を解剖することは多

くの誤まりの元であると。處がそれは大いに否なである。それには二つの理由がある。

第一は、日本國民の傳統道德と道德の植ゑ付けは、いつも非常道德を大宗として、平時道德をおろそかにして來た。つまり市民としての教育よりも、武士的紳士としての教養と覺悟を說き付けることに專念した。これは今日の、小學中學女學校の教科書を見てもすぐうなづかれるので、××××××がメカホンのやうに專念に叫ばれて、博愛、人道、社會奉仕といふやうな類は、舶來品だとして虫の息で說かれる。だから日本國民性の、もしくは日本道德性の最高の表現を見るには非常時の國民と道德性を見るのが一番よろしい、といふ事に結着する。

第二は、非常時の現はれほど、ものの本音があらはにさらけ出される事がないことである。さすが奸曲無類の河内山宗俊も、不用意であつたために、何とか大膽に上野で立派にお手の筋を見やぶられた。人いづくんぞ廋さんやである。不用意とは、人間が一切の技巧をぬいでしまつて、裸一貫の風袋だけになつた刹那である。一體個人の生活も國民の生活も、その大部分は、かういふ本質によつて形づくられるのが多いので、人爲的技巧の參加する部分は案外割合に少ない。だから國家や個人生活やの營みは、まづその外に現はれた技巧的部分よりも、かうした本質的な内部に觀測の錘を入れて、そこから出立しなければ眞相はわからぬのである。

四

で、震火災影響と、それが與へる恐怖はなるほど莫大であつたであらう。が、要するに震火災そのものは、一時的の自然的物理力であるに過ぎない。永遠性をもつて審議されねばならぬものは、さうした非常時に現はれたところの、國民心理の將來そのものでなければならないのだ。こゝに問題がある。

第一は、震災時に發揮されたところの、社會奉仕の觀念や相互保持の精神が、どれだけ本質的なものであり、また、どれだけそれが、震災後の社會までに延長されるかといふことである。常識から云へば、なるほど共互扶助や、社會救護の必要なことは、社會人お互の生活が、危機にのぞんだ刹那ほど高率で、それほど効能のある事がないのではあるけれども、さてそれを心理的に考察すれば、全く違ふ。即ちかゝる場合の人道的精神は、元來が本能的反應であり、或ひは本能的刺激の部分が根據となるもので、いくらか未だ原始的なも

のといへる。つまり、自己保存の本能はどんな生物にもある。その自己保存の意識が、自己の生命を愛惜すべきことを悟らすると共に、他のものもまた自分と同様に、生命を愛惜するだらうと類推することから、そこに他人の生命に對する同情が起る。そしてその同情は、それを壓迫する環境が強烈であればあるほど、なほと強烈に他人の上にも働きかけるのであるが、しかしそれが生れて來る根據を求めて來れば、要するに自己保存の原始的本能に萠すもの以外でないことがわかる。だから、周圍の事情に、生死といふやうな、人心を緊張させるところの、非常の刹那が背後あたり起つて來ないとすれば、その折角の相互扶助の狀態も間もなく解體するにきまつて居る。燒出された人々に、焚き出しを惜まない同情家も、一方に、廣く買出して來た物を高く賣つて、暴利を燒出された人達から占めることを忘れぬ矛盾がそこから來る。それは突發的な本能的反應だけに動いて、それ以上のものを持たない結果である。といつて、もとよりこの本能的反應も、社會共存に缺き得ない一つの基礎的機能ではある。それに相互の扶助そのものは、本能的反應の外に、與へるものその者に對して、一つの自我的滿足、もしくは享樂を自覺させることによつて、與へる者に、無形の報酬を與へるわけにもなる。ただわれ等の云はうとするのは、單にかゝる原始的本能のみに任せられただけで、その上に、社會的正義の意識と自覺が、ひろくそれと民衆とに結び付けられ、行きわたるのでなければ、眞實の相互扶助精神の永遠性と擴充性は、決して樹立されぬものだといふのである。で、今日までのわが市民に、自體どれほどの社會的正義の觀念の自覺とがあつたか。それがわれ等の知らうとする處である。

五

東京市は自治市といはれた。けれども、自治市の體面がどこにあつたか。道路は、下水は、交通は、そして建築はどうであつたか。自治市は市の財政をもつて行政するところの、行政區劃の意味ばかりではない。自治市の文化的意義は、市民自らの意志によつて、それを統治することを明示するものでなければならないのである。然るに元來が地方人の集合である新東京の市民は、さながら洪積土性である東京の地質のやうに、個と個との間に頑丈な粘着性が更になかつた。そして君は東に行き玉へ、私は西へ行くといつた程度の個人性が、十八世紀の自由産業精神のやうに、思ひ切つて傍若無人に發揮されて居た。その生活は、すべてが自己の趣味と生活を標

準として打ち建てられるだけで、公衆と社會への交渉は、ほとんど念頭にないものの如くであつた。道路がわるい、下水がわるいと云つても、それは自分一人が使ふものではない。澤山の人の使ふ道路であり、下水であるから、その修正は、おれの知つたことぢやないといふ態度であつた。もしこの論理を引きくりかへして、この道路も、下水もみな自分の使ふものだ　また他の人々と共に使ふものだ。自分の爲にも、社會の爲にも、だから共同して修正する必要があるといふ處に歸つて來たならばどうか。さうすれば、一市に、一町に、すべてが統一した自治生活が始めて行はれたであらう。さうしたなら、彼は東京が震火災の都であることを知る故に、鐵筋コンクリートの大建築の側に、マッチ箱のやうに木造家屋は建てなかつたであらう。少くとも自分達の棲む一町内の道路ぐらゐは、アスファルトなり、木煉瓦なりで町費で改造されたところもあつたであらう。

更に社會的施設においてもさうである。有産無産兩階級の闘爭が、かく烈しくなつて居る世界思潮を、夢にでものぞいた富者階級は平生の生活においてももつと謙抑するところがあり、また社會的正義の何ものであるかを考へて、利潤の搾取や、分配においても、もつと建て直す方法があつたであらう。

六

われ等が今度の大震災に示されたところの、いはゆる相互扶助精神について、その永遠性を討檢せねばならぬものがそこにある。大震災は、一朝にして國民市民の頭腦をとりかへたか。そして震災當時の多數の美談も、結局は本能的反應以外に、どれほど社會的正義の黎明が、加味されて居たかといふことである。人はよく云ふ、この大災によつて、今までの有産階級も、皆なプロレタリヤの（地平線）まで打ちのめされ、貧富の階級が全く均分したと。しかし有産階級者は、たとへプロレタリヤまでにつき落されても、決して精神までプロレタリヤに安住するものではない。彼等の唯一に希望とするものは、たゞやはり、もう一度昔の富をとりかへして、昔の有産階級に浮び上らうとする一念のみである。いな、今日はさうした有産階級のみではない。あらゆる有産無産の市民が單なる生きることだけに甘んじない。みなわれ勝ちに富んだ將來の資本家たらむとして、廢墟の灰の中に躍ひ、もがき爭ひ合ひつゝある。

さらばかゝる間にあつて、將來の新帝都市民としての統一

的節制が、また相共扶助の精神が、果してどんな風に形づくられ、またその融和がどこの一點に交叉さるべきであるか。また大災に現はれた非常時の博愛心理が、どの點までこの新帝都の上に、本質的に蒔き擴げられ、植ゑ付けらるべきものであるか。われ等は多大の關心をもつて、この終結を注視しやうとする者である。

七

第二の關心はもつと大きい。そしてそれは全國的である。それは外でもない。わが國の國民性は、一體かくまでも殺伐性をもち、殘酷性を帶びるものかといふことである。なるほど講談などでも見るやうに、封建時代の野性は、人の首を斬ることが芋がらを切るやうであつた。けれども今日は廿世紀である。まさか、そんな殺伐性はほとんど失はれたものだらうと思つて居た。それだのにこの震災當時のに現はれた狀態はどうであらう。その上關東半面に亘る×××殺傷の跡を見ると、單に防禦のために防禦したといふよりも、むしろ殺傷するそのことに興味を持つやうな情報が、いくら贔屓目に見ても數多く現はれて居る。近代の戰爭でさへも、その武器は出來るだけ兵士の致命的な殺戮を行はず、わづかに戰鬪に堪へない程度で參加員に負傷させ、それによつて兵力を殺ぐ役に立たせる目的の下に作られて居る。然るに自警團員のとつた殺傷手段は、多くは殘忍目を掩はせる程度のもののみである。その上無法とも暴虐とも形容しかねるものが多い。しかも自警團は職業的軍人ではない。退いて市町村自治の中堅となるべきところの、青年や壯年をもつて出來上つて居るものである。たとへ彼等の棲む町村で、婦人や子供が有りもしない風説で脅かされたにしても、その時に正しい知識と落着いた判斷をもつて、その有り得ないことを闡明してやるのこそ彼等の本務とすべきものではないか。非常の際であつたとは、言ひのがれにはならない。非常の際であればこそ、猶ほ彼等の沈着な判斷が必要であつたのである。殊に×××に對する國際的情感の乏しかつたことなどは、今更ではないがまことに戰慄に堪えない。

八

思ふに彼等をこゝに至らした根因にはいろいろあらうが、私は中での大きなものとして約二つを舉げることが出來る。一つはわが國の敎育精神が、依然としてあまりに偏よつた國家主義に傾むいて、博愛と人道の國際的精神を哺くむべき餘

裕を持たないことである。二つはこの二三年間、社會主義無政府主義や勞働問題が起つたのに對する對策として、暴力統治主義がどこからもなく是認され、時の××××××すらもそれとなく後押しする形があるために、暴力主義は、今後において、ますます勢力をひろめて行かうとする傾きがあることである。かういふ事實が國內の殺伐氣分と潜在性を煽りまたは刺激するのに、どれほど有力であつたか知れたものではない。ことに靑年團を組織する分子が多く軍隊生活をおへて來た人達であることをも注意するがよい。そしてそこに軍隊教育といふものの缺陷が、何ほどかでも現はれるものがないであらうか。昔の軍隊は、殺人と戰鬪のために建てられた。が、現代では軍隊が、その殺人と戰鬪を出來るためさける爲に、つまり脅威の手段として建てられて居るのが、近代世界の微妙な國際的氣分ではないか。殺す爲の劍ではない、活かすための劍だと昔のすぐれた武人も云つた。現代の軍隊が、なぜこの微妙な精神を若い國民に吹き込むことをせずに眞正面から、暴力と殺人の當然性を是認するのであらうか。

震火災の恐怖は大きい。けれども、それは要するに物理的反應だけのものである。人間の慘虐性が與へる恐怖は、その深刻さにおいて、物理的反應の百倍も千倍にもなる。測り知り得ないものは人類の心理だからだ。自警團の殺傷や、甘粕大尉の宗一君絞殺や、龜戶署內の勞働者殺しのやうな流血事件が、數の多さに於いて比較にも何にもならないところの、被服廠內燒死者の慘狀にくらべて、もつともつと近代人と將來人の神經を顫動さする理由がそこにある。自然の殺人は單純である。人類が自ら手を下す殺人にいたつて、深刻さと、複雜さに於て、恐ろしい恐怖性をそれ肉體に持つからである。復文明國民は、それでなくてさへ神經が極度に過敏になつて居る。この上われ等の同胞たる社會人によつて、血まみれの手を突き出されるのを見ることは殆んど堪え得られない。

暴力と暴力の喧嘩なら、獅子や虎の力が人間よりも遙かに強い。人類が文明の世界に生きるのは、暴力によりて生活の取引きをしないで、文化をもつて一切をかき抱くところにある。あれ等は一切の暴力を絕滅したい。現代において暴力を是認するやうな思想の一切を絕滅したい。それが出來ず、こんな殺伐な暴力性と血の統治がやういに絕滅されず、却つて大つぴらに永遠に是認されるとしたならば、どこに文化の新帝都が復興され、どこにこの首都に潮流するところの新日本が出來上る曙光があらう。またもしこの儘に暴力統治の精神が橫行するならば、日本は大震災を回轉期として、新たに一

大恐怖時代の渦に捲込まれる外はないからだ。

九

われ等はかくして、この大災において、廣く市民および國民性の上に流れるところの、いくたの美點を發見し得たにかかはらず、最後に撲たれた、この最大で、最も深刻な刺激のためになほわが國民性の樂觀を、しばらく保留せねばならぬ遺憾を持つものである。

それにつけても、もし現代のわが國女性が、男性のすべての情感の世界にくゞり入つて、それを修正し、緩和し、聖化することに力めたならば、なほその希望の幾分は達し得られるであらう。それを敢てし得ぬのは、果して女性の地位のひくい爲か、情熱のとぼしい爲めか。それとも女性ですらも、なほ昔風の軍國的氣分に幾分でも囚はれて居るためであらうか。

大震火災で最も深い印象を受けたこと

◇　堀江歸一

日本人なり、東京市民なりが、日本の地震國であることを忘れ、耐震防火の設備を怠つてをつた怠慢に驚きます。噴火山上で舞踏してゐるといふことを聞きますが、誠に今度の東京市民に當はまります。

◇　柳澤健

自然の冷酷さといふこと、その中に囲まれた人間のSolidarityといふこと。

◇　吉井勇

深い印象を受けたことはかなりありますが、先づ感じられたことは自然の酷らしさです。

◇　德田秋聲

全體的にかうといふ強い印象はないと思ひます。

◇　茅野雅子

いかに人間の力が偉大だと言つてみても、自然の前にはほんのちつぼけなものだといふことをつくづく感じました。

生と死の問題

帆足理一郎

一

花は咲き、花は散る。月は滿ち、月はかける。散りたる花かげたる月は、再び咲き、再び滿つる時がある。けれど、人は死してなぜ再び歸り來ないのであるか。死は一切の終末であるか、若し終末ならずとせば、死後の生命は如何になりゆくのであるか。

カアライル曰く『私は靈魂が不滅であるかどうかを知らぬけれど日々新しい生命が生れ來ることを知つてゐる』と、然り、吾等は日々新しい生命の生れ來る事實を不思議がると同時に、日々死に去る生命の不思議を思はざる能はぬ。何故に人生に死があるのであるか。若し死ぬべき生命であるならば始めから生れなかつたがましではないか。人生果して生くるだけの價値ありや。吾等何人も自分の生命ほど大事なものはないと思ふ。吾に採りて吾が生命は實に絕對價値だ。しかし絕對價値である我が生命になぜ死滅があるのであるか。之を逆にいつて、結局死なねばならぬ我が生命にどうして絕對の價値があり得るのであるか。如何に讃美を盡したものであつても、それが瞬間的一時的の存在である場合、吾等はその絕對價値を主張することはできないではないか。然らば、吾等が最大の價値と思つてゐる我が生命に、何故死なる限界が置かれてゐるのであるか。

死は自然だ。如何ともすることはできない。たとひ今回の如き大災厄に出逢つて、不意に慘虐な死の苦酸を甞めさせられないにしても、一年の後、十年の後、百年の後、何時かは死すべき運命を吾等は擔つてゐるのではないか。死の來るは

盜人の來るが如く不明だ。けれど、一生の内一度は必ず來る必ず來つて吾等を生命の明るい舞台から、暗い黑幕の彼方に奪ひ去つてしまう。誰れか死の手を免がれでたものありや。誰れか死と闘つて最後の勝利を得たものありや。

過去五十萬年人類の文化的要求は常に自然を征服して、人間の意志目的に服從させんと努力し來つた。そして吾等は着々その成功を收めつゝある。吾等は今や雷に鞍を置いて地上や海上や空中を翔廻つてゐる。吾等は耐震的の建築によつて地震に打勝つこともできる。吾等は防火設備を改善して火災に打勝つこともできる。吾等は醫術を研究して疫病に打勝つこともできる。吾等は一切の知的、道德的、精神的努力によつて、一切の邪惡苦難に打勝つこともできる。けれど最後まで打勝つことのできないものは實に此死なる自然の破壞力ではないか。

二

死は生命に採りて最大の勁敵だ、死は生命に採りて神秘中の神秘だ矛盾中の矛盾だ。吾等の最も惜しむ處のものを死は遠慮なく奪ひ去るではないか。死ほど殘酷な怪物が何處にあるか。人間の如何なる創造的努力を以てするも所詮死には打勝てないのであるか。

されど思へ、此世に死なるものがなかつたならば、果して生なるものがありうるであらうか。よしありうるとしても、生命が不老不死である場合に、人生の價値が生ずるであらうか。一度生れたものは永久に死なぬものであつたならば、生れるといふことさへもないものであらうか、さうした永遠の生命に果して生活の價値が發生するであらうか。人生の一瞬一刻に無限の價値が生ずるのは、それが五十年七十年に限られてゐるからではないか。稀有性は價値の重大なる要素だ。もし生命が死によつて妨げられない永遠のものであつたならば、その時々刻々は永遠に續起するものなるが故に、人は之を濫費しても空費しても何とも思はなくなるであらう。消え失せても直に回收することのできるものはたとひ甚大の價値あるものでも、その眞價は發揮されず、感得されずに持ち傳へられるではあるまいか、例へば、ダイアモンドが土塊の如く無限に多量あると假定し、その一つを失つても直に他の

ものが努力なくして得られるやうであつたならば、それは寶石としての價値を持ちうるであらうか。

これと同樣に、人間は切つても血が出ない、打殺しても死なないものであつたならば、吾等は果して自分の生命を大事に取扱ふであらうか。如何なる惡事を働いても、傷られず、殺されず、如何に身體を濫用し、冒瀆し、淫佚に耽り、暴食にすさんでも、肉身體は健康であり生命は永遠朽ちないものであつたならば、果して人間に道德的努力なるものがありうるであらうか。道德的努力なくして、人生に價値が發生するであらうか。

否なく〳〵、事實は全くこれに反して、人生には限りあるが故に、吾等はその一瞬一刻をも惜んで、これを最も有益に最も有意義に費さうとするのではないか。光陰は矢の如く、一度去つては二度と歸らず、紅顏の美少年も、何時しか白髮の老翁となる。吾等に老衰と死滅あるが故に、吾々はそれに逆つて戰はうとするばかりでなく、その戰ひが却て人生の價値を生み出すのではないか。

『春宵一刻値千金』と古人は歌つた。一刻の春宵をして千金の値あらしめるものは、清香馥郁たる花のうつろひ易きが爲めではないか。人生は六七十年の短日月に限られたるが故にその一瞬一刻に吾等の藝術的努力を加へ、吾等の創造性を最も深刻に切實に働かせて、無限の價値を發揮せんと努める。吾等はその一瞬一刻を惜みて自然の暴力と戰ひ、病と戰ひ、邪惡と戰ひ、罪と戰つて、吾等が永遠の價値、無限の價値と信ずる愛と正義の世界を建設せんと努力する。この努力奮鬪なくして、何處に人生の價値があるか。

愛と正義の世界なる吾等の創造した人間價値、文化價値、即ち靈的價値は、吾等の物的生命と永遠に共なることはできない。吾等の靈的價値は肉體の生活から死の力によつて引き離されてしまう。引き離されるが故に、却て我等の創造した靈的價値はその絕對性を發揮して、獨自無双の價値(Unique Value)となる。人生には死滅がある。而して我なる人生は、永久無限の宇宙に空前絕後のもので、唯一つしかない。唯一つで、而して一度去つては再び繰返すことのできない生命なるが故に、それは獨自無双、絕對無限の價値を持ちうるのだ。然らば死は人生の否定ではなく、却て人生の肯定であ

い、人生に價値創造の可能性を附與するものではないか。人間に死なくして生の價値は發揮されない。是れ吾等の拒絕し難いパラドックスだ、

三

人生がもし始めから無限のものであつたならば、それは吾等の努力によつてそれ以上のものとなすこともできねば、また吾等が努力しないからとて、有限になるわけではない。從つて人力の左右し得ない價値は人間價値ではなく、自然價値だ然るに吾等人類は過去五十萬年、自然價値を改造して人間價値たらしめることに努力し來つた。而して人生は死ある爲めに自然的には無限でなく、有限の價値だ。有限の價値なるが故に、吾等はその一瞬一刻に無限の價値を發揮させようと努力し、その努力によつて人生は自然的有限價値から、段々文化的無限價値に轉化されて往く。玆に吾等創造的進化論者の立場があるのだ。

さらば、更に進んで、進化論者の見地から死の問題を論じよう。我々進化論者は事物の連續といふことを信ずる。進化は單なる變化ではない。AがBに變化しても、AとBとの間に何等の連絡もなければ、それは進化とは云へない。のみならず、進化とはAがBに變化することによつて、一層價値の增加を見る場合を意味する。

宇宙にありとあらゆるものは歷史を持つてゐる。歷史なるものは今ある如く昔からあつたのではない。萬物は歷史的過程を通うして段々にその價値を創造的に增殖し往く、これ吾等の信條である。これは一種のドグマであるかも知れぬ。しかし此ドグマがなければ、吾等は生命なる事實を理解することはできないからだ。生命は生長を意味する、即ち進化的發展を意味する。若し生命に進化的生長的發展がなかつたならば、それは死物だ。固定休止した靜的實在が、どうして生命でありうるか。

既に認められた科學的事實として、生物に進化あり、人體に生長あり、心理に發展あり、社會に進步がある。若し進化發展が吾等の體驗事實として、宇宙の常相であるとするならば、如何にしてそこにその正反對の事實である死の現象があるのであるか。

もしそれ萬事の究極である死なる事實が眞に事實であるとすれば、恐らく宇宙に眞の進化なるものはないのだ。之に反して宇宙に進化發展のあることが事實だとするならば、萬事の終りと見える死の現象は、實はさうでなくして、進化發展の一段階であらねばならぬ。一粒の麥が地に落ちて、腐敗し去らなければ新らしい芽は出でない、人間の生命が老いて墓場に入るといふ變化を豫想しなければ、新しい生き〳〵とした生命の生れ出て來る餘地はない。

一個の生命がそのある限りの精力を使ひ果して、次代に來るものゝ生命を物的にも靈的にも、肥し培ふことがなかつたならば、どうして、一層大なる生長發展の可能を持つた處の、そして過去の歴史が示してゐるやうに、事實、一層大なる生長發展を遂げてゐる處の次代の生命が發生することができよう? 人間の生命が親より子に、子より孫に傳へられて彌益榮へ往く事實を見れば、死は所謂一層生々とした生命の爲めに精力を蓄積する過渡的現象に外ならぬのではないか。進化の事實は少くとも、死をして萬事の究極たらしめることはできない。死は生の爲めの準備に外ならぬ。死は生命を一層活力を持つた活動體にする清涼劑ではないか。進化論は所謂死の究極的職分を否定せざるをえない。

四

けれど進化論的に見た生命は種屬又は人類全體としての生命が死によつて斷絶することなく、次代を追うて繼承されるといふに過ぎない。もし然らば、個々の生命は種屬的生命の一連鎖に過ぎず、それは次代の爲めの準備である手段的のもので、究極的價値ではなく、從屬的價値に外ならぬものとなるではないか。吾等が死に關して問題とする處は種屬としてではなく、個人としての生命が死によつて休止することを悲しむからだ。人類としては如何に永遠であつても、吾れ一個人としては死の苦痛を拭ひ去ることはできないからだ。

人間の個體に生期あるが故に、吾等は人生價値を生產し得るのだといつた。更に又親より子への新陳代謝がなければ、生命の進化はないといつた。けれどそれは何れも吾等個々人の努力を意味する場合に於てのみ然るのだ、而して個人的努力の內容は常に我が生命を永遠化せんとする處にある。人生

は死に逆つて闘はんとする努力によつて一層豐富に生命の價値を增殖する。子孫との新陳代謝が畳なる個體の反復であつたならば、進化は意味をなさぬ。親より子、子より孫が一層大なる生命の可能を持ち、創造性の一層大なるものを發揮するが故に、そこに進化の現象があるのだ。さればこの進化といふこと、人生の價値は物的限界（生活期間の限界其他）に逆つて戰ふことによつて生ずるのであるといふことを聯絡して考へれば、死の謎を解く鍵がえられるであらう。

物的限界に拘束されてゐる個體の生命は、それが種屬的には永遠たるべきを知りながら、尚それを以て滿足する能はず人類の創生以來、個的生命の永久化は人間の努力の中心であつた。生理的には醫術や衞生の途を講じて生活期間を延長し來つたが、それにもまして、吾等は心理的に精神生活を創造して個々の生命を永遠化せんと努力してゐる。

吾等は五尺の軀。七十年の物的生活に滿足せず、知的には古今東西の人類が經驗した生活を學問の力によつて我が個體の內に再現し、過去現在の世界的經驗の凡てを及ぶ限り我れの內に實現して、將來の世界に向つて働きかけようしてゐるまた我等は情的に過去の人類が體驗した悲喜哀樂を藝術的努力によつて個々人の內に再現し、人類全體の情的經驗を我が方寸の內に味はんとしてゐる。また我等は行爲的に、即ち道德的に、古今全人類の生活興味を己が生活興味の內に抱擁し全人類の向上と幸福との爲めに活動することを以て、人類的生命を個人の內に活現しつゝあるではないか。

科學、哲學、藝術、道德の力によつて物的個我を靈化して精神的自我の世界を築いて往くことは、死に打勝つて生命の領域を益々擴張するものであるが、更に進んで我等は宇宙全體の生命を我が生命とする宇宙的生命、即ち神的生命と融合一致せんとする宗敎の努力によつて、我が個々的生命を絕對無限のものとすることができる。限界ある物的な個我の生命を改造して、無限なる靈的大我の生命に轉化する我等の努力は個人〳〵の現在に於て可能なることであつて、只我といふ小さい生活の興味を段々擴張して、全人類、全衆生、全宇宙に及ぼせばよいのだ。しかしそれは只思想的に頭だけで、または感情だけで、さうするのではなく、實際生活の鍛冶場に於て、聖き愛の實行による奉仕の生活、それが個々的生命を

して永遠のものたらしめる第一要素だ。そこにまた我等の主張する宗教の壇場がある。

物的個我の本能的欲求に超越して、常に全宇宙を抱擁した神の愛のけ高い壯嚴なる理想に憧れ、日々の生活に聖い心からの愛を捧げて隣人に奉仕する信仰の生活にいそしむものには、死は何等の棘をも持たないのである。凡ての衆生の生命を我が生命とする神の生活にあやかり、神と共に働き神と倶に樂しむ信樂の生活にいそしむものに、どうして死がありえよう。彼れにとりて死は宇宙の滅亡だ。神の否定だ。吾等神にありて生くるものは、神が永遠の實在であるやうに、我等も靈的には永遠の生命を活現しうると信ずる。永遠の生命は既得の價値ではない。それは我等が神を理想として生活し、神の如く聖き愛を以て無限なる宇宙の生命、宇宙の衆生、人類同胞に奉仕せんとする實在的努力によりてのみかちうるのだ。

吾等の死に逆つて求める處は、たゞ限りなき連續を意味する永久の生命ではない。それは永遠の生命の量ではなく質を求めるのだ。永遠の質は即ち五六十年の生命、否な、早世したイエスの如く僅か三十年を越えない量的生命の限界の中にも充分に實現されうる。永遠の生命を瞬間の中に活現する、これ吾等の靈的努力ではないか。かくて死に打勝つ靈的生命の可能は人類の文化的發展と共に増大し往く。我等はベヤグソンが云つたやうに、生命的進行の一大軍旅として、死の壘壁をも突破して創造的に進化する可能性を益々進歩的に個性人格の内に發揮する靈體ではないか。

五

死の考察に於て一層痛切に感じられることは愛が生命の原理であることだ。我が愛する者の生命は死によりて我れより離れ去ることなく、彼の魂は一層清き美しきものとなりて、我が生命の内に生る。彼に對する我が愛が一層強ければ強いだけ、彼の魂は我が内に生きて我が指導力となり、我が慰めとなる。彼が成さんとして成し能はざりし所、私は彼の魂と共に働いて彼れの爲めに之を成し遂げんと努力する。愛する者の死は、我が魂を潔め、我が心情を純美にする。愛する者の死は、我が心の奥底に透徹して我が罪を悟り、我

がはしたなき愛の極めて小弱なるを慚愧させる。吾等は愛する者の死によつて大なる試煉に逢ひ、煉獄の苦みと悩みとを通じて、靈的に一層大なる愛者として生れ更る。

有島武郎氏が、例へば、亡き妻に對して無限の愛を感じ、愛の祭壇に額づいてゐた間、氏の生活は人道的な詩情に光り輝いてゐた。而して聖浄なる人道の使徒として我等の愛慕に値ひするものがあつた。然るに氏が一たびその亡妻に對する愛を冒瀆して、仇し女と醜惡なる戀に落つるに至つて、氏は自ら、氏の高潔な人格を蹂躪し去つた。聖浄なる愛を失つたもの丶末路は死である。單にそれは肉體の死であるばかりでなく、靈的にも絶望の死だ。氏に對する吾等の愛慕は全く夢の如く消え失せたが　そは愛の消滅から來る當然の歸結だ。

讃むべきかな、聖き愛！　聖愛の世界には死なるものはない。自然がよしその暴威を逞しうして、我等の肉的生活を破壊し去るとも、また我等の物的生活の基礎を奪ひ去るとも、失はれたる人々の魂は永遠に愛する人々の魂の中に生きて、遺れる人々の靈的生活を潔め高めて往く。それは故人に對する吾等の純眞なる愛あるが爲めだ。愛ある所死はその醜姿いを現はすことはできない。愛は即ち生命の力だ。（完）

大震火災で最も深い印象を受けたこと

□　野口米次郎

電燈の有難いこと、夜は眞暗で流言蜚語が縱横に飛び、中野の方から見ると、天をこがす眞赤な濛々たる烟の雲を眺めたこと。

□　山田わか

今度の震火で最も深い印象は、何といつても萬をもつて數へる燒死者のあつたことです。それが全く不可抗力ではなかつた、避ければ避けられるものであつたと思ふので一層遺憾です。その證據にはサンフランシスコの大震大火の時、私も罹災者の一人だつたのですが、其時は火力も今度のより烈しかつたにも拘らず、燒死者を殆ど出してゐません。それからもう一つは生き殘つた者、燒け殘つた個處への救恤品が（その結果の善惡はとにかく）比較的早く行屆いたことなどです。

□　日夏耿之介

勇敢なる「臣民」や、臆病なる「人間」の「暴徒ごつこ」を目にして夥しき感慨を強いられたり。こゝに詳語する能はざるなり。



普通選擧と山本內閣

室伏高信

普通選擧がいよ〳〵山本內閣によつて實現されるかに見える。その普選案なるものの內容はまだ分らないが、兎も角も普選の名を許るされるもの、若しくは政治家の一部が自ら普選案と稱しえられるものが次の通常議會に提出されるであらうことは、最早や既定の事實となつたように見える。

私はこれを山本內閣の一大英斷であると考へて居るものではない。何故なら、山本內閣でなくても、如何なる種類の內閣であつても、今日組織せられる內閣でさへあれば一、二年若しくは二、三年の間に普選の實行をなさなければならない時期に置かれて居るからである。

けれどもこの機會に普選斷行を決心してかゝることは。少くとも政治家としては賢明なやり方である。前加藤內閣が躊躇逡巡して決するところなきものを、そして一方に政界の大勢力たる政友會が尙ほ普選反對の旗印の塗りかへに愚圖愚圖してゐる間に、逸早く普選の腹を固めて、多年懸案であつた政治の根本に觸れて、よく爲すあるの氣力を示すて至つたことは、今日のわが政治の局面に立つものとしては、最も賢明な態度であるといはなくてはなるまい。

勿論それは政略であるに相違あるまい。政略であるがゆゑに普選實行についての政府の態度について非難を加へる餘地のあることは勿論であらう。政友會の普選に反對することが一つの政略であるごとくに、山本內閣の策士達が普選即行を

かゝげて立つこともまた明らかなる一つの政略である。その意味においては、政友會のうへに加へらるべき鞭は同じく山本内閣の頭上にも加へらるべきであらう。けれどもそこには少くとも賢と愚との相違はある。時代を見るものと、時代を見る能はざるものとの相違はある。

普通選擧と政友會

世の中の、一番に時代後れであるとされてきたものは、從來は閥族若しくは官僚であるとされてきた。またそれに相違はなかつた。それに對して、政黨政治をもつて取り代へようとする運動がブルヂョアラヂカルの旆旗をたて今日に及んできたのである。

その閥族若しくは官僚内閣である山本氏の内閣が、ブルヂア・ラヂカル、若しくはソオシヤル・デモクラシイの要求である普通選擧を決行しようとし、それに對して政黨主義者としての政友會が反對して立つとしたら、政友會は今日以後、日本における最大の時代後れであるといふの、立派な折紙をもらつたわけである。閥族若しくは官僚が、復活の力を强めないまでも政黨が一層に信望を失墜するであらうことは疑の餘地がない。

私は、政友會が直に滅びるであらうとは無論言はない。けれども政友會が國民の前に總勘定をうけなければならない時が近づいてきたことは明らかである。彼等はその内部で總裁の人物について彼是の内輪爭ひをしつゝある。けれども世間から見れば、政友會の不信用なることは、一總裁の如何の問題ではない。原敬氏が今日あつたとしたら、政友會に對する世間の反感は一層强かつたかも知れないのである。

政党の不信用、大政黨の不信用、今日の政治上の根本の動きはこの點から出發する。山本内閣のごとき、一つの閥族一つの官僚の内閣、しかもシイメンス事件によつて立つべからざる致命傷を負ふた政治家が、今日の世に白晝公々然として立ち、天下みなこれを怪しむことをなさないのは、これ山本氏その人に對する信望のためではなくて、またこの内閣員の何某に對する信望のためでは毛頭もなしに、政黨の不信用特に大政黨たる政友會に對する不信用の反映である。

政局打開

こゝに政治の局面打開の要求が横はつてゐるのを人々は見なくてはならない。今日人々の求めてゐることは政黨でもない官僚でもない。山本でもない。犬養でも後藤でもない。加藤高明、高橋是清では勿論ない。要するに現狀の打開である。

政治屋は多い、當代の政治家をもつて自ら居らんとする人は今日はあまりに多い。けれども人々は政治に飢えてゐる。ほんとうの意味の政治に飢えてゐる。政治を否認する人にしても、今は寧ろ政治に飢えてゐる、今日の政治に飽きてゐることは、寧ろ今日の眞の政治なきことに飽きてゐたことである。政治なきことは既に久しい。官僚はあり、行政はあり、事務はあつても、政治なきことは既に久しい。

この時に當つて、政府が普選斷行をもつて立つことは、やや政治の生命に近づきつゝあることを示してゐる。政治はこゝに起るであらう。政治熱は、全國に再び澎湃として起りきたるであらう。社會問題の代りに、政治論が今後の何年かに盛り行はれるであらう。社會問題それ自身、勞働運動それ自身も、再び政治化の傾向を進めるであらう。政治運動の狂風時代がこゝにつゞくのである。そこに舊勢力が滅び、新らたなる勢力が代るべきである。その時期が今ま正に開けんとしつゝある。

普選と婦人參政

普通選擧は斷行すべし。婦人參政權問題もこの機會に解決すべし。婦人參政權論者はこの機會に、猛然立つて一大運動を起すべきである。

婦人參政權運動を成功せしむる道は、しかしこの運動が從來の運動家によつて行はれることではない。之れが從來の職業的婦人運動家の手から解放されることをもつて第一要件となる。かくのごとき不信用、無理解、不誠意なる人々の手から離れて、眞に新らしき時代の心を心とし新らしき世界を世界とする人々の手に委せられなければならない。即ち婦人參政運動それ自身の建てなほしがなくてはならない。こゝに婦人參政運動は人々の同情と理解とのもとに、普通選擧運動とともに並び立つて行くことできるであらう。

けれどもこゝに注意を要することは 婦人參政權の問題を理由として、普選反對に利用してはならないといふことである。詳しくいへば、普通選擧も、婦人に參政權を與へるのでなくては不徹底だとするの理由によつて、普選そのものにも

反對せんとする人々がある。その人々は婦人参政權の贊成者ではない。普選の反對者である。普選反對の口實を婦人参政權に求めるのである。それによつてラヂカリストを欺かんとするの戰術である。私たちはかくのごとき戰術によつて欺かれてはならない、

婦人参政權獲得すべし。普通選擧斷行すべし。

婦人参政權は、今日では尚ほ實行の期に幾分の距離のあることは事實である。今日の政治家にその即時斷行を要求することは誤りである。婦人参政權はかくのごとく安價に買ふことはできない。諸國の婦人参政權が幾多の婦人の血によつて購はれてゐるごとくに、日本のそれも、またしかるべき代價によつてのみ買ふことができるであらう。

普通選擧の意義と價値

ビルマアクはブルジョア・リベラルを押へるために、ラツサアレの普選論を買つて出た。山本內閣は政局打開のために、日本のブルジョア・ラヂカルの普選論を買つて出た。ともに一時の權略である、ビスマアクの一時の權略が成功したごとくに、山本內閣の一時の權略も成功するであらう。

ビスマアクが普選を實行した結果は、しかし遂に社會民主黨に道を與へた。日本において、直に社會民主黨の勢力が勃興しようとは思はない。しかし一方に小農黨が起るであらう。一方に勞働黨が起るであらう。また農民黨と勞働黨とが起らねばならぬ。虛僞の農民黨、虛僞の勞働黨の代りに眞の農民黨、眞の勞働黨が起らねばならぬ。

かくして普通選擧が、今日未だ政治の圏外に置かれてきた人口の多衆を政治に組織し、政治に覺醒し、こゝに日本の政治分野を一變するに至るであらうことは明らかである。そしてそれ等の人口の多衆が政治に目ざめた時に、その人口の多衆がその階級的關係に目ざめるに至るであらうことも、疑の餘地はない。こゝに新らしい政治生活とともに新らしい階級生活が始まるに至るであらう。

そして最後に、勞働階級も農民階級も政治のうちに組織された時に、或はそれ等の被搾取階級が政治的優越階級となるに至つた時に、眞の普選の價値、政治の眞の價値が試練されるに至るであらう。その時のきたるのを見るために、政治の波をして、先づわれ〳〵の岸を洗はしめよ。

新東京繁昌記

新東京の黎明色

高須芳次郎

(一)移動した繁華の中心

牛込の家が九月一日の大地震のためにひどく壞はれたので私は市外世田ケ谷に假寓することにした。そして九月八日晝頃、家族をつれて西五軒町から四谷見附まで非常な雜沓の中を殘暑に喘ぎながら、私は重い荷物をさげて歩いた。そこから私らは、辛うじて乘合自動車に身を托して、新宿追分までいつた。車中から、四谷の大通を見ると、まるで緣日のやうに賑はつて居た。

私らが追分で自動車から下りると、附近の燒けあとに板圍ひをしてある邊から葵橋停留場へかけて兩側に一寸の隙さへないほどにいろいろの飲食店が出て居た。梨、西瓜、燒栗、牛うどん、饅頭、すいとんなど賣る店が繪端書や新聞を賣る人たちと錯綜して、そこに今までに見なかつた繁昌を見せて居た。

「こんなところが、こんなに繁昌しようと思はなかつたね。」と私は妻を顧みて云つた。下町が壞滅してから、東京の繁昌は、今まで場末と見られて居たところへ移りはじめたのである。時の推移につれて、人事の上にいろいろの變遷が起るのは、避け難いことであるけれども、今度ほど、大きな烈しい變化を巷の上に見たことは曾てないのである。それは大きい時の革命である。

東京の繁昌を說くものは、今まで必ず下町を說いた。銀座新橋、日本橋、人形町などを說いた。下谷、淺草などを說い

た。が、それら繁華の中心となつたところは、震災、火災のためにすべて一瞬時に亡びてしまつたのである。それと共に花々しかつた東京の姿は、大方なくなつたのである。そして其の繁榮の俤を山の手の盛り場に見るやうになつた。牛込の神樂坂、四谷の大通、小石川の白山、芝の三田通などに新しい繁昌の渦巻を作るやうになつた。そして下町の榮華の名殘は唯これを丸の内ビルヂングに求めるよりほかがない。でなければ、淺草觀音の附近に昔ながらの雜沓と賑かさとを求めねばなるまい。それらを除くと、日比谷、上野、九段、芝などの公園にある新しいバラックの町其の他によみがへりゆく東京の繁昌の芽を見るとも云へよう。いづれにしても今の東京は、餘りに變りはてた。たとひ、殘灰や廢墟の下から新しい力が泉のやうに湧き出て居るとしても——

が、私は其の變りはてた東京の姿を冷かに見ることが出來ない。私は暖い心で其の現在と未來とを祝福するために、今見る東京の一面をこゝに記したい。新しい東京のよみがへりゆく趣を人々に傳へたい。「滅」から「生」へぐんぐん伸びてゆかうとする東京についての見聞を語りたい。

(二)丸ビルの新下町情調

私は下町の榮華と繁昌とを縮圖にしたやうな丸ビルのことを思ふと、無限の感慨に沈むのである。大震前の丸の内は、どこを見ても宏壯な洋館が到るところに建つて居て、何となく、ヨオロッパの都市を歩いて居るやうな感じを私に與へた私は大小の事務所から、時々扉を排して、忙しさうに出てくる洋館の人たちを見て今更、二十年前の丸の内の原始的だつた有様を回顧して、東京の進歩と變化の餘りに烈しいのに驚いた。そこは明治三十年頃、私が始めて東京へ來た時分、三菱ケ原と云はれて、一面草茫々とした淋しいところであつた。夜に入ると、人通りが絶えて物凄いほどであつた。それが大正十二年には、帝劇、東京驛、三菱會館、丸ビル其の他工業倶樂部や東京會館などを中心に新裝の洋館で、大方埋つてしまつたのを見ると、昔の淋しさを知つた私には、それが夢のやうに思はれてならなかつた。田山花袋氏の『東京の三十年』のうちにも其の事を記して「丸の内は、いやに陰氣で、さびしい、荒凉とした、寧ろ衰退した氣分が滿ちわたつてゐて、宮城も奥深く雲の中に鎖されてゐるやうに思はれた。何といふ相違であらう。今は濠の四周を輕快な電車が走り、自動車が飛び、をりをりは飛行機までやつて來た。今ではさびしさとか陰氣とかいふ分子は影も形も見せなくなつて了つた。宮

城の松、その上に聳く群の雲、遙かにそれと仰がれる振天府すつかり生々とした色を着けて來た。」と云つて居る。

かうしてすべてが生々した異國情調と明るい氣分で滿されて居た丸の内も、先日の大地震、大火災のために大半壞滅したのである。

それはソロモンの榮華も野の百合の花に及ばぬと云ふことをつくづく思はせた。私はポンペイの廢墟のことを耳にして居たが、其の實物以上の悲痛な有樣を丸の内に見ようとは夢にも思はなかつた。内外ビルヂングや郵船ビルなどの殘骸を見ると、自然の大な破壞力の前に人間の力で出來た建物の如何に無力であるかを嘲るやうに見せ付けられた心持ちがしてならぬ。けれども丸の内は流石にポンペイのやうに全滅はしなかつた。灰燼と焦土を前にしてあとには、東京驛や丸ビルや三菱の建物などが殘つた。其の他は概ね廢墟のやうになつてしまつた。銀座亡び、日本橋亡びた今、花やかな明るい心持に浸らうとするには、丸ビルにゆくよりほかはないのである。私は其の堅固と壯麗とを愛する。

私が最初、丸ビルを訪ふたのは六月下旬の頃であつた。其の時分、私は大抵新聞社に籠つて史書を讀するか、でなければ頼まれて居る原稿を書くかして、以前のやうに好んで銀ブラの樂しみに浸らなかつた。丸ビルへ至つたのは、そこの七階に居る友人に逢ふためであつた。其の時、私は友人と約束した時間に未だ三四十分の餘裕があるので、丸ビルの賣店がならんで居る間をぶらぶら歩いて見た。其の日は曇つて居て、何となく、重苦しかつた。が、丸ビルの賣店に明るく銀色に輝いて居る電燈の光、其の下にならべられた鉢植の牡丹花の目ざめるやうな紅ゐや草花の心が染み入るやうな色彩などを見ると、私の頭腦が急に輕くなるのを覺えた。何處を見ても、そこには美しい色彩、美しい空氣、美しい人が居た。

「Tさんでありませんか。」

と誰か私を呼びかけた。よく見ると、其の洋裝の青年紳士は、十年前、私らが食道樂の會を毎月開いた時分、時々出席した人であつた。彼れは、晝餐に小酌したと見えて、其の滑かな白い顏に櫻色を浮べて、口邊に酒窩を漂はして居た。がさうした姿も丸ビルにふさはしいやうに思はれた。私は再會を約して友と別れた。

賣店の品を見て、私が欲しいと思ふのが一つ二つあつた。貧しい私は、在來さうした欲望を起さうともしなかつた。また慾望が頭を擡げても、大抵強ゐてそれを抑へ付けた。丸ビルでは、其の陳列の品の飾り方や色彩の取合せが新しく私の

眼に映つた。そして私は鉢植の牡丹花か、形の宜い松の盆栽かを一つ買はうかとも思つた。また秋になつたら、こゝへ來て冬帽を求めようとも思つた。それ程ど客の購買心をそゝる空氣が魅力强く動いて居た。

それから私は七階の一室に居た友を訪うて偶然、七階からちつと東京全市を俯瞰して居た芥川龍之介氏に逢つた。初對面であつたので、私は芥川氏と別に話しはしなかつた。が、芥川氏が、丸ビルをどう見るか、それを聞いて見たかつた。江戸時代、平安時代のロマンスのうちに、新しい夢をさぐり出す芥川氏は、丸ビルから、どんな夢のロマンスを考へ付いたであらうか。私はそんなことを考へたが、到頭氏に其の事を問ふ折がなかつたのである。

友と丸ビルを出て、下谷のある鳥料理屋へゆく途中、友は地下室にある花月へ毎日晝餐を喰べにゆくことを私に話した。三十五錢の辨當で、一本のビイルを飲むと、簡單で心持が宜いと云ふやうなことであつた。それらのためであらうか、新橋方面からも、晝餐や晩食を喫しようとする人々が、丸ビルへ多く來るやうであつた。

其の後、私は二ケ月ほど、丸ビルへゆかなかつた。間もなく、九月一日が來て、私らは大地震に襲はれた。當時、內外ビルヂングが倒れて多くの死傷者を出した、それを丸ビルだと誤傳したものがあつたので、私は友の身の上を心配した。が、あとでそれは丸ビルでないことを知つたのでほつと安心した。

震災前でさへ、丸ビルの繁昌は、私らの注意を强く惹いて居た。それが銀座亡びた今は下町の精粹をこゝ一つに集めたのである。荒凉とした燒けあとの氣分を一時忘れようとするもの、輕快な飲食に心を慰めようとするものは、いづれも丸ビルに吸はれるやうに集るのである。空前の大震災で、赤裸裸になつてしまつた人々の多くが、第一に思ふのは矢張口腹の要求であらう。其の次に衣服、住居、其の次に心の糧といふ順序になる。それだけに丸ビルの繁昌も、地下室にある森永のキャンディ・ストアや花月、中央亭の食堂や吉野壽司や汁粉屋などに最も多く集められる。其の何れもが客で一杯になつて、身動きさへ出來ぬ。地震前にくらべると、客の數が三倍四倍に上つた。所謂「燒けす太り」の有樣を具體化して居る。そしてこゝに集まつて居る男女の顏はいづれも新しい希望と未來の幸福とに輝いて居るやうに私に見える。灰色の運命に呪はれたやうな、くすんだ顏色をして居るものが殆どない。私は丸ビルの宏壯な姿、明るい色彩を思ふと、何となく心强

い。

「東京の生命は永久に亡びない。」

と云ふ感じが切實に私の胸を滿たすのである。たとひ、はげしく荒涼とした焦土を吹きまくる北風が冬と共に音づれて來ようとも、丸ビルには、いつも水々しい春の氣が漂うて居ると云ふことを思はせるに充分である。

（三）活氣と雜沓とに滿ちた四谷

山の手に居ながら、銀座や人形町などを愛して居た私はこれまで四谷の大通や牛込の神樂坂などにさほど注意したことがなかつた。銀座を見た眼には、それらの山の手の盛り場がいかにも淋しく、くすんだやうに見えてならなかつた。また實際、垢ぬけのしない、ごたごたしたところがあつた。それが大震後、銀座以上の賑かさを巷の上に見せようとは、誰れも豫期しなかつたことである。

ある晴れた日、私は新宿追分で電車を下りて四谷の大通を歩いて見た。私は先づ湧き返るやうな雜沓の烈しさに驚かないわけにはゆかつた。自動車、電車、自轉車、荷車、貨物自動車などが始終通つて、すこし油斷すると、恐しい目に逢ふかも知れぬほどである。そして狹苦しい歩道には、衣類や世帶道具を賣る店がずつとならんで居て、人と人とは袖を觸れ合ひ肩を相摩する位である。追分から新宿御苑あたりまでは、震災前、人通りがさほどなかつたのであるが、今は終日のやうにぞろ〳〵人が通つて、雜沓がいつやむとも見えない菓子屋、雜貨店などは大抵十人位の客が詰めかけて居た。自動車のためにひどく舞ひあがる塵芥を浴びながら、誰れも平氣で歩いて居た。

私の鋭く、弱い、そして細い神經は、自動車、電車の騷音に少からず惱んだ。そこに一つの不安をさへ感じた。そして濛濛と煙のやうに立ちのぼる塵埃は、私の咽喉に入り、鼻口に入つて、私の眉をひそめさせた。往來を向ふへ横ぎらうとすると、いろ〳〵の車があとから、あとからと續いて、どうすることも出來ないほどであつた。久しく淋しい味に馴れて來た私は、賑かさのために惱まねばならなかつた。

四谷郵便局附近は、殊に賑かであつた。うつかりして歩いて居ると、直ぐに人に衝き當るばかりである。午前十時頃だが、「すゞらん」と云ふカフエには、もう男女の一群が這入つて飮食して居た。食卓や店の前には、鉢植の黄菊や白菊が芳香高く薫つて居た。そして香屋や呉服店などには、多くの客が山のやうに群つて、ひどく混雜した姿を見せた。一體に

どの店も非常に活氣附いて、主人や小僧までが緊張して居るやうであつた。それは曾て私が四谷の大通に見た歳暮賣出の光景よりも遙かに賑かさを増して居た。

それから私は牛込の方へ出かけたのであるが、歸途、新宿追分附近の横町を歩いて見た。それは小雨が、ぽつ〳〵降出した夕暮頃であつた。歡樂の巷へ集つてくる人影は未だ目立つて見えなかつたが、文化西洋料理とか、オロラとか云ふカフエには、若い人々が七八人位這入つてしんみりとした秋の夕の灯の下に飮食して居た。ある寄席には、浪花節の一座が掛つて居て、白い燈光を浴びながら、木戸番の男が太い聲で「さあいらつしやい。」と呼び續けて居た。私は大震後、一ヶ月半經つて、始めて此の聲を聞いたのである。そして寄席の前にひらひらと動く旗や幟の色彩を見たのである。私は急に新しい元氣を得たやうな氣がした。

横町を出て、大通に沿うて歩くと、滿目光の巷である。カフエの灯、活動寫眞館の灯、露店の灯、商家の灯などが一つになつて巷を照らして居た。銀座の夜にくらべると、新宿邊の夜は、いつも私に暗い感じを與へたのであるが、今は以前にくらべると、ずつと明るくなつた。銀座の夜の光りをこゝへ移したやうである。それに在來の武藏屋呉服店を始め、松屋、高島屋、松坂屋、菊屋などが下町から四谷、新宿へ來て看板を出して居ることなどを思ふと、銀座の一部分をこゝに見る心持ちがせぬでもなかつた。

(四)山の手の小銀座趣味

ある曇り日に私は冷めたい風の動きを感じながら、神樂坂の下に起つた。此處の繁昌も四谷の大通に讓らなかつた。坂の下の角には、一人の半白の老人が「地震饅頭」と云ふのを賣つて居た。今出來たばかりの饅頭を二三の人々が爭ふやうに買つて居た。牛込會館の附近にあるグランド食堂は未だ晝前であるので、私は其の中へ這入つて見なかつたけれども、灯が花やかに瞬き出す時分になると、男女の客で一杯になると聞いて居る。グランド食堂から少し坂を上つたところには往來へ店を突出して、ゆで小豆や天麩羅などを賣つて居る小さな飮食屋があつた。木村屋はいつもより以上の客が店頭に群つて居た。そして私は美しく化粧した女が四五人、前後して往來をゆくのを見た。

盛文堂書店には、殊に若い男女が一番多く集つて、頻りに新刊雜誌を素見して居たのが私の眼に映つた。大震災以來、一時東京の出版界は全滅に瀕しようと云はれたのであるが、

有力な雜誌は、震災などに少しも屈しなかつた。それにある一印刷會社の印刷能力だけでも優に大阪の印刷所全體をひつくるめた力を凌ぐほどだと云はれた位であつたので、出版界の氣勢はさほど衰へなかつた。有力な雜誌は何れも十月十日前後に出て淋しくなつて居た書肆の店頭を飾つた。が、私は暫く世田ケ谷のやうな田舍に居たので、久しく店頭に雜誌を素見する若い男女の姿を見なかつたのである。それが私には少からず物足りなかつた。それは大震前の新聞に多くの出版廣告を『東朝』などの第一ページに見たのが、大震後一時、ぱつたり姿を消した物足りなさと同じ思ひであつた。それで私は盛文堂の前を過ぎた時、始めてそれらの物足りなさを除くことが出來た。

カフエ・オザワの門や入口は滅茶々々になつて居たが、「開業仕候」と記した紙を貼付して居た。奥の間の瀟洒な食卓が巷からよく見えて居た。私は不圖、正宗白鳥、小川未明、島田青峯の三氏と一緒に昨年秋、こゝで紅茶を啜つたことを思ひ出した。其の時、白鳥氏は相變らず、私らに「あきらめ主義」を說いて居た。私は、長い間其の心境の上にさしたる變化を見せないで、世の中を白眼に見て居る白鳥氏の人生觀に物足りなさを强く感じた。私には、あきらめてしまへぬことが世の中にいくつもあつた。そして消極的に象牙の塔の中へ身をかくすことが、どうしても出來なかつた。そこに私と白鳥氏との心境とがまるで異つた兩極を示すやうに感じた。

「白鳥君が、あの邊のテエブルによりかゝりながら、人を茶化すやうな調子で、何でもあきらめるさ。」

と云つたのだと思つて私はちつと其の方へ一瞥を投げた。

カフエ・オザワの向ひにある田原屋は、食通のよく行く家である。こゝも「開業仕候」といふ張紙を大きく出して居た。昨年の夏、「時事」の佐々木茂索氏とそこで逢つたことがあつた。ある時は、神樂坂横の末よしで長田幹彥氏と痛飲してから、また田原屋へ來て强い洋酒を煽り付けたことを私は思ひ出した。

神樂坂は、カフエ・オザワの一部が損害を受けた位のもので、他はまるで震災を知らぬかのやうである。神戸の牛肉を喰べさせる清松、釜飯を呼び物にして居る「をしどり」を始め、川鐵、紀の善其の他のすべての料理屋が地震前と同樣に迎へて居る。そして四谷の大通ほど雜沓はしないが、全體の町の有樣には調和があつて、がさがさしたやうなところが少い。午後に入ると、非常な人出を見るのだが、自動車などが

目まぐるしく通らないので、落着いた賑やかさである。そして活動寫眞、寄席其の他の娯樂も自由に味ふことが出來るのが何よりもよかつた。

私は往來、神樂坂を通つても、特に町の有樣などに注意したことがなかつた。が、下町が焦土となつた今日遊時に取卷かれて居る灰燼や廢墟を見た眼には、色彩に飢えた心持が強く動いて居るので、平生に倍した賑かさを見せて居る神樂坂が急に生々した別世界のやうになつて私の眼に映つた。山の手の小銀座！ 私は今神樂坂をかう呼びたい。私は芝三田の大通や小石川の白山なども、略ぼ神樂坂などと同樣の繁昌をして居る姿を想像することが出來た。

(五)新繁昌の芽と新商賈往來

新東京の繁昌はこれを郊外に見ることも出來た。大井町、澁谷町、巣鴨、龜井、板橋、千住、日暮里、瀧野川、中野などがそれである。地震がなくとも、それらの土地は東京の人口の過剩の捌け口となつて居たのであるから、年々少しづつ繁昌を加へて居た。が、大震後、避難者の多くが何れも何處と數へられるほど入り込んだので、急激な賑やかさを加へたそこには、新宿追分や四谷大木戸邊の繁華を其の儘そつくり移した趣が見える。

が、それらにまして震災後の繁昌を新しく象徴する特殊のものが二三ある。其の一つは三萬二千の燒死者を生じた被服廠あとの花賣である。此の悲劇を弔ふために毎日くる線香や遺族や同情者などを目當てに五十人ばかりの花賣が納骨堂附近に現はれた。中には、遺族中の老人や小供が其の花賣の群に加はつて、人々の哀愁を強くそゝるのも見える。そして其の花賣らが一日の賣上高は、一軒毎に二十圓以上に達するのである。ある寺僧の一團は、そこへ天幕を張つて、大袈裟に花賣をして、メガホンで「お花が線香付で五錢です。」と大きく呼ぶのを私は見た。

今一つは、久しく忘れられて居た食物中、すいとんが到る處に復活した。すいとんは江戸時代に可なりに喜ばれたものである。明治の中ば頃まで、それが路上、店頭に客を引付けて居た。花袋氏は曾てそれについて「今は殆どその面影をも見せないもので、非常に旨さうに思はれたものがあつた。冬の寒い夜などは殊にさう思はれた。それはすいとんといふもので、蕎麥粉からうどん粉をかいたいものだが、其の前には、人が大勢立つて食つた。大きな丼、そこに入れられたすいとんからは、暖かさうに、旨さうに湯氣が立つた。そこにゐる

中小僧が丼を洗ふ間がない位にそのすいとんは賣れた。」と記して居る。あるボオル箱屋は火事に燒出されて、急にすいとん屋になつたが、平均一日の賣上が十餘圓に上つて、以前よりも多くの儲けを得た。私は牛込見附から四谷見附へゆくまでに堀端に沿うて、すいとんを賣つて居る露店を五六軒も見た。

それから今一つ、最も私の心を惹くのは、殘灰の下から生え出る繁昌の芽である。新東京の未來に花を咲かせるであらう復興の芽である。此の芽ほど意義があり、尊いものはない淺草の觀音堂が殘つて、其の繁昌が舊に倍して一日の賽錢が五百圓を算することも、交通繁昌で市街自動車の收入が一日一萬二千圓に上つたといふことも、白髭の渡錢が一日二百圓に達したといふことも、神樂坂のどら燒屋が僅かに三時間で百五十圓の收入を得たことも皆新東京の繁榮を示すものである。それらも私らに心强さを感じさせるが、一番私の心を動かすのは、焦土の上に湧く一つの「生」の大きな力である。九月下旬までに焦土の上に新しく建てられたバラックの數は三萬六千餘に上つて、營業を始めたのが一萬戸に達したのは「生」の力の表現にほかならぬ。殊に多いのは飲食店で、それが新たに六千餘軒を數へるに至つた。土一升、金一升と云はれた銀座の燒け跡にも、先づ出來たのは飲食店である。サツポロ、ビイル會社のビヤホオルや、カフエエ・ライオンや東京サロンや食道樂で知られた赤べうたんや、青柳、たんぽゝカフエエ・ロシヤなどを一緒にした家などが、いづれもテント張の下に客を迎へることになつた。最も飲食店の多いのは淺草公園でもう假營業を願ひ出たのが二千二百軒で營業を始めたのが三百軒を越えた。

勿論今暫くのうちは、すべすべした瑪瑙の小卓に銀のカツプの啜り泣きを聞くやうな日を直ぐに見ることは出來ない。けれどもカフエエ・コオノスに於ても、江戸前を發揮した竹葉に於ても、震災前ののんびりした氣分を味ひ得ないこともない。衰滅や凋衰や破壞のあとには復興と繁榮との黎明色が到るところに漂うて居るのである。新東京よ、私は御身の未來を心から祝福する。

焦土復興と殘街繁昌

白鳥省吾

一、神保町

『神保町！』と呼ぶ車掌の聲に私は愕然として驚いた。春日町、水道橋、三崎町と、電車の窓から燒跡を私は眺めてゐたのだ。震災後四十餘日を經た昨今では崩壞した煉瓦は片隅に積まれ、灰も片寄せられ、ところどころにバラックが立ち並んでゐる。然しその痛々しい光景は震災當時よりも深く心に喰入つてくるものがある。同じやうな大きさの新しい板とトタン葺の小屋、牛めし、うどん、しるこなどいふ數限りない飮食店。燒失した水戸邸あとの赤十字病院産院、戸板の上に並べられた葡萄、柿等の果物店、または品不足の古着屋——いかにもみじめで、間に合はせ物だが、所謂それらは東京の復興氣分で、かくばかりの打擊をうけたあとで、立ちあがらうとする人間の努力は人をして涙ぐませるものがある。それは原野ではないのだ。その背景としては、嘗てあつた順天堂等の幾つかの宏壯な病院、明治大學等の各學校、私達が講演會を時折やつた明治會館、屋並を揃へた商店、民家、それらはもう跡かたもなく永久に消え失せたのだ。そして低いみじめな新しいバラックのかなたに嘗て都會の蔭に隱れてゐた九段の丘がもう手にとるやうに見え、靖國神社の大鳥居がぬつと覗いてゐる。

黑焦げの街路樹、そしてまた牛めし店、一品料理、街角に焦げた亞鉛板を屋根とした交番——私はその交番と巡査のユーモラスな光景に笑ひ出さうとした時。

『神保町！』と呼ぶ車掌の聲が私を驚かしたのであつた。成程これがあの神保町なのだ。學生の町、書籍の町、も今はただこうした殺風景なものになつた。燒失した各區のうちでも深川、本所あたりの地域には數へるほどしか行つたことがないのだが、神保町邊は目をつぶると何處にどんな家があつたか直ぐ幻影に浮ぶ親しみのある町であつた。しかし、角の東

京デパートメント・ストアも地久庵もたくさんの書店もみんなもう無いのだ。賑やかなほどではないが人通りも相當にあつたが、それはみんな落付かない他國人に見えた。

震災の當時に二度ほど私は此處を通つたが、その未曾有の混亂のなかにあつて茫然自失するやうな變化を感じたのであるが、てうど葬式後ほど經て却つて亡き人の懷しさが感ぜられるやうに、少し日をへた昨今に今更古い東京の街と人とに愛着を感ずるのであつた。

二、丸の内附近

東京に住むこと十五年になるが、どちらかといふと都會風な享樂に縁遠い田舍者の私は、銀座も日本橋も是非とも無ければならぬといふほどの密接さはないと考へてゐた。しかし全く燒失した現在では月に二度三度しかその土地を踏まないにしても、相當に深い縁があつたのだと思ふ。丸の内なども似たやうな大厦が櫛比してるので其處に所在する新聞、雜誌社に用事のある時は、私はいつも地圖をひろげて、最も近い電車の停留場をしらべるほどの田舍者なのだ。

馬場先門のあたりから見ると、さすが二重橋の前あたりは震災後週日の頃に見た避難小屋も貼り紙もきれいにあとかたもなく、右寄りに天幕がきれいに並んでゐる。颱風や雨どもは大變なそうだが、この秋晴の青空の下にはいかにも幸福さうに見えた。

丸の内あたりの建築物も多くは崩壞し燒失して、殘つた物の一つである。丸の内ビルデングの一階賣店のみが非常な繁昌である。だが、その賣店は言ふまでもなく、どれもこれも貧弱さに悲哀を感ぜぬわけにはゆかない。殊に丸善の書籍などの陳列棚を見るとそれがはつきりわかる。個人の書齋ほどの洋書が並んでゐるのは、そゞろ秋風が身にしむのである。

大理石まがひの柱が幾つにも折れ、全階が粉微塵になつたとも言へたい内外ビルデングの前には人だかりがしてゐる。曲つた鐵筋を何かで切るらしく火花が出てゐる。傾いた石壁にカチン／＼と鑿をあてゝるのがある。いつ形づくことやらわからない。埋沒した人間のことなどが考に浮ぶ。前通りには震災畫報、繪ハガキの賣店、果物屋等が並んでゐる。東京驛から呉服橋までは例の賣店に續くやうに露店がたくさん出てゐる。呉服橋の袂で、競賣のやうに聲をあげてゐた梨賣は「これで十錢だ」と叫んでゐると、隣の煙草賣は『それは安いな、おれも買ひたいな』とひやかしてゐた。

三、神樂阪

燒け殘りの街を散步してると同じ東京に住んでゐながら五六年も遇はなかつた友人などにひよつくりよく出遇ふ。「お互にぶらつく範圍が狹くなつたからな。」などと顧みて苦笑せざるを得ない。

書店の前に揭げられてゐるむくどい繪の前に人だかりがしてゐる。錦繪大の安い石版刷の震災畫である。兩國橋のほとりの夥しい舟はみな人を滿載してゐる。炎の中の國技館、右往左往の避難民。白骨の山の被服廠跡の僧侶の供養、炎にかこまれた淺草觀音等。いかにも刺戟的なものである。

社會の大事變にはいつもこういふものが出てくる。日清戰爭の頃には少年であつた私は戰爭の繪を喜び、弱いチャンチャンを嘲弄して喜んだ、日露戰爭にもいろ〳〵の繪や畫報があつた。そしていま書店の店頭にこうした畫の並べられてゐることも當然なことである。しかしこれ等の事變に對して日本の畫家はあまり取材を求めなさ過ぎるやうである。俗惡な繪畫のみが人の目に觸れて、眞のいゝ繪が生れて來ないのはどうしたわけか。露西亞の戰爭畫家ヴィネスチャーギンほどでなくとも、この大きい事變を描く情熱が湧いて來ないものかなどゝ考へる。

下町の燒失と共に山の手の殷賑は神樂坂と白山とに集まるだらうと言はれてゐるが、此處でも目につくのは簡單低廉な食物と畫報エハガキ類の賣店の多いことだ。別に古い町、優れた都市の街を聯想させる何物もない場末の感じである。ただ毘沙門前に山芋屋が居たのは面白かつた。夥しい山芋の藁つとを並べて、千葉產一把參拾錢と書いてあるのは、いかにも深秋らしかつた。田舍出の青年らしいのが賣り子であつた。

雜然とした群衆の中を家鴨のやうに練つて步く藝者が目につく。この三流以下の藝者どもは不標緻な無智な表情をして燒け殘りの幸福さを感ずるやうに、湯あがりの顏だけ化粧した淺黑い顏をして、しやなり〳〵と町を練つてゐた。牛込會館の前には河合武雄舞臺監督で花柳章太郎の一座が有島氏の「ドモ又の死」等を演ずるビラが出てゐた。これは日本の文化としても丸てのものは、道路も飲食物も、書籍店も、建築も、藝者も演劇も劇場も、三流四流のもので我慢しなければならない低下さを感ずる悲哀だ。かくして神樂坂を眺められぬ氣分で私は見附の方に下りた。それでもう所謂賑やかな町はお終ひなのだ。「コレデオシマイ」と私は腹立たしく小

學生のやうに叫びたくなつた。

四、日比谷公園

日比谷公園前に電車を降りる。それは日比谷といふ一廓の玩具の町に着いたことなのだ。即ちこの一廓には所狹きほどたくさんの民家と賣店とがある。そして嘗て賑やかであつた京橋方面は茫々たる焦土なのだ。燒け殘りの家を修理して何かを營みバラツクを建てゝはゐるが、散漫で殘雜でまとまりがつかない。しかしこの日比谷町は小さいこまぐ\したものではあるが妙に纏つてゐるのである。

先づ公園に一歩を踏むと兩側のバラツクは軒並の賣店である。天麩羅、すし、饅頭、しるこ、燒鳥、そば、西洋料理どんな食べ物もある。エハガキ、畫報、雜誌、反物、下駄、等なんでもある。音樂堂前の廣場も運動場も何もかも道路の外の空地は、凡て賣店とバラツクとで一杯だ。密接して造られたこの粗末な新しい長屋のみじめさは人の心を暗くする。

池にはいつも樂しげに餌をぱくつく鯉は一尾も居らず、鴨も居らない。避難民が喰べてしまつたのだといふのはほんとうか。と眺望だけでない內面的な寂しさを感じる。鶴の噴水は水が不足で、寂然として水も吹かずに沈默してゐる。

澤田正二郞一座が「高田馬場」「勸進帳」などの野外劇を今日からやるといふ立看板が出てゐる。「みなさん聽いて下さい」といふ音樂會のビラも出てゐる。音樂や演劇がこうした場合に民衆との接觸を持つことはたしかに一進步だ。國家の非常時に於ては歌舞音曲禁止といふ古い慣例からの新しい立派な脫却である。

花壇にはコスモス、雞頭、カンナなどが秋空の下に目のさめるやうな美しさで咲いてゐる。人間の災厄に對してこうしたものは美を增すのであらうかと思はれる位である。たくさんのベンチは滿員である。その人々は平常の時とちがつてどこか田舍びた感じがされた。服裝が地味のためであらう。

『あすこにあんな茗荷がある。』

『花が咲いてるのは何だらう。』

などゝカンナを指してゆく小年增の二人づれなどを見ると服裝のせいばかりでなく、東京の住民としても中流以下の生活の人らしく思はれる。

服の新らしい二人の巡査がベンチに越かけてゐた。遠くで爆破作業の音が、こだましてきこえる。

『どの邊かな、あれは』

と一人は靜かに言つた。秋晴は人を汗ばませるほどの溫かさである。

めしひたる淺草

藤澤清造

その後の新聞によると、そこゝの燒け跡には、さかんにバラツクが建てられてゐるといふことが出てゐる。中でも、淺草が一等さかんだ。恐らくは、一等はやく復興するところはここだらうといふ意味のことが、これもまたさかんに聆かれてゐる。が事實はたしてさうだらうか。今のところ、私の知つてゐるのは、京橋の一部分と、麹町は丸の内だけなのだから、聲高にそれを否定するがものは持つてゐないが、しかし、私の歩きまはつてきただけの智識によつてみると、どうやら私には、この新聞の傳ふるところが、幾分疑はれないでもない。

なるほど、上野公園前を車坂へでて、それを電車路にそうて、右へまがつて行つたところなどは、盛んだといへば、それはなかなかに盛んだものだ。だがしかし、同時に悲しいのは、それは飽くまで「一時凌ぎ」といふことを金看板にして盛んなのだ。つまりそれは、盆をくつがへしたやうにして降りそそいできた夕立をやり過すために、そこの軒下へかけこんだ者の持つてゐる盛んなのだ。といつて分らなければ、私は重ねてかうもいひたい。――つまりそれは、それまで百燭の電燈をつけてゐた家が、不意にそれを失つたところから、その代りとして、今度は十燭光のそれをつけだした盛んさだ。でなければ、昨日までは、人もうらやむる繡綾羅に身をやつしてゐた者が、その夜おひはぎにあつて裸身にされたところから、やうやくの思ひでもつて工面してきた木綿もあらひ洒しのを着てあるくのと、同じ意味合ひにおける盛んさだ――すくなくとも、私だけは、はつきりとかういひたい。――無論そこには、どう蟲をころしてかかつても、折りあへない殖民地風な俗惡さ、もしくは雜駁さがあつたにしても、とにかくその上の、殷賑さといふのか、繁華さといふのか知ら

ないが、それを見知つてゐる私だけは、是が非でもはつきりとかういひたい。

で、もしも、私のいふところを疑ふほどの者は、——私が新聞にでてゐる記事を疑ふやうに、私のいふことを疑ふほどの者は、ものは試しだ、あすこいらを一巡あるいてみるがいい。そして、これは獨りあの電車通りばかりではない。田原町を右へまげると、そこは仲町通りになるが、それをのして、雷門へまでくるとする。それを更に左にまげて、仲店通りへはいつてみても、この蠟燭ながしの火影をみるやうな味氣なさは、何處までいつても、謂ふところの影の形にそうがごとしといつた風につてゐるから。——

　私ははな、ここへやつて來ないうちは、諺にいふ「知らぬが佛」でもつて、その後の新聞にでてゐるところを、その儘に信じてゐたのだ。ところでそれが、車坂をまがつてみると、それは過半、一時の不景氣から缺いたものだといふことは分つたが、しかし、その時もまだ、元來はあまり人のよくない私ではあるが、仲店のあたりだけは、流石にむかしに近い景氣をそへてゐることだらうと思つてやつてきて見たのだするとこれも今いつた通りなのだから、どこでそれは素見にではあるが、そこの門口まで尋ねてきてみた女の、ゐなくなつたのを知つた時のやうな氣持ちがしてきた。

　が同時に、かういふことだけはいへると思ふ。——これは私が手出しをしてはじかれた女にでも對するやうにして、その後の新聞記事について、厭味ばかりいつてきたからいふのではないが、ある新聞に、なんといつても、一等さきに店をひらくのは、それは飲食店だとあつたが、これだけは、ともすると誇張に失しやすい今の新聞中でも、紛ふがたなき事實だつた。——ちやうどそれは、火はあついものに出來てゐるのと同じやうに、人間といふ者も、飲み食ひをしなければ、ただの一日だつて生きて居れないものだけに、こればかりは事實その通りだつた。そして、物はついでもつて、も一つこの際私をして附加へさせて貰へるものなら、それはシャツだとか、呉服太物の類を商つてゐる店のおほいことだつた。でこれらを見て私の思つたことは、經濟學といふものの原則だつた。——元來が人間あまり利口に生れついてゐない所爲か私はこれを、錢湯へとびこんでから、宿におき忘れてきた石鹼を思ひだすやうにして、さういふことを思つてみた。

　といつたところで、それは何も、名のある飲食店といふ飲食店が、殘らず店をだしてゐるといふのではないから、そこのところは、間違へないやうにして貰ひたい。早いためしが淺

草は雷門附近の飲食店だ ここでともかくも店をだしてゐるといへば、それはちんやのバーに、奥の常盤と、仁王門まへの大増くらゐのものだつた。この外はまだ、碌すつぽ燒け跡もかたなしといつた爲體だつた。

このうち仁王門まへの大増は、觀音堂につらなつて助かつたのだから、依然として舊態どほり店をはつてゐた。それに常盤だ。ここは中へはいつて見ないから、委しいことは分らないが、こつちから見たところでは、一面に板だか竹だかで圍つて、入り口入り口には、大きく店の名を書いた提灯をかけつらねて、そこに景氣をみせてゐた。がこれらに比べて、哀れにもさびしかつたのは、ちんやのバーだつた。ここのは、閑遊會などでみる模擬店もどうやうに、一張りの天幕をはつて商賣をしてゐるのだ。そして、この哀れさは獨りちんやバーのみではなく、仲店どほり一帶がそれだつた。いや、仲店どほりばかりでない。火にあつたところは皆、板ツ葉でもつて圍つてはあつても、要するに、このちんやバーの境を一歩もでない底のものばかりだつた。

仲店などは、燒けけのこされた煉瓦のうへへ——それは、九尺くらゐの高さなのだが、それへズツクを冠せたり、トタンを葺いたりして、わづかに雨露をしのいでゐるに過ぎないのだ。そして、そこには、一二の繪草紙屋や、小間物屋などもあつたけれども、その大部分は、にはか出來の一品料理屋か、さもなければ、ゆで小豆屋か天麩羅屋、もしくは、すいとん屋かおでん屋などだつた。それと、思ひきり値段のやすい呉服太物を賣つてゐる店か、でなければ、メリヤスのシャツか、もしくはヅボン下などを商つてゐる店ばかりだつた。

それに、これは一つは時間の關係からかも知らないが、私の知つてゐる不斷の仲店どほりとしては、餘りに人出がさびれてゐた。その中で一等めだつたのは、大増の食堂だつた。ここだけは、溢れんばかりの來客でもつて、文字どほりの火事場さはぎを見せてゐた。

それにしても不思議なのは、この觀音堂の助かつたことだ。私は仁王門のまへにきた時に、何か知らひとりでに頭のさがるのを覺えた。それにここは、五重の塔も無事なれば、またそれと土塀一重をへだつた鐘樓も無事なのだ。私は何氣なく鐘樓の周圍をひとまはりしてみた。そして、その時、上の句はわすれてしまつたが、「鐘は上野か淺草か」といふのやそれからしてまた、「鐘一つ賣れぬ日はなし江戶の春」といふのなどを思ひだしてみた。そして、きうに思つたことは、今はさほどの威勢もそこには見ることは出來ないけれども、こ

の觀音堂のある限りは、淺草は永久に繁榮しつくすことだらうといふことだつた。

だがしかし、さう思ひながらも悲しかつたのは、またそこを引きあげてきて、仁王門のわきを通り、觀音堂のまへにきて突つたつた時だつた。——見るとそこらには、——觀音堂のうへや、仁王門のわきには、みな年をとつて、枯れきつた木の枝でゝもあるやうになつてゐる幾人かの男女が、菰莚をしいたうへに坐つてゐた。そして、各自が、みな膝のあたりに、腐つたやうな毛布のきれはしや、玩具のやうにも思へる小さな風呂敷づつみをおいてゐた。それがまた何か知ら、私のこころにこびりついてきた。

それから、私はまた瓢簞池のそばへでてきたのだ。そして目をあげて池のかなたを見渡してみたけれども、そこにはもう目をさへきるものといつてはなかつた。無論、そこからはなんらの物音だつて聞くことが出來なかつた。私は、イルミネ！ションの輝きや、はなやかな樂隊の奏する音色を、いつになつたら見聞きすることが出來るのだらうかと、さういふことも思つてみた。

また私は、私のすきな千束町は銘酒屋のあつたあたりへも來てみたのだ。だがそこには、あかんぼうの口でも見るやうに、僻くもそれは、二間に三間もあらうかと思はれるやうなバラツクが、幾つか建てかかつてゐるのみだつた。そして、それらのバラツクの陰から洩れてくる金槌の音や、鉋の音も何か知ら私には物かなしく聞きなされてならなかつた。ちやうどそれは、そこへ來しなに見てきたのだが、この前きた時には、崩れながらもまだ、この地の名物だつたその面影をたもつてゐた十二階も、その後は工兵隊の手によつて壞されてしまつたのだらう。もう影も形もなくなつてゐたが、それを目にした時もおなじ氣持ちがした。——これは一つは、場所がらの關係からきてさう思はれたのかも知れないが、ちやうど男の力その物をかたどつたやうにして聳えたつてゐた、あの十二階のなくなつたのを見た時とそれはおなじ感じだつた。ただそこには、物のあはれさがあるのみだつた。

また私はそこを離れると、今度は象潟町をぬけて、待乳山へのぼつてみたのだ。で、そこに行くまでにも、私は隨分とかなしい情景をみなければならなかつた。殊にいまなほ忘れがたいのは、もう手元もわからないまでに、——私がそこへ行く時分は、次第に夜のせまりかかつてゐる時分だつたが、その暗がりになほ燈火もつけずに、これもほんの形ばかりのバラツクの入り口へでて、大根をきりきざんでゐる若い女のゐたこ

とだつた。そして、私が死んだものゝやうになつてゐる待乳への ぼつて、前後左右をながめ見渡した時におぼえたものは、そのかみ奥州は平泉にきて、秀衡や康衡などの跡をとむらひ「夏草やつはものどもの夢の跡」と讀みのこした芭蕉のこころ持ちだつた。

彼はその件にまくらして、「三代の榮耀一睡の中にして云く」といつてゐるが、私がその時目にしたものは、三百年の榮華を一朝にして失ひつくしてしまつた後は、燈影もかぞへるに足りるほどしか持つてはゐない暗のなかに、哀れにもやつれきつた身をよこたへてゐる東京の景色であり、淺草のありさまだつた。まことかの女はいま、地震に魂をうばはれ、火にその體をやかれて、息もたえだえになつて、纔に床の上に横はつてゐるのだ。もしくは明眸皓齒の美しい人にたとへていふなら、これは病ゆえにその明眸をなきものにして、今まさに悶絶してゐるそれなのだ。

で、その中には、ここ淺草も、ぼつぼつとバラックが建てまし、いろ／＼な商賣もはじめられることだらう。そして、その中にはきつと、電燈もつけられて、夜もなほ晝をあざむくことになるだらう。がしかし、それも要するに、これが病人なら、それはその病勢の一進一退するのを見るもおなじで、本當に快方にむかつてくるのは、年が變つてからなのだらう。——年が變つて、川向ふの向島の土手に、咲きさかる花をみれるやうになるまでは、きつとここも蛇になつて「冬眠」といふのをやることだらう。私はさう思つて、待乳山をおりてきた。そして、聖天町へでた足を猿若町のはうへまげて、公園の裏どほりをずつと歩いて、燒けのこつてゐる下谷は坂本町へまでくる間は、平泉の遺跡にたつて、泪にくれてゐた芭蕉のこころ持ちから離れることが出來なかつた。その間にも私は、ランプの蔭で語りあつてゐる幾人かの人達をみたり、アセチレンや蠟燭の光をたよりに、商ひをしてゐる何軒かの店頭をみなければならなかつた。そして、そこにまた、私のこころ持ちまでも、餘計と暗くしなければならなかつた。——

終りに私は、私の歩きまはつてきた時日のことを斷つてふきたい。その日は、十月十三日で、時間は午後の三時半頃から七時がらみになるまでの間だつた。

私のスケッチ

網野菊

新東京といふと、私はまだ現實に出來上らない、頭の中にある東京を思ひおこす。それはハツキリした形はとつてゐないが、ともかくも或る輝しきを作つた東京であるのだ。もしも今眼の前にある現在の町をさして新東京と云ふなら、私はたまらない氣がする。今の此の町を東京とか新東京とかいふ名で呼びたくない氣がする。私の心に思つてゐる東京、描いてゐる新東京は、もつと〳〵どうにかした、落着きのある立派なものだのに。

バラツクは日に〳〵殖える。九段の坂に二三日行つてみないと、その間にどん〳〵神田一面が白いバラツクの屋根でうづめられて行く。だが、何と云つても、出來て行くものは、殺風景なバラツクだけなのだ。少くとも、此のあと三年間といふものは確かに。

燒殘り

私の家は丁度燒跡と燒殘りの境に立つて居る。私の家の前の三間道路をしきりに、左はバラツク、右は普通の家といふ風になつて居る。そして私の家の二階の裏向きの窓を開けると、牛込、四谷、新宿邊の高臺が昔の儘の姿で立つて居るのが見えるのだ。屋根瓦のいたんで居るのは兎も角も、二た月前と同じ姿の儘で朝夕の景色が眺められるといふことは、今の場合、かへつて奇異な感じをいだかせる。

夜になると其の窓から、一面に暗い空の一ケ所、四谷の上あたりだけがあかるく〳〵見える。まるで何處か小さい劇場で見るダンサーのやうな可憐な華やかさで。そのあかるさを見ると、どういふわけか、私は喜びは感ぜずにうすらもの悲しい氣持におそはれる。

バラツク村

いつか千駄ケ谷を電車の窓から見て通つたことがある。その時私は、それまで忘れて居た東京の負つたいたでを急にまた思ひ出した。まるで東京の文化復興を一身に背負つて立つ

やうな氣持で活た素晴しい意氣込みが、ふつとさめはじめたのは其のバラックを見てからであつた。地面に密接した、けゞ、ぞんざいな床、狭い室の中に干したおしめ、着物。

だが、昨日私ははじめて九段のバラックを見て多少元氣になつた。三列ばかりになつた家の、後側にある方はわからないが、前の側だけは、極めてキチンといろ〳〵の店が竝んで居るのである。炭屋がある、茹栗屋がある、煙草屋がある。繪はがきやがある、汁粉屋がある。中には蟒國だんごと染めぬいた眞紅な眞新しい洒落た大きな長提灯をさげた店もあつた。人々の顏も比較的平和さうである。空一面赤く夕燒けした下に、薄黑く浮ぶ神社、木のしげみ、鳥居。その前に生活する人は他のバラック村の人に比べてまあ〳〵しあはせな方だなと思つた。

文化日の出燒

芝浦、神田、日比谷その他、燒跡に出來た露店の中飲食店の多いこと〳〵、よくまあこれだけ飲食店ばかり出來たものだと驚く程だ。建物が大きかつただけに中々整理のつかない銀座の燒跡にでも、まつさきに出來たバラックは飲食店のそれである。

「牛どん」「すゐとん」「みそ汁あり」いろ〳〵書いてある中に復興燒　復興軒などといふあてこみの名が澤山ある。大正になりたてに大正軒、大正堂たどといふのが出來たのと同じだ。だが、九段下で「ヂシン燒」といふのを見たら、露骨すぎてばか〳〵しくなつた。

昨日、家の近所を歩いてゐたら、文化日の出燒といふ露店が眼にとまつた。「文化」は一寸不當だが、茹あづきの「社會奉仕」よりはましだ。

「日の出燒はいゝ。日の出燒はいゝ。」さう思つて私は一人悦に入つた。

丸善の賣店

七日のことだつた。近くで爆破工事がある爲め電車がとまつたので、九段から歩き神田へ向つて行つた。爆ぃ見物の人達が大勢竹橋の附近から坂の途中にかけて群つて居る。その中を歩いて行きながら、何氣なく階行社脇の電信柱を見ると丸善九段中坂臨時賣店開設の廣告がはつてあつた。しかも七日からと書いてある。自分の家から遠くない所に丸善の賣店が出來た　さう思つたら胸がわく〳〵する程嬉しかつた。「さうか東京だ。」といふ氣がした。

雜誌が依然東京で出版されることにきまつた、さういふ新聞記事を京都で見た時、云ひしれぬ誇と興奮を感じた。東京

に歸つて、山の手のあちこらに殘づた本屋を見ると、その姿に、「あゝ、こゝにもある、こゝにも殘つてゐる」と思つて、蘇つたやうな氣持を感じた。そして、今また、本屋らしい本屋の殘つてゐないと――いふより、前からもなかつた自分の家の近くに丸善の賣店が出來たといふことは實に嬉しかつたほこりと貨物自動車の響と日每に新聞にさらけ出される情ない報道とに兎角おびえ、滅入りこみたがる心に、それはまるで沙漠の中のオーアシスのやうな喜びを與へてくれる。

球の音

もう電氣もともりそめて薄暗くなつた町を步いてゐると、ふと、數をとる細い女の聲が聞える。燒殘つたたまつきやの中からだ。細い、かすかな其の女給の聲と球の音とを聞いた時、「燒跡を前に球などついてゐる不屆者。」さう云つて咎める氣にはなれなかつた。ともすればあの京の靜かな町を夢に見やはらかい樂器の音に心を走らせる自分を思ひ出して、何となく悲しくなりさへしたのである。

バラックごつこ

小さい妹達をつれて市ケ谷見附を步いて居たら、上の九つになる妹が、

「私達、このあいだ、あすこんとこに寢たのよ。」と云つて、電車道の眞中を指した。

道を步きながらオイ〳〵と泣いてゐる五つ位の女の子を、「地震の時はね、おばちやんでも店の××どんでも誰でもおぶつて逃げてあげるからね、心配しなくてもいゝのよ。決して××ちやん一人置いてきはしないからね。」と云つてすかして居る女の人があつた。

「僕、バラックを建てるの。」さう云つて遊んで居る小さい男の子があつた。

が、監獄の近所の子供達は監獄ごつこをするさうだ。バラック小屋の間に生活する子がバラックごつこするのは一寸も珍らしいことではないのだ。（十月十六日）

新東京記

三宅やす子

○

暫く都をよそにして、夏を涼しい海のはたで暮したのも、私には便利な、賑やかな、美しい東京の町といふものが、いつでも私を迎へて呉れるといふ心強さがあつたからだつた。好きな好きな東京を少しの間われから避けて、不便な田舍に暮すのには、いろ〱理由があつたにしても、其中には、左樣した氣持の轉換から、更にまた新らしい東京への執着を深めたい樣な心がひそんで居た事は否定出來なかつた。

其憧憬の東京へ、用事を果しに一日歸つた私は三越、白木、屋丸善、アルスなど、買物や用達を濟ませ、兩國から南總の濱邊の家へ立つたのが震災の前日であつた。

私の久り振りで見た東京は、過去何十年に建設された東京の最後の姿であつた。私の眼には、長く單調な漁村の景色に慣らされた後の銀座の通りや、大きな建物の印象があまりに深いためであらうか、災後半月を經て、再び帝都に足を踏み入れた時に、涙ぐましい戰きにふるへた。

あの日、私が最後に見た東京の街は、又東京としてのもとの姿の最後の日だつたのだ。廿時間を出でないで、またゝく間に焦土と化してしまふものとは誰が豫想だにし得よう。街には勇ましいまでにめまぐるしく走る車が業務のためにと凡ての活動を續けて居た。人々は暑いと云ひ乍ら活氣づいて働いて居た。

○

其もとの町が一夜に消滅して、私の眼に映じさせられたものは、燒跡の慘たる町に、これはどんな田舍でも見られない樣な七厘一つ釜一つを白布で圍つた樣な露店が、いくつと數へられない程並んで、ゆであづき、すいとん、牛めしと、客をよんで居る有樣だつた。

人々は荒んで居た。町にはうるほひがなかつた。「只生きるだけ」左樣した感じが私の身にひし〱と迫つた。

人力の前に自然の暴威はあまりに暴虐だつた。かなり都會を享樂しようとして居た人たちさへ、今は只食べて生きてゆく許りになつた。人心は又、恐ろしくいぢけて居た。

けれども其頽廢の都の中に、誰が壓へつけようとしても、おさへつけられて了はない復興の氣分は、恐ろしい出來事のあとに驚くべき力で働いて來た。

一日、一日と街の有様は變つた。人の心持も安定して來た何にもめげない江戸つ子氣分は、濟んだ事はさつぱりと諦めて愚痴もうらみもなしに新らしく働き出さずには置かないのであつた。

新東京の建設は、舊東京の破壞の日に、夙く其緒を發して居ると云つても決して過言ではない。

○

中にも機を見る事に巧みな人は、時機に應じて必要な商賣をして、平素に見られない利を得た。大した資本もなしに、場所さへよければ一日に多くの商ひをする事が出來た。

地震燒、ロノサイ軒、復興亭、などゝ名をきくだけでもそんな店を出す人の氣の利いた心持をほゝゑましく感じる。

復興へ、復興へ、それは只單なる叫びでなくて、其聲以上に大きく事實となつて、日に實現されてゆく帝都の現狀である。

○

泰西文明の急遽なる移入によつて、生のまゝに呑み下された在來の東京は、外形に於ても内容に於ても、たしかに畸形であつた。

都會をよろこぶものにとつて、又都會の中のいまはしい弊害にどれほど惱まされたらう。

終始ともなはない文明、内容のこりあはない文明、形式許り都會人が、集合して繁榮を築いて居た帝都の夢は一瞬の震動で根底から覆されて了つた。

初めて生れ出る、文化は或は眞の文化であらう。婦人の自覺といふものが今、空論を離れて、實際にさしせまつて來た男性の手によつてのみ建てられた舊東京に比較して、建設されるべき新東京は、男女協力の都である。女性も責任の半ばを負はなければならない。

恐らく今、東京の街の中に惰眠に安逸を貪つて居る女性は一人もないであらう。

生活の建てなほし、自分自身の改造、新らしい心の女性の力は、どこまで働いてゆかうとするのだらう。

新東京の建設は、實に男女協力の理想の實現である。

建物は男性の手で建てられ、街も男性の手で整理されてゆくけれど、中に働く人達の生活の根源をしつかりと安定にして充分の力を致させる事がどれだけ復興の根底を形づくつてゆくであらう。

女性の内助は、將來全く意味が變つて來た。少くとも此震災によつて、すつかり内容を變化させられてしまつた。

凡ての人の熱誠が基きあげるであらう新東京の文化に浴して、力のある藝術や、學問や、事業が美しい生命を續けてゆく事を私は本當に心から待ち設けて居る。

涙の溢れる東京

近松秋江

郊外に住んでゐれば、例年の今頃は、いつも池上のお會式堀の内のお祖師さま、雜司ヶ谷の鬼子母神と、景氣の好い團扇太鼓の遠音に、秋の夜らしい、しつとりとした生活氣分を享樂する時であるが、今年は、豐かな江戸氣分の一つたるその團扇太鼓の遠音さへ聞かれぬ寂しさ。毎夜九時を過ぐる頃から聞かれるのは、かつち〳〵といふ自警班の拍子木の音ばかりである。天下泰平の合奏曲の如き團扇太鼓の音に代ゆるに殺風景な夜警の木の音とは、思へば思ふほど有爲轉變の世の中ではある。

今はもうバラックがおほかた建ち連らなつたが、私は、神田橋から上野東照宮五重の塔を遠く見通し、大東京の繁華を誇りし日本橋の橋上を行きながら江東の國技館を望みて、そぞろに落涙することを禁じ得なかつた。

大震大火の前は、私共郊外に住んでゐる者は便利な省線に乘つて直ちに東京驛か又は有樂町驛に行き、そこから丸の内のビルヂングに入つてみるとか、數寄屋橋を渡つて銀座に出るのを最も便とした。一體さまで食慾の張つてゐない私は大した料理屋へ晝飯に入るといふにともなく、併し銀座をぶらついて銀座食堂へ入つた序に、むしろ其處で販賣してゐる各地の名産を買つて歸り、自宅でそれを賞味するのを樂しみに

してゐた。

鮒屋で舶來の白葡萄酒を買つて來ることも常であつた。それから國民新聞の人達のよく行く銀座の千疋屋の二階へはよく上つた。あそこは氣の張らない、好い家であつた。千疋屋で輕いかるい一皿か二皿の物を取つて二時三時頃辨當の代りの晝餐を攝ることが多かつた。新橋角の博品館で雜貨を求めることも屢々あつた。博品館は物の買ひよい店であつた。彼處にそのうち買ひたいと思つて見て置いた物が二つ三つあつた。もとより新しい物であるから、再び出來ることもあらうが、一寸惜い氣もする。尾張町二丁目の澤田洋服店に今春來二三の品を注文して作らした。今に爽秋九月の候になつたら向冬季節の散歩服として黑つぽい合着を誂へようと思つてゐたが、それも當分駄目となつた。何も斯も夏期を通り越し、今に清秋のシーヅンが始まつたらと、そればかりを樂しみにして暑いあつい夏期を通つて來たところへあの天變地異。越後屋の飾窓に秋のお支度の珍納も覗いて見られなくなつた。田屋の店前に立つて香氣の高い毛織物も眺められない。

日本橋に來て先づ丸善の慘憺たる殘骸は、赭土の燒野原を行く者をして、知るも知らぬも、覺えずそこに佇まして悽愴の感胸に迫るを禁ぜさらしめた。文學書肆としての老舗春陽堂は跡形もなく灰燼に歸し、さしもに大東京の殷賑を此の一地點に集めたかの雜沓を呈した日本橋の十字街は、はて何處であつたかと其處らを見廻すと柳屋も白木屋も恐く一空の灰燼に歸してしまつた。

それからそれへと、ありし日の大東京の面影を偲んでゆけば何一つとして追憶の涙の種ならぬはない。

日比谷の新音樂堂に澤正の野外劇が催され、菊五郎の舞踊が催されて、慘禍に悲しみ荒んだ人心を慰藉し緩和するといふは時宜に適した催しであるが、バラツクの村々を背景として其を考へると又更に新なる涙を留めあへぬ次第である。

かくて、バラツクの東京の市街は來年の今頃まで待てば大分落着いた觀を成すかも知れぬが、永久の形で新興する東京の市街を見て樂しむことは多分私共の生きてゐる間には望まれないことであらう。

私が東京の銀座を見たのは、變災前の一週間ばかり、八月の二十四日か五日であつた。銀座の十字屋で蓄音機のレコードを求め、少しばかり道を歩いたが何分殘暑の最も酷しき最中とて、早々にして有樂町から省線に乘つて郊外に戻つて來た。何も斯も秋のシーヅンを待つことにした。

私は今、バラツクの武藏野村の生活から新しい東京情調を味ふとが出來ぬ。それは自分が此度の災禍から免れて以前に變らぬ無事な郊外生活を持續してゐるからであらうと思ふ。

バラックの村には、多分それ〴〵燒野原に芽生えて行く新東京の情調も味はれることであらうと思ふが、それは自分の實驗を經ないことである。

以前からも、中野あたりの郊外からは時々牛込の神樂坂に日用品の買ひ物に出掛けることがあつたが、今日となつては一層牛込に用事がふへた。牛込の神樂坂によつて、古い東京の繁華と便利とをわづかに偲んでゐるのである。

それとゝもに此のあたりの郊外の、めき〳〵と繁昌してゆく有樣は震災後一層眼に立つて來た。東中野のステーション附近には震災前から既に新しい店舗向きの貸家が建ちつゝあつたが、それが震災後更に明るく引立つて見えて來た。日本橋の方の名代の老舗が幾軒も此處に支店を設けたり、設ける準備をしてゐる。ステーション附近の洋食屋など今までは主に出前のみで、そんなに客の影の見えなかつたのが、此の頃では銀座、日比谷のバラック村よりは遙に料理が調つてゐるので、何晩いつも客で滿員の盛況を呈してゐる有樣。

つい一週間ばかり前殊更日の暮れ方を待つて二度目に私は安自動車で焦土の東京村を見て來た。そして萬世橋の高架線のプラットフホームから夜陰の東京村を展望してバラックの遠灯を眺めると胸の潰れる思ひがした。（十月廿三日）

獨歩の「武藏野」より

必ずしも道玄坂といはず、又た白金といはず、つまり東京市外の一端、或は甲州街道となり、或は青梅道となり、或は中原道となり、或は世田ケ谷街道となりて、郊外の林地田圃に突入する處の、市街ともつかず宿驛ともつかず、一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈し居る場所を描寫することが、頗る自分の詩興を喚び起すも妙ではないか。なぜ斯樣な場處が、我等の感を惹くだらうか。自分は一言にして答へることが出來る。即ち斯樣な町外れの光景は何となく人をして社會といふものゝ縮圖でも見るやうな思をなさしむるからであらう。言葉を換えて言へば、田舍の人にも都會の人にも感興を起さしむるやうな物語、小さな物語、而も哀れの深い物語、或は抱腹するやうな物語が二つ三つ其處らの軒先に隱れて居さうに思はれるからであらう。更らに其特點を言へば、大都會の生活の名殘と田舍の生活の餘波とが此處で落合つて、緩かにうづを卷いて居るやうにも思はれる。見給へ、其處に片眼の犬が蹲て居る。此犬の名の通つて居る限りが即ち此町外れの領分である。――（明治卅一年）――



帝都復興畫譜

竹久夢二

1

何を、如何に、復興するのか、私には興味もあるし、もつけの希望をもかけてゐるのだが、責任を持つてゐないから、見物のつもりで丸の內へ出かけて見る。

ステッキの代りに鉛筆を振まわしながら、ぶら〳〵と——いやなか〳〵どうしてぶら〳〵所ではない、澁谷驛から東京行の電車に乘るのは死者狂だ。電車の込合方までが、異常だ。この秋の空の色や、日の美しさもたしか異常であつたが、男も女も水火の中を經て來たのであらう爲か、わけて女客の氣の荒いこと夥しい。これも特に氣のつく事だが、燒出されらしい婦人達は、みんな色が黑くなつてしまつた。しかし私の住んでゐる澁谷でも、夕方風呂の歸りなぞに出逢ふ女に、思はず足をとめて見るやうなのがある。久米縞の下へ浴衣を重ねて、水髮で、白粉氣なしだが、物越し褄はづれにどこか洗練されたあるデリカシーが、見る人の心へ柔らかに迫る。それは世俗にいふ意氣とか伊達とかいふのではない、もつと內質的に長い都會生活から養はれたものらしい、狹い東京の中で、からも地方色の



違ひがあるものかと、今更のやうに氣がつく。
また私は、さういふ下町の女が、僅かな緣故から、所謂山の手の赤屋根のアメリカ風の應接間など持つた家庭へ避難して來て、誠に板につかない悲喜劇の一幕をも見た。かういふ山の手の有産級の家庭には、また新しい時代を暗示するやうな、社交や、處世や、調度や、料理法があるのだ。またこの家の令孃が應接室のソフアに倚つて飲むコーヒーのさじの使方にさへ、アメリカの活動女優好みの蠱惑と巧みとを見ることが出來る。それは形の上の一例だけれど、この二種の女性の、この理智とあの情趣とに、互に學ぶものがなかつたであらうか。

2

さう私が言ふ事に憤慨なさる御婦人があつたら、私は燒ける前の下町の露路にさゝやかに侘て住んでゐる年寄夫婦とか、鳶の者の家庭を一度御覽に入れたかつた。どんな貧しい九尺二間でも、木口の好い長火鉢に艶布巾のよく掛つた南部の鐵瓶がいつもたぎつてゐて、六兵衛の茶碗が猫臺の上に乘つてゐて、備後を布いた緣側には蘭の一鉢位はおいてある。その調度のいかにもつゝましく物寂た淸々しさ。これはほんの一例に過ぎないが、また私はそんなけち臭い日本趣味だけを讃美するのでもないが、彼等がいかに好い品物を知つてゐるか、いかに一草一物にも深い愛をもつてゐたかを私は言ひたいのだ。彼等は茶碗一つにしても、その物を通じてその作者



を愛してゐた。吾々の祖先は、吾々の時代のやうに、さもしく貧しくはなかつた。

町内の夜警にしても例の自警團のやうな不統一なものではなかつたやうだ。近い例で、新佃島が燒かれずに一町内ぽつんと殘つたのを見てもわかる。當時あの町内で老若男女二日二夜まんぢりともせず、男は屋根で火の粉を防ぎ、女子供はバケツで水を運んであの猛火と戰つたのだ。住吉神社の鳩がポンプのガソリンをくわへて下つたといふ傳說よりも、人間が一つ心になつた奇蹟的な力に私は興味を覺える。

私は玆でそんな話に力みかへるつもりはなかつた。私は、復興の東京を見物に東京驛を降りた。私はこゝで自分の異樣な服裝に氣がついた、タキシーを着てゐるのだ。罹災者の爲めに私の貧しいトランクは空になつて今はこのタキシー一着で餘儀ないとは言へ、停車場にはまだ武裝した兵隊が三々五々立つてゐるのだし、旅客はまだ武裝を解いてゐないのだ。私は場内の煙草屋で一箱のボキラ、デ、コルチヨを見つけた。二階のサロンへ上つて、革の椅子に倚つて、絕えて久しいこの好ましい煙草を眺めた。そして金と藍と朱との心床しいレツテルの圖案を樂んだ。

そこであまり甘くない精養軒のコーヒーを吸つてゐると、これは大東京建設に參與する紳士達であらうか、庄司であたつたばかりらしい髯を撫でながら、聞くともなしに聞く如くんば、大松閣の假店へ出る女達の品定めである。私はふと抱一の屛風に濡れたレンコートを引かける種屬を遠く出な



6

いこの紳士諸君が、築地赤坂の傾斜の巷を失つて、それを新しくどんな風に文化的なアメリカ式な建築で復舊させるつもりか、ちよつと訊いて見たかつた。

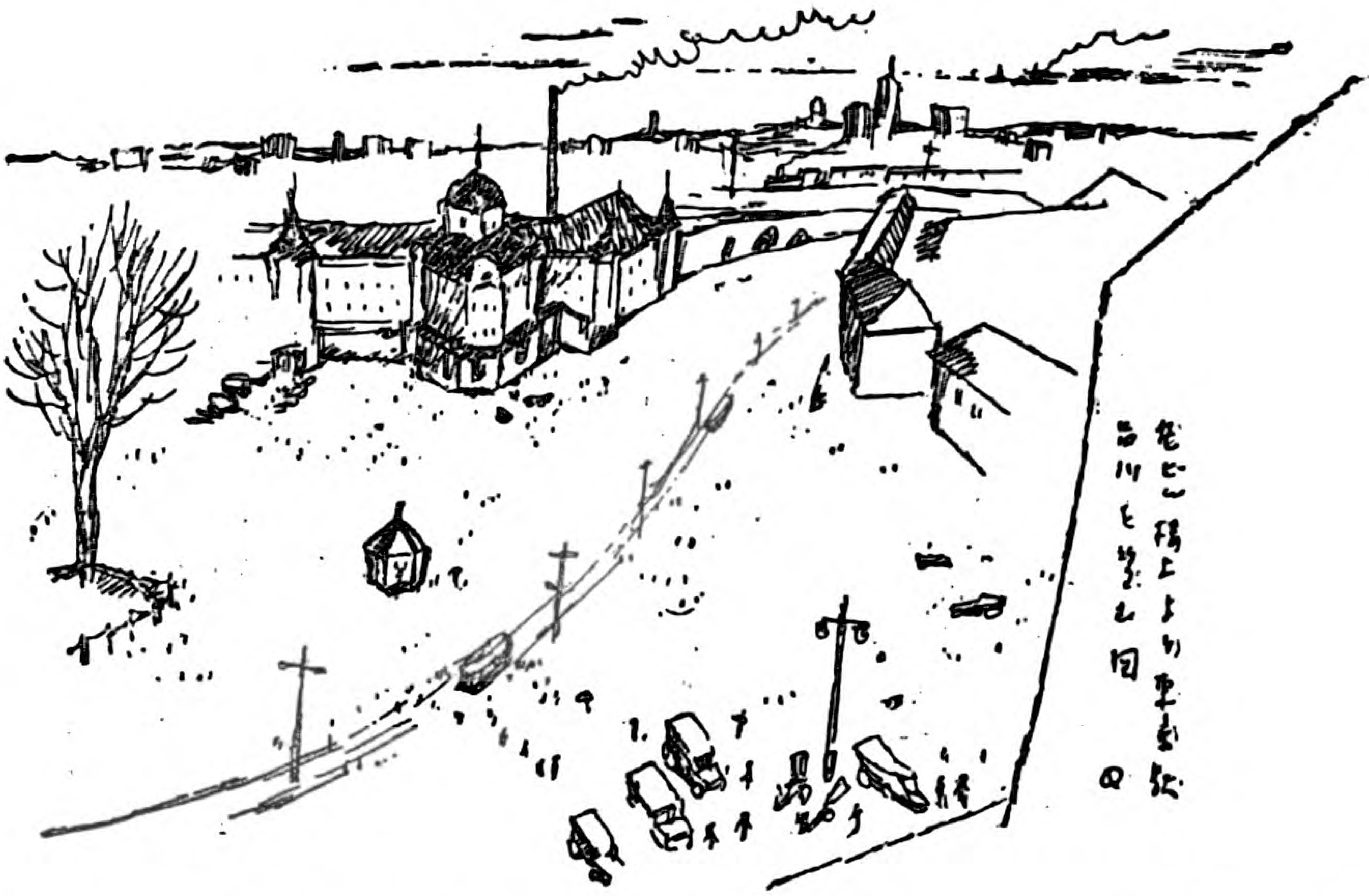
「東京會館のやうにやるのさ」とその人達は言ふだらうか。

3

私はそこを出た。驛前の廣場に迷惑さうに不調和に立つてゐる大銀杏の下に立つてあたりを眺めた。

少しも有機的な感じを眼に與へない、一つも曲線を持たない、たゞ徒らに大きな建設物が立ふさがつてゐるのを見た。味もそつけもない建築の廣い面に、同じやうな無數の穴が上下左右に並んでゐるのだ。これが均一主義文化の商標だらうか。そして一番下の大きな穴の入口には、護衛の兵隊が立つてゐる。その建物の周圍には數百臺の自動車や荷車、俥、人間が黒く動いてゐる。就中、丸ビルの周圍は、露店で埋められてゐる。震災エハガキ、藝術寫眞、表現派手刷木板畫、赤い地圖、畫報、情報、新聞、メリヤス、帽子、足袋、[illegible]、庖刀、バケツ、シヤボン、齒磨粉、鉛筆、萬年筆、毛布、布團、輕便ゴム靴、輕便鼻緒、輕便火おこし、輕便火消し、輕便おしめ干、輕便何々等々其他飲食店はその數算すべからず。まるではや、伯耆國大山か奧州三春の馬市を見るやうだ。

中には三越を小さくしたやうな露店で、枕、櫛、メリンス、ネル、金巾



丸ビル階上より東京驛品川を望む図

たきつけ、干瓢、茶碗、箸、茶、タワシ、針、糸、ボタン等を一手に賣つてゐるデパートメントもある。それは昔の萬屋制度が分業になりまた逆行したといふ形だ。この邊から出直してゆければ、復興もちよつとおもしろい。

4

「京に田舍あり」は沙漠の中にオアシスがあるやうに私達には嬉しい。

私は丸ビルへ入つてゆく。私はこゝへこれで幾度來た事があるかしら、地下室に何か食べる物があると聞いてゐたので、恰度晝時ではあつたし階段を二三歩降りかけたが、どうも地下室で堅いビフテキか何かをごり〳〵噛んでゐる間に、ぴしやんこにでもなつたら、爪をはがしても助かりさうもないと思つて、やめた。階上の食堂ならおなしことでも見晴らしも好いとおもふが、一人で食事するのも興がないと思つて「はいばら」の店へはいつて主人を誘つて見た、榛原氏は輕快な洋裝で忙しさうに出てきて「まあこの姿で働いてゐます。私はまだ年が若いからこれが樂になるでせう。燒いた商品は惜しくはありませんが、永年蒐集した參考品を失くしたのはちよつとあきらめられません」といふ。古い千代紙や小間紙などの板木も燒いたといふ。新しく板をおこすにしても、バレンを造る職人がもうないさうだ。「何を創めやうにも紙がないのです、今も土佐や石州から透元が來てゐるんですが、荷を出すにも船がないんです。見舞に送つてくれる



物と言へば傘を十本とか夜具とか塵紙とか、まるきり東京の事情が解らないのですね。でも大阪から持つてきた算盤だけは大當りでした」

私は忙しさうな主人に別れを告げて、玩具や唐物を並べた江戸の老舗、今のHAIBARAの店を出た。

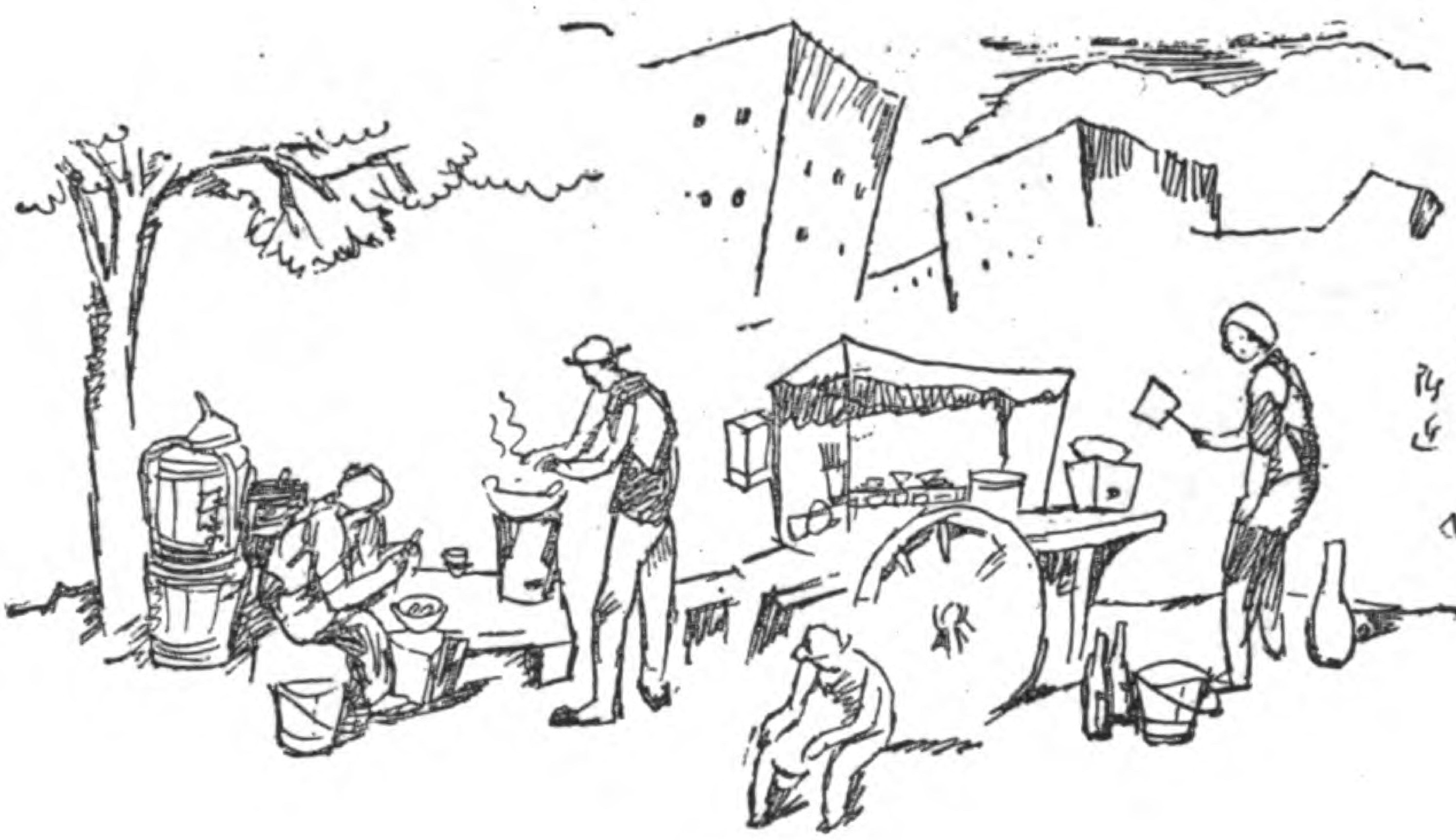
5

「時局に際し奉仕的提供」と書いたどこかの飾窓の前を人に押されながら歩く。梅、菖蒲、百合とそれ〴〵の香水が可愛らしい瓶に盛つてある。これをまたリリスのやうな文化娘が買つてゐるのだ。試みに梅を一瓶買ふと、その包裝紙がリリス式だ。資生堂のデコレーションがフランスの BON TON 直輸入だとすると、これはまたアメリカのレデースマガジンだ。

丸善へ用のあつた事を思出して寄つて見る。註文しておいたプラカートはまだ着いてゐない。この前この店に一冊あつたプロパートのルシアンパレーがもうなかつた。「時局に際して」ゐても、やつぱり賣れるのかなと感心する。

階上の食堂へゆくのだが。王女の左の手をもつて、しんづしんづときざはしを下りる心持は貴族的で好いが、一人てくてくと九階まで上つてゆくと考へるだけでも勞れる。これは好きではないが仕方なしにエレベーターへ乘つて、食堂へ上つた。

こゝにも大東京建設の紳士淑女諸君が群をなしてゐるのを見た。



6

有島生馬氏に教へられて以來私の好物の一つになつたマカロニーに、鳥肉を添へて簡單な食事をとつて、屋上庭園へ出て見る。

遙かに宮城を越えて富士山が見える。富士山の形が異つてゐるとも、ゐないとも、よくわからないが富士山だ。廣重の江戸百景の中にある富士山が見られるだけは、今の東京で見られるに違いない。すると抒情畫家廣重もあんまり嘘を畫いたのではない。富士見町はもとより、室町からも、日本橋からも百本杭からも、今は富士山が見られるだらう。

私は、食事を終つたせいか、非常に氣輕な氣持になつて四方山を見渡した。上野が見える、隅田川が見える。品川が見える。

品川のお臺場こそは悲しけれ
千年萬年待つたとて
どう黒船が來るものぞ

といふ唄を思出す。所が黒船が來たのだ。レーニン號が來た。しかし我日本帝國は、一彈を用ゐずして追返してしまつたか。かうして見ると、東京の街は急に明るくなつたやうだ。そしてなか／＼ハイカラだとおもふ。日本家屋の雨露に晒された羽目板のセピヤ色や、草の生えた瓦屋根の灰色がなくて、街は黄と赤に見える。バラックのトタン屋根も、空の青色をうつしてかうして遠くから見ると青くてなか／＼に美しい。それに山下新太郎



氏あたりが、新しいデコレーションでも施したら、とても見違へるやうな東京が出現するのかも知れない。

7

「女性改造」の註文だつたから、もつと委しく丸ビルを見ずばなるまい思つて、大丸へ白木へも入つて見たが、いづれを見ても田舍育ちの、何から何までさもしくて、手にとりあげるやうな物は一つもない。この十年來の呉服屋はどこでもさうであつたが、それでもたまには琉球紡だの地織の掘だしものがあつたが、今は何もない。大島まがい、結城まがい、お召まがい、實用切等々。

丸ビルを出て、濠端を歩く。

「まるで鼻の落ちた女の末路だ」とある小說家が言つた帝劇を玄關口から覗くと、なるほど屋根がぬけて青空が見える。車寄の所へ來ると、歐風花文字で「花月食堂」と書いて下げてある。櫻の木に、紅白の段々幕を廻じた中から、ひよいと平岡氏が顏を出す。

「この通り辨當屋だ」といふ。

日比谷の三角地へくると、これはさすがに星島二郎氏の思付だけあつてこゝのバラックはなか〳〵上等だ。平野屋がこゝでどんなものを食べさせるのか　ちよつと寄つて見たい氣もしたが、歸りの電車が込むのを恐れて歸ることにする。（九月十九日）



わが母のおもひで

私の母は自殺した

藤森成吉

母の思ひ出――それは、かうして書くにはあまりに悲痛すぎる。

母は、私の數へ年二つ（滿二歳に足らず）の年に、もう此の世の中から居なくなつた。自殺したのだ。

どうして母がそう云ふ最後を取るやうになつたか、それは、今人の云ひ傳へてゐるところを綜合すると、私の――同じく今は亡つた、――祖母の虐遇と、父の當年の放蕩にあるらしい。

寡婦の姑の嫁いびりと、家を外の夫の冷淡、……それはお定りすぎる、が、今もなほ昔のままを存してゐる故郷の古い私の家を見、生活氣分を見、更に此のごろ

の新しい若い家庭を思ひ較べる時、私にはあまりに當然な氣がする、今から三十年前の日本の一般の家庭、それは女——殊に嫁に取つて、暗い、空氣も碌々通らない牢獄のほかの何物だつたらう、今から考へれば、どうしてその中で日本の女が生きて來られたか、——私は全く、一種奇蹟の氣もちさへ感じる。

とにかく、母はその一個の犠牲になつたのだ、なぜそんな家から構はず實家へ歸つて行かなかつたか、慈愛に滿ちた生みの兩親——が、彼等はやつぱり昔風に義理固かつた、一たび嫁つて戻る位なら、これで處置をしろと云つて、嫁入り道具と一緒に一振りの懐劍さへ彼等は彼女に與へてゐた。その土産物で、彼女は思ひあまつた最後を決したのだ。

丁度、今から二十九年前の七月二十幾日、「前の」藏と「中の」藏と中の庇合ひで、自害した彼女の身體が發見された、彼女は、美事に十文字に腹を切つてゐた。うろたへ騒ぐ人々にかこまれて座敷へ移されながら、「痛い」とも「苦しい」とも一言も云はなかつた、祖母や父へ向つて、ただ、

「成吉をお願ひ致します」。

と云つたきり、從容として彼女は死んで行つた、當の私はその生みの親の大事も知らずにスヤ〳〵眠つてゐたさうだつた。

年二十二、——若くてゐながら、何と云ふ美事な死に方だらう、と、當時人々は、語り合つた、それほど若かつたとは、私は今でもどうしても思へない、今の私より十年も前に現在の妻よりも五年も若く死んだとは。

生前の彼女を知る誰も彼もが一致するのは、やさしい氣質ながら、一面おそろしくシッカリしたところを、彼女が持つてゐた、と云ふことだ、産——私を生んだ——の時なぞも、その朝起きぬけに、祖母から近所の溫泉へ一緒に入らないかと勸められて、少し工合が惡いからと斷つて部屋へ行つてをつたまま、八時ごろ「もう生れました」と、ひとりで私を抱いて居間へやつて來た、と云はれてゐる、そこにも當時の私の家の空氣が覗はれる、同時にその氣象が彼女を殺したのだ。

祖母は、生きてゐる間ぢう、彼女を苦しめたことを否定した、そうして、何かと云へば今の嫁——私の繼母——に引き較べて、彼女が如何にやさしく、自分に對して手厚かつた

かを繰り返した。親類の女達は、又一樣に、彼女がどんなに怜悧で思ひやりが深かつたかを云ふ。

が、當の私は何も知らない。顏の見覺えもなければ、聲の記憶もない。たつた一葉、今も、私の生家の金庫の中に。外の寫眞と分けて彼女の記念の寫眞が保存されてゐる。丁度マリヤか何かのやうに赤んぼの私を抱いた彼女は、やゝ華手な矢がすりの着物を着て、ひとり椅子へ腰をおろして、思ひ入つたやうにじつと前を見つめてゐる。おゝ、その思ひ込んだ眼つき。――これがいけなかつたのだ。……どうかしてその寫眞を見るたびに、私は思ふ。

遺言の言葉を思ふにつけ、なぜその位なら、もう一踏んばり母は踏んばつてくれなかつたのだ。と私は何度となく思つた。時には彼女が怨めしくもなつた。それほど、彼女の死んだことは私に大きな打撃となつた。成長すればするほど。

結婚するにも、私は母親のある、そうして兄弟の多いことを、妻の一つの條件にした。それによつて、少しでも自分の心の寂しさが埋められやうと空想して。今また子供が笑ふにつけ、その年齢で兩親のそろつた彼の幸福さを、彼が泣くにつけ、求めても獲られないやさしい祖母の姿を考へる。

もし尠くとも今日まで彼女が生きてゐてくれたら、私に取つてどんなに大きな力だつたらう。どんな場合にも許し、抱き取つてくれる一人。……それがなかつたばかりに、どんなに今まで自分の生きかたを阻まれたらう。恐らく私の全生涯が變つたらう。たゞ彼女の存在だけで。

一旦逝けばもう返らない。かつて彼女はゐた。が、今どこに見つけられやう。彼女に代る一人も。――そう思ふ時、私は永久の損失を感じる。そうして二十代までとはちがつた意味で彼女をどこまでも慕ふ。

私の母

中川紀元

久しぶりに東京から歸つた息子とその老母とが奥座敷から坪庭を眺めながらポツリ〳〵と話してゐる。部屋の中には本箱がギツシリ並んで夥しい書物がホコリにまみれて積んである。その多くは古めかしい漢籍ばかりだ。今は老母の夫もその長男も死んでこの家にはこれらの本を讀む人がなくなつてしまつた。老母は長男の嫁と一しよに小さな孫たちを相手に火の消えたやうな生活をしてゐる。この老母は私の母で東京から歸省した息子はその次男である私である。

母は八人の小供を持つたがそのうち今は三人を亡つた。男の子は二人のうち兄は日露戰爭に出て負傷したのが基で久しくブラ〳〵した揚句先年死んでしまつたので今は弟の私人人だけである。

私の父は少しばかり漢學者で私塾を開いて地方の青年を敎へてゐた私の田舍で先生と云へば私の父のことであつた。私が繪を習ふことに決心した時世間では「先生」の息子が繪かきなぞになるのはおかしいと云つたりした。

父は頑固一徹な道學者で母は隨分苦勞したと思ふ。私たち兄弟も馬鹿らしい程貧窮に育てられた。

私の母は典型的な只の女である。夫には素直な妻であり子供には慈しみの深い母であり、世間からはいゝおばさんと稱ばれる以外に何も取柄も特性もない舊式な女である。「何事も控目に。他樣のお邪魔にならぬやうに」と云ふのが私たちのホンの子供の頃から今になるまでの母の唯一の訓言であつた。

母は涙もろい性質で他人の一寸した不幸にも直ぐ貰泣をするのに却つて自身の事には氣丈で涙一つ見せないやうなところもある。

母に就いて特別な思出と云ふやうなものもない。たゞ私は小供の時に母は家中の誰よりも第一に私を可愛がつてゐると信じてゐたので、兄弟喧嘩なぞした場合に母が成敗して双方を同樣にたしなめたりすると私は無暗と腹が立つて母に突つかゝつたりした。

私は小學校を卒えた時幼年學校の試驗を受けに長野の町まで行つて體格檢査に一とたまりもなくはねられた。しほ〳〵と歸つて家の前の土藏の入口に母が立つてゐるのを見た時、一度に悲しさがコミ上げて來てワツと泣き出した。散々惱みてゐた陸軍大將の大望が無殘にも消えてしまつて、もうえらい人なんかになりたくない、何處へも行かずにいつまでも母のそばに暮してゐたいと云ふ氣がした。思へばあどけない事であつた。

私が巴里に留學してゐる留守の間に父の頌德碑が門弟や地方の人々によつて建てられた。その除幕式の寫眞を送つて來たのを見ると村の端れの高い丘の上に美事に建てられた石碑の前に母が大勢の人たちに守られて立つてゐる。私は譯もなく涙ぐましくなつた。そして「母はみんなに尊敬されてゐる——」と思つた。

母は今年たしか七十歳になる。すつかり白髮になつてすつかりいゝおばあさんである。先頃の歸省の折も母の顔を見てゐると、これから先いつまで生きられるだらうかと云ふやうな事が沁々考へられた。草深い信州の山の中に生れて何十年間をひつそりと平凡に暮して、また音もたてずに死んでゆく一つの生涯、この世の中に最もありふれた生涯も私にとつては何物にも更えられない唯一人の母の生涯である。母の上に幸あれ！

おぼろげな容姿

茅野雅子

母に別れたのは五歳の秋でした。それ故思ひ出と云つても、殆ど何一つまとまつたものを持つてをりません。おぼろげな容姿と、さびしい稍長めな顔の輪廓位を覺えてゐるばかりです。それも後に見た寫眞などから頭に印象されたものかも知れません。況して性格とか性質とか云ふやうなものを暗示することは全く覺えてはゐませんから、私の頭に殘つてゐる母はほんたうに夢の中で見た花のやうで、ただぼんやりと美しい懐しい感じを與へるに過ぎません。

ものの心を覺えるやうになつてから、母を知つてゐる人について、種々母のことを聞き訊ねて見ても、幾時も理想化された話ばかりのやうで、私にはどうしても眞實の母のやうには思へません。それで私は母を思出すたびに唯寂しく悲しくなるばかりですが、それでも尚二つ三つ判然と覺えてゐることがないでもありません。

乳母が結婚して宿へ歸つてからは、私はいつも母の側で寢かされてゐたやうな氣がします。そして朝早く眼をさますと夜の明けきらない雨戸を少し開けた縁側に、母が坐つてゐることが暫々ありました何か默禱をしてゐるらしく、手を合せて南の空を一心に見つめてゐるのでした。時には、私も母の傍に坐つて、白けてゆく星の光をみながら、母の祈りのすむのを待つてゐることもありました。またお祈りの濟むのが待ちきれないで、こそこそと寢床の中へ入つて了つたこともあつたやうです。蒼白い顔にほのかに明けてゆく朝の光りをうけた母の顔が、非常にさびしく、非常に靜であつたことを覺えてゐます。それにしても母は一體何を祈つてゐたのでせう。

私は時々それを思出しては誰かに聞いて見たいと思ひながら、未だその機會がなくてゐますが、今はもう聞いて見やうと思ふ人さへ、大方は亡くなつてしまつてゐます。

　それからいつ頃のことでしたか、母について土藏へ行つたことがありました。うす暗い土藏の窓からさす光で母は私を見つめながらしみじみと何か話してくれました。併し小さかつた私は何を母が話したのか少しも覺えてはゐませんが、唯話の後で紅葉の模樣のついた小さい手筥を貰ひました。その手筥の中にはお金が一ぱい入つてゐて非常にうれしかつたことを覺えてゐます。どう云ふつもりであんなものをくれたのか今でも解りませんし、その頃大切にしてゐたその箱も幾個も失つたのか、全く跡かたもなく見えなくなつてしまひました。

　かうしたとり止めのない記憶の中で流石に母の亡くなつた時のことは幾分か詳しく覺えてゐます。丁度柿の赤くなつた、頃でした私がひとり臺所の釣ランプの傍で柿を喰べてゐると突然店の方から番頭の彌助が入つて來ました。其緊張した顏つきが小さい子供の私にも何事が起つたのだといふ直覺を與へたのでしよう。「彌助、どこへゆくの。」思はずかう聞いた私には眼もくれずに、番頭は大急ぎで二階へかけて行きましたあとで聞くと臨終に迫つた母のために、要をぬいた扇を屋根へ投げに行つたのださうです。(扇を投げるのは生前種々にかけてあつた祈願を解くためだと云ひます。)

　暫くして私は乳母の膝に乘せられて母の枕許に坐つてゐました。姉や弟や祖母や其他多くの人で病室は一ぱいになつてゐました。靜に臥してゐる母の顏はみてゐるうち益々蒼く變つて來たのですが。小さい私には別だん悲しくも不思議も起らず只大勢の人の顏と母の顏とを見比べてゐたのです。恐らく其頃の私に死と云ふものゝ悲しさ恐しさが解らなかつたのでせう。

　それから私は祖母につれられて佛壇の前に立たされたことを覺えてゐます。佛壇にはいつもよりも一層明く燈がついてゐました。祖母は私を抱きながら「もう小孃ちやんのお母ちやんはないのでつせ」と云つて泣き出してしまひました。私も急に悲しくなつて始めて大聲で泣いたのを今も判然と覺え

てゐます。
こんな断片的なことしか母に就て覺えてゐない私は　人が暖かい母親の記憶を語る時など、しみじみと寂しいとも思ひまた幼かつたにもかゝはらず、これ丈けでも覺えてることをせめてもの幸福だとも思ひ直したりします。

私をいぢらしさうに見た母

小川未明

Aといふ教師は、ある日、修身の時間に善童と惡童の二人の話をみんなにして聞かせた。

「外國に、ラゼルといふ、おとなしい、親や、教師や、目上のものゝ言ふのことをよくきく、いゝ子供があつた。家では兩親に可愛がられ、學校へ行つては、先生に褒められた。

「そのラゼルの友達に、グリーンといふ惡童があつた。この子供は、家にゐては、親の言ふことをきかなかつた。學校へ來ては、先生の言ひ付けを守らなかつた。いつも、品行點は丁であつた。

「みなさん、これは、外國のお話ですが、この組の中にも、ラゼルがゐれば、グリーンもゐます。みなさん、ラゼルは誰でせう？　グリーンは、誰でせう？」

慢性リユマチスに罹つて、いつも片脚の膝頭をトン、トンと、處をきらはず、時を問はず、體を前にかゞめて拳で叩いてゐた。教師は教室の裡に、小さな頭を並べた生徒等を見渡した。

生徒等の中からは、一番出來る行儀のいゝ組長の名を呼んで、それをラゼルだと言つたものがあつた。

「それで、みなさん、グリーンは、誰でせうか？」と教師は言つた。

みんなは、自分達の中に、そんな悪童があるだらうか？いつたいそれは誰だらうか？　と、寧ろ教師が、こんなことを言ふことさへ不思議に思つた生徒等は、好奇の瞳を輝かして級中を見廻した、そして。果して、グリーンは誰であらうかと一語を發する者がなかつた。

この時、教師は、言つた。

「先生のいふことをきかない。いたづら者の小川、はグリーンです。せいといふとはしないし、するなといふことは、する」

みんなはこのとき私の顔を見た。私は、曾てこんな罵辱を受けたことがなかつた。

直覺の鋭かつた私は、子供の時分から、教師に對しても、服する人も、さうでない人をも知つてゐた。そして、ある教師は、同情の眼をもつて私を見たにかゝはらず、ある教師は私をほんたうに憎んだのであつた。

その時から、私は、みんなにグリーンと綽名された。私は綽名を呼ばれるのを聞いて默つて、笑つてゐることができたら…もしくは、悪童の名をもらつたことを却つて、みんなに誇つてやるだけのユーモラスが、その當時に於てあつたらなんでもないことであつたが、やはり私はさう言つた者とも戦はふとした。そして、もし、綽名を言つて逃げたものがあれば、飽迄、追ひかけたものだ。

「だつて、先生が言つたんぢやないか？」

私に、掴まへられた、私より弱かつた者は、最後にはかう言つた。私は、それをどうすることもできなかつた。

グリーンの名は、やがて學校中に知れ渡つた。私は、そこでも、こゝでも聞く、自分の綽名に對して、もう、全く、どうすることもできなかつた。

「學校へ行くのは、やだー」と、私は、言ひ出した。

母は、困つてしまつた。

「何といつたつて、お前は默つてゐればいゝのだ。默つてゐれば、いまに誰もいはなくなつてしまふ」と、母は、言つた

私は、やはり、學校へ行つた。

母は、私が、學校から歸るのを、いつも心配して待つてゐた。

「今日も、みんなにいぢめられなかつたか？」と、母は、私に、たづねた。

「誰に、私が、いぢめられて？」

私は、かう言つて、母からも、侮辱されたやうに感じたのであつた。

ある日、突然、母が學校へやつて來た。それは、用事ができて、私を迎へに來たのであつたが、また、私が、どんなであらうと見に來たのでもあつた。

ちやうど、休みの時間で、私は、多くの友達等と廊下に遊んでゐたが、母が來たので、その方へ走つて行つた。子供といふものは、かういふ時、綽名を格別の惡意がなくともいひたがるものだ。

「グリーン」と、一人が言ふと、二人、三人、といふ風に、みんなが、面白がつて、私が母と對してゐるのは、罵聲を浴びせかけた。

私は、ほんたうに嚇となつてしまつた。そして、多勢の中に踊り込んで行つて、どいつでも擲り倒してやりたいやうに思つた。

「默つてゐれ、お前は口出しをするな」と、母は、學校の入口に立つてゐて、私をなだめてゐた。

私は歸る仕度をして外に出た、待つてゐた母は、私に、對つて、

「お前は、いつでもあんなに、みんなからいぢめられてゐるのか？」と、やさしく問うた眼には、涙が光つてゐた。

私は、たゞ頭を振つたきりで、何も言はなかつたが、おのづから自分の眼にも熱い涙が湧いた。

「ほんたうにあんなにいはれても、我慢をして、默つてゐたいゝ子だ。なんでも、お前のほしいものを買つてやるから」と、母は言つた。

その時、母は、ほんたうに、私といふものを不憫に思つたのだらう。

私は、みんなから、しかも、母の前で、罵辱された。それについて、母から、褒められる何ものもないのを知つてゐたそれで、たとへほしいものがあつても、この際、口に出して買つてくれいと母に、言ふことができなかつた。

しかし、母は、よく私が心の中でほしがつてゐるものを知つてゐた。其の日學校からの歸り途に澤山銀杏の實を買つてくれた。赤、白、紫、黄、青、などに、これ等の實は彩られ

てゐた。

北國の樂しみの少ない、冬には、この銀杏の實を炬燵の上で弄んで、鈍色の寒い日を送るのが樂しみの一つであつた。

これは、私が、考へるのに幼年の過去に於ける、悲しい思ひ出の一つであらう。

――一二三八――

苦鬪の一生を送つた母

山川菊榮

○

私達は男女とりまぜ四人のけうだいで、父母も達者ではあつたが、父は仕事の都合上、多く留守がちであつた。四人の子供は母を中心として生活し、母は四人の子を中心にして生活してゐた。私の生れて育つた家は、水戸藩の儒者であつた私達の祖父（母の父）の隣りでその持家であつた。家中の襖には祖父が能書で、自分や、その一門の作に成る長短の詩が書いてあつた。楷、行、草、隷等さま〲の書體で幼い私達には其等の中で讀める字は幾らもなかつた。しかし私達は母が口ずさみ〲するのを聞いて、其等の詩をいつとなく頭にきざみ込まれてゐた。

古今集と唐詩選とが母のいつも愛吟する詩や歌の出所であつた。私達の家には、母が娘時代からもつてゐた烈女百人一首などと特殊のものがあつた。これらは古來人の龜鑑とされた武士や烈婦の吟詠を集め、それを私の祖父が、手づくりのかるたの臺紙にその特有の書體で書いたもので、母の家に傳はる一家の敎育資料ともいふべきものであつた。なほこの外に古今集の四季一百首、戀一百首、唐詩選の七言絶句、五言絶句三體詩の中の古詩などもみなかるたに出來てゐた。新古今のも出來てゐた私達けふだいは、子守歌の代りに是等和漢

の古典を、母によつて誦し返し〳〵朝な夕なに聞かされたものだつた。私達は學校の唱歌よりは唐詩選の詩や『古今の歌』の方が親しみが深く、なつかしいものだつた。私の兄と姉とは十歳にならぬうちから漢詩を作つて祖父に直して貰てゐつた。私がそれ位の年になる頃は、祖父が郷里に歸つたので、モウ習ふ折がなかつた。

母が簞笥の奥深くしまつてゐた珍しいもので一つは懐劍であつた。懐劍といふと昔の貞女や烈婦を想ひ出さずにはゐられないが、全く私の母はさういふものをもつに適した性格の人であつた。

母がまだ五ツ六ツの頃、邸の裏庭でその兄と仲間と三人で遊んでゐた、そこへ蛇がチョロ〳〵出て來たので、仲間が打殺して、『若樣チョツト此處をお踏みになつて』と兄に云つた。繪畫の方に優れた才があつて、明治初年油畫に志しながら夭折した此母の兄は氣の弱いおとなしい人であつたので、青くなつてあとしざりしたすると妹娘の母が『私が踏んでゐやう』と平氣で蛇の頭を踏みつけたので仲間が驚いたといふ話がある。又同じ頃、虎の見世物がかゝつたので祖父が母の兄をつれてゆかうとした處が『こわいから厭』といつて聞かなかつた。『ではお千世は行くか』、『ハイ』『こわくはないか』『イヽエ』。これで母だけが虎見物のお供をした話もある。

母が十二三の頃は水戸藩は二つに分れて幾度か慘憺たる市街戰の巷となつた。母が仕事の稽古に行く道で夜前の戰ひに斬られた人の血に染まつた屍體を見たことも幾度か、また母の身内でも刺客に襲はれて亡命した者もあればその兇刃に仆れた者もある。祖父すらも危い目にあひ銃丸が家の柱を貫通したことも一再でなかつたといふ是等の經驗は只さへ氣丈な母の心膽を練るに十分であつた。そこで、『お千世は强い女だからこんなものを持つても間違ひはあるまい、』といつて祖父が渡してくれたのが例の懐劍ださうで、それは緋の錦の小袋にはいつて、今も母の守り刀となつてゐ

る筈である。

○

今一つ母の持物では、照憲皇太后から拜領の大形のコンパスがあつた。明治維新後、母の一家は上京した。母は築地や青山の西洋人の學校で英語をやつた。何でも一番始めの先生は、上田萬年博士の父君などとかいつた。それから中村敬宇氏にも弟子入りした。今でも母の居間には敬宇氏の書『勤儉』の二字の額が唯一の裝飾となつてゐる。『敬宇先生、敬宇先生』私達は『中村敬宇』が何人であるかを知らぬ時代から、朝夕のように母の唇から敬虔な信徒のような態でその名を聞いたものだつた。母が十七か八の年、今のお茶の水の女子師範が始めて出來て生徒を募集したので、母もこれを志願した、その時一番ではいれたので、開校式に行啓された故照憲皇太后當時の皇后から頂いたのが例のコムパスだといふことだ。それは明治七八年頃のことだからいづれ舶來であつたらう。銀のように美しく光つて濃い紫のびらうどのような切れの中に並んでゐる處は、すばらしく立派なものであつた。これは中學時代に私が使つて、それから私なども手傳つてめちや／＼にしてしまつたように覺えてゐる。

まだ母が大切にしてゐたものゝ中に、知己の間柄であつた税所篤子の短冊や蓮月の扇子や短冊などもあつた。これらも私が子供時代に習ふとか何とかいつて大分おもちやにしてへらしてしまつたように思ふ。

○

又私は、北風に吹きさらしの裏口に出て、物置の前に立つて襷がけ凜々しく澤庵漬をしてゐる毎冬の母の姿を思ひ出さずにはゐられない。『子供らを育て上げたら、モ一度机の前に坐つてゆる／＼本が讀みたい。』これが私が物心つくかつかぬ

頃から口癖のように聞かされた母の追憶であつた。實際四人の子供を一手で育てた母は新聞見る暇もないほど忙しく立ち働いてゐた。私が七八つの頃。よく兄や姉のために、夏の夜は團扇を使ひながら三國史や漢楚軍談、呉越軍談などを讀み聞かせて呉れたが——私にはむつかしく分らなかつたが、只だ曹操は惡者で孔明はいゝ人なのだといふ印象だけは殘つてゐた——そんな折より外に、母自身のために讀書する暇などは全然なかつたらしい。子供らの足袋までも夜なべに作つてくれたほどであつたから。

○

母は明治十一年頃結婚してから長い間洋服生活をしてゐたそうで、束髪などは一番始めに結つた仲間の一人だとかで、往來で惡口をいはれた話などをよくして聞かした、母は漢學の素養や、祖父が常に歴史上の英雄の興亡などを論じた影響もあつたが、政治上の問題とか、政治家の批評などをするのが好きで、薩長の横暴を憤つたり、華族を手盛りでこしらへたりした事情其他をよく口にしたものだつた。

七十年に近い私の母の生涯、殊にその後半世は、たゞ子供らのみが知る眞に尊い犧牲獻身の生活だつた。私達は勿論自分らの母としての彼女に滿腔の敬意と感謝とを捧げることを惜まない。が單に一個の人として見ても、その縁の下の力持的な表面に現はれぬ苦鬪の一生とその強い意思に對して敬意を表せずには一られない。母は實に勇氣と精力そのものゝような人である。たゞ惜しいことにその生れた時代、その育つた境遇が母の能力を十分に發達させるのに不適當であつた。そのために——母はそれを悔いてはゐないが——私達から見る時は惜しい人に一生餘計な苦勞をさせたように思はれてならぬ。

帝都復興に對する若き女性の希望

新東洋主義へ

高群逸枝

男が外部的であるに對して女は内部的である。男が理智的であるに對して女は感情的であると云ふことが云はれるとすれば、大變災から帝都復興に對する男達の希望なり感想なりが總じて理智的で外部的であるに對して、私共女のそれが總じて感情的で内部的であらうことは當然であると思ひます。もし然らば單に育兒とか台所とかの方面のみに止まらずして、思想藝術、宗教教育等の所謂社會の内部的方面へ勢ひ私共女の「敏感」が觸れて行き、且つ現に觸れずにはゐられないであらうことも當然であると思ひます。

平素は隱れてゐるが、いざとなると必ず現はれる女性美は、普通云はれてゐる外形的な女性美で無く、内部的な愛の美であります。私は本所の被服廠跡で、母親がその子を庇つて黑焦になつてゐた多くの死體を見、また震災當時の看護婦達の目覺ましい働きを聞きました。かやうな事は、犧牲的精神の發露であるとか、平素の訓練よろしきを得た爲めであるとか云ふ性質のものではあるまいと思ひます。それは女の極く原始的な感情から來たものである、野生的な、自然から得た感情から來たものであると思ひます。

私共は生後幾年ならずして、既に人の子の母親なる愛の本能を自覺します。もし然らば謂ゆる人類に對して、謂ゆる社會に對して母親の愛の見地からする平等無差別觀を以て臨み、且つ現に臨んでゐるであらう事は、毫も怪しむに足らぬ自然性の發露であると思ひます。否、單なる平等無差別觀のみて無く、不平等、差別、爭鬪、虐待等、汎ゆる無理解と制度の矛盾と狹小なる客觀と幻影的信念とからくる、凡ての悲

慘に對して、いかに現代の私共女が苦痛と煩惱との中に漂泊つてゐるか、これはとりも直さず女の自然性、女の宿命のいたす處であると思ひます。

茲に於て、「女の叫び」なるものは、もはや單なる女自身のものでは無く、母親のものであると云ふことが云はれます。母親にとつては、男の子も女の子も共に平等に彼女自身であるからです。現に私は震災後の自警團の盲動に對していかに數多くの女達、しかも無智無學な田舍の女達が、嘆き悲しみ惱んだかを知つてゐます。或るお婆さんの如きは、鮮血滴る竹槍を提げてゐる自警團の屯所へ、身を以て突貫し、叱り附け、泣き狂ひました。此れを見ても、いかに「母性愛」が國境をも人種をも越えた廣大なものであるかと云ふことが云はれます。

かやうな女性美の發露こそ、今後は特に望ましく、且つ唯一の光輝あるものであらねばならぬと思ひます。震災に依つて得た自覺は「贅澤してはいけない」の一事であつたらしい、としても在來の女性美、單なる男性の享樂的對象としてのみ外形的女性美を以て、女性美の主要なるものとする見方が變らない間は、贅澤は必ずそれに附帶するものである事は明白であります。

文化人とか文明人とか云ふ人種は、餘りに外見の美、外見の調和に囚はれ過ぎました。また人工と人力とに自負し過ぎました。あはれ槿花一朝の夢、文化も文明もほんのあれしきの地震で、黒焦とぺしやんことになり終つたではありませんか。おゝ何で物質のもろいこと。文化人種の自負が單なる物質、蟻の塔であつたことを知ると、今更ら件止千萬であります。

上はレーニン號の追放、重大事件の綜因から、下は自警團の盲動に至るまでの、私共女の心臟を突き刺し、且つ改めて考へねばならぬ仕誼に私共を陷らしめた數多くの機縁が喜ぶべきものであるか、はた悲しむべきものであるかは問ふべき限りではありません。

ただ、私共が現在いかなる位置に押し上げられ、または押下げられてゐるか、遂に苦悶の聲を上げて起つより外には仕方がなくなつてゐるからです。

廣く世界の狀態を見るとき、獨佛英にわだかまる暗雲、伊土の形勢、日露、日支、日米の關係等から、それらの全部に漲つてゐる經濟的危機のもたらす戰爭準備、等を見ると、私共女の神經過敏な感情には、遂に第二の世界戰爭が感覺されるのであります。一身を完全ならしめんとせば客觀の廣大を期さねばなりません。とすれば、女は女の眼前を清めることに夢中になり、日本は

日本の震災善後策に沒頭又は眩惑してゐては、いかなる事に立ち至るか、殊に今度の震災で曝露した所謂「國民敎育」の幼稚さを思ふと、此のまゝにして置いては、何時いかなる外交問題又は内亂を惹起するか、杞憂に堪へぬ次第であります。

私共女の希望といたしましては、外見的復興よりも内部的革新へ主力を注いで貰ひたいと思ふです。芝居とか、文學とかの内容とする處にしても、外見的美から内部的美へ、娛樂的贅澤助長の役目から眞理と愛への感激へ行くやうにして貰ひたいのです。

外戰爭を拒み、内弱小國、プロレタリア國の眞理と結び、「富國强兵」の理想を捨てて精神的國民を標榜し、神國の國是を樹立し、國民をしては「金を儲ける生活」から、「科學者の生活、原始的詩人の生活」へ行かしめるやうすべきであると思ひます。社會主義は釋迦か基督の世でなくては行はれぬと云ふことを私共はよく耳にしますが、「科學探究、藝術創造」の生活へ導かれた者には、××的社會こそ最も適合してゐる社會です。

なぜなら其所では、贅澤の慾望も、金持の名譽も何もあるものではありませんから。そして現代では最早や誰も彼もが、さうした精神生活へ慾望をもつてゐますのに、機會の不均等である故にのみ、落ちついて書物も讀まれず、科學も探究されないでゐると云ふ有樣です。況んや今後の戰爭は科學的戰爭です。科學的戰爭を拒み防ぐ萬一の備へにしても、兵力、人力の賴みがたい事は今度の震災が證據立ててゐるところです。

而し言ふは易く行ふは難いことです。まして制度の革新などと云ふことは一朝にしては到底出來ないことです。明治の維新にしても地震、大獄、戰爭等の戰慄すべき悲慘事の後にきました。私共女は尙汎ゆる苦悶と懊惱とに試めされなければならぬらしく思はれます。

ただ私共の行く道として現在開かれてゐるであらう道は、從來の西洋主義から東洋主義へ、物質主義から精神主義へ、理智主義から熱情主義への道を辿ることであると思はれます。外形美から愛の美へ、人工から自然へ。自然に歸れと云ふルソーの言葉は、再び呼ばれねばなりません。從來の哲學は主知主義と主意主義とに限られ、汎ゆる思想は思考からきて居り、思考卽實在の眞理は、何等かの意味に於て創始以來今に至る哲學と云ふ哲學の一切の眞理であつたと云ふことが云はれると思ひます。

もし然らば、今後の哲學は主情主義の哲學であり、今後の眞理は情即實在の眞理であると思ひます。情即眞理、情即愛、情即思想であると思ひます。

この思想は藝術宗教教育の全般に亘つて波及せられるであらう。またそれが當然であると思はれます。例へば震災前の教育界と云へば、全然行きづまりの教育界でありました。ところが震災後帝都復興説と共に、國民教育の復興と云ふ説が起つてきました。もし然らばいかなる意味での國民教育であるか。或は象牙の塔の建て直しを意味するものでは無いか。

而も私共は、かやうなる動きに對して、或る期待と喜びとをもつ者であります。それはなぜかと云へば、行きづまりを生じてゐた教育界には、文化的教育とか、所謂藝術的教育とか云ふ惰弱な教育法が行はれつつあつたからです。

再び私共は「眞理」を以て教育する教育に復歸せねばなりません。周圍の事情がどうあらうと、兒童自身の家庭、若くは個性がどうあらうと、眞の劃一教育を以て勇敢に兒童に君臨する教育、教育者自身をして眞理の使徒ならしむる教育、野卑不正なるブルジョア社會の惡徳を發く教育に復歸せねばなりません。その時始めて教育者の位置は、昔日の如くに師父の位置、思慕と高徳との位置として獲得されるでありませう。

終りに私は私共若い女性の若い精神の美が、新興日本の地平線上に花と咲く日の近づいたであらうことを祈り、且つ誓ひます。

實際的に見た私の要求

藤田咲子

今回の震災火難につきましては、妾共は益々女性といふ者の天稟の弱さを見せつけられました。勿論男性の力にしても、驚き嘆かれたでしたが、妾共は殊に醜い狼狽をしました。そして力ある男達の保護に身を投げかけたのでした。それには社會から無理強ひに弱者として押こめられた氣味もありますが、でも、女性の誰だつて、我から拔む

でて夜警に當り得なかつたでせう。亦闇黒の夜徑を辿り得なかつたでせう。彼の階級的一派の婦人達が、日頃の饒舌に似ず街頭の救恤に迅速の行動を執り得なかつたのも、畢竟立悚むだからでせう。それが女性としての眞實なのです。天稟の正直な姿なのです。――尠くとも解放されてゐない我々の日本といふ社會では――。

ですが、妾共女性は眞實に種々の體驗からして、將來に處する心の鍵を授けられました。それは那邊の評定で尠い方々が目論まれた、これから厚化粧を愼しみませうとか、御馳走は皿數や品數を減じようとか、そんな形式的のなま柔しいものでなく、もつと眞劍な、突き刺されたような感得で有り得るのです。

それで差當りの謎から與へられた、帝都復興に對する現代婦人の希望と感想につきまして、妾に一言謂はして頂きます。

先づ感想としては

第一は何故に華族富豪階級が門戸を開放してくれなかつたかと謂ふ事です。帝都の三分の二は不幸にして灰燼となりましたが、併し元々住宅地帶としての山の手は、其の大部分は瓦の墜落、塀の壞れ位でした。隨て彼の幾十萬の避難者へ即刻、卽座に山の手の各戸が救ひの手を伸べたならば、恐らく總てが雨露に曝されなかつたであらう。飢餓に泣かなかつたであらうと考へられるのです。殊に廣大な邸宅を構へ庭園を有してゐる華族とか富豪とかの階級が、何故、それを敢行しなかつたか。實際から視ても、九尺二間の貧民窟に却て避難者の多數を收容してゐるではありませんか。そして華族や富豪階級は、申し合せたように堅く鐵や石の門を鎖して、甚だしきは標札を剝いだといふではありませんか。何といふ卑怯、何といふ狡猾さでせう。彼等が居常の安逸に對しても、斯ういふ秋にこそ、社會へ對する謝恩的に仁を施すべきではありませんか。疊を汚されるとか庭を荒されるとか、そんな物質の損傷に怖れて、尊い同胞の生命を脅すといふ心理は、もう今日の時代には生存の資格を喪うてゐる筈なのです。又、官憲にしましても、少し手緩くはなかつたでせうか。何故戒嚴令に依り、どしどし彼等の優越階級者の邸宅を徵發して、哀れな罹災者の心を慰はしめなかつたでせう。若しそれが實行されてゐたならば縱令他動的にもせよ、階級的反目が融和暢達して、どれほどか社會を和らげ得たでせう。罹災者は亂民ではない、泥棒ではない。誰もが悲嘆の底に突伏して、仁恤に縋りきつてゐる、順良な、

涙もろい人々なのです。それが低級階級の手に救はれたとしたら、どんなに嬉しく、どんなに感謝したでせう。妾は、斯うした社會的共同生存の美譚が、取殘されたことを遺憾とし、同時に優越階級者の潛伏さ加減が憎々しく感ぜられるのです。

第二に男の方でもさうですが、殊に女性の服裝は此の際どうしても改良さるべきものです。從來優美本位で考案されてゐる日本服の、いかに危難に際して、不便であるし、放漫であるし、不用心であるかは、彼の火を潜つた誰もが感得した事なのです。袖とか、裾とかが舉動の邪魔になるばかりでなく、降りかゝる火の粉に對しては、丁度燒つけのやうに我から進んで燃したやうなものです。のみならず、その爲めに男の暴力を防ぎ得ずに、むざ／＼貞操を蹂躙された女性があるといふではありませんか。ですから、これから先は、どうしても女性の服裝は洋裝的に改良さるべきで、罹災者の多くが新調に差迫つてゐる今日が、改良斷行の好い機會だと思ふのです。といふて、妾は極端な洋裝萬能主義を唱ふる者ではありません。要は立居振舞に輕快であり、護身的であり、そして經濟的であるもので有つて欲しいのです。

第三は、衣と相俟つて寢臺と、地下室の設備を要求したいのです。寢臺の方は疊の上でなければ安眠されない習俗を改めて、寢臺組織にしたいのです。といふ譯は、今多數者がバラツクで體驗しつゝある苦しい不眠狀態から視れば、誰しも氣附く事なので、又、今後復興に際しても、妾は木材よりも何よりも、此の疊といふ物、即ち疊床と疊表の供給難に惱まされるだらうと考へるのです。ですから此の際一工風して、折疊み式、乃至は容器兼用の堅固た木製寢臺に改めることをお薦めしたいのです。從來の戸棚などを甘く利用したならば別に寢臺としての場面を取らなくとも工夫されようと思ふのです。此の寢臺は鐵製でしたらより堅固でせうが、併し此の際そんな註文は實行難でせうから、差當り木製で相當な物を得られるでせう。次に地下室は、どうしても必要だと思ふのです。これは住宅一般に共通の問題ですが、殊に商業地帶としての面積を制限的に密集する街域では、勢ひ竪の利用が必要なのですから、此の際地下室を設けて、平常は物質の貯藏室に當て、災禍の場合は、此の地下室へ衣類とか貴重品とかを收藏して、皆が身一つで避難する事にしたいのです。今回の難にしても、人情として、力に餘る荷物を身に負うたがため生命をすら亡ほした方が尠くないの

です。現に眞實に言語に絶する彼の被服廠跡の四萬といふ幽魂にしてからが、若し運びこまれた多量の荷物がなかつたならば、彼れほどの燒死數を出さなかつた筈です。荷物に火の粉が注いで燒けたといふ事が慥かに重大事であつたのです。それに、地下室の設備費用は頗く多額を要しないでせう。砂利、砂、セメンで出來る筈なのです。それからの希望としましては數々ありますが、限られた紙數ですから、重なものの二三を述べますと、第一は公設市場の充實といふ事です。今度の震災は幸か不幸か、食糧缺乏の必然的要求は、從來お臺所で註文してゐた、虚榮と引込思案のごつちやな謬想を壞して、大分市場への買出しが現示されたやうですが、此處で一つ此の美風を助長すへく公設市場の充實を謀つて頂きたいのです。公設市場は現金だからといふて、懐勘定に遊面を造る力もありませうが、それは愚かな沙汰です。只一月だけ工夫すれば、其の翌月分の買物位の現金は誰しも準備され得る事なので、現に此の騷動の中でも萬遍なく現金主義が實行されてゐるではありませんか。そして買懸け金には、それだけ餘分な利得が懸けられてゐるではありませんか。ですから當局者は此の機會に全速度で公設市場を充實させ、それには市場の賣品種類を增加して貰ひたいのです。只飲食物のみでなく、衣類、家具等も備ふべきでせう。

第二は此の際公設質屋も可いでせうが、妾は一步を進めて、多數民衆のための小口取引に適應する相互銀行を官營乃至半官營の元に實現して頂きたいのです。其の名稱は庶民銀行とでも申しませうか。要は中產乃至下級階級の總てが均霑するものであつて欲しい。其の組織とか內容とかについては、元より妾の智識の及ぶ所ではありませんが、ちよつと胸に浮むだ一案を申しますと、其の銀行で少額の月がけ又は日がけ貯金を奬勵し、それを條件として應急の小資金を薄利で貸附ける。それには係りの人々は、普通銀行で視るやうな屋內的尊大な態度でなく、其の月がけなり、日がけなりの金を、歷訪的に進んで集めるといふ事にして欲しい。つまり、民衆をして頗る輕便に貯蓄し、利用し得る金融機關を實現して欲しいのです。質屋のやうに、人目を忍ぶ横丁式の機關は決して民衆に取つて頗く有りがたいものではありません。妾は是非此の普遍的輕便な金融機關の實行されん事を希望します。今回にしても、今迄にかゝる便利な機關がありましたら、主婦は非常に幸福であり得たと思ふのです。

第三は家庭に對する衞生思想の普及方法を徹底的に講じて頂きたいのです。我々が科學智識に乏しいために、いかに生存率を減退せしめてゐるかは、心ある者の等しく感ずる所でありますが、殊に今回のやうな災厄に處して、到る處にはら〳〵するやうな非衞生が、公びらに行はれてゐますのは眞に驚くべきです。衞生といふ事は元より男の方の注意が肝要ですが、實際からして、家庭衞生は、どうしても主婦としての女性の手に俟つべきものなのです。ですから今後は各町内に亘つて講演會とか、其の他の卑近な、普遍的の方法により、市で衞生思想の普及に努力して頂きたいのです。そして、只に衞生許りでなく、其の集會の席で、他の日常的な科學思想をも吹き込むで頂きたいのです。併も此の方法は充分の興味を附帯し得るに於て、寧ろ極めて容易の仕事でありませう。いざとなつて年々多額の傳染病豫防費を支出しながら日頃の保健費に吝かな當局の態度は、發達にはこれ迄諒解され得なかつたのです。亦其の都度慌てゝ配られゝ豫防注意書にした所で、衞生の思想が眞から吹き込まれてゐない多數の主婦達にとつては馬の耳に念佛でありませう。

第四には何時でも各家庭へ注意の温かい眼を注いでゐる町内委員の充實を希望します。今度の彼のだらしのない應急品の配給振りや、忌はしい横領沙汰なども、つまりは各町内に善良な世話役が居ないから起るのです。何々議員といふやうな、そんな野心家流に眞面目な親切があるでせうか。それよりも、どこの町内でも正直に稼いでゐる階級者の中に、親切な世話好きな人物がゐるのですから、それを公選して、日常お臺所廻りをして貰ひましたら、非常に便宜で、行渡つた融和が得られるでせう。表から裃着けた注意よりも、お臺所から砕けた聲の方がどれだけ有効か、それは誰にも分る經驗なのです。

其の他、公園の設備、幼兒預り所の普及、婦人團體の民衆化等種々な希望もありますが、それ等は聰明な男性のお集りである、市役所や、内務省邊りの歷々へ暫らくお預けして、お手並を拜見したいものです。

高群逸枝さん

御住所をお知らせ下さい。

女性改造編輯部

凶災より復興へ

加藤愛子

未だ曾て覺えのないほどの大變災に遇つては、ふだん頗る自己無反省な私も全く深刻な印銘を刻み込まれずにはゐられませんでした。

維新以來五十年、人智のすべてを盡して、建設してきた現代文明の華が、ほんの數時間のうちに見る影もなく破壞し去られたのを目擊しては、今更ながら、自然力の偉大さを歎ぜずにはゐられません。

私達は、人智の急速な進歩をあまりに賴みすぎてゐました。文明の美に陶醉して、人爲の背後にひそんで常に之を育みつつある自然を忘れてゐました。私たちは「人間萬能」を過信してゐたのです。鳥のやうに空を飛べるではないか、魚のやうに水を潜れるではないか、爲さんとして爲し得ざる事なしと、私たちは自惚れてゐたのです。人智を以て、自然を征服し得たものと信じて疑はなかつたのです。自然がこの迷夢をよびさますために、遂に一大鐵槌を下したことは正に當然ではないでせうか。

今になつて、私たちは始めて人間の力のあまりに弱々しく賴み難ないのを覺つたのです。あの強震の前には、文明の粹を誇る強固なビルデイングも破壞されたではありませんか。あの猛火の前には、百の防火設備も殆ど何等の効を奏しなかつたではありませんか。

これは勿論、私たちの負ふべき罪です。自然力の偉大を無視し、忘却した罪です、しかしながら、過去の文明の華美を偲ぶ面影が、たゞ僅に殘る建築物の殘骸であり、堆灰であることを思へばそゞろに暗涙をさそはれずにはゐられません。

しかしながら、破壞された既往の文明はまさしく何れの日にか滅ぶべき運命を持つてゐたのではないでせうか。世界大戰以後、經濟的に著しく膨脹してきた我國は、その進歩の上に於て、幾分不健全な點が認められました。そして、その上に咲いた文明の華にはたしかに健全味が失はれてゐました。それがこの近年には更に著しく、頹廢的、享樂的になつて來たやうです。ひとり

男性のみならず、將來社會の中堅たるべき女性の生活に於てさへも。

まつたくこの有様が何時までもつゞいて行つたらそれこそ恐しいものです。社會がどうなつて行くか、それは想像するに難くありません。近來、識者間に叫ばれてきた「生活改造」の聲は畢竟このだらけてきた人心を如何に取り返すかにあつたのです。幸にして、大自然の力は、人類の十年、二十年にして漸くなし得る事業を、僅々數分時でやつてのけたのです。しかも、最も深刻に、如實に私たちに生活改造の必要を表示してくれたのです。

大震災のあつた日から數日の間、私たちがもつとも強く欲したものはなんでしたか？

食ふこと、寢ること、單にその二つだけだつたではありませんか。白米がとだえて、玄米を食はなければならなかつた私たちは、白米の握飯を山海の珍味以上に思つたではありませんか。着着のままの冷いゴロ寢を絹布の夜具にくるまつて寢るよりもなほ嬉しく感じたではありませんか。

富も、社會的地位も、すべてが無價値でした。ごらんなさい。被服廠跡の累々たる死骸を。紳士も、勞働者も、立ちんぼうも、すべての死骸は一列一帶に黒く焦げて何の差別もなかつたではありませんか。

私は全く赤裸々な人間の心をみました。ふだん自動車に乗つて、お召の着物をきて、澄してゐては、醜い心でも美しく見えます。しかし今度はさうではありませんでした。美しいものは美しく、醜いものは醜くみえるだけです。装飾の壁は揺り落されたのです。

我國の女性がまづ装飾の壁を落さなければならないとは從來云はれてきた事です。私はもう男性中心の時代に過ぎて、女性中心の時代が來たといつてもいゝと思つてゐます。社會的にも、家庭的にも女性はむしろ男性を助けると云ふのではなく、男性を從として、自動的に働かなければならないと思つてゐます。そのためにはまづ、浮薄、弛緩、虚榮の分子を捨てゝかゝらなければ駄目です。しかし傳習的に虚榮なり、浮華なりの分子を多量にふくむ女性にとつて、この根本的自己改造はかなり無理な事です。けれどもこの地震によつて、いかに浮華な女性でも、化粧に浮身を窶すまへに、ふたゝび原始的な女性に立ちかへつて各自生活の根本を考へ直さなければならないでせう。女性ば女性で單獨に生きて行くやうにしなければならないでせう。私達女性は今迄、あまりに男性に對して從でした。目ざめた人達は、ほんの一少部分で、

大部分の女性は新流行の着物を選ぶことに目ざめても社會的にはまだ／＼深い眠りを貪つてゐたのです。今度の凶災には、まざ／＼とこの缺點が現はれました。本所、深川其他に於て七萬からの人命を失つたのは何故でせう。勿論、家の倒壊其他による不可抗力もあつたでせうが、私は、あの際、各個人が銘々機宜の單獨行動を取り得たならば、あの慘害を幾分なりとも輕減し得たであらうのに、と思ふのです。ほんとに女性に沈着と機敏とがあつたなら、と思はずにはゐられません。

今後、私たちは眞劍になつて、生活改造をやつて行かねばなりません。過去の生活は一たん破壊されたのですから、眞に意義ある生活態度を取らねばなりません。根ゆるぎもしない強固な生活が必要です。人類に對して、殆ど絶對的の威力を持つ自然力の發動によつて一變する如き虚僞の生活を去つて、力ある甦生の道に進まねばなりません。新東京市の健全な復興は、その上での事です。いくら耐震耐火の大建築物が出來ても、そこに住む人たち、殊に中心をなす女性の心が耐震耐火に出來上らなければだめです。

私は、今度の災害について、最も悲む一人ですが、他方には最も喜ぶ一人です。何故ならば、假令、百億圓、二百億圓の損害を被つても私たちの心さへ耐震的耐火的であれば東京はいつでも復活して行きます。そして、より美しく、より健になつて行くでせう。

私は災後、市街を歩いて、新しいバラツク街が處々に出來たのを見て、實際氣確かに思ひました。私たちは、今や、神の大きな試練に打ち克つ事が出來たといふやうな氣がします。

私は、自分の家が火になつたとき、たゞそれを眺めてゐました。悲しさも何もありませんでした。たゞ「之から更に蘇るのだ」と呟かずにはゐられませんでした。もう、過去の美を惜む氣にはなれませんでした。なぜならば、あの凶災は形而下のものこそ破壊しましたが、形而上のものは益々洗練してくれたのですから。

もう間もなく、新しい理想の都は實現されるでせう。喜ばしい事です。しかし、それは單に物質的に理想境であるだけではなく、靈的にも理想の都でなければなりません。犧牲となつて、横死した幾十萬の生靈を無意味の死に終らせないためだけにでも、私たちの心はこれから入れかへらるべきでせう。

慟哭の歌

杉浦翠子

百年に一度めぐる稀れまれの地震とは謂へ死なざりにけり

天落ちて地立ち上るかも忽ちに家倒れてひと殺さるる

あらかじめ何日割れ裂くるこの地上計られずして夜々眠りけり

土の下の地軸とよみて家も人も微塵に散れる破片の如し

焼け跡の都起さばやと謀るまに今年の秋も更けゆきぬらむ

燒ける物火をいなみかね生ける者死をまぬかれず立ち崩るとも

東京の銀座通りといはれけめ今は往く人なくなりにけり

神創め天と地とをつくらせて人間に悲しき命あたへぬ

地震にて多く死ににけむその數に我が洩れながら生の寂しさ

絵を描く夫を巴里に置きたれば稀有の地震にひとり騒ぎぬ

留守なれば男手にする荒仕事我がするなり鐵槌もちて

土を掘りて歌の草紙を埋めおきぬ地震ゆるるとも驚くことなし

娘よ妻よとひとにいたはるる世のをみなごは羨しきろかも

哀しき遭難者の手記

阿部しづ

(一) 劍のかげに

このごろ腸を惡くしてゐる義敬の襁褓をすゝいでゐた時である。ぐいと體をもち上げられたやうな感じがしたと思ふと、盥の水が渦を卷き初め棚の上から瓶が落ちて割れて板の間は氣味惡い液體を漲らした。私はとび越えて茶の間に眠つてゐる義敬を抱いて立つと、足が浚はれて轉びさうになる。何時もの地震とは違ふと思つた時にはぐあらぐあらなる音の中に藥罐が轉つて灰煙をあげる、戶棚が倒れる、壁が落ちる、電燈の笠がはずれて硝子戶にあたると微塵に碎け飛ぶ、瓦がなだれるやうに落ちる。私は義敬の哺をすつかり懷に入れると路次を曲りくねつた奧の空地まで飛んで來た。近所の人達はもう此處に集つてゐた。一震がすむとわあつとどよめきが上つて人々が動き出した。

「ビルデングが倒れた、小松屋が潰れた、」

「男は助けに來てくれ、人が五人も下敷になつてゐるんだ。」

號んで來た人も激しい震れかへしには思はず聲を潜めた。

私は異常に緊張した心で小松屋へ行つて見た。後に建つてゐる工事中のビルデングが倒れ懸つたので三階の料理屋が斜に押し出されたまゝ潰れて了つたのである。巡査や軍人が人を掘り出しにかゝつてゐるが、震れかへしが來ると爭つて小さい窓からとび出す。

おゝ夫の江は？　あの工事中の內外ビルデングは？

一時私の眼の先は眞暗になつた。朝鮮にあのまゝ居たなら何の事もないのに、私が無理を云つて東京に來たのである。

しかし或は無事で私の許に歸つて來てくれたかも知れぬと

思つて私は忙いで家の前に行つて見た。斜に傾いた家の中は壁土の上に諸道具が散亂してゐるのである。電車でさへ廿分はかゝる、未だ歸る筈は無い。更にあの數層の鐵骨が倒潰したとしたならば鐵柱の下敷となつて呻吟してゐるのではないか、數丈の下舗道に墜落して粉碎されたのではないか、胸が煮湯のやうに沸き立つ。生れて二月の義敬が眼を開いて居ながら泣きもしないのを見てゐると私の方が聲を擧げて泣き立て度くなる。

此時、喧噪の中から丸ビルで三百人死んだといふ聲を聞いた。私は馳けつけると「內外ビルは？內外ビルは？」と號びあげた。

「あれもだめさ、皆僞建物だな。」と云つたのは此の界隈の家主であつた。

私は物に憑かれたかのやうに往來にとび出すと夢中で走つた。行き違ひにならないやうに途の兩側に江を索める爲燃え出すやうな眼光を放ちながら。義敬の頭を懐に入れて降り落つる火の子と車馬や人垣の中をやつと來た時、そして無慘に崩れた鐵骨の層がまさしく內外ビルなることを認めた時、私は脚の骨の連絡が失くなつたやうにくら〳〵して倒れさうであつた。しかし義敬がけたゝましく泣き出したのに勇氣をもり返して眼を上げたのである。服に血を透したまゝ出て來る人、鐵骨の間に片足を挾まれて倒に垂れた人、頭を挾まれて血を流してゐる人、之等の一人をどうして私の夫と信じ得られやう、助けてゐる人達の危い足場は震れかへしの度に脅かされるのである。

「どなたか江を御存じありませんか。朝鮮人の江を？」と私は人群に向つて號び問ふた時、頭から血を垂れながらも、一人の重傷者を背負ふて息をきらして來た男があつた。

「あれ！」と私は號ぶと江に縋りついた。嬉しいのか悲しいのか私の顏は變に歪んで眼が熱く熱くなつた。私は彼の腕に抱きしめられたまゝ消え入つて了ひ度かつた。重傷者を自働車迄送り屆けると彼は私の許に歸つて來た。夫婦はお互の姿を顧り見ながら何にも云ふことが出來なかつた。

江の負傷の治療をと思つた時私は初めて火に圍まれてゐる事を見出した。煙の息が襲うて顏が赤く灼かれる。火の子が頭にふりかゝる。一息に大建物を吞み盡す猛火がまつしくらに奔つて來て阿鼻叫喚をまきあげる、電信柱に傳はる火が嘲けるやうに歩みよつて來る。どおんどおんと地をゆるがす爆音はあらゆる地上のものを滅却しやうとするのか、凄まじく狂ひ逃げる人々の後について私達も宮城前に逃げた。もう日

は暮れて燒け盡くる都の空は赫く照り出された、何一つ持ち出さぬ私の家も既に黑焦の土と燻つてゐるであらう。

次第に私共は步を運ぶことが出來なくなつた。ぎつしりと詰つた前の人ごみは十分に一步も動かぬのに後の群集は必死で押し寄せるのである。此の中を無理にかきわけて行かうとする自働車や車が更に混雜を增さした。「命の惜しい者は荷物を捨てろ。」と警官が怒號しても背負つてゐる大荷物を捨てゝ他人を一步早く安全地へ導くことをする人は無い。私が背負うてゐる子を潰さない爲に江が後を守つてゐた。かれこれ四時間も人波に溺れてゐたらうが、一時にどうと後から押されて前にのめり轉んだ時、初めて地と空間を感ずることが出來た。

人に押されたり衝きあたられたりして江の傷からは新らしい血が滲んでゐた。彼は芝草に押しあてて頭を冷やしながらやはり怪我した人々のことを話した。百人以上は內外ビルの中に救はれずにゐるだらうと語つた。五人の人を自分で救ひ出したと語り、自家が心配であつたがどうにも出來なかつたことを私に詫びた。

呼吸の幽かな義敬が私達の心配になつた。未だ白煙の上つてゐるうそ寒い空の明に、熱の高い子を單衣の胸に抱いて乳を含ませたが、顏をしかめてちつとも吸ひつかない。乏しい乳は今朝はもう絞つても一滴も出ないのである。私も俄に水落の傷い空腹に襲はれた。松の露でも吸はうかと見れば火の子が黑く消え殘つてゐる。水を飮ませる、パンをくれるといふので行けば、待ちくたびれた上にもう配給濟であつた。最後に江が出かけていつた。そして其の歸りの遲いのを案じてゐた時あたりが急にものものしくさわめいて來た……。

× × ×

病院の庭にはコスモスが凝として今日も咲いてゐる。夫も子も失つた孤りの心のうつろに秋風がさむ〳〵と沁みる。

(二) 火の粉の中で水盃をして

長島喜代子

「火は仲町の角で止るから家へ行つて水の仕度をして來るからね」

足袋はだしの伯父は息をはづませながらさう云つて、私と病人の從兄を電車通りに敷いた蒲べりの上に殘して、伯母と從妹を連れて急いで出て行つた。洲崎と本所と日本橋と三方から燃えて來る焰の煙が頭上で黑い渦を卷いて、落雷のやうな音をたてゝ建築物の燒け落ちる音が、不安を一層濃くして行く。たつた今逃げて來た日本橋方面は一面の火だ。土藏造りの會社の二階が崩れ落ちて、路上にうず高くなつたのや、西瓜のやうに頭をくだかれたKの姿などを思ひ出すと、誰彼と心に浮ぶ知人の上が心配になり出した。しかし靜かに考へることさへ許さないほど家を燒かれた人達で電車通りはごた返して居た。

「二人とも來い！糧秣廠へ逃げるんだ！」

眼の色を變へた伯父が飛んで來ては、ち卷の手拭で從兄の胸をぐつと結へた。衝心しては危い、從兄は十分前までは床について立ち上る事さへ缺いて居た脚氣患者なのである。從妹の手でかつぎ出された蒲團を糧秣廠内の入口に近く敷いて病人を寢かしたのは、もう夜に近い六時だつた。蒼い顏が火に映じて大漁の鮪のやうに寢かされた病人の呻き聲が遠近から聞えて悲しかつた。家具を出しに行く伯父等が運んで來る度毎に潮のやうに人々は小さい門から押して來る。すべてを嘗め盡す魔物の舌先のやうに火の手は追ひかけて來て勢を落さない。

なんと云ふ凄じい風！トタン屋根を吹きめくり、立ち木を狂はせるその風の勢と共に、火は頭上に匐ひかゝつて來る。火の粉は風にあほられて數かぎりもなく舞ひおちる。聲をからして逃げ道を示す警官の顏には、緊張を通り越した必死の

色があり〳〵と浮んで居る。

「逃げられる所までは行かう。」然し其の時には三方ハ火の手が四方に延びて、唯一の避難場所と目されて居た月島さへ火につゝまれて居るのだつた。堅く閉ざされた倉庫の扉を毀して火の粉をよけやうとする人達も出來た。

「歩けるか？」

「あゝ、大丈夫だ」

病人が立ち上つた。どうして此の儘居られよう手當り次第に荷物を一つ脊負つてよろめきながら人波にもまれて裏口へと急いだ。火を見た屠殺場の牛や馬が、煙に卷かれて猛り立つて飛び出して來た、蹄にかけられて轉ぶ人の呻き聲、逃げまどふ悲鳴、しかも火足は人の逃げ足よりも早く、既に側の倉庫には火が移るのだ。人々の顏がくつきりと畫き出されて居る。こんな物凄い光景も此世の一端なのであらうか、雪崩を打つた人波が遂に裏門の塀を破つた。行く手はすべて火—火の粉はふりかゝる。遂に脊負つた荷に火がついた。解かうとしても堅く結へた荷は容易に解けない。仕方がないから首からすつぼりと拔け出してしまひ、最後に手に殘つたものは一本の帶と一個の土瓶だつた。

やがて生きやうとする人々の力が相生橋の上に集つてきた。水に近いと云ふだけの理由で期せずして集つた人達でおされ〳〵して、頭の手拭を直す爲めに手を上げる事すら出來ない。數千の人の心は刻一刻に變る風向と火の手の方向とに支配されて、生と死との間に立つ眞劍な表情だけが刻まれて居る。糧秣廠をなめ盡した火は人々の期待を快げに裏切つて紅の舌先を商船學校にまで延ばした。橋の袂にある電車と商船學校の船着場との間にどれだけの距離があらう。そして電車に二間と離れぬ所に居るのが私達なのだ。兩側の火の粉が焔をこがすやうに落ちかゝる。人々は着物をぬいでそれを結び合せては橋の下へなげ入れて必死になつて電車に水をかけた。前面にのみ氣をとられた人々はその時海の中での悲鳴を聞く迄は船が燃えるのに氣がつかなかつたのだ。

あゝ何たる悲慘であらう。生きながらの地獄だ。家財を山と積んだ船には悉く火の粉が飛んで燒かれ、死んで行く人達の最後の救を求める聲が耳を劈くやうに鋭い。周圍の火、船の火、晝よりも明るい船中に立ちながら燒死する人々の姿があり〳〵と畫き出されて居るではないか—

船の火は、海を蔽ひ、足の下からは熱い〳〵煙が風に伴はれて裾をこがす。對岸の石川島造船所にはすつかり火がまわつて大建築物のどうと倒れる音が極度の不安を尚一層たかま

らせて響く。
「み！！水をゝゝ水を……」
従妹の後に蹲つて居た濱の伯母が突然うなるやうに云つた。あゝ火の手よりも早く死の魔手はさし延べられたのか……
……この時私が持つてゐた帶と土瓶が偶然役立つて人込みの中からやう／＼海水を汲み上げられた。懐中藥で息をふき返した伯母の唇から、もぎ取るやうにして、一家の者の渇き切つた喉が次々に潤された。
「濟みませんが死にさうな病人なのですが」
「喉がヒッついちやいさうなんですが」
「駄目だよ！一滴もないんだ」
もう義理も人情もない只自分だけを生かしたい、どんな汚い水であらうとこの時一口濕してくれた水がやがて最後の水杯なのだつた。
燒けた船からは火がうつゝて橋の後方が落ちた。
「後は落ちたぞ！海へ出ろ、海へ」
「海には筏があるぞ！」
生きんとする人達がど――ッと押して來やうとも前は紅の海！橋の後からは火がどん／＼廻つて來る。然し然しこれ以上にどこに活路を見出し得よう。

「南無阿彌陀佛／＼」
死に望んで御佛にすがる、人達の口からは期せずして念佛の聲が洩れる。
私達五人は、五人の帶でしつかり手を結へた。黑こげになるやうな事はあるまいが、むされて死ぬのなら死後ははなれ／＼にならないやうにと。その時は實に泪さへ一滴出ない瞬間だつた。悲しみも苦しみも輝きも無い十の眸を合せて私達は放心したやうに死を待つた瞬間だつた。緊張か放心か、あたりの人々の間にも聲もなくしめやかに、死を迎へる心持ちに寂として居る。私は靜かに眼を閉ぢた。一分……二分……後から押す力に無抵抗に押され／＼して酸素のない息苦しい空氣の中で呼吸さへ堪へ忍びながら只苦しい沈默が守られて居る。
「あッ!!!風が變つた、商船學校は落ちちやツたぞ！」
死に面接しながらも、尚一縷の望みを失はないで火を見つめて居た人が叫ぶと、歡呼の聲が期せずして男の人達の口から異口同音に叫ばれた。光明を見出した人々が急にざわめき出してきた。
「あゝ有難い有難い」
結へた手を解いて時計を見ると、四時一寸前なのである。

「四時だ」伯父が云ふと生きかへつたやうに群集は煙の少くなつた空を見上げた。有明の月が落ちやうとして東の空の明るさは火の手では確にない。

「もう大丈夫だ」

「おゝ、助かつた！」

半分落ちた橋の火は滿潮に消されて確實に生きて居ると云ふ喜びがその時人達の間に漲つた。お互に見交す眼は感激の涙、瑞喜の涙でかゞやいて居る。恐しい死地から一刻も早くのがれやうとする群集に押し流されて、商船學校の焼け跡に立つた時宛も昇り出た太陽の赤さ、たゞれるやうに燃えにもえた火の塊よ。それは革命の旗印か、とも思はれた。人々は今は支へることの出來ない飢ゑに、斃れた牛や馬の皮をはいで、血のしたゝる肉を奪ひ合ふ恐しい餓鬼に變つた。死地をくゞり抜ける事が出來ても人間は食べる事なしに生きられやうか。五人は奮然と立つて郊外の家の方へ歩きつゞけた。身のまわりに風呂敷包み一つあらう筈もなく、やう〳〵我家の焼け跡にたどりついた時、伯母の眸から初めて涙があふれるのを見た。

只一本の線路を匍つて渡つた永代橋の下には、焼けた船體の上に死體が幾つとなく重つて居る。

焼け殘りの臭氣と死體から發散する惡臭が鼻をついたが、さうした冒險もすべては死をいとふ人間の本能から出た夢中の行爲に外ならなかつた。

あゝすべては神の試錬とみて瞑目するには餘りに痛ましい出來ごとであつた。矛盾の中から生れた文明はかうして數萬の人間を殺して破滅を招いてしまつた。

(三) 悲しい横濱關內の話

川口たり子

東京に較べて横濱は幾層倍も惨らしく破潰され、焼き盡されて殘つた所とては、郊外の一部分、それも不斷はあまり顧られない場所計りです。それも漸く雨露を凌がれるくらゐのものですから、目抜の大通り、別けて關內にはたくさんの悲しい話が傳へられて居ります。

住吉町のある家では一家七人暮でありました。主人と、主人の老父、妻子五人、丁度あの怖しい日、一家が午の食事に取り掛つて居りますと突然ぐらぐらと震動して、表に通りかかつた自轉車に乘つた小僧が地上に投げ出されたのを家の中から眺めた相です。地盤が確りして居た爲でせう。これ迄度々の地震にも外に出なかつたのださうですが、此日の第二回目には『それ大變だ』と主人が云ふなり、傍の三歳になる子を抱へて、戸外に逃れました。

殘る人達も箸を措く間もなく走り出しました。

近所の人達も皆大通りに集まつては、世にも恐ろしい變事を恐怖に滿たされながら語りあひました。主人は家族の者を一と渡り見廻してはつと胸が潰れました。『居ないぞ。若しや』と思ふと氣忙はしく、も一度見直したが、やはり老父の姿がそこにありません。

此時はもう火事が何處からともなく血のやうに赤い焔を吐いて居る時でした。

家族の者を近所の人に託して公園に避難をさせてから、自分は潰れた家の其處と覺しい邊を屋根瓦を拂ひ、屋根瓦を拂つては、聲を限りに父の名を呼びました。と微かに『木に腕を挾まれてる早く助けてくれ』と云ふ聞き馴れた聲が耳元にきこえてきました。近所に通り掛る人を呼び、手を貸してくれと頼みましたが非常の場合誰も耳を藉してくれません。少し掘つて行くと一挺の鋸が手に當りました。それで邪魔な木は切り拂ひ、切り拂ひしてやつと父を掘り當てることが出來たのです。

その時はもう火は近くの家を燒いて、ぱちぱつ云ふ音がしきりに聞えてきます。火の子の熱さ。

見ると五六軒先の家が黒烟を吹いて居るではありませんか。一方父は棟木の下になつて、左腕をそれに壓さへられてるのです。『痛いよう痛いよう。助けてくれ』と身もだへするのですが太い木の事とて拔けられません。

主人は思ひ切つて『お父さん、勘忍して下さい』と云ひ乍ら、鋸で父の腕を引き始めました。火が迫つて居りますので棟木を切る事が出來ないと見てです。

父は苦しみました。『痛い。痛い。棟木を切れ』と涙を流し、嗄れた聲で云ひました。

主人は目前の地獄の鬼になつた氣で、更に腕を引きます。痛々しい聲も此場合、愚圖々々して居れば火に葬られますので、聞かぬ振りして手を已めません。火の子は間斷なく降り掛りますが、物ともせず鋸を動かしました。

此の間幾度天祐を祝み、風の變る樣祈つた事でせう。火は三軒前に移り、其の熱さは堪へられません。親の腕に鋸をあてる不孝、苦しさ、弱る心を勵まして是迄助ける爲努力しましたが、もう萬事を諦めました。頭の毛はちりちりと燒け縮み初め、咽喉の渴く事渴く事。風は轟々と赤く吹き荒み、其の中に父の細い聲がと切れと切れに洩れます。

『助けてくれ、熱いよう、痛いよう……』

もう我慢にも鋸を動かす氣力がなくなりました。空腹、熱氣、不孝、主人は只一言でも父が念佛を稱へてくれればよいと念じました。

此の儘に居れば自分まで死なねばなりません。眩めきさうな足を踏み締め、『お父さん御免下さい。生き乍らお別れ致します、成佛して下さい』と云ひ殘し、血染めの鋸を投げ捨て、呆けた様によろよろと公園に逃げました。

生き乍らに火中に捨てた親、其の腕を何ぼ非常の時とは云へ、鋸で引きにした恐ろしい罪。

其の上どうしても助からぬなら、何故痛いと云つた時已めて少しでも樂にしてやらなかつたか、と呵責と悔恨とで主人は日夜苦しめられ、其上此の後の家計、目前の饑餓に二重にも、三重にも心を痛めて、遂には發狂して了ひ、三日許り經つた夜、何處で求めたか、大出刃で切腹し、親に濟まぬ、親に濟まぬと云ひ續けて果てたさうです。

ある人が話したのを餘りに哀れ深く、恐ろしく思つて書き送りました。

(四) 愛兒を奪はれ憎惡より感泣へ

栗島浪江

一九二三年九月一日！何たる恐ろしい日でせう。いま思ひ出しても身の毛が、よだちます。眞面目な親切深い夫も、私をいつも親切に監視してゐてくれた老いの母親も、來月は一生に一度の晴れの結婚をする筈だつた文學の好きな妹も、いまはあの被服廠の燒死者の群と共に歸らぬ過去の人です。

私と愛兒の二歳になる久吉だけが、不思議にも命が助かつたのでございます。私は母親を失ひ、夫を失ひ、妹を失ひ、かつ全財產を灰燼にしてしまひましたが。絶望の餌食にはなりません。それは言ふまでもなくあらゆる苦痛から救つてくれる愛兒が私のふところにニコニコしてゐるからでございます。では私と愛兒だけはどうして助かつたか。

それに就いてはぜひとも物語らなければならない話がございます。私達一家族は揃つてチヤブ臺に向ひ今や箸をとりあげやうとしたとき、あの大地震がやつてきました。最初はそれほどでもないと思つて居りますと、見る見るうちに大地は狂つたやうに搖ぎだし、世もこれが末かと思はれました。第一震が濟むと直ぐ私達家族は街路へ飛びだしました、と前よりも大きいかと思はれるやうな第二震がきました。どうなることかと思つて見てゐると、彼處の家も此處の店も玩具を子供が毀すやうに潰滅します。そのうちに——それ火事だ——と言ふ聲が起りました。火の手は見る見る天空高く燃え上ります。

『火事ぢや死にたくも死ねない、あの被服廠の大廣場が安心だから……』

常に私達附近の（若宮町）者はさう言つて安神してゐたものです。それとばかり必要なものだけ出して皆被服廠へ避難します。私達も『それ！』とばかりに被服廠へ避難しました。いつも事に當つて沈着な夫はその日の二時頃までは家に居て、現金や、株券や公債など、それに重要書類などの荷まとめをして居りました。

『おいお前の着物をいゝのだけ持つてくるからこの荷物を監視してゐろよ。』

夫はふたゝび家へ戻りました。——これが夫との一生の別れだ。——私の身にとつて、どうしてそんなことが思へるでせうか、しかしひどく眞劍になつてゐたあの時が實際最後なのでした。夫がでてゆくと直ぐつい近所の、永年懇意にしてゐる雜貨屋の安川さんが参りました。そして私の袖をひいて、

『大變です、こゝにゐては危險です　この七十の阪を越したぢいい樣の言ふことには間違いありません。いくら廣いたつてこゝには木が一本ないぢやありませんか、それに一方は川ときてゐるから逃げやうはございません。』

ほとんど狂氣のやうに怒鳴つて私達に他へ避難せよ、と忠告して下さいました。しかし四邊の人達は皆——大丈夫だ、大丈夫だ——と言つて安川さんの言葉を信じませんでした。

ドヤ〳〵と入り來る人達のために久吉がキヤーッと泣きだしました。で私は愛兒を安川さんに抱いてもらひました。すると安川さんは『行兒！』と一聲發して人波を分けて驅けだしてしまひました。私の驚きはどんなだつたでせう。狂氣のやうに追ひかけました。火の手はいよ〳〵擴ります。私と一緒に安川さんを追ひかけた妹が

『姉さんいくら自分の兒が可愛いくたつて自分の身にはかへられないから、被服廠へ歸りませう。』

と言ひました。私も泣き泣きふたゝび被服廠の方へ二足三足歸りかけたが、愛兒を殺されてなるものか、と思ひ直してふたゝび安川さんの後を追ひかけました。そのとき人の心と言ふものは實に信用できないものだ。とつく〳〵思ひました。あれほど親切な安川さんが他人の兒を奪ひ取るとはあまりに心が一時に惡くなつたものだ、と思ひました。そのとき安川さんを心から憎みました。この大地震と大火災のどさくさに他人の愛兒を奪つて逃げるなどゝはあまりにひどい、さう思ふ私の眼には熱い涙が流れて居りました。兩國橋まできて見たがつひに安川さんの姿を見失つてしまひました。兩國公園に大へんな人達が避難してゐるから、きつとこゝに相違ないと思つて私も公園へ駈込みました。もう火の手は四方八方に擴がつて居りました。それにこゝは津浪が來るから他所へ逃げろと言ふ聲が起りました。私もそれが恐しくなつたのでどこへか避難しやうと考へました。そのときは愛兒を抱いた安川さんが見えなくなつてしまつたので自分だけ助かればと言ふやうな氣持になつてゐたのです。しかしまた一方には——死んでもいゝ——そんな風な氣持もたしかにあつたと思ひます。實際あのときの氣持はほとんど夢中で現在はあまり記憶の鏡にはつきり映り

『栗原さん久ちやんは此方だ、上野へ逃げませう。こゝに居ると命があぶない。』

私と五間と離れないところに安川さんが泣き喚く久吉を抱いて私を呼びかけてゐます。

『盗人だ、子供盗人、私の子供を取りかへして下さい。』

私はそんなことをたしかに怒鳴つたやうな氣がします。ふたゝび安川さんの姿を見失つた私は――上野へ逃げませう。――その言葉をたよりに死力を盡して上野公園をさして駈けました。

日の暮れる頃になつても安川さんはついに見當りませんでした。上野の山から大東京を見渡せば、なんといふ恐しいことでせう。見渡す限り火の海です。夫はどうしたらう。母さんは、妹は？…・私には被服廠に避難してゐる家族が急に心配になりだしました。しかしそれは考へるだけでどうにもならないのだ。さう思ふと、なるやうにしかならないと言つたやうな氣持になりました。どうでせうあの上野の山には立錐の餘地もなく、しかも一人々々の顏がまるで眞晝のやうによく見えるぢやありませんか。私はその夜は愛兒を探し求めるために――安川さん！安川さん！――と怒鳴つたりまた火の海となつてゐる大東京を眺めたりしてついに二日の朝を迎へてしまひました。

それは三日目の日です。家族の安否を確めるために、被服廠をさして出かけました。

『被服廠ぢや十萬人位死んださうだ』

この言葉を耳にした私は――不安――に襲れました。不安以上の不安だと言ふ氣がします。若しも夫が、母が、妹が、燒死したら？それは考へるだけでも恐しいことでした。なに死ぬものか、さうは強いて思つて見るけれども、惡寒のやうに襲ひ來る不安はどうしても、拂ひのけることはできませんでした。するとまあどうでせう、若宮町の自家の燒跡へたどりついて見ると安川さんが、しよんぼり久吉を抱いて笑つてゐるぢやありませんか。そのときはもう安川さんに對する憎惡は感謝の心になつて居りました。

『濟みませんでした安川さん。』

私は安川さんから渡された愛兒を抱きしめて頰擦りしました。

『私が言はないこつちやない、貴女の家で助かつたのは久ちやんと奥さんだけですよ。』と安川さんはニコ〳〵して居りました。そして火事のときの心得や地震のときの心得を諄々と話して下さいました。

夫も、母も、妹もついに被服廠の灰燼となつてゐたのです。しかし私と久吉とはあの老人安川さんのために命が助かつたのです。私は實際安川さんを手を合せて拜みました。しかし安川さんはなぜ夫と母と妹も合せて助けて下さらかつたのだらう。――と言ふ不滿も起りました。

かうしてペンを走らせてゐながらも、生前の夫や母や妹の姿がちらついて胸が一ぱいになります。坊やが泣きだしました。こゝで筆を擱きます。

(五) 呪はしき巨人の死

村岡巴

まづくてとても食べられないと
一たび以上け味はなかつた
君が裸體の死骸をば
朝から晩まで晩から朝まで
日毎夜毎に見守りながら
眼玉の脫れた孔の中から
絶えず流れるどす黑い
にがしほのやうな血みどろな
腐つた肉の塊りを
私は喜んで口に受け
裂かれた肉の間から
湧き出る蛆をなつかしみ
君が形見と手に受けて
腐つてむれてとけて行く
死體の臭氣にむせかへり
私は喜んで死ぬでせう。

これは今から六七年以前、一般世間にあの恐ろしい流行感冒が猖獗

一

拜火教の無言の塔で
火にも燒かれず水にも入れず
木にもかこめず土にも埋めず
何處からともなく飛んで來た
恐ろしい鷲の鳥が
眼をゑぐり取り肉をつゝき
ひとたび味をこゝろみて
もうたくさんだと引き上げて
何處へか行つてしまふなら
私は一人とぼ／＼と
遠い國から沙漠のやうな
荒れに荒れた道を歩んで
淋しい心を抱きながら
無言の塔へと登るでせう。
そしてそれ等の鳥でさへも

を極めた時、私も洩れなく冒された一人となつて、生死の境を彷徨した後、稍恢復期の發後の時に、退院の幾時かを、床に仰臥して書いたものであつた。又これは、今は亡き夫が自分の死を豫想して作つて寄越した詩への返歌でもあつた。ところが夫の死の豫想ははからずも的中してしまつたのである。自分の死は實に無慘な悲慘な極みを盡して現はれるかも知れない。そんな無慘な死を相當として與へられるやうな、又そんな恐ろしい鳥でさへも、まづくてとても食べられないと唯一度のこゝろみで、飛んで行つてしまつて、見かへられないやうな者であつても、憐愛してくれるかといふ時であつた。

ところが事實夫は二間四方もあるやうな、大きな重たい煉瓦の下敷となつて死んでしまつたのである。呪つても呪つても大正十二年九月一日の震災は呪ひ盡せない。何といふ私の氣持であらう。うつろな心に何思ふことも出來ず、唯、茫然と日は明け日は暮れるばかりである。

二

其日玄關口に一度出た夫は、何思つてか再び立戻つて來て、洋服の内カクシから保險の證券を取出した。

『お母チヤンこれを忘れたから置いて行きます。もしもお父チヤンに萬一のことでもあつたら役立てゝ下さい。滅多にそんな事もあるまいけども、鍵のかゝる所に入れてね』

と云つて、いつもなら坊やを抱つこして、坂口まで行くのに、其日は時々驟雨がザアツザアツと來て風さへ加はつたので、前日に自分の洋傘は會社に忘れて來たと云つて、私のを持ちながら、薄いレインコートに身を包んで出かけて行つたのであつた。私は坊やを抱いて座敷間の窓から硝子越しに見送り〳〵行く彼を見送つたのであつたが、其朝『何だか氣分が重い』と聞いてゐたので、何といふことなしに、私には彼の後姿が沈み勝に見えたのであつた。それに保險證券を渡しながら言つた言葉が妙に氣になつて、何だか不吉な豫感がサツと一瞬心をかすめたのだが『何、そんなことがあるものか』と強いて打消してしまつた。其後、私はばあやに坊やをおんぶさせて、朝の掃除に取りかゝつた。いつも九時頃には何も彼も用事が片附くので、それから二時間ばかり、手紙其他の書きものに時を費してゐた。やがてばあやが、

『奥様、少し時間が早うございますが、支度が出來ましたから、御飯を召し上つて下さい』と言つて來た。其日はどうしたことか、大抵お晝近くには坊やが晝寢をするのに、すつかりねこじつてしまつたので、それから私は坊やをさん〴〵あやして後、平日通り一人の晝飯を終つた。食事の後、坊やのスエーターのつゞきを編みはじめやうと、椅子に腰かけた時、私はいきなり横倒しになつてしまつた。最初は地震だとは少しも氣がつかない。次の瞬間にまた一ゆれ大きなのが來た時、はじめて坊やの所に飛んで行つた。あんまりねこじつてむづかるので、今少し前、又もばあやの脊中におんぶさせた所であつた。私はいつものやうに坊やが向ふの部屋で、ベツトに寢てゐたなら大變だつた。ほんとにねこじつてくれてよかつたと心より感謝しながら、ばあやと坊やをかばひながら、外へと飛び出した。其時『あ、しまつた。

何故道へ出たら。家が倒れて來るかも知れないのに。芝の上へ出ればよかつた』と思つたがもうおそかつた。大地は搖れに搖れた。私達は立つてゐることが出來なかつた。私の脊筋にはサツと不吉な豫感が再び閃めいた。

『お父チヤマは駄目だ。きつと今頃會社の中で潰されてゐる。あゝ、死んでゐる。きつときつとさうだ』と直感してしまつた。今朝の出來事が私のこの氣持を裏づけて、もうどうすることも出來ない思ひに打のめされてしまつた。涙を流して私にかじりついてゐるばあやと、泣き叫ぶ坊やとを抱いて、私の心は割合に落着いでゐた。眠られぬ一夜を明し、幸ひ此處は瓦一つ飛ばず壁が全部落されたのみで家もゆがまずに居たので、一部屋だけ誰が來ても入れるやうに掃除して翌日の午前は過ぎた。一人二人三人四人と川の上の住居の人達は歸つて、あと八人だけといふことになつたけれどやがて其八人のうち六人まで歸つたのに、あとの二人は音沙汰も無い。其中の一人に自分の愛する者を數へねばならなかつた時、私の胸は張りさけるばかりだつた。やがて、二日の午後一時頃、夫の弟が眼もあてられない様をして逃げて來た。まるで戰場から出て來た人のやうに、色艶もなく、魂も抜けてしまつたかのやうな姿であつた。次に二時頃になつて、母と義妹とがなさけない姿で、やうやく足を運んで避難して來た。父も來た。私は兩親にかじりついてはじめて泣いた。

『お父チヤマはまだなのです。お父チヤマはまだなのです』

と云ひながら、父の肩に打倒れて泣いた。

『大丈夫だ、巴、しつかりおし。きつと何處かに生きてるよ。船にでも逃げてゐるかも知れない。まださういふ人が澤山にあるのだから。しつかりしなくつちやいけない。私もついてるよ。安心おし』

と云つて父も男泣きに泣いた。

『いゝえ、あのすばしこいお父チヤマですもの、何で今日まで歸らずに居るものですか、きつと死んだのです』

と云ひながら、私は大地も見えなくなるまで泣いた。其翌日の三日の午後夫の死の現場を見とゞけた者の來て話した時、私は『あゝさうだつたか』と思つたばかり、涙も急には出なかつた。それから主人の白骨と、平生主人が腰に下げてゐた金庫の鍵が二三日して、弟の手によつて掘出されてから、私も遂に主人の會社の燒跡へ行つて見た。横濱の中でも、山下町一體の居留地は殊に眼もあてられぬ様である。其處にも此處にも大きな煉瓦の殘骸は私の心を憤らすまで悲しませた。私の脚下五尺の前には、今なほどれだけの死人が横つてゐた事だらう。實に〱むごい悽惨たる跡を、飛び越え飛び越えせめて夫の死んだ場所だけなりと、見とゞけたい一心に、私は踏みしめ〱歩いて行つた。何處が往來やら家やらそんなことは問ふことも出來なかつた。主人の會社を探しあてるのに、どれ程の時を要したことだつたらう。うつろ心に、私は夫の手に朝、觸れてゐた思出の鍵をと、一片の骨とを小さい袋に入れて、胸に下げてあるのをしつかりと握りながら、燒けつくやうな日光のもとに、ほとりを浴びて、歩きに歩いた。

三

村岡は私にとつてほんとうによい夫であつた。彼は全く靜かな、重々しい、嘘を吐いたり、虚勢を張つたりしない、頼りになるよい人間であつた。

賀川豊彦さんが九月二十三日の週間朝日に、『灰燼の中に座して』と題して書かれてある中に、

『私の妻の從從は山下町にある相當に大きな印刷會社の社長であり、私と妻との結婚を媒酌してくれた人はその支配人であつた——後で知つたことであるが、妻の從弟の印刷工場では約四百名の職工（其の中多くは製本女工）の中、逃れた者は僅かに、八名で、社長、支配人、外凡ての職工は煉瓦の下に埋れて死んで了つたといふことであつた。』

とあるのは亡き夫や、夫の會社のことなのである。

生存者が八名といふ事は間違ひで、段々あとで解つたことであるが壓死者は六十七名であつた。

『社長ですか、今助けます。』

と一人の者が言つて飛んで行つた時、

『村岡だ。助けてくれ』

と云つて兩腕を出したといふことを聞き、何としても眼の前がすぐ火になつたので、見殺しにしてしまひましたといふことを聞くにつけ、私の胸は身も世もなくかきむしられる。どんなに其一瞬間、過去、現在、未來が走馬燈のやうにくるくると頭の中を廻つて、『お母チャン、坊や』と名を呼びつゞけ、心に思ひつゞけて苦しみもがいて死んで行つたかを思ふと、何故私はかうして生き殘つたのだらうとうらめしくなる。

全ては御心である。はかり知られぬ御心であると思ふには、あまりにあまりに悲しすぎる。唯、唯、小さな信仰は生前よりよりよき世界に、彼が今樂しんでゐることを信じて、僅かに慰められるばかりだ。

彼には此世の務がもう終つたのだ。けれど私にはまだ有ると思ふ時、この小さい生きた形見の子供を抱いて、僅か一年と四ヶ月になつたばかりの坊やを抱いて、呼び來らない心の叫を出ひながら、此の子を雄々しく育てなければならないと思ふ。偉い人にならなくてもよい。唯人間らしい人間になつてくれゝばよい。父の愛と母の愛とを一身に集めて、圓滿な性格の者となるやうに、ひたすらに祈られる。

被服廠へも行つて見た。夫と同じやうに、もしくは、それ以上に無慘な死に方をした多くの人の骨の山を見て、かへつて心が慰められ、輕くなるのを覺えるのは、何といふことだらう。全ては過ぎた。

このうつろな心よ！（一九一二、十、十二）

厨川白村氏の思ひ出

菊池寛

今年五月十三日女性改造の講演會が、慶應の講堂に催されたときだつた。私は講師の列に加はつてゐなかつたが、講演果てゝ講師達が、帝國ホテルで晩餐を共にする段になつて、急に私の處へ「改造社」から電話がかゝつて來た。「厨川さんが貴君に會ひたいと云はれるし、芥川さんや久米さんも居られるから、」晩餐の席へ出ないかと云ふのである。私は、京都から上京せられてゐた厨川さんに、久し振に會ひたいと思つてゐたので、直ぐ帝國ホテルへ馳け付けて行つたのである。長谷川如是閑氏と武者小路氏とは晩餐を辭されて歸つたとかで厨川さんと久米、芥川の外に有島武郎氏が居られる丈だつた有島氏とは、一二度顔を合はしたことはあるが、口を利いたのは、その晩が始めて位である。その席上で、有島氏が、「死ぬのには、首を縊るのが、一番樂だ」と話して居られたのを後で想ひ起した。その晩は、いろ〳〵愉快に話したやうに思ふ。帝國ホテルを出たのは、十時に近かつたと思ふ。そのとき、私は足の惡い厨川さんのために、改造社で乘物を用意してないのを、少し憤慨した。私は、厨川さんと連立つて、有島氏と三人で、日比谷の交叉點の方へ歩いた。交叉點で、有島氏は電車に乘ると云つて、其處へ殘つた。私は、有島氏が一人淋しさうに（と今はかきたい所だが、そのときは、さうハツキリは感じなかつた）紋附の羽織を着て立つてゐた姿を思ひ出す。私は、厨川さんと數寄屋橋まで行つて、タクシで送らうと云つた。すると、厨川さんはそれには及ばない、俥を見付けて乘ると云つた。私達は、數寄屋橋の方へ歩いた。私は、京都大學を出たので、教室では厨川さんの講義を聽いたが、學生時代には訪問したことも話をしたこともないので

廚川さんの身邊に就いては、美しい蝶子夫人の在る外は、何にも知らなかつた。私は、そのとき「先生には、お子さんはお在りになりましたか」と、訊いた。そして、博士に中學へ行つてゐる男のお子さんがあるのを知つて、今更不思議なやうな氣がしたのである。戀愛尊重のために戰つて居られる博士に、三人も四人ものお子さんが在るのは、一寸意外だつたのである。宿俥が見付かり、博士が俥に乘るのを見とゞけてから、私は後から來にゐた久米などゝ一緒になつた。

からなつて見ると、その晩の帝國ホテルを出てからの幾分間は、私に忘れられないものとなつた。戀愛のために身を棄てた有島氏と戀愛至上を說かれた廚川氏とが並んで步いたのも、何かの因緣であらう。有島氏の事件のとき、廚川さんは大に擁護された。その廚川さんも、二月と經たない後に、不慮の横死を遂げられた。戀愛は不朽なりと云ふかも知れぬが戀愛をする人やそれを說く人は、何と云ふはかないものだらう。

廚川さんが、英文學者としての位置や、文藝界思想界に盡くされた効績に就いては、外に云ふ人があらう。たゞ、大學教授など云ふものは、分りもしない癖に、文壇を輕蔑したり白眼視したりするものが多いが、廚川さんは常に、文壇に對して、理解と厚意とを持つて居られたやうに思ふ。殊に、僕は京都大學出身者としては、文壇に最も活躍してゐたせいか特にいろ〳〵な點に就いて好意を持つてゐて下さつた。この機會に先生の靈に謝して厚くお禮を云つて置く。

哀しみの追憶より

厨川蝶子

思ひがけない今年の秋の災害は私共の身にもふりかゝつて此世から良人を葬つてしまひました。鎌倉の山の懐で、たつた五人だけで寂しいお葬ひをしたのですが、その靜かに寂しいのが仰々しい葬列とか、儀式めいた虚禮とか言ふものを平常から嫌つてゐた夫の臨終としては、却つてふさはしいものであつたやうな氣もします。柩の周りには、良人が平常から最も愛してゐた二人のお弟子と、京都から獻身的につくしたいと言つてわざ／＼自分から附いてきたクリスチヤンの或る大工と、今度の遭難で色々面倒を見て貰つた鎌倉の植木屋の主人と、私との僅か五人で靜かな野邊おくりをしたのでした。暮方の靄が鼠色に漂う路々には、秋草や野菊が美事にこぼれ咲いてゐたのを、みんなで手折りながら、それを柩の上に捧げて火をつけることになつたのですが、四邊は樹立が蒼黑く繁つて、その間に芒の穗などが細い銀鼠色に光つてゐて、心の底までもしいんとひきしまつてくる夕方でした。私は自分で火をつけるにしのびなくて、一人だけ逃げるやうに、早く山をかけ下つたのですが、日は次第に暮れる、柩につけた火が夕風に低くたなびいてきて、いつまでもいつまでも麓の方へひく／＼流れてきた時の氣持を何と云つたらよいのか、たゞ嚴肅な悲壯な氣分にをのゝいてゐました。翌朝、朝露のまだ干ぬまに再び山を上つた時には、夫はもう白骨になつてゐました。眞白に碎かれた、綺麗な白骨を一つ／＼拾つてゆくときには、新たな感慨はまたしても胸の底からこみあげてきて瞼が熱く／＼なつてきました。やがて京都にゐる三人の子供達が、私が捧げて歸る父の遺骨を見た時に、どんな氣持がするだらうかと、それを思ふと心が一杯になつてしまひます。子

供達は今でも鎌倉へゆけばきつと父に逢へるやうな氣がしてゐることでせうに、かういふ骨瓶などをだいて歸らねばならないのは餘りに苦しい現實の夢だと思ひます。

厨川のことは何と申しても私が一番よく知つてゐる筈です私でなければ分らないことが多いだけに、言ひたいことも書きたいことも澤山あるのですが、今はもう何やかやと疲れきつてゐて、落着いて筆をとる氣持が出來てゐませんが、おたづねですから、簡單にお話してみませう。

厨川に對して、私が平常から最も敬意を拂つてゐたのは、その生活態度の眞劍なことでした。それには何時でも頭を下げました。なまけるとか、誤魔化すとかいふことがなくて、自分の信念をその儘實行する人でしたが、あれに人並の健康があつたらとそれが殘念でならないのです。體が弱かつたといふのも、その原因をたづねると粗食と、過勞のためでした。學生時代には東京にゐながら、淺草一つ知らなかつたといふのですから、下宿屋などもごく粗末なところに住んでゐたと見えます。良人の生れた家は貧しかつたものですから、家の方では尋常師範へでもいれる考へだつたらしいのですが小學時代の先生から認められて、學資の補助を受け、京都の第一中學校へ、それから第三高等學校を出ましたのです。大學校は東京でしたが、その頃兩親から僅か六圓（明治卅七年卒業）の仕送りしか受けてゐなかつたさうで、あとの不足の分は、自分で原稿を書いて雜誌に出したり、小石川の下宿から築地の外國人の家まで徒歩で往復して日本語を敎へに通つたりして、苦學をしてゐたさうです。それでも二年生からは特待生になつたので學資の心配はいらなくなりましたが娯樂と云つては圍碁を一つうつでもなし、學生時代から古本屋をめぐるのが何よりも樂しみだつたといふ夫は、自然友人との附合も少く、そのために色々な反感を買つたこともあつたやうでした。

大學を出ると間もなく、熊本の五高に奉職することになつたのですが、その時の卒業論文は、「詩文に表はれたる戀愛」といふのでした。厨川自身はその當時、東京の大學院に殘つて、夏目先生の門で研究をつゞけたかつたさうですが、熊本ゆきは仕方のない事情だつたと見えます。五高に奉職す

ると同時に兩親を養つて、今までの學費の恩に報いてゐたので、三十九年に私と結婚をした頃には、まだ下宿屋住ひをしてゐて、机一つに本箱一つだけの質素な良人の當時が偲ばれます。その翌年、私が妊娠した頃から、京都へ變るといふ話もありましたので、私だけ一足先に京都へゆき、間もなく夫も移つてきたのですが、三高の教授時代の生活も亦きりつめた苦しいものでした。「文學十講」を著したのは丁度三高時代でしたが、それが世に出ると間もなく、留學の話が持ちあがつて色々と準備に取かゝることになつたのですが、不幸にも左の足に受けた僅かの火傷がもとで、左脚を切斷することになつたのはその際のことで、あの頃も留學を眼前に扣へてゐましたので、死にもきれずに苦しみ悶えてゐました。それでも大學の先生方のお力ぞへで漸く退院すると間もなく、日本の海を離れることになりましたが、辛抱強い性質だけに、自分の學問のためには斃れる覺悟で洋行の途に上つたものでした。留守中の生活もかなり苦しかつたものでしたから、それを氣づかつて洋行中に送つてきた原稿や何かで、兩親の生活を支へたのですが、さういふ風に自分だけはどんな不自由に堪へても、人々は不自由させたくないのが厨川の平常からの心持でした。また良人は一體に金には淡泊な性質で、近頃も机の抽斗を片附けてゐました時、封筒が出てきたのを何氣なしにあけてみると、金が出てきたことがありましたが、講演會か何かで貰つたのをその儘忘れてゐたものと見えます。平常でも財布を持つて歩くことを面倒がつて、古本屋などで好きな書物が見つかつた時は、人にとられないやうに側の方へその本をおしこめておいて、歸つてきてから私に金をくれとよく言つたものでした。最近一二年はもとからの腸出血が一層激しくなつて衰弱しきつてゐたのですが、それでも近い一人旅などはいつでも三等にきめてゐました。子供とか私を連れてゐる時には二等にしましたのも、人には苦しい思ひをさせたくないといふ平常の氣持から出ることなので、家庭內の生活にも夫のその心が事々に動いてゐました。生涯の計畫は果せるだけ果して死にたいと願つてゐた良人はいつでもよく仕事のためには早起きをしましたが、その時などでも家人の目をさまさぬやうにして、音もたてずに一人で書齋へはいつてゐました。夜はまた十時頃になると、幾度も自分で女中部

屋へいつて、女中達を早く寢かせてから、自分だけは一時までも、二時までも仕事をつゞけてゐるのが常でした。併しそれも普通の健康體でしたら、言ふほどのことでもないのですが、本棚の書物を一冊とるにも、人手を借りなければ苦しい體でありながら、自分のことは努めて自分でしてゐたのです。食事なども昨年の五月頃からはずつと一日一食で、朝はコーヒーをすゝり（夫はコーヒーが好きでした）夜はお粥を僅かに一膳きりしかとれない程衰弱してゐたのです。大學の先生などもよく「厨川さんのやうだと大抵の人なら、病院で高枕をして寢てゐるのに」とおつしやつていらつしやいましたが良人は寢てゐる時でも寢床の中できつと何かしてゐました。便所の中へでも仕事を持つてゆくといふ風でした。「今何を食上つていらつしやるのですか。」とたづねてみても知らない場合がよくあつたやうに、僅かの時間でも惜しがつて仕事に熱中してゐたのですが、その間にも人樣の面倒だけは十分見てあげるやうに努めてゐました。「人樣には自分がしてきたやうな苦しみをさせたくない、好きな道を自由にひらいてあげたい。」と何時でも言つてゐましたし、そのために實行もしてゐました。私などにも、洋行中に苦しい生活をさせたことを濟まないと言つて、出來るだけのことをして、自分で惱まうとしてゐました。それも最近二三年頃のことですが、着物などでも出來るだけのものを私に着せて、自分で樂しまうとする厨川の心持がよく分りましたから、私もやはり喜んで貰ひたさに身につけてゐました。又旅行をしても、人樣のやうに先先で賑かに遊ぶことの出來ない性質でしたから、一人で淋しいからと言つては、私や子供をなるたけ傍に近づけておきたい氣持でゐたやうです。

殊にこの夏は、その氣持が強く動いたらしく、鎌倉に來てからなどは、子供が一日「叔母樣の處へゆきたいから東京へ出して下さい。」と言つた時にも「何も今度に限らなくともいゝではないか。又この次、冬にでも來た時に行つたらいゝではないか。」と何時にもなく怒つてゐたのを聞いた時は變な淋しい氣持がしました。普段の厨川でしたら「子供がゐなければ落ついて書けるのに」と、よく言つてゐたのです。又私が親戚の別莊をたづねて遲くなつた時にも小言を言ひましたので、「どうして此頃はこんなか知ら」と思つてゐたのですが、

今から思へば無意識のうちにも何かの豫感が動いてゐたのでせうと思ひます。さぞかし淋しかつたであらうと今から思へば悲しく胸にこたへてくるものがあります。淋しい思ひをしながら、自分の血を絞つては仕事をつゞけてゐたのです。

　夏休みの前などでも學校から歸ると、いきなり鞄を投げだして苦しさうに、仰むけに寢た姿なども、今私の目の前にありますが、學校で講義をしながらも、苦しさに机にかじりつきながら、出來るだけ色にあらはさずに努めてゐたと思はれる我慢強い眞劍な良人の姿なども見えてきます。今年の春の末頃でしたか「女性改造」の講演會で上京したあとでも、「厨川といふ男の聲はさぞ氣力のない聲だと思ふだらう。自分はもう大きな聲では物が言へなくなつた。」と言つてゐましたが、あれが東京での最後の講演だつたのです。

　それでもこの夏、輕井澤の夏期大學にゐました頃は、あの秋のやうに清澄な高原の空氣が頭をよくし、體の具合もよくしたものと見えて「輕井澤へ來てからは隨分よく書けた、體の具合も大變によくなつたから、この具合でゆけば、今年の秋は實のいつた仕事が出來るだらう。」と喜んでゐたのでした

良人はもとから輕井澤が好きだつたのです。私は海がすき、子供も海がすきでしたから二三年前までは輕井澤へ行きませんでしたが、たつてすゝめるので、私もはじめて行つてみたのですが、月の美しい晩など「こんないゝ月は高原でなくては見られない。」と言つては、足の惡いのを忘れたやうに、露をふくんだ秋草の咲き亂れる野をしきりに連れまはつたこともありました。それでも輕井澤では子供の好きな水泳が出來ないので、鎌倉にゆくことになつたのですが、俗惡な夏の鎌倉は嫌ひだと普段から良人は言つてゐました。鎌倉でも冬の鎌倉とか梅が咲く頃の鎌倉は靜かで暖かでしたから、よく八幡樣のあたりを散歩しながら、「實朝はこんなところで歌を詠んだのだらう」と言つてゐたこともありましたが、今年の鎌倉はわけて暑苦しく、輕井澤との氣溫の變化がはげしかつたためか、體が一層衰へ氣味になつてきました。それでもある夕方など、私や子供が海から歸つてくると、良人は自分の手で、風呂をわかしてあつたことがあります。女中を連れてゆきませんでしたから、流しもとや風呂場は私の仕事でしたがその時はほんとに勿體ない氣がしました。そして仕事のひま

〳〵には水を撒いたりするのを自分で樂しみにしてゐました。

八月の三十日に、三人の子供が鎌倉をひきあげるといふ時には、體の具合がよほど惡かつたにも關らず、良人はどうしても横濱まで送ると言つて、無理にも見送りに出たのですがあとで子供達から聞きますと、長男(十七)の文雄が父の體を氣にして、汽車の出る間際になつてから、急いて駈けていつてアイスクリームを買つてきて渡したさうです。すると、「もう汽車が出るのに何をする。」と叱つて、今度は自分が三人の子供にアイスクリームを買つて渡したといふことですがさういふ場面が父と子の最後にならうとは思ひもよらぬことでした。その時も非常に疲れて歸つてきましたが、そのあとから夫が子供に送つた手紙がありましたが、その中の文句に

(次郎や守は汽車の中で上衣をぬぐことを知つてゐたか。)

と書いてありました。十七にもなる文雄の方はともかくも日本人は無作法だといふことを普段から父に聞かされてゐた小さな子供は、暑い汽車の中でも上衣をぬがずにぢいつとしてゐたのではと氣づかつて書いたのでせうが、子供を愛してゐた厨川の心はこの一言にも分ります。

外に出ては色々の苦しみを堪へしのび、家にゐても家族の者の面倒をよくみて、一切の苦痛を身一つ胸一つにひき受けながら、尚あれだけの努力を續けてゐたのですから、良人の生命が短かゝつたのも無理がないやうに思ひます。只管眞劍に、正直に、文字どほり懸命の努力をつゞけてゐながら、しかも自分の終生の仕事として殘しておかうとした、專門の著述は二つとも未完成のまゝで、不慮の死をとげてしまつたのですから、私の胸は今、厨川に氣の毒だ、可哀さうだと思ふ心で一杯なのです。「もう一年でいゝから生きたい。」と言つてゐた良人の聲が、今私の胸をえぐるやうに苦しいのです。

あの九月一日の災害の時にも、倒れた家から漸くぬけだしてから、

「家に原稿を殘してきたから取りにゆく。」と言ひ出してきかないのです。足の惡い良人ひとりを取りにやることは出來ませんから、しきりに止めたのですがどうしても聞きません。

「それではは私もまゐります。二人一緒に死ぬ覺悟でまゐりませう」と言ひましたら、その時良人は、

「お前が死ぬといけないからそれではよさう。」と言ふのです私は吃驚して良人の顔を見ました。その時ほど夫の愛の深さを身にしみて感じたことがありませんでした。自分には到底厨川だけの大きな愛はないとはいつも思つてゐたのですが、あの時こそは、身うちにこたへて勿體なく、これから先はどれだけ愛しても愛し足りないと思ひましたのに、それがもう出來なくなつてしまつたのです。今となつてはせめて、良人が殘した子供を二人分に愛して、子供達の天分を、良人ほどの苦勞をさせないで、のび／＼と育てゝやりたいと思つてゐます。それから毀れた家から取出した良人の書類を、私は出來るだけ處理して、一日も早く世に出したいと思ふことと、この二つが私に殘された大事な仕事なのです。子供達が一人前に育ち、良人の殘した仕事が片附くまでは、私はどんな苦しみにも惱みにも打堪へて、死以上に苦しい生をつゞけてゆかねばならないと思つてゐます。厨川の死をみつめた時には私も良人をさらつた海の中へはいつて共に死にたいといふ願ひを、ほんたうに私としては壓へきれない程願つたのですがしかしあの血みどろになつてゞも生きてゆくといふ生活狀態をとつた良人のことを考へると、私ばかりがたやすい死の道を選んで、今後の生活の苦しさ、寂しさから逃れることが出來ません。「すべては子供たちの大きくなる日まで。」私は今さら覺悟をきめてをります。それによつて良人がかねてから言つてゐた「自己放棄の自己主張」といふことを、自分の體でほんたうに實現されると自覺してゐます。厨川の戀愛觀などにあらはれてゐる思想も、眞實の體驗から出たものであると間違つてはゐないと私には思はれます。

四十度の高熱に唸されながら、死の際まで、遺稿のことを言ひながら、厨川はとう／＼亡くなつてしまひましたが、私はこれから身をもつて良人の主張を生かしてゆかねばなりません。それが亡き人の靈に捧げる唯一の愛だと信じてゐます。

（――遺骨をだいて京洛に歸らんとする前夜――）

震災雜記

（子供達に見せるために）

平塚明子

二

お隣のおちさんは地震の時七階で、お仕事をしていらしたので、外へ出ることなどはとても出來ないばかりか第一倒れさうで歩くことも出來ないので、窓にかたくしがみついたまゝ、戸外の建物の搖れるのを見ていらしたのでした。煉瓦や土藏づくりの家がひとたまりもなく雪崩れる、鐵筋コンクリートの岩丈さうに見えてゐた建物が大きく搖れて、見るまに罅が入つてかしげかかる、大きな石が落ちる、殊に物凄かつたのはすぐ前の建物がゴーッとおそろしい響をたててそのまゝの形で下へ沈むやうに崩れて行つた時で、矢張り窓側に立つてゐた四五人の白粉を眞白に塗つた若い女事務員達が手をさしのべて、悲鳴をあげて泣き叫んでゐるのを見ながら、どうすることも出來ずにゐるうちに、何もかも蔽ひ隱されてしまつたときだつたさうです。おちさんは可哀さうにあの人達は確に死んだ、毎日窓と窓とで顏を合せるので、お互が他人ではないやうな氣がしてゐたのにと溜息をなさいました。

おちさんの周圍に集つた人達は、息をはづませて話すこのおそろしいお話を一言も聞き洩らすまいとみんな耳を欹てま

した。坊や達も勿論この熱心な聴手の中の一人だつたので、敦坊などは人の袂の下からくぐり込んで、おぢさんのすぐ前に突立つて、口をあいたまま、瞬一つしないで、おぢさんのお顔を見詰めてゐましたつけ。

でもおぢさんの會社は幸に無事でした。（あとで火事で焼けてしまひましたけれど）でおぢさんはひどい揺れが少しやむと夢中で外へ飛び出しました――幾つもある梯子段をどう降りて來たか全く覺えもなく。すると急にお家に一人お留守居をしていらつしやるおばさんのことが心配でたまらなくなつて、そのまゝとんで歸つてゐらしたのでした。

おぢさんはまた途中のことをいろ〳〵お話なさいましたよ。潰れた家の多いこと、立つてゐる家でもこの邊のやうにちやんとしたものは一つもないこと、頭や顔から血を流してゐる人、繃帯をした人、擔がれて行く負傷者らしい人、こんな人達に何度も出逢つたこと、日比谷へ來たら火が燃え上つてゐたこと、坊や達のお馴染のあのお玩具屋のある新宿追分邊も火事で通れなかつたこと。それからおぢさんは餘程こはかつたと見えて、自分が乘つていらした自動車（おぢさんは途中から知らない荷物自動車に乘せて貰つたのです）が通るすぐその後へガラ〳〵とお家が倒れかかつて、地煙りをドツと浴びたときのことを何度も何度もおつしやつては、その度毎に身慄ひしてゐました。さう〳〵坊や達の知つてゐる四谷見附の角のお料理屋もぴしやんこに潰れてゐたさうですよ。

みんなの顔は急に暗くなりました。恐ろしさが今迄の二倍三倍の大きさとなつて蘇つて來ました。お父さまや、お兄さま、姉さまなどがお勤め先からまだ歸つていらつしやらないお家の方々は俄にその生死が案じられだし、ご無事を祈りながらお歸りを待ち詫びてゐました。

「お宅は皆さま御揃ひでほんとに御安心ですね」と私共はみんなから羨しがられました。お付さまも全くお父さまのお出かけになつてゐる時や、お姉ちやまの學校へ行つてゐる時でなくてほんとに仕合せだつたと思ひました。坊や達も祖父さま祖母さまのこと、新橋のおぢさま、おばさまのこと、みさちやん、ちいちやん、もんちやん、ためちやんのこと、それか

ら坊や達ふたりの大事な大事なお友達のさんちやんのことを大變案じてましたね。

「ね、お母ちやま、どうしてるかしら」つて何べん言つたか知れません。

人達はいつまでも道端に立つてばかりもゐられませんでした。疲れて來ると地震のあい間あい間をうかがつては、こわごわ自分達の家の中へはいつて、大急ぎで雨戸や莫蓙、筵などをてんでんに持ち出し、よささうな場所に敷いてはみんなかたまつてその上に坐りました、向ふ三軒兩隣りといつた人達が自然集つてひとかたまりになるので、それがそこここに大家族のやうに陣取つてゐます。やがてその中の誰れかがお茶道具を家からもつてくる、或ものはお菓子を運ぶ。仕舞には大きなおはちまでもち出されました。

成駒屋の門前の竹藪は一番安全と思はれたのでせう。お年寄や赤ちやんやご病氣の人達が寢かされてゐたやうでした。炭屋の前には早速大釜が据ゑつけられました。やがて大きな薪が熾に燃えてお湯が煮たちますと、この幾組かの大家族に自由に飲まされました。坊や達の渇き易い喉はこれでどれほど惠まれたことか知れません。ほんとうに先刻まで他人であつた人達が、今はご兄弟のやうな心でお互に向ひ合つてゐるのです。お母さまは何だかかうした非常の中で見られる人間のやさしい心がうれしくなりました。

東の方の森の間から見えてゐた新宿の火事らしい煙がだん〱量を増し、勢を加へて來ると、人達は立つて、その方へ不安の眼を向けました。そして、車庫が燒けてゐるのかも知れない、武藏野館に火がついたのだなどと言ひあひながら風向きに注意したりしました。風は向うへ向うへと吹いてゐるやうでした。消防自動車の唸り聲や、火事場のどよめきらしい騒音も遠いやうに又近いやうに聞えてきます。刺子を着た消防夫が通る、火事場にかけつける男達が何人も私達の前

を起つて行く。

けれどそれよりも少し南よりの空に、赤黒い煙がずつと廣く大きくひろがつて行くのを私達は見ました。

「大變な火事だ、何處だらう。」

地震の不安が去らないのに、火事の不安が又蔽ひかゝつて來ました。

京橋日本橋が燒けてゐるとか、日比谷だとか、淺草が大火だとかさまざまな報導が何處からともなく傳はつて來ました。

「いやだなあ、火事」と氣の弱い敦坊は溜息をつ いてしまひました。

「ねえ燒けて來ない、やけて來たらどうするの？」

「あら燒けて來たつてこわかあないわ。ねえお父ちやま。お家の中にゐないのですもの、お家がやけたつてこわかあないわ。」とお姉ちやまは得意さうに口を出して、「地震は何處へにげてもそこいら中地震でせう、だからこわいけれど火事は燒けてゐるところだけですもの、にげればちつともこわかないわ。」

「火事だつて燒けるからこわい。」

「あらいやあだ、地震の方が火事よりよつぽどこ わいわ。」

敦坊の心配はお姉ちやまの地震と火事の比較論などではおさまりません。

「お母ちやま、燒けて來ないの、大丈夫？」と小さな聲で何度も念をおします。煙ばかりで火が見えない位だから餘程遠いのだこんな處まで燒けてくる筈がないとお母さまがいくら云つても矢張り無駄でした。なぜなら敦坊に言はせると晝火事は夜の火事よりも火が見えないで分りにくいからなほこわい。近いのに遠いと思ひ違へたりするからなほ こわいといふのでしたから。

もうその時は午後の三時を過ぎて居ました。お晝飯を食べはぐれてゐる坊や達のお腹はふだんならどんなにかすいてゐる筈ですのに、おそろしさに食慾さへ子供のもつあらゆる慾望の中で一番強い食慾さへ失つてゐたのでせう。お母さまが御飯代りに上げた大好きなカルケットさへ、いつまでも手に握られたまゝでゐました。

赤黒い煙はます〳〵空にひろがつてゆきます。

感じ易い敎坊の心に今一つ大きな不安を能へてゐたものはこの煙よりももう少し南よりの空にもく〳〵と湧き上つてゐる大きな、不思議な雲の一團でした。ちよつと見ると眞夏の空にかかつてゐるあの銀白に輝く雲の峰のやうで、よく見るともつと陰影の強い、何かしら天地の異變を暗示してゐるやうな、人の心の中に久しく忘れられてゐた迷信をよび醒さずにはおかないやうな無氣味な狂想的なものでした。

この雲が現はれ出したのはいつ頃からか氣付きませんでしたが、私共の注意を惹き、疑問の的となりだしたのは二時頃からでしたせうか。ところが三時頃には大きな煙突から繼に吐き出される煙のやうに、後から後から黒黄色く不安に濁つた雲が渦卷ながら湧き上つてゐました。上の方は夏雲のやうに白く晴るく中ごろは陰影が多く、下の方は煤烟のやうに黒黄色い雲―　このあやしい雲の脚はどうしても煙に續くものとより思へませんでした。

「雲ぢやあない、煙りだ。併し上の方は確に雲だ」

私共は不安な氣持でこんなことを言ひ合ひました。

日が暮れるにつれて、東南一帶の空は血色に染め出され、遠くの森や木立のかげが深い印象的な黒さで浮き上りました。例の魔女のやつた雲も一層輝かしい赤さで明るく照り出されました。

坊や達は非常な驚異と感激をもつてこの偉大なそして夢幻的な光景をしばらくは默つて見入つてゐました。

「いやだなあ、あんなにまつかで。大地震だとなぜあんなに大火事になるの、空の赤いのがなほらなければ地震もやまないの？」

敦坊がこんな疑問を出しはじめると大地は又グラ／＼と大きく搖れました。あわてゝお母さまにしがみついた敦坊は震動がしづまると「いやだなあ」と口の中で言つて深い息をするのでした。

私共は火事場のさまを想像してはみんなで心を痛めあひました。

併し火に追はれて逃げ廻つてゐる下町の人達に比べると私共は何といふ呑氣さだつたのでせう。ともかくもこの中で晝と夕とをかねたお食事をすることが出來たのですもの。お母さまはお臺所の隅に久しく忘れられてゐた塵だらけの石油ストーブを持ち出し、溝板の上に据ゑて、お晝のお肉とお野菜を滅茶苦茶に煮込んだりしました。空には美しい星が何事もなかつた夜と同じやうに光つてゐました。お姉ちやまはこの星空の下でいつもまゝごとをして遊ぶときのやうに茣蓙の上で小さな蠟燭の影の多い光に手もとだけ照らされながら、お隣のおばさんやおぢさん逹と並んでお食事をするといふことが、今日一日のおそろしさをしばらく忘れさせるほどうれしくそして物珍らしく感じたのでせう。お調子にのつて何杯も何杯もお代りをするのでした。けれど敦ちやんにはとてもそんな餘裕はありません。

「お腹がいいんだものあとで食べる。」

弱い／＼と言はれるののつらさに、かう言つて一杯の御飯さへ殘すのでした。

夜になつて却て人通りが增すほどでした。電氣と瓦斯を絕たれた暗闇の町を大小の提灯がいくつとなく行きする。自轉車が走る、自動車が砂けむりを立てて何臺も續く。炭屋の店先には大晦日の夜のやうに高張がかかげられる、道端や植込の中の避難者の群では蠟燭の篝火がぽつちりともつて、その周圍に黑い影がうごめいてゐる。非常時の氣分はこんな市

外の片隅にも溢れてゐました。

「今夜どうするの、どこへねるの」

坊や達は代る／＼かう言つて、今夜のことをひどく心配しだしました。

「ここへねるのさ、お星さまを見ながら、お月樣もうちき出てくるよ。あんな小さなお家の中で寢るよりかよつ程氣持がいゝ。」

お父さまはこんなことを言ひ乍らご自分がまづゴロリと仰向けになり、「ああ、全くいゝ。こりやあいゝ氣持だ。成程乞食をすると忘られない筈だ」などと晝の疲れでもう横になっていらしたお隣りのおぢさんを見て笑つたりなさいました。

「あの雲をごらん、大きな達磨さんがゐるから。早く見ないと崩れてしまふよ。」お父さまに注意されて坊や達は頭の上の例の赤く輝く不思議な雲に眼を移しました。

「寢てごらん、その方がよく見えるよ。ああお爺さんに變つた、ホーラあそこにあごのところに長いおひげが生えてゐる分つたらう。」

坊や達は爭つて寢ました。雲はお爺さんから天狗に、天狗からロダンの顏に、ロダンから妖婆に、妖婆から子供にと幾度となく變りました。しばらく雲の姿の面白さに心を奪はれてゐた坊や達はいつの間にかねてしまひました。お父さまは早速お蒲團や毛布をお家から持ち出してふたりの上にかけました。

「矢張り子供ですわねえ、あんなにこわがつてゐても、眠るだんになると、こんなにすぐねられるのですもの。」

とお母さまはけふ一日脅かされ通してゐた敎坊の弱い疲れた神經をはじめて休ませることの出來たのをよろこびました

私共はいよ／＼野宿の用意をしなければなりませんでした。夜が更けても益々人通りを增すとも減らない往來のやかましさ、殊に荷物自動車が寢てゐるからだに傳へる何とも言ひやうのないいやな響と震動、その度毎に卷き上る砂塵に參つ

て私共は間もなく、大勢の人の群から離れて、矢張り眞間避難してゐたあの大きな櫻の並木路へお引越しました。そのお夫婦だちは私共と一緒でした。お姉ちやまはお父さまに、敦ちやんはそのおぢさんに運ばれたのでしたけれど、よくよく疲れて眠入つたと見えてふたありとも何も知りませんでしたわね、手一つ動かしもしませんでしたもの。電燈も瓦斯燈も全く點かない夜の町の、わけても市外の植込の中は、只恐ろしさに震へてゐる夜陰ばかりのやうですのに、よく見るとそこにはもう先着の避難者が幾組も陣取つて、中には木の間に蚊帳をつつて、もう靜に休んでゐるもの、大風呂敷の急設テントをはつてゐるものなぞが見えて來ました。思ひがけないところから人聲がしたり、咳が聞えたりしました。

この時大きなお月樣がやつと東の森をはなれるのを見ました。昨夜と同じところに、同じやうに靜に靜にのぼるあのお月樣は一體この下界を――僅一日のうちにかうも變り果てた下界を、この大凶變をまあ何とごらんになつたことでせう。お母さまもたいへん疲れて來ましたけれど神經は益々尖つて行くばかりでとても眠られませんお父さまの高鼾をうらやましく思ひ乍ら、幾度かせめてからだだけでも休めやうと坊ちや達の間に横になつては見ますけれど、頭が下につくと地の搖ぐのが、かすかな、かすかなものまで一つ殘さず非常な鋭さで感じますので一層無氣味でなりませんし、混亂の大東京から火焔と一緒に渦巻き上る、何とも言ひやうのない一種の雜音、その間に交る爆音も眼をつぶると一層よく聞えて來ますし、その上藪蚊はこんな時とばかり遠慮なしにやつて來ますから、却て心が落付きません。お母さまは又起き直つて茣蓙の上にお坐りしては眠つてゐる人達の蚊を追つたり、ふみぬがれたお蒲團をかけたりしてゐるのでした。

「大變なこつでした。皆さん無事ですか。私の方は燒けてしまひましたよ。この通り、着たつきりです。また荷物もちつたあ出したけれど、なんせ橋が落ちちやつたんですから逃げる丈が骨でさあ。本所邊は全く話にもなんともなりません。餘つ程死んだでせうよ。こゝらあほんとに極樂です。こんなところは何處にもありやしません。」

大きな提灯が露路の奥へはいると間もなく興奮した聲で、こんな話がはつきりと聞えて來ました。

眞赤に焦げてゐた東南の空は南へ南へと大きくひろがつて行くばかりでした。

「淺草から、吉原も燒けました。おいらんが又澤山やられたこつでせう。」

又こんな話も聞くともなしに聞えました。

お母さまは焔の海、火の嵐の中を、悲鳴をあげ乍ら、恐ろしい形相をして逃惑つてゐる狂亂の女達の影繪をぼんやり目の前に浮かべながらひとり胸をさわがせたりしました。

お月樣はいつまでも高いお空で物凄く光つていらつしやいました。

「まだ夜は明けないのかしら」

かうして只々夜明けを待つたのはお母さま一人ではありませんでした。

難に克つ

澤田正二郎



一

何事かあるべしと思つた時、人々も亦、何事か起るべしと感じてゐたらしいその時、地球の一隅から、異様の物音が聞えて、地上のもののすべてが、同じやうに赤るみへ投げ出された。

惡も善も、美も醜も、そしてそのいろ〳〵の心持で、互ひに入り亂れながら、右往左往して嚙み合ひ、傷つけ合つた、それから後の幾日かの秋晴の日は、眞裸となつた私たちの心に何を訓へただらう？

私はちようどその時、思ひがけなくも、而も他動的に突發したる忌まはしい事件によつて、けれども亦、感謝したいほどの得難い體驗を嘗めながら、冷たい、暗い、三日の日を過ごしました。そして、世の中の最も卑しむべきものを見た。職權濫用者らの憐むべき心情をも親く閲したのであつた。一度は、世を呪はうとまで思つた身が、重たい鐵鎖に繋がれ、常の日には、いつも憐みの心をもつて迎へ送つたあの囚人自動車に乘せられて、過ぐる春演劇改善の相談會があつた時には、その席に招待されたことのある警視總監の官邸を横に見ながら、警視廳の裏門を這入つて、薄暗いコンクリートの地下室へ入れられたのであつた。然しながら、このコンクリートの中には、まだ〳〵惠ある日の光がさし入つてゐた。同じ職にある人の心にもいろ〳〵の變りのあるのを私たゝは　つたごゝの人々の優しい心が、今まで世を呪はうとさへ思つた私の心を、幾分かでも柔らげて呉れたのも事實であつた。さうした、多少でも感謝的な氣持に囚はれかけようとした間にも私たちにも、正しき裁きを受けるために裁判所へ送らるる分時を、一刻千秋の思ひで待つてゐたのである。その時であつた。二度と私たちの生涯に於て、とても味はふことの出來ないやうな大きな力が襲ひかゝつて來たのは――。一度！ 二

度！踏みしめた大地までが、私たちを眞直に立たせて置かないのかと怪しませるやうに震動したのであつた。九月一日の大地震！それは、私たちの上に降りかゝつた突發事件がほんたうに思ひがけないことであつたやうに、人々には全く思ひがけない大災厄であつたに違ひない。

二

「死ねば諸共だ、狼狽ててはならんぞ！」私は、他の四十六名の者に對つて斯う叫んだ。氣の毒な座員たちは、私の體を取り圍んで集まつた。神はわれら正しき者を護らせ給うたものか、幸ひ一人の怪我人もなく數分の後には、その職に親切なる人たちに守られて、まづ初め、帝劇の横の廣庭に避難させれらたのであつた。想へば嘗ては、この白堊の中で幾千の觀客を前に、拍手に迎へられながらステージに立つたこともある私たちは、今は鐵鎖につながれて、南側入口前の三和土の上に蹲くまつてゐなければならないとは、何たる運命の皮肉であらう。私は、その數奇さに微笑まずにはゐられなかつた。が、その微笑の直ぐ下から雨のやうに降りかゝつて來るのは、すぐ眼の前に燒け落ちる警視廳の火の粉であつた。娑婆は、この大地震と大火災とでごつた返してゐる。けれども私たちは、靜かに／＼、そこに蹲まつてゐなければならなかつた。周章てもせず、騷ぎもせず、靜粛に、たゞあの冷たい手錠をはめられたまゝで――。駈け行きながら誰かは云つた「これで全世界が引つくりかへつて呉れればいゝ」と。飛んでもないことだ。私たちには、まだ／＼大きな仕事が殘つてゐるのに、而もその仕事は、この世界が完全に存在してこそ有效に役立つものであるのに――。

家族安かれ、我が劇を愛して呉れた人に安かれ、すべての人々安かれよと念じ祈りつゝ、私たちはまだそこに蹲くまつてゐるのであつた。火の手がだん／＼掩ひかぶさつて來た。彼方此方で「熱ツ熱ツ」といふ聲が聞える。危險と見てか、係の警官は私たちを宮城前の廣ツ場に連れて行つて呉れた。畏いことではあるが、過ぐる年、先帝陛下の御危篤が傳へられた時には、心をこめて拜し祈つたあの廣場の前の松の木の下に、四十七名珠數つなぎになつたたまゝ、一人が小便をしたいと云へば已むを得ず全部がそれに附き合はなければならないといつたやうな有樣でこのまゝ檢事局に送られるか、それとも、非常の場合とて責付放還されるか、何れにしてもその早からむことを待つてゐたのであつた。見あぐると大空は千年古を經しさそりが巣くつてゐたとも思はれる穴ぐらの壁

のやうに恐ろしい色を呈してゐる。

三

あの火は大藏省だ。その向ふのは神田だ。こちらのは芝だあれが京橋だ。日本橋だといふその火煙の圍みの中に、花の蕊のやうに帝劇の燒けてゐるのが見える。學生時代に、三等切符を買ひながら見つめてゐたあの屋上の翁の像が、今まで善美を誇つてゐた帝劇の運命を負ふかの如くに、見えてゐる間に倒れ落ちてしまつた。開館式に招ばれて行つたあの宏壯な建物、友が結婚の披露をしたあの東京會館の胴骨の、うつろのやうに抉られてゐるのが悲慘さを物語つてゐる。綠をたたえた松の樹の下、泰平そのもののやうなお濠の中に石垣が幾個所も亂れ落ちてゐるのも痛ましい極みである。私たちは、この大きな異變の爲めに、三日の間見ることの出來なかつた天日の明るさを今日漸く見ることは出來た。けれどもその日の色は天變の爲に狂つてゐた。何事かあらねばよいがと氣づかつた憂ひが、今その目のあたりに展開してゐるのである。雜音は刻一刻とその響きを增して來る。帝劇の燒けてゐる××××××××××た人々の顏にも、漸く不安の色が漲つて來た。「いよ〳〵世の中が壞れかゝつて來たのではないだらうか」と云ひながら走つて通り去る者がある。それでも私たちは、幸か不幸か、まだ安らかに芝生の上に憩うてゐたのであつた。何ぞ知らん。その時すでに都の太半は、崩れかけたり燃えたゞれたりしてゐた時だつたのである。また人々は、追ひかゝつて來る火と煙とに卷かれて、修羅の巷を叫喚してゐた時だつたのである。

向ふから、編笠をかぶつた囚人達が、幾十となくこの廣場へ連れて來られるを私たちはみた。これはまた、皆が皆、不安さうな面持で默々として頭垂れてゐる。それだのに、私たちは何故こんなに安心してゐるのであらう。ゐることか出來るのであらう。

四

「この手錠から放たれる時は、街を歩いても安全な時なのだ」と云つて私は皆の者を慰めた。然しその時分にはもう、何も彼も、家のことを思ひ、老いたる父母、最愛の妻子のことを氣遣うてゐるの心情が、判然と私の眼に映つたのであつた。やがて私は、この職を司る上の人に呼び出された。一同の顏には或る輝の色が漲つた。しかしてそれは、事實となつてあらはれた。固より白日の身の、國法の正しき限りは、自分

たちの行爲の罪なきを信じてゐた私たちは、進んでも法の裁きを受けることを希望してゐたのであるから、命じられずとも、「明日午後六時までには復び集まつて出頭しませう」と約して、一同兎に角放還されることとなつた。それはもう、四時に近いころであつた。情知る人々の見送りをうけながら、丸の内から一歩外へ踏み出してみて、初めて私は、世の中の只ならぬ様に驚愕した。人は火から逃れんとして、凡ての財物を捨てゝ逃げてゆく。何といふ悲惨さであらう。無理に罪人をつくる檻なのだらうとさへ思はせられたあの××署の門を出て、初めて乘る自動車に押し込められる時から、正しき裁きを受くべくこれから裁判所へ送られるのだ。そしたらきつと晴天白日の身となると信じてゐた私たちは、さうして今日釋放されたら、何でも好きなものを腹一ぱい食べるから、と、他の者とも語り合つて、わざとその朝は、與へられた食事は同檻の人に與へて、何一つ口にしなかつた爲に、空腹に空腹を感じてゐた私たちは、先づ歩いて歸るのに食を得なければならないと思つて、常盤橋を渡り、日本橋の心安い親戚の家を訪はうとしてみた。けれどももうその家のある町まではどうしても行くことが出來なかつた。忠臣藏にでもあるやうな四十七名の座員は、「天」「下」の合言葉を便りに、列を作り車に重い荷を積んで苦しんでゐる馴れない人を見てはそれを手傳つてやり、又、道端に倒れてゐる力弱い婦女子のあるのを見てはいたはり救けながら、ひた走りに走つて、本石町の角まで來た時、私は更に二度目の驚きを深くしたのであつた「世界の絶滅とはこのことか」今度は、私からして斯う思はずにはゐられないやうな氣がした。烈風に煽られた猛火は私たちを襲うて來るやうである。裏の細道を駈ける人、も一度搖れたらきつと崩れ落ちるにちがひないやうな危險な屋根、しかも焰に吹きつけられて燃えしきつてゐるその軒下を走つてゆく人、さうした焰のガードをくぐり拔け喉乾けば、消防のホースにかぢりついて泥水を口に入れたり、路傍に落ちころがつてゐる角砂糖を見つけてかぢつたりしながら、またひた走りに須川町の方へ走つて行つた。萬世橋にかゝらうとした時、私は、橋を渡つて上野の方へ行くべきか、右に折れて淺草橋の方から行くべきかに迷つた。その時先登に立つた二三の者は、既に右に折れて、「淺草橋の方へ出た方が近い」と叫んでゐたが、私はそれを止どめて、御成街道へ渡るべく、少しは遠くともその方が安全であることを主張した。若しもあの時淺草橋方面へ向つてゐたなら、向島の私の宅へ行くべき目的であつた私たちは、藏前通りは通れなかつたといふこ

とであるから、たゞ一つ燒け落ちてなかつた兩國橋を渡つて被服廠の跡へでも逃げ込み、あの何萬の悼ましい犧牲者たちと同じやうに、枕を並べて燒死したかも知れなかつたのである。運命は、常に危い分岐點を私たちに與へて、その力を試さうとするのである。私はあるものを信じてゐる。或る奇蹟をさへ信じてゐる。この信じるといふ力をもつて、一歩々々を踏みしめながら、幾萬となく下町から避難して來ては、その下町方面の火の海を、恐ろしさうに見下ろしてゐる上野山の群衆の顏を左に望みながら、車坂から眞直に、こゝも火の海と化した淺草の方へと急ぐのであつた。

五

赤黑く焦げた、未だに忘ることの出來ない異樣の天の色よこの恐ろしい姿の幕は、はや夜の帳に掩はれんとしてゐる。あらゆる電光は滅してもなほ、燃え漲がる火光によつて路面は晝のやうな明るさである。途々、座員の家を訪はうとはしてみるけれども、何處も此處も、既に猛火の中に包まれてしまつてゐて手の施しやうもあらばこそ、その紅い火の光に照された顏一つ、それは、私の家の安否を私に知らしむべく、すぐ警視廳まで駈けつけて呉れたけれども得果さず、今し空しく雷門まで引き返して來たといふ文藝部のH君であつた。

この混亂の巷に於て、奇しくもH君に巡り遇うことの出來た不思議さよ。××署の事件には、たゞ一人殘つて私たちの行爲の潔白を明かにし、一刻も早く私たちを無法の扉より救ひ出すべく有志の人々と共に、日夜奔命してゐたこのH君の手を握つたまゝ、私は暫くは言葉も出でなかつたのである。

渡らんとした吾妻橋は既に燒け落ちて渡れず、白鬚橋を迂廻せむとして進めば山谷方面の火の手に遮られて吉野橋までは寄りつけさうもない。私は、阿鼻叫喚の巷に佇立したまゝ暫くはその取るべき方法に就て考へたのであつた。「何物も餘すな」ともいふやうに、無慘や、八方の火の手は焔の立髮を立てゝ駈けめぐつてゐる。若し一家の無事を知らせて呉れたH君に遭ふことが出來なかつたならば、私はまた、川を泳ぎ渡るの險を敢て冒して、或は不歸の客となつてゐたかも知れないのであつた。私は、逸る心を宥め靜めて、私たちが一年の月日、よく守り闘つた懷しい公園劇場へ引きかへしたのである。こゝでは、三日間つひに逢ふことの出來なかつた公園劇場關係者たちの顏をも見ることが出來たが、近隣の人々の溫かい惠みの握飯に飢をしのいで、暫し休らう暇もなく、火は今にこゝをも襲はんず勢である。

火を負うて逃ぐべきか、火を避けて遁ぐべきか。再びこの分岐點に立つて考へること數分時、自分の考へ一つで、數十の人の尊い生が危くなるのだといふ大きな責任を背負つてゐた私は、こゝでも或る信念の閃めきを發見し得たのであつたさうして感じたまゝに、私は、眞暗い公園劇場樂屋から座蒲團一枚づゝ持ち出させ、新國劇の大提灯を列の前後に押し立て、燃え盛る火の手の側面を見ながら、二時間前に歩いた電車通を上野の山へと向つたのであつた。ちようど三日間、馴れぬ檻房の苦しみに心身ともに痩せ細つてゐる人々を勵ましながら漸く上野臺に辿りついて振りかへれば、まづ胸をつまらすものは下町一帶の火焰である。しかもその火の色たるや大自然の莊嚴さなどといふ言葉とは全然かけはなれた心憎い物凄さを帶びてゐた。

火！　火！　火！　火の海！　滿目みな火の海！　むかし住むだ山の下の御徒士町も、稻荷町も、初戀の想ひ出殘るどん〳〵橋の附近も、芝居の閉場後、輕い疲勞を覺えながら涼しい夜風に吹かれて歩いた淺草の通りも、何もかも、火と煙とに包まれてしまつて、私に救ひを求め叫んでゐるかのやうな氣がする。懷しい記憶の跡々が斯うして、みんな灰になるのかと思へば私はそれが悲しい。

六

上野の山を拔けて、少年時代に、心膽を練る爲に來た谷中の墓地や五重の塔あたりの雜沓を右に聞きながら、私たちの一隊は、根津より本郷臺へと急ぐのであつた。旬日前には、一高對三高の野球の試合を一日休演して觀に來たこともあつた一高正門の前に、友の日君から運んで來た菰を敷き詰め、幾萬の人々が逃げ叫ぶ聲を聞きながら、はや本郷三丁目邊まで延燒して來たといふ火の手を危ぶみながら、眠らんとしても眠られず、不安の第一夜は更けてゆく。

夜は白々と明けかけて來た。今日は私たちには、家族を探しに行かなければならない用事があつた。それと午後五時には、復び警視廳へ出頭しなければならない約束を控えてゐた私は先づ、數名の門弟を引きつれ、具足を固めて千住大橋を渡り、それから向島へ向ふべき道順を定めて歩き出した。本鄕臺のみは、未だ比較的安全地帶になつてゐるけれども、山一つ越して、一歩を日暮里の外へ運べば、そこはみな、崩れた家と燒け落ちた家とのみで、滿目を遮るものは煙の外に何物もない。曾て俳句の會に招かれたことのある三河島の某園を偲びつゝ、足は燒野原を東へ〳〵と辿つて行く。

「あッ嚴正だ。警察から逃げて來たんだ。乾分をつれて凄い服裝をしてゐる」

　傍路の人々や行き交ふ人々の立話を聞き流しながら、或る時は、春風に馬の立髮を靡かせて駈け歩いた綾瀬の堤防を急ぎ〳〵、中學のころ、芦の微風に心を靜め、オールの影を小波にうつした隅田の支流に浮揚する哀れな幾多の屍に合掌を手向けながら、私たちは鐘ケ淵紡績の附近まで行つた。言問の方面から、北へ〳〵と急ぎ行く者の中には、或は傷き、或は泥まみれになつてゐる者が多い。一夜川にその身を浸してゐたといふ老婆もあつた。髮の毛を焼け落されてゐる若い婦人もあつた。顏中を繃帶してゐる男もあつた。その人々はたゞ生きむとする願ひの爲めに、行くあてもなく、ひた走りに走つてゐる氣の樣子であつた。その群の中に私たちの家族の者の無事な姿を見出した時、私たちの欣びは何んなであつたらう。そこには矢張り私たちの事件を氣遣うて、自分の家に歸るのをも打ち忘れながら奔走して呉れた三四の友人たちもゐて、私たちの妻子たちを守つて呉れた。聞けば、生れて初めて持つたばかりの私の家は、昨日の夕方焼け落ちてしまつたといふことであつた。思へばそれも笑止である。私は、其の人々や家族の者の元氣な顏を見て一時に幾倍もの勇氣を得、本郷臺の安全を主張して、再び今來た道を引き返すことにした。

　附近の青田には、初秋の風がそよ〳〵と吹き靡いてゐるのは、都の空は、依然として火と煙とに包まれてゐる。本郷へ歸り來る途々で、この災害が終つたら、すぐと朗かな日和が來るもののやうな心の願ひに頼つてゐる者のあるのを私はみた。やがて怖ろしい〳〵試練の日が横はつてゐることを知らないでゐる人々の心を私は憐まずにはゐられなかつた。

　空腹と歩行とに疲れきつて、今にも道端に坐り込まうとする女子供らを鞭ち勵ましながら、漸く本郷臺へ辿り着かうとした時には、飽くことを知らない魔の火は、今にも既う附近をも嘗め盡さんず形勢であつた。追分の電車通りに聳え立つてゐる瓦斯會社の旗が北へ向いたら北へ逃げるのだと警告をしてゐる折しも、前日約束した警視廳出頭の件に就て、わざ〳〵交渉に行つて呉れたH君とK頭取とは、それには及ばずとのことであつた報告をもたらして來たのであつた。日が暮れると共に、三丁目あたりの火の手は、直ぐ眼の前にも迫つて來たやうに近く見え出したので、兎に角、婦女子らを安心せしむるに足るよりよき安全地まで避難すべきの急務を知り前夜と同じやうに、またも印入の提灯と旗とをかざして北へ

〳〵と逃れゆくのであつた。子供の時に活動寫眞で見た、街の滅びるその光景のやうに、荷物を背負つたり、車を挽いたりした人々の群が、あとから〳〵とつゞいて來る。
辿りついたところは岩崎氏の解放地である小石川西丸町の廣馬場であつた。幾千の避難者たちと共に、危い提灯の灯を圍んで、不安の第二夜を送らねばならなかつた。けれども、夜露を凌ぐべき何物もなければ、安らかならぬ夢は、結ばれては解け結ばれては解けして――。

七

三日の日が來た。もとむべき食のために、無事であつたといふ山の手を駈け廻り、或は知己の家を訪れて得て來た少しばかり米を糧に、百名に餘る座員たちの命はつながれてゆくのである。四日目からは、ふみ出した足の傷に痛みを覺えて一歩も動けなくなつてしまつた。けれども私たちは、先輩友人たちが、自分の財の中から割き惠んで吳れる飲品などによつて、命をつないでゆくことが出來た。片腕を病の爲になくした友だけは、その情の賜物を乳母車に一ぱい積んで來て吳れた。數十金を惠んで吳れた同じ燒け出されである老大作家諸君その他の日用品を寄贈して吳れた作家、私たちは、この人の惠みの美しさを涙なしに受けることは出來なかつた。
西と東に分れても、たゞ心はいつも密接してゐる病友のKは大阪府下の文化村から、一番がけに見舞の使者をよこして吳れた。聞くところによると、大阪のある新聞は私の死を報道したとさへいふのである。Kは、使者に向つて云つたさうである。「澤田君は、ある信念によつて生きてゐる男だ。斯かる禍の爲に不慮の死を遂ぐべき筈はない。若し、死んでゐて逢へなかつたら、骨だけを拾づて來て吳れ!」と。また大阪へ殘してゐた母は、祭壇に私の寫眞を飾つて日夜泣いて禮拜してゐたとの知らせであつた。
野營の幾日かの間には、不安の餘震や、雨の日や風の夜がつゞいた。けれども私たちの上にも、苦しいといふ苦しみは襲うて來なかつた。何故だらう。私たちは、あの大震災に遭遇する時に、三日間も、云ふに云はれぬ苦しい思ひをして來た。世にあるまじい、これが日本の國かと疑はれるやうなむごたらしい體驗をなめて來たのであつた。一つはその賜で無くて何であらうぞ。

八

六日目に、私たちはまた、燒けずに殘つた一高前の友の家へ

へ引きかへして行つた。秋の朗かな日がつゞいて帝都の燒跡には早くも復興氣分が漲つて來た。人はバラックを建てて自己の職業にいそしむことに急ぎ出した。地震と同時に横倒しに倒れてしまつたと云ふ私の家の煉瓦塀が、ひどく交通の不便を生ぜしめてゐるといふ報らせを聞いた私は、一日、座員諸君に手傳つてもらつて煉瓦運びをしに行つた。その時、或る人は、こゝにバラックを建て住むやうにと私に勸めた。けれども私は考へなければならなかつた。自分は今、住むべき家のことを考ふる時であらうか。自己のみを安かにすべき時であらうか。不自由ながらも、友の家の小さかな二階の一室に雨風を凌いでゐる。食ふものも腹を空らさない程度には食つてゐる。私には、私のバラックの家を建てる前に、先づ自分の天職に就て考へてみなければならない義務があつた。

また或る人は云つた。斯うして大勢の人を抱へて遊んでゐてはならない。何か商買をなさい――と。しかし私たちは、世のさま〴〵の階級の人々のやうに、この大きな禍に面して俄か造りの職業に甘んじてよいか。否、私たちにはもつと〳〵大きな任務がある。それは何？　私は友H君と僅かな花束を携へで焦土の巷を終日歩きつゞけた。人が面を掩うて去る屍の山に、黄いろい煙に燻ける痛ましい屍の山に跪いていつまでも〳〵禮拜したのであつた。この人々の斷末魔の苦しみを自分の身にひし〳〵と味はつてこの人々がこの世に殘した思ひ事の幾分でも果さうと誓ひ祈つて――。この日々の勤めは私たちのこれからの演劇の生命に如何に大きな、泣くに泣かれぬやうな體驗を與へたであらう。然らば私たちは、この難に際して、先づ初に何を爲すべきであらうか。

世の中の生業の中に、演劇ほど社會生活、人間生存の上に密接なる關係をもつてゐるものはないと私は思つてゐる。さうして私は、この演劇を觀賞するところの人々の豐かな心持に抱かれて今日まで生長して來た。今の私には、安住の前に奉仕がなければならない。私たちは、一日も早く、この荒れに荒れたる帝都に、演劇の樂園を築かねばならないことを知つたのであつた。あらゆる支障を排し、あらゆる困難をくゞり、私の怨みも仇も打ち忘れて、朗かな秋の日に、帝都幾萬の人々に心の安けさを與ふべく働かなければならない、雜務を感じた。この企の爲には、如何なる苦痛、如何なる恥をも忍ばなければならないと思ひ立つた。斯うして、富まざる身も心の富に補はれて、また疲れた體も心の輝に勵まされて、雨の日も濡れそぼちながら、霽れたる日にはその濡れを乾かしながら、霽から街を飛び廻つた。私と同じ心をもつた

人々は、この熱い企の爲に特志を捧げて、或は遠くから馳せ參じて呉れる人も數多かつた。而して、この涙ぐましいほどの努力は、あらゆる人々の諒解を收得して、在帝都各新聞社と後援劇作家協會贊助、國民文藝會主催の名の下に、十月十七、八、九、三日間の野外劇は、晴れやかなる秋の日に、晴れやかなる數萬の人々を迎へて、何の故障もなく、芽出度く震災第一歳の晴れやかなる終りを告げたのであつた。私は今人の世の呪ひも、怨みも、憎しみも悉く打ち忘れて、今度のこの擧に好意をかけて呉れた人たちに心から感謝を表しつゝ輝きある行く手にその一歩を進み入れようとしてゐる。邪は正よりも力強く、一時、將に絶滅せんとしてゐた私たちの世界が、まだ〳〵至極必然であることを知つた私は、これからもなほ、私たちのその正しさを知らしめんが爲に、力ある一歩々を踏みしめなければならない。何處までも邪と闘つてゆかなければならない。

十月廿日（日比谷の野外劇を終りし翌日）

讀者欄

婦人の立場より

砂川まさ子

明治文化の爛熟期を通り越して、所謂大正文化の建設を見る頃から婦人の間に叫ばれてゐた、女子參政權問題、男女同權論云々等は、今回の震災を轉機として、遺憾の無い所の可否論が代償された。

あゝ實演に依つて見る時、私達は果して同權論を口にしていゝかといふ事を疑はざるを得ない。何故ならば、一般第四階級乃至第一階級所の婦人、といふよりも寧ろ押しなべての婦人達が、自分自身のまわりさへきちんと處理出來てゐない事を目撃した。いやしくも、文化生活の、インテリゲンチヤのと口にしてゐる婦人なら何故にもつと自己といふものを凝視しないのか。徹視しないのか。(私はテーブル上の空論は抜きにして實際に就ていふ。あの長い着物をぺたりぺたりと引き摺り、或ひは腰卷をうるささうに足に卷きつけながらぞろぞろと通るさまは餘りにみつとも良いものではなかつた。草履と下駄とを片方づつ穿きながら妙な足どりで逃げて行くさまは餘りみつともよいものではなかつた。

あゝした非常時に際付して何故もつと活動的になれないのだらう。きりゝと尻からげは出來ないのか。パンツを穿いてゐた人は居なかつたのか。何といふ非文化的な生活をしてゐた人々だらう。つゝましやかさをこそ日本婦人の美點とは云へ、何時までも因襲に習ひ傳統主義を保守してゐる非活動的な婦人の口々から、婦人參政權の男女同權論のと叫ばれるのは些か、矛盾してゐるやうな氣がする。もつともつと、白非褻裸にされても(文字通りの意味だけに解されては困る)何等非難の打ち所の無いやうな人間になつてゐてこそ初めて大きな口も開けるといふものだ。

如何に生活様式が異なるとは云へ日本の婦人(農家の婦女子をのぞく)の非活動的なることか。婦人間に運動の勃興したのさへつい最近ではないのか。帝都復興に際して先づ思はねばならぬことは、活動的な婦人を養成せねばならないといふことである。否、私達多くの婦人が活動的にならねばならぬといふ事である。

これは生活様式を全然變へなければならぬ事ではあるが、行く行くは徒らなる西洋かぶれでない所の眞に目ざめた自覺した歐風生活が取り入れられて來るのは必然的だと思ふ。さすれば、服裝その他の點から云つて嫌でも婦人までが活動的になつて行く筈である。此處に帝都復興に對する婦人の立場の第一歩があるのだと思ふ。

私達は今後低徊趣味を捨てねばならない。無意味に過去に拘泥してゐる時は、何等新らしいものを取り入れる事は不可能である。九月一日を記念するのもいゝ。それは忘れやう

としても忘れられないのは誰しも同じだから

　けれど徒らにその邊を低徊して現實より理想へと突破出來ないやうな婦人は向後無用となるであらう。何故ならば、帝都復興に關しさうした低徊趣味の婦人（男子をも含む）は何等あづかる力の無いものだからである。

　この意味から云つて私は小供の雜誌編輯者に一言呈上し度い。震災哀話もいゝ、震災實記もいゝ。けれど何時までもそんな事を載せて子供の頭を縛りつけて置く事を止めてもらひ度いのである。九月一日二日三日四日五日、その位でもずゐぶん子供の頭には打撃であつた。それなのに、その恐ろしかつた當時を忘れさせやうとはせず、返つて思ひ起させるやうな方法を取る事には贊成出來ない。實例をあげるならば、私の知人の六歳の女兒は地震と火災とに驚いて顏面の神經がひきつれて、ひどく口が歪んでしまつた。御飯を食べてもこぼれた位。それも川舍の靜かさによつて次第に癒えて今では殆んど正しくなつたけれど、僅か六歳位でさへ然うである。それ以上の子供達の頭への影響は想像するのさへ可哀さうに思ふ。また、田舍へ避難してゐた子供達は、僅かな餘震にも眼の色を變へて屋外へ飛び出した。所が震災に遭遇しなかつた子供達は平氣である。この二つの例のやうに鋭くなつてゐる子供の神經をチクチクと何時までも刺戟してゐる事は良くない事であらうと思ふ。この際極めて美しい物語りをでも讀ませて子供達の心に春をよみがへらせるのが子供雜誌編輯者の勉めではあるまいか。こんな事も男子方には忘られてゐる事實なので記して見た次第である。

　要するに、今度の帝都復興に關しての婦人の任務ともいふべきは男子のそれ以上に多い。であるから吾々婦人は、これを機として出來得る限り日本の家庭に叶つた改良をほどこし愼重に復興へと盡力してゆくべきである。

兩性勞働の時

さだ子

◇女は弱かりき

　混亂慘憺の巷を逃げ迷つた私自身の有樣は如何に恥かしい追憶を持つてゐるでせう。そこにみた帝都女性の弱さは私に如何なに深く考へさせたことの多い事でせう。從順と淑さとに心を包んで、指の細々しさを誇り、弱々しさを以て、唯一の同情を得る武器としたわたし達女性は、自然の暴威には一も二もなく、氣を顚倒し、心を錯亂し、その取亂し方は、言葉のかぎりでした。わたしたち女性は、「歩く」ことさへ不自由であるふがひなさであつたとは、成人の罵言のみではなかつたのです。禍難にあたりまして、わたし共は自分一人すら逃げることが出來ず、多くの任務を持つ男性の行動を如何に多く妨げたことでせう。長い胡蝶の樣な袖に長い裾、脆い帶がどんなにか活動を妨げたでせう。

　それはまだとして、この大慘害の救護に女性の與つた力は果して如何程でしたでせう。食糧配給に死體運搬に、警戒に復舊に、警察

に通信に、一切の活動がみな男性の手に委ねられて、女性は只傍觀したのみでなかつたでせうか。一二婦人團體の活動はあつたといへ、お互に聯絡もなし其微弱さはお話になりません。これは何んに原因してゐるでせう。婦人の肉體があまりに弱々しかつたからです。精神が沈滯してゐたからです。救護や復舊事務が、女に適しないもののみと、誰れが信ぜられませう。近い例を引いても、衣服の即給に婦人は一齊に針をとつたでせうか。健康な婦人は、罹災者の救護に繃帶をまいたでせうか。二三の看護婦や團體の他に、かやうな女にとつて容易な仕事すら顧みられなかつたのです。

私はかういふ状態をみて、結局女は精神的にも肉體的にも、あまりに弱すぎたことを痛切にかんじました。

◇ 精神の復興にも

肉體的に微弱なことは前の通りですが、精神的にも微弱です。女は涙に脆く悽惨な事には男子以上に同情の涙を流しました。けれども、かゝる際に手をつかねて感傷の快感に耽つてゐるのは、何の效果もありません。私たちは、惨害に荒んだ男性の心を慰し勵まし、自分から愚痴を言つて、一層家庭を陰慘にすることのない樣に努力すべきです。子供たちには尚更この注意が大切でせう。帝都復興の精神的方面はわたしたち婦人が主として當るだけの決心を持ちたいものです。

◇ 兩性勞働の時

この度の樣な大震大火に迫られ、其損害幾十百億といはれるとき、私は切に兩性勞働を呼びたいのです。勞働は虚榮を去り、永く白粉とダイヤと帝劇に麻痺した婦人の心を引しめ、他方には強い身體を作ります。勿論經濟的の見地から勞働の必要は申す迄もありませんが、いざといふ時は勞働の他はありません。勞働しないものは、かういふ變災には劣敗の他はありません。市中で女浪花節家の御子榮さんが働いてゐられるのをみて、私は切に感じました。平常の見榮をも忘れて、汁粉賣りをしてをられた某夫人をみても感じました。この時、この國難の時、「女も働けるもの」といふことを天下に示したいことを皆樣にお願ひ申します。

私は本月一家の都合で田舍へかへりました。田舍の婦人は白粉もつけず、メリンスの帶に紡績の袷で、一日働いて居ります。そして私は先日一里ばかり離れた農村に參りまして、その村の娘さんたちから、お母さん迄、日に燒けた丈夫さうな顔をして、木綿のツギハギのものを着、一生懸命に稻刈りをしてゐるのをみて、都會の女性があまりに安逸すぎたのと、粉飾に沒頭したことを今更沁々感じました。私は燒け出された一人ですが、勿論一生けんめいにこれから働くつもりです。皆さまもどうぞ勞働して下さい。

愛讀者の諸姉に

讀者欄を復興したいと思ひます。今までも澤山の投稿がありましたが編輯者が拾ひあげたいと思ふものが餘りに少くて遺憾でした。よい原稿が集りさへすればどれだけでもこの頁を解放したいのですから、種類と形式に捕はれずに自信のあるものでしたら何でもお送り下さい。掲載のものには薄謝を差上げます。讀者欄とおことわり下さい。(編輯室より)

生活改善の新提唱

誰にも出來る 衣服の改善と諸種の實例

佐賀ふさ

明治大正を通ずる五十有餘年の文化の進度は世界の人々の驚異に價するものでありました。孜々として築きあげた大東京も大自然の一微動なる九月一日の大震とそれにつゞく火災とによつて槿華一朝の夢と化して仕舞ひました。自然は奢れる私どもに懲らしめの鐵鎚を下したのでせうか、又より善き文化を建設する爲めにかく迄多くの犧牲を要したのでせうか、何れにしても幸ひ生き殘つた私どもは、之等生ながらにして埋られた過去の生靈の爲めに或は次代の國民の爲めによき文明の基礎を形づくる事に全勢力を打ち込まなければならない時であると思ひます。

五十有餘年の歳月は私どもの腦に樣々の理想の塔を建築せしめました。併し長き因習より脫し得なかつた私どもは敢てそれを地上にうち建てる丈けの勇氣を持ちませんでした。日常の生活と理想とは餘りにかけ離れたものでした。政治上教育上の問題はさておき衣食住のそれに於てさへ、識者の間に稱へられる理想案は机上に空しく埋づもれて、生活の實情は矛盾と撞着に滿ちて居たのでした、殊に遲れて居たのは衣服の問題、更に婦人の服裝問題であります。

徳川三百年の文化は婦人を奥樣、お內儀として家の奥深く閉ぢ込めました、其遊民としての生活に適合するやう精練さ

れた服装殊に文化、文政の消極的政策によつて完成された徳川末期の風習を祖先傳來の遺風として明治大正の急速なる文化進歩の中にあつてすら頑として守り通して來ましたのが今日の私どもの服装なのです。此長袖や廣帶の爲めに此度の震災に私ども同胞幾萬人は助かる可き命を失つたのでありま す。三萬人が一度に燒死したと云ふ被服廠跡の慘事も、持ち出した衣服が火の媒をした事によると云ふではありませんか、又死者の中男子よりも婦人の方が遙に多かつたと云ふ事も其原因の多くが活動に不便な服装に禍されたものだと云つてもよいと思ひます。

識者の指示する簡素な生活、身輕な服装を今一日早く斷行した居たならば此度の後悔も少なかつたらうと思ひます。

一朝にして廢墟と化した此衢を復興すべき大任を双肩に荷つた私共婦人も、今こそ長袖廣帶の要なき飾を一擧に取りすて身輕な自由な服装に脱ぎ換へる時が來たのであります。私共の天地は更に廣くなりました。目の前に爲すべき仕事が山と積れてあります。それらに手を下す前に、しつかりとした足どりで歩み出す爲めに、甲斐々々しい服装に取かへたいと思ひます

三越は三億圓、白木は一億三千萬圓、松坂屋は一億圓の在庫品を全燒したと云ひます。罹災者の大多數は身を持つて逃れた人達許りであります。之等の人々は先づ餓を凌いで次に來る可き問題は寒さを凌ぐの問題となつて來ました。此際私どもが一致して従來の衣服の半分の用布で出來る衣服を着、其數も必要以外に出でぬ事に制限するならば、此冬は燒け殘りの反物で充分間に合ふ事だらうと思ひます。引いては國家將來の經濟界を救ふ一助となる事と信じます。又裁縫と洗濯と衣服の仕末に許り追はれ通して來た中流婦人も、家産復興の爲めには出て職に就き家にある人も內職に依つて生産的な仕事に携はる可く餘儀なくされて來たのですから之等裁縫仕立換、洗濯等の爲めの手數と時とを出來得る限り節減し作業能率を舉げ得る簡易な服装に脱ぎ換へる事は目下の急務であります。

それでは私どもが今採る可き新衣は、支那服か朝鮮服か南洋服か、日本服の中にも古代服、地方的特殊な服装多く人々の創案に成る種々の改良服など色々ですが、生活改善同盟會では此際婦人の服装を東北地方の特殊服モンを用ひるか、又は裾短かい洋装にと主張して居られるやうです。成る程今日のやうな大變事の服装としてはモンペは大變よい思ひ附きであると思ひます。併しあの災害の最中こそ粉黛を施し美衣を

省る所ではなく、全く生きんが爲めにのみ赤裸々な生活に最も簡素な原始的に返つて居りましたが、十日たち、二十日經つ間には堀の水を使つても白粉をとき、配給の衣服の中から撰り好みをするやうになつて來たではありませんか。かうなるとモンペ等は誰も省みるものゝなくなるのは人情止むを得ぬ事です。又美を愛する婦人の心情です、何と云つても便利と衛生と經濟にのみ立脚した服裝は非常時の應急にはなつても、永久性を帶びないものと云はなければなりません。從來考案された改良服が實行されないのも其同じ原因にあると思ひます。それですから衣服の三大要素は是非美的要素を加へねばなりませんが、この意味で凡ての點に長年考慮され精練されて來たものは矢張洋服であらうと思ひます。殊に近代の洋服は東洋的趣味が多く加はつて來た事と、形の變化に極りない事と、各人の體格に合して自由に改造し得る自由さを持つて居ります事とは、背の低い足の短かい私どもにもぴつたりと和した形を撰む事が出來るのです。現に婦人服研究の目的で巴里に行つてをられる或夫人の通信中にも日本の外官の奥様方が召て居られる洋裝が巴里婦人の中に在つて少しも見劣りのしないのは不思議な位である。之は全く其形の撰み方によるのであらうと云つて居られますが、私もそれに同感であります。

又我國の氣候風土さては固有の建築などにも調和したものを撰み出す事は左のみむづかしい事ではないと思ひます。併しながら洋裝となりますと米國風だとか英國風だとか佛國風だとか規定の風習に拘はり單なる模倣に陥り易いのでありますが、さうなりますと却つて不自由な不便なものになります。私どもの希やうとするのは洋裝の善い部分を土臺にしてそこに自由に工夫考案し、或は日本の氣候風土、復興せんとする大東京又は日本國民に相應しいものを撰定し最善の日本國民文化を創始するのでなければなりません。

形の選擇　さて洋服を撰擇します上に私ども實生活の便利から特に注意しなければならぬ條件を申して見ますと

一スカートの巾及び長さを適度にする事

巾は二尺巾二布前後が最も便利です。餘りに狹いものは疾走や階段の昇降に不便であると同時に、襞多く巾の廣いものにも弊があります。今度の震災にも女學生の袴は足に絡まつて困つた經驗を持つ人が多いのです。長さは脛の半位或はそれより稍長い位がよいと思ひます。

一着用の便利なるもの

和服を着馴て居ります私共には前を廣く明けて樂に手の通る

るやうなものでなければ急な場合に困る事が多いと思ひます。

一　身巾の寛かなるもの

住宅の不完全な我國ではどうしても衣服で温みを保つ必要がありますから割合に多く重ね着をする必要があります。其便利の爲めにも亦不恰好な體格を補ふ爲めにも寛かなものゝ方が都合がよいのであります。

一　裁縫の簡單なもの

洋服の仕立價は中々高價なものですから、實用服としては家庭で製作し得るものでなければならないのです。それには着物スタイルが最も便利でありませう（之に着物スタイルは、日本服を洋服化したものでありますから）

一　保存の爲め手數と場所の要らぬもの

型の複雜なものは一枚一枚其まゝ洋服掛に釣るし洋服簞笥に仕舞はなければなりませんから場所も取りますし、又度毎、襞や飾の手入に手間取りますから飾の少い形の單純な着物、スタイル等にしますと其まゝ疊んで仕末が出來ますから僅の容器ですみます。

一　洗濯の容易きもの

襞や飾の多いものは洗濯が面倒ですから布地の取り合せ等で淡白りと意匠した清楚なもので、形も疊み附けて引きのしの出來る着物スタイルならば世話なしであります。殊に毎日のやうに洗濯の必要ある夏服は之に限ると思ひます。

勞働服　家庭婦人にあつては臺所の働き着、職業婦人は事務服と云ふ風に其勞働の種類や輕重により必ずしも一定する事は出來ませんが、先づ普通の働き着としては、上着は單衣の仕立にして夏冬通して用ゐ下着で重に調節したいと思ひます。

上着は形の選擇に附いて申ました凡ての條件を考慮して見て、着物スタイルが一番都合よく出來て居ると思ひます。

布地は洋服地と云へば、必ず舶來の廣巾物でなければと考へますが和製のものだつて、又和服地だつて、並巾だつて少しも差支へはないのであります、私等のやうな貧乏人は新しい洋服地を求めて居るわけにはいきませんから、和服地を轉用したり、古物を工夫したりして作つて居ります。こゝでは主に新しいものに就てよりは廢物利用を申して見度いのであります

尚もう一つ多くの人々が思ひ誤つて居る事は洋服裁縫と云へばミシンでと考へるやうですが、洋服でも上等物は凡て手縫でするのでありますから、手縫の練習のよく出來ていらつしやる皆々樣が無理にミシンをお使ひにならなくともどん〳〵縫でやつて裁き度いことであります。只氣を附けなければな

手らぬ事は、和服は毎年仕立換をしますが、洋服は一度縫つたら永久的なものですから恰度和服のネルやセルの縫方と同じやうに丁寧にする事であります。

私は此夏を手拭浴衣地一反で二枚の着物スタイルのドレッスを作り着通して見ましたが涼しくて樂々と働けました。それに洗濯の樂な事は大助りでした。極く簡單な形ですけれど布の取り合せ方で中々氣のきいたものになりました。其他白縮や白絣の古浴衣も一枚ぶんで立派な洋服一枚に直す事が出來ます。



（手拭浴衣の仕事着）

冬も木綿物でよいのですけれど、仙台袴の古いのがありましたから黒無地に染めて鼠色のフランス刺繍の糸で極く簡單な手繍を入れてドレッにしました所見違へる程美しく出來上りました。

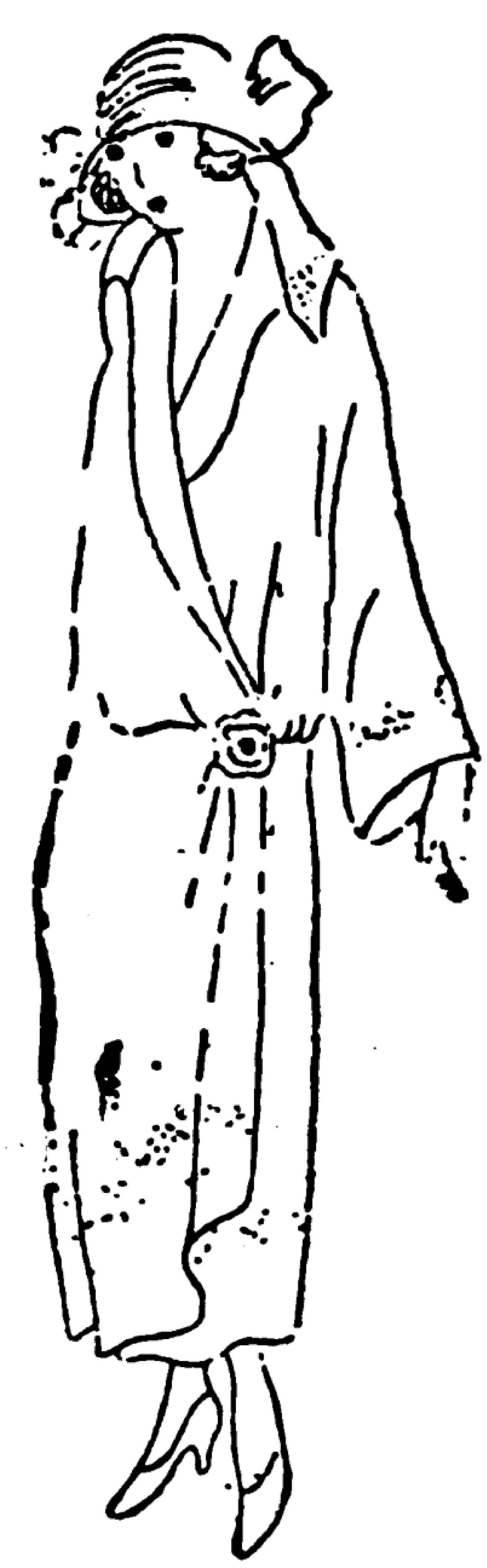


（古袴利用の冬服）

お寒い時には此らから毛絲編ショールの不用品でスエターを作つて、羽織りますと暖かで中々ハイカラな格恰になります。

其他金紗や羽二重ショールならば、よいブラウズが出來ますしメリンスや銘仙の着物も取り合せをよくすれば立派なドレッスになります。

コートは黒無地の木綿厚地のセルの和服コートがありましたから之に手繍をして作り換ましたら中々面白いものが出來ました。



（和服のコートを洋服のコートに）

ます。

下着　夏はヅロースとペテコートを有合せの白綿で作りました。ヅロースは恰度腰卷程ペテコートは丈の二倍あれば足ります。

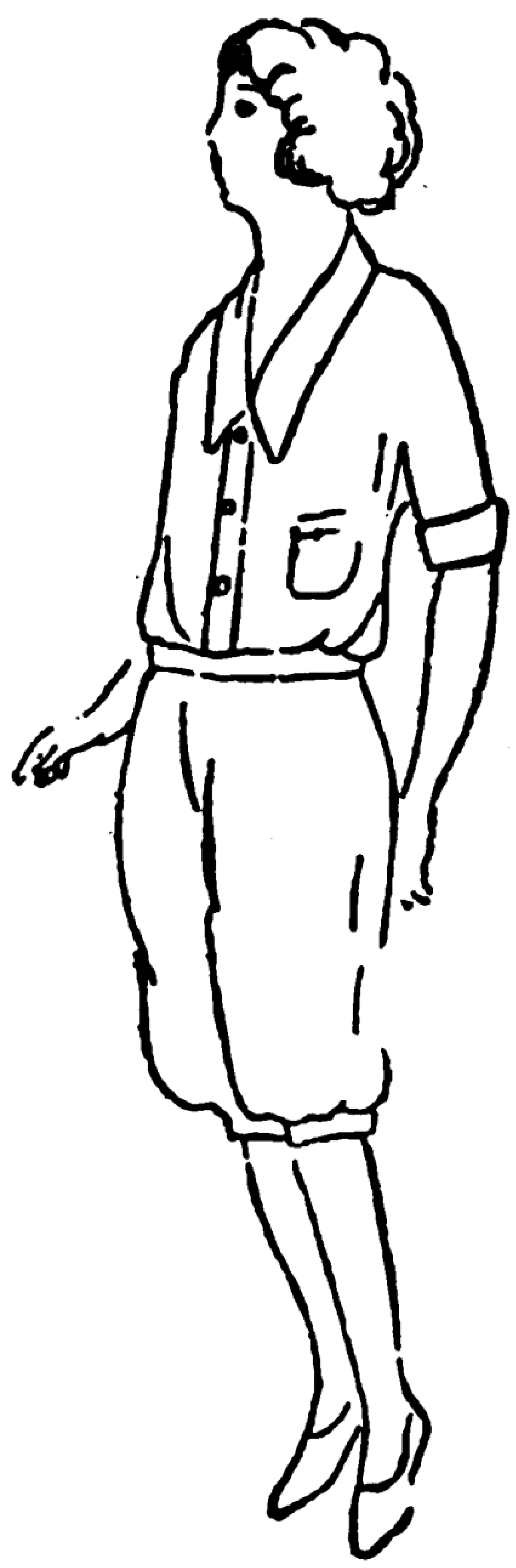
冬はメリヤスかネルのカンビネーション（ネルの長襦袢で出來ます）にペテコートは都腰卷に肩紐を附けて利用しますと暖かくて氣持のよいものが出來ます。

下着を撰ぶ時に注意しなければならぬのは、便所の設備が日本風のそれと洋風のとは餘程異つて居りますから、自然股の開き具合に特殊な工夫が必要なので、さもなければ不體裁な私どもは可成不便な思ひをさせらるのであります。

帽子と靴　帽子は麥藁のが一つあれば春から夏を通して秋までそれで間に合ひますし冬はそれの上から繻子でも羽二重のマフラの廢物でも手ぎわよくかぶせますと美しい冬帽子になります。

靴は有合せがなければ新調するより仕方ありませんが一足では下駄より高價ですけれど、下駄の五足ぶり位は大丈夫保ちます。靴下も一足八六十錢の黒メリヤスのは一足袋より汚れも目立ちません、洗濯も樂であります。

特種な勞働服　非常の場合とか過激な勞働をする時には、スカートの代りにニッカースを穿きますとどんな活動でも甲斐々々しく自由自在に出來ます。此ニッカースも古袴一着で充分間に合ひます。モンペ姿よりは此方が遙に氣がきいてゐます。



（勞働服）



社交服　此際の事ですから別に社交服とか禮服とかの必要はないと思ひます。宮内省でさへ凡ての正服は省略しフロックコートとか羽織袴の略裝をさし許さるゝ事になつたさうですから平常服の汚れないもので間に合しておけば充分だと思ひます。若し新調するとしても和服を轉用すれば隨分異つた面白いものが出來ます。私は夏の唯一の外出着として縞絹縮の單衣でドレスを一枚作りましたら未だ殘りでブラウズが一枚取れました。縞の色と同色の巾廣のリボンを一本飾に使つた丈ですつきりとした配合に出來上りました。

冬のは紺縮緬の羽織を利用し、黑レースを取り合して作りました。絣模樣等は其模樣を上手に活して使ひますと、非常に張つたドレッスになります。寶石を鏤めた高貴な夜會服にも大して遜色を見ないやうであります。



（縞銘仙のドレッス）

下着　ペテコートやシユミー、ブルーマ等も長襦袢や、襦袢の袖を利用すれば上等のものが出來ます。

休養服　仕事服や、社交服の古物で充分間に合ひますけれど和服を利用して作るならば冬の寢衣にはネルの單一枚で二枚作れます。一枚が二枚になつたのですから洗濯が樂になります、部屋着として羽織るには友禪の長襦袢や、羽織の裏などに綿をふつくら入れ支那の冬服のやうに縱横に刺しておきまと丈夫であります。

裁縫について　着る事を斷行して裁くと同時にぜひ家庭製作の練習を初めて裁き度いものであります。一枚に洋服裁縫と云へば、大層六つかしいもの丶やうに考へられて居りますがそれは男子服とか、婦人のものでもコートのやうな身體にぴ

つたりと合はさなければならぬものは特殊な技巧と練習とが必要ですが、素人には一寸面倒かも知れませんが、ドレッスやブラウズやスカートや下着類等は一寸習へば誰にでも樂作なく直に出來るもので、和服裁縫のやうに一定の形のものを同じやうに縫ひ上げる單なる仕事と違ひ、畫家が一管の筆と一箱の繪具とで立派な美人畫を畫くのと同じやうに一本の針と鋏によつて作り上げる立派な藝術品として面白味があります。

衣服の類　一反で二枚出來る洋服でも巴里や紐育の月々に變遷して行く流行を追つて行かなければならぬやうな窮屈なものでは改善所が改惡になつて仕舞ひます。私共には私共丈の必要を充たして行くほんとうの着方をしますれば、洋服位嵩張らないで、持ち運びに便利で經濟的なものはほかにはありません。一家の收入中平均十%を要すると云ふ被服費も必ず半減する事が出來ると信じます。且つ又今回のやうな一大變事に際しても、山なす荷物に不慮の災害を招く等の心配は毛もなくなるわけであります。

大震火災で最も深い印象を受けたこと

○　**長谷川時雨**

黒煙りが追ひかける空の下を、血にまみれ、土にまみれた人人が、流れるやうに丘に青いものの見える生麥、鶴見へと、焔と炎熱に燒けた線路の砂利を踏んで、流れるやうに來かかつたのを見た時、不思議に一切を諦めた氣持の中に、よくも生きてきてくれたといふ感謝の涙が湧き出して止りませんでした。苦しい／＼中を生きた力、何物にもかへ難い尊いものだと、胸の中がグイ／＼言つて聲をあげて泣きたいやうでした。

○　**中原綾子**

人間の生きんとする力こそ大なれやとて涙流る。

○　**土岐善麿**

都會の浮華な「文化生活」の行詰つた一進展でせう。私自身老幼十餘人の二家族を擁して避難の不安をくゞりぬけましたが、到る處で人間のミュチュアル・エイドの親しさを感じました。肉身の强い結合といふことも深い印象の一つです。

食物の献立は科學的に考案したい

手塚かね子

凡ての生活問題が實質的に傾いて來たと云ふ事は社會改造の基礎であつて誠に喜ばしい現象であります。併し實質的と云ふことは虚を去つて實を得る意味であつて、無智な節約生活ではないのであります。即ち、眞の文化を建設すべき大なる意味を悟るべき時機が襲來したのであります。

此度の天災によつて死地よりまぬかれた多くの人々は、平等に地上になげ出され、天然に歸つた人の心は衣服も、住居も、其中半は分配し、又は貸與せずには居られない様になりました。食物に至つては、更に平等を思はせられました。當時一般の人々は玄米と梅干と澤庵、干物と云ふものより外に得ることは出來なかつたのでありまして、最初は玄米飯と泥水の全く自然食でありました。

この自然より與へられた献立は可なり立派な科學的の配合であつて、玄米の成分に就て科學的に考究し、玄米及び半搗米を以て主食として居つた人々は何等の煩ひもなく生活が出來たことゝ思ひます。併しながら、一般の人々は玄米の不消化であることゝ、食し慣れないが爲めに、白米の供給を待ち焦れて「何もなくともよいから白い御飯が欲しい」と云ふ聲に満たされたのであります。昨今白米の供給と共に其他の副食品も漸く市場に持ち出されて、完全なる食物の献立をすることが出來るやうになりましたから、科學的の立場から考察して、榮養の目的に適する樣に述べて見ようと思ひます。

温量と主食に就て

先づ中流勞働者、例へば會社員、醫師、敎員、學生、などの、精神及び筋肉を使用する人々は、其勞働の分量及び體量にもよりますが、邦人の平均必要温量は、一千八百温量より二千二三百温量と云ふことになつて居ります。

家庭にある婦人は家政の仕事と子女の養育等にて或は激勞に近い人もありますが、先づ中流の婦人としては中等勞働者

と見なしてもさしつかひないと思ひますし、又さうあつて欲しいと思ひます。

そこでこれ等の温量に要する食物の中で、主食品としての白米は、一人、一日の分量が三合乃至四合であります。一合の白米を食して得らるゝ温量は三百カロリー位でありますから、三合を食する人は九百カロリーを生じ、四合の人は一千二百カロリーを生ずる理由であります。地方の某女學校寄宿舍の平均白米は四合二勺より三勺であると云ふことでありますから、男子の學生などは裕に四合以上を攝取することゝ思ひます。兎も角其割合で計算すれば良いのであります。

麵麭は一斤で一千温量を生ずる割合になつて居ります。副食品と調味料より生ずる温量主食品より生ずる温量に加へて副食品及調味料より得らるゝ温量を計算せねばなりませぬが調味料より生ずるものは誠に僅少のものでありますから、重に副食品のものを以てこれにあてねばなりませぬ。

吾々の日常用ゆる副食物の中で重なるものの温量を擧げて見ますれば左の樣なことになります。

百温量を生ずる重要副食品の分量

豆腐	凡三分の二丁強
油揚	凡拾七匁強、(揚げ二枚弱)
納豆	凡拾五匁強、(一つとの三分の二)
鷄卵	凡拾八匁、(大卵一個)
白身の魚	凡貳拾五匁――卅匁
淡赤色の魚	凡貳拾匁――廿五匁
豚肉平均	凡拾參匁弱
牛肉平均	凡拾八匁弱
里芋	凡五拾匁強
馬鈴薯	凡參拾匁強
甘藷	凡貳拾匁強
味噌	凡拾七匁強(味噌汁、椀に凡三杯)
砂糖	凡七匁強

此外に分量少くして多量の温量を生ずるものは煮豆類であります。

此の如く温量を土臺として献立を作るのでありますが、温量の點のみに偏するときは、保健に必要な各榮養素の不足を來すことがありますから注意しなければなりませぬ。

献立をするには各種の食品を配合すること

同じ種類の食品を毎日繼續すると云ふことは、温量の上か

ら相當のものであつても、各食品に含有して居る榮養素が蛋白、脂肪、含水炭素、鑛物質の何れかに偏して居るものでありまして、一種の食物からこれ等のものを全部攝取すると云ふことは不可能でありますから、主食品（白米、麵麭）を主としてこれ等の含水炭素に配合するに、（蛋白質に富む爲め）豆類及豆類製造品、又は肉類、鷄卵等を加へて献立をする樣になし、其他各種の野菜物を配合して更に各種のヴイタミンをも攝取して消化吸收する樣にせなければなりませぬ。

ヴイタミンにしましても穀類はB（抗脚氣病のヴイタミン）最も多く、A（發育のヴイタミンと云ふ）これに次ぎ、C（抗壞血病）は恰ど缺除して居ります。

豆類は重にBヴイタミンを有して居ります。獸肉類は重にA、Bのヴイタミンを有し、Cを含むものでありますが、未だ全般にわたつて研究が進められて居らないのであります。

（但し牛肉はCを含有して居ることが明かであります。）

魚類は大體獸肉類と同樣でありますが、Cヴイタミンを含有して居るものゝあるか否やは判明して居りませぬ。

野菜類は一般に各種のヴイタミンを含んで居るものでありまして、甘藍、ほうれん草、ちさ、玉葱等はA、Bのほか多量のCヴイタミンを含有して居ります。

次に果實類は最もCヴイタミンに富み、Bは之れに次ぎ、Aは赤茄に及びバナヽ位に含まれて居るに過ぎませぬ。

鷄卵及牛乳は各種のヴイタミンを含んで居ますから、結構な食品であります。

又脂肪類の中で動物性のものは、Aヴイタミンを多量に含有し、B、Cは殆ど缺除せられて居ります。植物性の油脂類は各種のヴイタミンを殆ど含有して居らないのであります。

之等の食品をいろ〳〵取り混ぜて献立をする理由になつて居るのであります。

更に又心理上からも同じ種類のものばかり配合するときは所謂あきが來て此方面から食欲の不進を來す樣になりますことは誰しも經驗することであつて、決して我儘と云ふ樣な問題ではなく誠に自然の要求から起ることでありますから、家政の責任を持つて居る處の婦人は此點に充分の考察がなくてはならない事と思ひます。

献立の變化は調理を生かしめます

各種の食品を配合すると同時に、更に大切な問題は献立の變化法であらふと思ひます。

調理の巧妙な人でも同じ献立の食物を長くつゞけますと、

單調に飽いて心理的に食欲を減ずる樣になります。食欲の減退は消化吸收を鈍らし、同時に身體が衰弱することになります。則ち榮養上には適當に配合せられた献立でも同じ方法のものばかり供給するときは、精神上に不快の感を起し、從つて氣力を失ふものであります。

　或獨逸の有名な學者の說でありますが榮養學上より見たる理想的の食物調理は、各種の食品を一緒に煮たゴタ汁であると云ふことであります。要するに西洋料理のスチウ、日本料理で云へば、さつま汁、けんちん汁、のつぺい汁の樣な種類のものであります。これらは調理法から云つても簡單であり各種の榮養成分も充分に煮出される方法でありますから、勿論必要な調理であつて殊に最近の生活上、家庭料理として大切な一つでありますが、これとても毎日長く繼續するといふことは、心理上大に考へて、變化せしめなければ前述の樣な理由によつて、折角の價値を失ふ事になります。

　最近の震災の時、常に結び飯の好きな人が、大喜びで毎日食して居つた處が、三四日經過すると食欲が不進になつて、好物の握り飯が餘り好ましくなくなつたので、子供の時分の山遊びの時の結び飯や、鮎つりの折の握り飯のことを想像して食べたところが、味覺が新鮮になつて大層おいしく食べられたので、よろこんでゐると、だん／＼感情の新鮮みが失はれると共に味がなくなつて、一口も咽喉を通らなくなり、結局食べられなくなつて何とも云へぬ淋しい心持になつた、と云ふことを聞いて、恰度献立の變化と云ふことに一つの例を得たことゝなりました。

　又それと同時に、單純なもの數種を一定期間内に、例へば一週間の献立を作つて毎週繰り返すと云ふことは、同一の結果を來すことになります。

　又一面から食物の智識が明瞭になればなるほど、單調なる献立の精神に及ぼす影響が強くなりますことは事實であります。

　要するに單調は永續性を有して居ないものであります。それ故適當に變化ある献立を作つてゆく必要が起るので御ざいます。

榮養上より見た調理法

　震災後バラツク式の家に住居する人は勿論のことでありますが、幸ひにして燒失の災を免れた處の人々も、出來るだけ簡素な生活を尊ぶ樣になつたことは結構なことでありますが簡易と云ふ方面から、食物なども煮かへしの物などを毎日使用すると云ふことは誠に懸念に堪へないことであります。こ

れは榮養素たるヴイタミンの活力素の効能を消失する憂がありますから、時折之を用ふることは差つかひありませぬが日常に使用することは大に考へねばならないことであります。
榮養上から見て、蛋白質、脂肪質、含水炭素、鑛物成分等は加熱によつて大した變化を及ぼさないのでありますが、ヴイタミンは、加熱すればするほど効果を失ひ、折角新鮮な品を買入れても、調理上の注意によつて榮養の價値を少くすることになります。それ故なるべく新鮮な食品は一度煮たものを即時に食するか、又は煮返しをせないでも濟むものは次の時間に其まゝ食する樣にいたしたいものであります。
尙他に罐詰物もヴイタミンの効果を失つて居りますものでありますから、便利な簡易食物ではありますが、之等を用ふるには、他に新鮮な食物を配合することを忘れない樣にすることが肝要であります。例へば朝食に罐詰物を食したならば夕食には新しい品を食する樣に又少し位手をかけても差つかひのない家庭なれば、罐詰の牛肉に煮た馬鈴薯を添へるとか鮭や其他の魚の罐詰なれば、菜のおひたしを添へるか、大根の煮たのやおろしを添へるとかする事が必要であります。

子供に就ての榮養

子供の榮養問題については昨今大に注意せらるゝ樣になつて參りましたが、天災後の今日では更に家庭の主婦が注意を拂はねばならないことゝ思ひます。子供の成長發育は食物の如何によつて定るものであると云つても良いのであります。
子供の食物は大人の食物と全然異つたものであり、且つ其調理法も自然のまゝに放置することは、誠に恐るべき結果を招くことになるものであります。
離乳後四歲位までの子供には、お粥、おじや、次に軟かい御飯、と云ふ樣なものを主食とし、魚類なれば煮た小魚が最も消化しやすいものとせられてありますが、小魚類には小骨があり、從つて危險でございますから、充分に注意の出來る家庭では安全でありますが、先づ白身の魚なれば消化が良いのですから、之等を用ふる方がよろしうございます。野菜類は、馬鈴薯をよく煮てつぶしたものが一番消化がよいのです。三四歲の子供なれば小蕪の軟かに煮たものや、豆腐、林檎に砂糖を加へて軟かく煮たものなど大によろしうございます。此時代の子供は最も危險でありますから、纖維の多いもの及び小豆の煮えたものなどは禁物であります。
五歲から七歲迄の子供には、餘り纖維の多くないものであれば大抵の野菜は軟かに煮たものはよろしいのであります。魚類は淡赤色のものも與へて差つかひありませぬ。鷄肉、牛

肉などは出來る丈よくたゝいて、擂鉢で摺つて煮たものがよろしいのです。玄米は此時代の子供には消化する力がありませぬ故、止むを得ぬ時はとろとろに煮たお粥にして與ふるより仕方がありませぬ。

おやつに就ては、これも注意が肝心であります。三四歳迄は餡入りの菓子は禁物です。葛湯、葛ねり、ウエフワース、輕いせんべい類、品質の良いビスケツト、カステーラ、牛乳で作つたコンフラワープツデング、カスタード、などは最も適當のものであります。この外最も簡單で理想的のおやつは馬鈴薯を燒くか、或は茹て用ふることであります。

五歳からは餡入りのものも餘り多からぬ程度にて與へて差つかひありませぬ。豆板、蜜豆、團子、餘り濃厚な西洋菓子は禁物です。例へばクリスマス・プデングや、ウヰデングケークなどは禁物です。

其他強い香料の入つたものや、珈琲などは刺戟成分が強いものでありますから與へない方がよろしうございます。

要するに食物の獻立は温量を參考として、各榮養素を適當に配供し、出來得る丈簡素な方法により巧妙なる調理法により榮養素本來の價値を全からしめ、眞に實生活の目的に適する樣科學的に考察するとは目下の急務であらうと思ひます。

我家の一人一ヶ月食費拾圓の簡易獻立實例

	日曜	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜	土曜
朝	玄米の粥 牛乳、砂糖、漬物	御飯 みそ汁（せん大根 里いも） 茄子鹽漬	御飯 みそ汁（豆腐 さき葱） 大根糠漬	御飯 すいとん汁 梅干	御飯 葉つき小蕪のみそ汁 漬物	御飯 みそ汁（じやがいも、いんげん） 澤庵	松茸飯 小まつ、玉子とじ） 福神漬
晝	雜炊 さつまいも丸燒	豆腐薄くず汁 すり生姜 福神漬	風呂吹大根 ごまだれ	しるこ キャベージ 落花生酢和	黒豆野州煮	燒豆腐 藥味（ねぎ かつを）	雪の花 あま煮
夕	ライスカレー（人牛肉、馬鈴薯、玉葱）福神漬らっきやう、紅生姜、果物、柿	乾鮎煮びたし ずいき芋三杯酢	茶めし さつま汁（牛肉、人參、大根、ねぎ、じやがいも）	カツレツ じやがいも唐あげ、ウレターソース	生鮭自然やき おろし	うどん、みそ仕立 調味（さらし葱、柚子、すりごま、からし）	かきあげ（さつまいも、牛蒡、みようが、乾むき海老、合せ醤油おろし） 果物（珈琲）

婦人の三大敵

木村恒

一

この一文を帝都復興に意氣組んでゐる婦人達に捧げる。但し上流婦人は私の考慮のうちにない。

二

日本の家庭には、婦人にとつて恐ろしい敵が三つゐるが、あなた方は知つてゐますか。この三大敵のために、日本の婦人はいろ／＼の事を世間の所謂識者から云はれるばかりでなく、實際また毎日どの位惱まされてゐるか知れないのである。そしてどの人も其生涯の大半をこの敵との戰ひに擦りへらしてゐながら、誰も一向その敵に氣づいてゐない。

それは然らば何だ。料理と洗濯と裁縫の三つだと云つたらまあそんなものと呆れるかも知れない。だが先づ私の云ふところを聞いて頂き度い。

今、家庭から三度三度の食物の調理と云ふことを取り去つた後の女の時間を考へてみよ。女はどの位肩の輕さを感ずるだらう。結婚した婦人が一年後に新婚の夢から醒めた時、自分の時間と云ふものを計算してみたらば、一日の大部分は勝手で費されたことに氣づき驚くだらう。

家庭内の料理は毎日三度である。其度に女は味の心配をし經費の計算をし、永い時間を費さなければならない。而かも外で働く男達は、女の心づかひなどは問題とせず、ともすると外で食事を濟して來てしまふ。けれども家庭の女は矢張り歸つてきて食べるものと想像して食膳を整へなければならぬ。もし歸つて來なければ勝手で費した時間の大部分は無駄となり其上經費もまた無駄になる。一日平均六時間は勝手にしやがみ込むのが日本の主婦である。一生涯には隨分大變な時間を勝手で消してしまふわけで、其上男達に待ちぼけを食はせられた無駄費用も莫大の額に上るわけである。ところで

作られた料理に對しては、男から勝手無責任な批評を受ける。おのれは調理の際の中途で一向味などには無感覺となつてしまつて、いつも本當の腹ふさぎに箸を動かすと云ふ状態になる。其上惡いことには、我國の昔からの習慣は、主人の爲めにのみ料理をするので、主人の膳には鮮魚を選ぶが、他の者は、殊に主婦などは間に合せのもので濟してしまふ。そしていつかゆつくり御馳走を食べませうよと自分達の口を慰めてゐるが、さて一生の内に幾度男と同じやうな御馳走を口に入れるだらうか。幼い時からかうした男本位の食事に馴らされて、娘も一向父の食膳の御馳走には食慾を唆られなくなる。いつか母親と同様、結婚する頃には、食物に對して恐ろしく無感心無感覺の目と舌とを持つやうになつてしまふ。

　ところが此食物に對して無感心無感覺の娘が、一度結婚したとなると、何よりも食物について悩まされることになるのである。そして一日少くも平均六時間は料理の爲めに費し、その後の時間は洗濯と裁縫の爲めに坐り込むので、これでどうして婦人が知識を養つたり詩を讀んだりする暇があらう。處女時代に鯉の如くだつた女も、結婚して一年も經つと泥鰌のやうになるわけではあるまいか。

　で私は、此大震災で帝都が丸焼けになり、さて復興されると云ふ今日此際、都會の婦人は先づ大聲に市なり府なりの當局者に、簡易食堂の増設を迫り、進んで簡易食堂での食事を實行しなさいと云ふのである。もし三度の食事を簡易食堂へ出て食べると云ふことになつたら、どの位婦人の肩の重荷が減るだらうか。毎日勝手にゐる筈の五六時間はみんな他の事のために使用出來るわけで、繪を見ることも詩を讀むことも出來るのである。そして一日に三度〳〵の食事の味の心配や調理の苦勞は無くなり、經費もずつと少くなる。婦人は屹度今よりも氣輕になつて、もつと大きな聲で笑つたり快活に話したりするやうになる。御用聞や小賣商人のうるさい問題も世上から自然消滅となる。

　もし我儘な男や分らずやがこれに反對したらば、叱りつけて賛成させたらいゝ。今日諸方で新しい料理の方法だとか、營養料理だとか頻りに發表され議論されるが、それらは要するに女の爲事を複雑にする以外何の効能もあるものではない。『料理は女のするもの』と云ふ何千年來の傳統を破壞しなければ、新らしい時代の婦人問題は根本的に改良されはしないのである。

三

その次は裁縫である。日本の裁縫は主要道具があの小さな針であるために、一枚の着物を作るにもどの位の面倒を要するか分らない。其上衣類の主體が毛織物でないため春夏秋冬いつでも張り替へだ縫ひ直しだと苦勞しなければならない。そして女が一度針を手にしたら幾時間も不健康に坐り込み、頭を惱まして神經を勞らせ、窓先の靑空を眺める餘裕すら其心から失つてしまふ。

夫婦暮しの間はまだいゝとして、子供が出來て來れば、主婦は全く年が年中裁縫に追はれ通すので、いつか詩も快活も奪はれ、機械化し、着物の奴隷となつてしまふのである。誠に氣の毒である。

だから女は其手から針と糸とを捨てよ。そして專門業者に裁縫は依賴することゝせよ。經費の問題を云々することを止めるがいゝ。本當に婦人達が其手から針と糸とを捨てれば、乾度裁縫專門業者が續々と出來る。自然に賃錢は安くなる。

そして今迄のやうに女は簞笥の底へ着物を隱しておく事を廢し、外出着と家着と位にし、男も子供もさうする。今迄のやうな簞笥を嫁入の唯一條件とすることも廢止する。さうすれば裁縫賃などは問題とするに足らない微々たるものになつてしまふ。人は九月一日の大震大火で、着物の多いなどと云ふことは、如何につまらぬものだか知つたらう。今こそ亂雜複雜になり過ぎた生活を單純化さなければ駄目だ。

家庭での裁縫が廢止されたら、日本の女は公園の散歩も出來るやうになり、今よりずつと顏色もよくなること請合である。それはひいては男の幸福でもある。

四

第三は洗濯である。これも家庭から廢止してしまひたいので、日本の女位天候を氣にする女は珍らしいと思ふが、それが實は洗濯が出來るか否かの爲めに天候を氣にするのだから情けない。

西洋洗濯と云ふものが今は至る所に發達してゐる。僅かの經費を惜しみさへしなければ、女の手から洗濯を廢するのは一番わけのないことである。

日本の婦人は、西洋洗濯と云ふと、何か魔術でも使つてきれいにするやうに敬遠し、洋服を洗濯したりクリーニングしたりするところと位にしか考へてゐない。そして矢張り昔流の手洗ひ洗濯法で、天氣ばかり氣にするのである。殊に狹苦しい生活の都會では、洗濯ほど厄介のものはない。早速廢止を婦人達で決議して欲しいものである。

これも裁縫と同じく、洗濯業者を利用しだせば、自然其業者が増加してくる。さうなれば洗濯代は競爭でまた自然に低められ、吾々が充分負擔し得られるやうになる。さうする爲めに婦人は運動を起してもいゝではないか。實際今日の洗濯業者は、婦人の無知につけ込んで、隨分儲けてゐるかも知れない。

五

以上の三つの大敵を婦人が家庭から追ひ拂つたら、混亂複雜の極、徒らに無駄が多く、自分の時間と云ふものを殆ど持たない日本の婦人も、十分に自分の時間を持つことが出來、生活は直ちに單純化され、そこに始めて文化生活も營まれるのである。婦人問題につき先覺者達のいろ〳〵の名論が出るが、どれを見ても『何故日本の婦人はかうも元氣がないのか。』と云ふ其根本にはちつとも觸れないで、枝葉の問題をさも大問題の如く論じ、いよいよ婦人の生活を複雜にしやうとばかり心がけてゐる。生活改善とは一體どんな事なのか、日本の婦人の生活根本問題である料理と裁縫と洗濯の廢止については、ついぞ今迄これを聞かない。この三つから解放されぬ限り、日本の女は永久に伸びることは出來ない。和服が洋服になつたところが、衞生的營養料理がどんなに發達し研究されたところが、それらは婦人の肩に新しい荷物を加へるだけのことである。婦人は決して身輕にならない。

二匹の犬

垣根をはさんで二匹の犬が飼はれてゐました。二匹とも雌犬でした。いつでも離れたことのない二つの生物は、椽の下にうづくまつてゐる時も、紅や紫の奇麗な花床の周りを駈つてする時も、往來の人にじやれる時も始終一緒で仲よしだつたのです。誰が見てもホロリとするやうな仲よしの犬達でしたが、それが一日のうちに三度だけ仇敵同士のやうに黄ろい齒莖をむいて今にも嚙みつきさうな凄じい見幕にうつて變るのでした。それは犬達の飼主から三度の食物を與へられる時のことでした。食物は二匹とも平等に與へられるのでしたが、どちらか一匹が相手の分も平げちまはうとして、一口嚙んでは吠え、吠えては相手の樣子を探りあふのです。私は今度の非常事に於てこの二匹の犬の姿を澤山の人間同士の中から見出しました。

野枝さんのこと

野上彌生子

野枝さんに就いて何か話せと云ふことでお引け受けしたけれども、本統を申すと私たちのおつき合ひは時日の上では決して長い間ではありませんでした。あの方の最初の結婚生活の恐らく後半と思ふ頃か、それを破つて大杉氏のところへ行かれるまでのほんの二三年間に過ぎなかつたので、それ以前若しくばそれ以後の野枝さんに就いては私は何んにもお話する資格のないことをお斷りいたしておきます。

もう十年からになります。その頃染井に住んでをりました私どもの家のすぐ後に、いつも上手な三味線や尺八の音がして、陽氣な笑聲に充ちて、如何にも樂しさうに暮らしてゐる一軒の家がありました。また丁度その時分平塚さんが中心になつて出してゐらした「青鞜」と云ふ雜誌の用事で、ちよい〳〵私の玄關まで來てくれる若い小柄な女學生風の人がありました。この人の顏は獨特でした。私は一と目見てジプシーの娘を聯想しました。笑顏がひどくチヤーミングでした。校正の時なぞは朝夕取りに來て貰つてお氣の毒ですから、郵便で送りませうと云ふと、構ひません直ぐ近所にゐますから、と云ふ返事でした。おや、左樣ですか、とは云つたけれども、それつきりで、話の下手な私は何處に住んでゐるかと云ふやうなことを氣輕く聞き出すことも出來ませんでした。當分は名前さへ知りませんでした。それ故ずつと後になつてその人の家が近所も近所、つい竹垣一重のいつも賑やかな鳴物のしてゐる裏の家だと分つた時には吃驚しました。——云ふまでも

なくその人が野枝さんであり、その家が野枝さんの最初の結婚生活の暖かい巣なのでした。而して尺八はお連れ合ひのT氏、三味線はその御母樣、家族としては他にT氏のお妹さんで下町風な美しいおつねちやんと云ふ方と、その御主人が御一緒のやうでした。

併し斯んな家族關係が少しでも分つたのは野枝さんが最初の赤さんを抱いて、丸髷なぞに結つて表に出るやうになつてからのことでした。（野枝さんの丸髷は大層よく似合ひました。小意氣なおかみさんと云ふ樣子になりました。これは皆んなおぐし上げの上手なT氏のお母樣が結つておあげになるのでした。）丁度その頃は私も小さい赤ん坊を持つてゐましたので、若い母親同士の同情と理解、並びに忙しい育兒や家事の間にも尚勉強だけは怠るまいとするやうな共通の努力が、私たちを急に親密にいたしました。お家の方とも自然お心安くいたしました。T氏はもとより皆さんがめい〳〵獨自の世界を持つてゐて、決して侵し合はないで、さばけた、極自由なお宅のやうでした。而して野枝さんの家庭生活は、物質的の不足を除いては、呑氣で樂しさうに見えました。

今から思ふと、私たちのあの頃のつき合ひ方は、卒直で何等の虛飾のない氣持のよいものであつたと思ひます。私の家には低い茨の垣根で圍まれた小さい前庭がありました。T氏の家はその庭に添つて右に曲つた小路の奧になつてゐたので、野枝さんと私はよく低い茨の垣根を中にして、小路と庭とで話しました。二人とも手襷がけのままで。でなければ野枝さんは赤ん坊をおんぶしてゐるし、私はまた庭箒木を手にしてゐると云ふ風で。何をそんなにおしやべりすることがあつたか。讀んだもの、また讀み度いと思ふものゝ話が重でした。私はその頃譯してゐたソニヤ、コヴアレフスキイの自叙傳について話してあげたと思ひます。引いて一八五〇年代のロシヤの若い婦人たちの解放運動のこともよく話題に上りました。野枝さんは、それと同一の思潮で、日本の女權問題の啓蒙運動であつたその當時の青鞜社の仕事のことなぞをよく話しました。丁度野枝さんはその雜誌を苗床にして育ちつつあつたやうな人でしたから、單に一寄稿家に過ぎなかつた私な

ぞよりは内部のこともよく知つてをり、お仲間の若い婦人たちも多かつたので、私はめい〳〵面白い個性を有つてゐるらしいその人たちの噂話を興味を持つて聞きました。でも忌憚なく云ふと、その頃の野枝さんの世界は、知識的にはまだひどく幼稚で單純でした。(尤も年から云へば非常に早熟ではあつたけれども。)他愛のない女學校の話なぞを、さも重大な出來事のやうに何度も聞かされたのを覺えてゐます。

その内に私どもの家は十間ほど北寄りの奥まつた二階家へ移りましたが、その家は周圍が廣くて、前庭の一隅に三軒の借家が並んでをり、その中央の一軒が丁度T氏の家になつてゐる位置の關係から、その引越しは私たちの間を一層近づけ、野枝さんの生活——それは物質的にもずつと苦しくなり、且精神的には、最初の甘美な夢からさめかけた妻の必然に味はなければならない痛みを感じ始めてゐた——をも、朝夕目の前に見ることになりました。たゞ見てゐた、實は私はぢつと眺めてゐただけでありました。野枝さんは家の中の面倒な事情や、自分の苦しい心持や、また貧乏の不平なぞは一度も口に上せたことはありませんでしたし(今思つても野枝さんのその態度は大層立派でした)、私もその點には決して觸れませんでしたから、徹底的な救助の出來ない以上、みだりに他人の生活に立ち入るのはいけないと私は信じてゐたのでした。私のこの態度は最後に大杉氏との問題について野枝さんから打ち明け話のあつた瞬間まで變はりませんでした。

併し默つて一人で苦しんでゐられたこの期間の野枝さんが、私には最もなつかしい野枝さんとして思ひ出されます。若しこの間の野枝さんを見なかつたら、私のあの方に對する友情は、ずつと違つたものになつてゐたでせう。それ程私はよい感銘を受けたのでした。實によく忍び、よく働いてゐられました。頼むべき人が頼みにならなければ、自分の手で運命を切り開いて行かうとする健氣な氣魄に充ちてゐました。同時にお子さんに對してはよいお母さんであり、T氏に對してもまだ十分忠實な妻であり、また弟子であつたと信じます。寧ろ餘りに弟子になり過ぎ、感化され過ぎてゐたのを惜しみます。何故なればT氏のあの變な虛無主義や自由主義や、極端にデカダンな生き方は野枝さんによい影響のみは與へなか

つたと思ひますから。それはあの單純な熱情家の弟子の邁念を知らず〱飽ました恨みはなかつたか。怖ろいしい最後の誘惑に面した時、野枝さんが何處までもそれと戰はうとしないで、無造作に家や、夫や、子供を捨て得たのも、勿論他に多くの理由はあつたにもせよ、平生T氏から得てゐたものが遠因になりはしなかつたか。この意味から少しの詭辯が許されるなら、野枝さんの最初の結婚の不幸な結末は、T氏も一半の責任を負ふべきだと思ひます。

大杉氏とのことが起つたのは野枝さんがもう小石川の方へ引き越された後でしたからその過程に就いては私は何んにも存じません。たゞ、たつた一度その家をお訪ねした時に（二度目の赤さんに産着を持つて行つてあげたのだと記憶します）、野枝さんのゐた小部屋の机の上に大杉氏の譯した「相互扶助論」が置いてあつたのを覺えてゐます。發賣禁止だけれども借りてゐるのだとか云ひました。でも誰から借りたのか私は聞かうともしなかつたし、野枝さんも默つてゐました。

その頃野枝さんは平塚さんから「青鞜」を受けついでそれを出してゐたし、書くものや名前も社會的に注目されかけた時でしたから、どうか岐路へそれないで、眞面目な成長を遂げて欲しい、と私は心からそれを氣遣つてをりました。今までのやうに朝夕出逢ふわけではないのですから、私は原稿なぞを送る序でによく忠告や激勵の言葉を書き添へました。野枝さんの返事も大變眞實のこもつた手紙でした。（あの人は一體に手紙上手だつたと思ひます。字もたつぷりしたよい字でした。）而して一度ゆつくりお話したいことがあるのだけれども、と云ふやうなことがよく書いてありました。その癖訪ねて來てもそのことには觸れないで歸つて行きました。日に何遍も手襷がけで庭口から飛び込んだ野枝さん、貧乏しながら明るく快活に笑つてゐた野枝さんとは何んだか違つて見えました。あの人の特長の活き〱した點が、來る度に失はれてゐました。私は野枝さんの心がひどく惱んでゐるのを感じました。併し私はそれはT氏との間に早晩起るべきものと豫想された苦しい破綻が來たのだとばかり考へ、その間に野枝さんの新しい戀愛問題が縺れてゐるなどとは夢にも思ひませんでした。

丁度大正五年の三月であつたと思ひます。一夜私の家では謠會があつて、お客樣が大勢いらしてごた〱してゐた時に、玄關にまた人の聲がしました。どなたか會の方が後れていらしたのだと思つて出て見ると、うす暗い格子戸の前にもう幾月も姿を見せなかつた野枝さんが、二番目のお子さんをおんぶしてしよんぼりと立つてゐたので、私は喫驚したのを今でもはつきり覺えてゐます。大杉氏とのことに就いて相談を受けたのはその晩でした。私は元より大杉氏のことは何んにも存じません。併しすべての話から察して野枝さんの心がその時最も飢えてゐたものを持つて現はれた人らしく思はれました。野枝さんは神近さんとの交際もよく知つてをりました。而して又私は前に一寸耳にしたことのあるT氏と野枝さんのお從妹さんとかの間のことも聞かされました。苦しい話ばかりでした。T氏は野枝さんとの隔たりの埋め難いことを見て、既にすべての自由を許したとの事でした。

『それであなたはどうしやうと仰しやるの。』

野枝さんはその一點に苦しみ迷つてゐられたのでした。私は申しました。あなたがT氏との生活を築き直さうとしてどんなに努力したかは十分知つてゐる積りだから、それが失敗に終つて自分の持ち場を去らうとするには異議はない。併しその儘大杉氏のところへ行くことだけは考へなければならないと思ふ。殊に神近さんのやうな間に挾まつてゐる他の異性があるとすれば、非常に面倒な苦しい關係になりはしまいか。それよりもこの機會を利用して一二年みつちり勉强することをお勸めしたい。——「時」が一番よい判斷を與へてくれると思ふ。その上で矢張り大杉氏のところへ行くべきものであるなら立派に行くがよからうし、又どんな事で、今は消滅したと信じてゐるあなたの古い愛が芽を出して、T氏やお子さんたちの許へ歸ることにならないとも限らない。それなら尚結構ではないか。それ故どうか愼重な態度を取つて欲しい。及ばずながらその間の生活費位はどうにでもしようではありませんか。私はそんな話までしました。野枝さんはそれが一番よい方法だと思ふと同意しました。而して抱いてゐるお子さんの上に大きな涙をぽた〱流してゐるのを見ると私も一緒に

悲しくなりました。どうにかしてこの年下の友達をよくしてあげ度いと思ふ氣で一杯でした。私はお客の中を家の外まで送つて出て少し行つた四つ角で別れました。――これが今から思ふと野枝さんと私の永久のお別れでした。

私たちはその後一度も出逢ふ機會がなくてすんだのでした。野枝さんは私の忠告を輕視した點で疚しかつたでせうし、私自身にしてもあれほど云つたのにと思はないではありませんでした。殊に間もなく葉山の事件が起きた時には、それ見たことかと腹立たしさをさへ感じました。あの忠告を半分でも用ゐてくれたら神近さんをもあんなお氣の毒な羽目に陷れなくもすんだであらうし、すべてがもつと立派に處理された筈だと考へると返す〳〵殘念でした。併し私はよい思ひの瞬を聞くにつけても、この古い友達を忘れることは出來ませんでした。野枝さんが書くものなどの中で、よく染井時代の友情を懷しく思ひ出してゐるらしいのを讀んだりすると、私もあの低い茨の垣根から笑ひかけて來た元氣のよい顏を見るやうな氣がしました。どうか幸福でゐてくれるやうに、私は遠くから祈つてをりました。昨年の春であつたと思ひます。私たちは或る機會に一度何年ぶりかで手紙の往復をしました。野枝さんはいつもの情味のこもつた長い手紙でいろ〳〵書いて來ました。人間は本質的にさう變はるものではありません。私はあの頃と何んにも變つてはをりません。――そんなことも書いてありました。それから又、考へると今直ぐにも訪ねて行き度い氣がするけれども、私のためにあなたの靜かな生活を亂すことを思ふと氣が引けて行かれません。私には尾行なぞがついてゐるものですから――と云ふ意味を書いて、何處かで偶然の機會で逢へるのを待つてゐるとありました。

併しどんな偶然も決してこの地球上では私たちを出逢はせはしないと云ふことを知つた時の私の驚きと悲しみを想像して下さい。あの人に何の罪がありませう。あの人の社會主義かぶれなぞ、私の信ずるところが間違つてゐなければ、百姓の妻が夫について畑の仕事に出ると同程度のものに過ぎないと思ひます。若し大杉氏が貴族か金持であつたら、悅んで貴族や金持の生活もしたでせう。――これは決して野枝さんを輕蔑しての意味ではなく、それ程にあの人は愛する人の世界に身を打ちはめて行ける人だと申すのです。あの人の一番美しいのはその點ではなかつたか。ただそれだけの可愛い單純な女性が、何故生かしておかれなかつたらうと思ふと、可哀想でなりません。

七年前の戀の往復

我武者と思はれる大杉氏にもかうしたこまやかな情の半面があつた。野枝さん神近市子さんとの三角戀愛はこの大杉氏の書翰により悉く明瞭になります。この戀文は例の葉山事件前後（大正五年）野枝さんと大杉氏との戀愛の高潮時代に往復されたものです。そして上記の寫眞は、大地震の日柏木の大杉氏宅前の路次に避難中の氏夫妻を、安成二郎氏が撮された二人の最後の寫眞です。



大杉氏より野枝さんへ

けさ、あの雜誌や新聞をポストに入れて歸つて來ると、三十日のと一日のとの二通の御手紙が來てゐる。

本當にいゝ氣持になつて了つた。僕はまだ、あなたに、僕の持つてゐる理窟なり氣持なりを、殆んど話したことがない。それでも、あなたは、それがすつかり分つて了つたのだ。二ケ月間と云ふもの、非常な苦しみを無理にも壓へつゝ、全く沈默してあなたの苦悶をよそながら眺めてゐたのも、決して無駄ではなかつたのだ。

しかし、一時は僕も、全く絶望してゐた。そして僕は、せめては僕の氣持も聞いて、これで綺麗にあなたの事はあきらめて了はうと決心してゐた。あなたの事ばかりでない。女と云ふものには、全く望みをかけまいとすら決心してゐた。そして、それと同時に、僕自身の力にも、殆んど自信を失つてゐた。僕が、いつかのあなたの手紙を貰つてから、ひどく弱り

込んで了つたのも、全くこの爲めであつた。

あなたは、僕に引寄せられた事を、感謝すると云ふ。けれども、僕にとつては、あなたの進んで來た事が一縷の救ひであつたのだ、それによつて僕は、僕自身の見失はれた力をも見出し、又それの、幾倍にも强大するのを感謝する事が出來たのだ。

けふの、あの二通の手紙は、まだ多少危ぶんでゐた僕を、全く確實なものにしてくれた。本當に僕はあなたに感謝する。

あなたの小强い進み方、僕はそれを見てゐるだけでも、日時に又僕の力の力强い進み方を感じるのだ。

本當に僕は非常にいゝ氣持になつて、例の仕事にかゝつた。晩飯までの、二時間ばかりの間、走るやうに筆が進んで、いつもの二倍程も書きあげた。

又邪魔がはいつた。正午頃に、勞働者の一同志が來た。新聞の配達の勞働組合をつくりたいと云ふのだ。しかし、もう殆んど、其の準備が出來てゐると云ふのだ。

一時間ばかりは、其の話で大ぶ面白かつたが、やがて下らない其男の身の上話や何かに移つて、折角の興も大ぶさめた。

三時頃に漸く歸る。あくびが出て仕方がない。又、けさの手紙をとり出して見る。そして此の手紙を書き出した。

御宿の濱と云ふのは僕の大好きな濱らしい。僕には、濱邊が廣くつて、其處に砂丘がうね〳〵してゐないと、どうも本當の濱らしい氣持がしないのだ。僕の育つた越後の濱と云ふのがそれであつた。

あなたの、早く來てくれと云ふ言葉も、何んの不快もなしに、と云ふよりは寧ろ非常に快よく聞くことが出來た。

本當に行きたい。一刻でも早く行きたい。今にでも、すぐ、飛び出して行きたい位だ。

ゆうべは、神田の一軒の本屋に寄つて見た。極く小さな本屋でもあり、それに或る雜誌をやりかけて其方へ全部の資金を注いでゐるので、あなたの本の話は駄目だつた。もう一軒これならばと思つて行つて見たが、そこの主人がきのふか軍隊に召集されて行つたとかで、これも亦駄目。まだもう一軒、望みをかけてゐる本屋もあるが、一寸行つて見る氣にな

らない。

文章世界は、そんな話は全く駄目。孤月は少しも顔を見せない。

兎に角、旅費さへ出來たら、せめて一晩泊りのつもりで行く。そして第二土曜にあなたが上京した際には、是非何んとか都合して、一緒に御宿へ行かれるやうにする。

五月二日午後五時　　榮

野枝さん

あなたが大きな聲で歌ふと云ふ
其の歌ひ聲を聞きたい

野枝さんの手紙

雜誌ありがたう御座いました。今皆よんで見ました。昨日からの不快が少し減じました。この位方々でやつつけられゝばいゝ氣持になります。まけをしみでなく、あんまり皆がいい氣になつてゐる馬鹿さ加減がをかしくなつて來ますもの、よくも〳〵口をそろへて下らないことを云つたものですね、すつかり痛快になつてしまひます。随分私は憎まれ者ですね。戀をすれば何時も石を投げられるにはきまつてゐますがね、少し烈しすぎますね、あなたに餘程可愛がつて頂かないちやこのうめ合せはつきませんよ、本當にあんまり可愛相ぢやありませんか、でも　、私默つてゐればよかつたと思ひます。あんなものなんか書かずにゐて、これから先に、ほんたうのことが分つた時に、皆を片つぱしから言ひまくつてやればよかつたと思ひますよ。

今頃は原稿が屆いたでせうね、孤月には少し遠慮してやりましたが、あんなことを言つてゐる人だと知つたら、あのくだらなさ加減をもつとありのまゝにさらしてやればよかつたと思ひます。本當に馬鹿ですね。

もう何かゞすつかりきまつてしまひましたから、一日も早く東京に歸りたいと思ひます。どうかして十日位までにはたちたいと思ひます。何處にもゆくところもないし、することもなく一人で退屈してしまひます。昨日からまた本をよみました。女の世界の原稿も半分は書けましたけれど　まだ皆迄書き終りません。それから大阪の方の原稿を、お送り下さる

に菊地氏の宛名にして下さい。今朝電話をかけにゆかうと思ひましたけれど、お金がないからよしました。お留守だとつまらないから。

よつちやんが、昨夜身うけされて行つてしまひましたよ。あさえさんも行くさうです。こそちやん一人になりました。大阪からは早く來るやうにと幾度もさいそくがきます。でも今度ゆけばまた暫くあなたに會へないのですね、それを考へると、いやになつてしまひます。

今度東京にかへりましたら、米峰のところへと、西川夫人の處へ二人でゆきませんか、山田先生のところへも一寸からかひに行きたい氣がします。お一重さんのところへも。とき〴〵から云ふ　ふざけたことを考へてはひとりでよろこんでゐるのですよ、罪がないでせう。

今度かへつたら本當にまた長く別れてゐなければならないのですから、恩にきかせたりなんかしないで私のおつき合ひをして下さいね。お仕事にさしつかへがあれば、此處に迎ひに來て下さる日までお仕事をなすつてもいゝでせう。どうせ直き、お目に懸れるのですから、一日や二日位はがまんします。この四五日少し私は馬鹿になつてゐるやうです。頭がぼんやりしてフラ〳〵してゐます。私がかへるまでに、あなたのお仕事が澤山進みますやうに、お願ひいたします。書いても書かなくともいゝやうなことばかり書きますね、いやになつてしまふでせう。それでも、ね、こんな事でも書かずにはゐられない氣持を買つて下さいな、あなたにはそんな馬鹿げたことは出來ませんか、出來なければ仕方がありませんけれど。

だらしのない手紙ばかりね、もう止しますわ、

はいちやい

六月六日　　のえ

大杉さま

大杉氏よりの手紙

朝起きて見ても、手紙は來てゐないし、ガッカリして、仕方なしに仕事でも始めようと思つてゐる所へ、來た。

本當にあなたは、何處へも行かずに、東京にゐるのが一番

いゝのだ。僕にも其の事が、切りに考へられてゐた。今のあなたと僕とは、とても、永い間離れてゝる事は出來ないのだ。大阪　九州へは、若し是非とも行かなければならぬものであつたら、半月位の間に一切の用を濟まして來る事は出來ないものだらうか。そしてあなたは、出來るだけ早く、あなたの勉强なり仕事なりに取りかゝらねばいけない。あなたがブラ／＼してゐる間は僕もやはり何にも手がつかない。そして二人は、戀の戯れにのみ、惑溺してゐなければならない。

しかし僕は、少くとも今日までは、あなたとの戀の惑溺に、少しも不快や悔恨を感じてゐるのではない。寧ろ溺れるだけ溺れて見たいと思つてゐる位なのだ。僕は、あなたとの惑溺には、何んの不安をも持たない。それでも、もうお互に、其の惑溺から出てもいゝ時ぢやあるまいか。其の戀の戯れを、一日のうちの或時間とか、一週のうちの或日とかに短縮してもいゝ時期ぢやあるまいか。

僕も、僕自身の仕事を始めると云ふ自分への約束の時が、もう大ぶ間近に迫つてゐる。早く、いろんな俗事の整理をつけてしまはなければならない。いつかもあなたに云つた、あなたに冷淡になる時が、いよ／＼來たやうに思ふ。

辻君や子供の事は、僕には、少しも愚痴だとは思へない。よし、愚痴だとした所で、何んの遠慮もいらない愚痴だと思ふ。そして僕は、其の所謂愚痴を、折があらばあなたの口からもらして貰ひたかつたのだ。いつかも、上の兒の事を話し出してあなたを泣かした事があつたが、下の兒を預けた通知を出す時には、是非ともそれをしたければいけない。そしてこんど東京に歸つたら、何よりも先に、辻君とも又子供とも會つて見るがいゝ。少なくとも子供とは、今後も、始終會ふやうにするがいゝ。そして　もし出來ればあなたの手許に置く方法を講じるのが一番いゝ。

僕は、あなたに十分に愚痴を聞いて、そしてこんなことまでの相談をして見たかつたのだ。あなたとしては、そんな相談をしかけられることは不快な侮辱のやうにも感ぜられるかもしれないが、しかしそれは少々コンヴエンシヨナルな、感じ方ぢやあるまいか。少なくともあなたは、あなたの愚痴は、誰れよりも先に僕にもらさなければいけない。

金のことだつてそうだ。そんなつまらない遠慮をされてはいやだ。いつも云ふやうに、僕は決して、自分でいやな無理はしない。神近だつて、あなたの爲めでゞはなくて、僕の爲めにした事なのだ。そして又、其のために、僕が歸らなければならぬと云ふ事は少しもなかつたのだ。現にあの朝も、神近への手紙に、土曜までは歸れないと云つて置いたのだ。

神近は餘程怒つてゐた。御宿へ來た手紙等では、其氣焔當る可らざるものがあつた。しかしそれも、けふは歸れるかあすは歸れるかと思つて、ツイ手紙を出すのを怠つた、僕の罪なのだ。事情が分らなければ、誰れだつて、怒るのは無理はない。

宮田からの辻君の仕事は、ミルの婦人論にきまつたさうだ。

いつまでも〳〵書いてゐると仕事の方がおくれるから、いい加減で止さう。仕事も、すつかりなまけて了つたので、今日からは又夢中になつて始めるよ。こんどこそは、よしあなたが歸つて來ても、あなたの事は向ひの室に閉ぢこめて、置いて、ロクに御相手もしないでコツ〳〵やつて見せる。其の覺悟で、金が出來たら直ぐに、本當に早く歸つておいで。

六月二十五日朝　　榮

可愛いゝ野枝さん



憶ひ出すまゝ

（榮兄さん夫婦と宗坊のこと）

橘あやめ

榮の兄さんと野枝の姉さんと、それに私の子供の宗一とが憲兵隊で慘殺されましたことに就いて、是非私にも何か書けとの御話しがありました。多くの學問のある方々が御讀みになる『女性改造』などゝ云ふ立派な雜誌に、私のやうな者が何を書けやう道理もありませんが、たゞ『憶ひ出』を書き並べればいゝとの御話しなので、それならばと、つい御引き受けをして了つたのです。

しかし、宗一のことを書くことだけは御斷り申しました。只今の私に、何うしてそんな勇氣などが りませう——。最初の程は、親切に御見舞ひ下さいます人々から『宗一さんが……』の一言を云はれましたゞけで、直ぐ悲しさに身中が慄へて了ひました。泣き崩れて了ひました。私のこの樣子を見て傍の人達も『それでは貴女の體が持つまいから——』と種々になぐさめて下さいますし、それに私自身でも『こんなに泣いてばかり居ては折角アメリカから養生に歸つて來て入院してゐた程の私の體が一さう惡くならう。——さうなつては猶さら夫に申譯けが立たない』と思ひ、氣を取り直しまして、其の後ちは成可く誰れにも御會ひせぬやう、たゞ靜かに寢てゐるやう、そして、なるだけ宗一の事は考へぬやう、憶はぬやうと心懸けて來ました。さうして、只今では少しく心も靜まつて參りました。

ですけれども、宗一のことを憶ひ出すまゝ、それを文字で記して行かうといたしましたなら、悲しい私は、二三行書きかけてゐるうちに必つと泣き崩れて了ふことでせう——。

『憶ひ出なら……』などゝ、つい御受合をして了ひましたが

さて、それを書かうといたしますと、別にこれと云ふ御話しがないのを恥しく思ひます。

榮兄さんは學問の出來る偉い人なのだと、たゞぼんやり知つて居ましたばかりで、兄さんの書かれた本などは全るで讀んだこともありません。兄さんの主張なさる思想や、行動などが、どんなに惡いことなのか、いゝことなのか、私には少しも分りません。けれども、四五年前に一度久し振りでアメリカから歸つて參りました時、いくら牢に入れられても少しもひるまず、ひどい貧乏な生活をしながら自分の主張のために活動せられてゐる兄さんを見ましては、『あゝ偉い人だ――』と感ぜずにはゐられませんでした。

私が生れますと間もなく、母はあの世の人となつて了ひました。そして私は、繼母の手にかゝつたり親戚に預けられたりしながらやうやく九ツに成りました時　こんどは父に死なれて了つたのです。私は一番末の妹でして、兄さんや姉さんも澤山ありましたが、いつとう上に『榮』といふ兄さんのあることは、この父の死にました時に始めて聞かされましたのです。それまでは、そんな兄さんのある事など誰れも敎へてくれないものですから、夢にも知りませんでした。

しかし、その父の死にました時にも榮兄さんは歸つて來ませんで、いままで知らなかつた姉さんが見えました。それが榮兄さんの先のつれあひの保子さんでした。後とて知りましたが、あの時は丁度『赤旗事件』とかで榮兄さんは千葉の監獄で苦役して居られた最中だつたさうでそれで、保子さんだけが來られたのでした。

たしか其の翌る年だつたと思ひます。保子さんが迎へに來られまして、私は、すぐ東京へと引きとられて參りました。ところがまた私は、何かの都合からでしたらう、間もなく甲府の親戚へ預けられました。

或る日のこと、私が近所の子供たちとおもての柳の木の下で遊んで居りますと、がらがらつといふ響きと共に私の家の前へ俥が着きました。『あらつ俥が來た――』と、子供心にたゞ何んとなく嬉しい樣な氣がして傍へ馳け寄つて見ますと、それは洋服姿の、大きな眼がぎろつと光つてゐるおつかない人でした。そして、其のおつかない人が私の顏ばかりをじろじろと見ますので、私はそつとお友達の後ろへ隱れて了ひました。これが千葉監獄から出たばかりの榮兄さんだつたので、

私は此の時初めて榮兄さんの顔を知つたのです。

私は榮兄さんに連れられてまた東京(家は大久保にあつた)へ參りました。

郷里の家の方も榮兄さんによつてすつかり片附けられました。繼母は離縁になり、私のすぐ上の進兄さんも勇兄さんも大久保へ引取られて參りました。そして、やゝ大きい勇兄さんは職工學校へ入れて貰ひました。私は斯うして十六の歳まで兄さんの手元で育てられたのですが、いま思ひますと、二十日餘りの牢獄生活から出て來られたばかりの兄さんが、弟や妹を引き取つての世話はなみ大ていの事でなかつたらうと思ひます。

しかし其の時分、未だ世間のことなど少しも知らない私は毎日近くの戸山ケ原などへ出掛けては遊んでゐましたが、何う云ふものか榮兄さんには親しめませんでした。おつかない人のやうに思へて、肉親の兄さんだといふ親しみを以つて話しかける事が出來ませんでした。何にしろ九ツの時に始めて榮兄さんのあることを聞かされた位で　小さい時に甘えたりふざけたりしながら共に育つた兄さんではないのと、最初に非常に恐つかない人のやうに聞かされて居ましたのとで、妙に親しめない處があつたのだらうと思ひます。それに、私達のことはすべて保子さんに任せきりで同志　方々と運動のほうに忙しかつたやうですから——。

しかし私が斯う申し上げたからと云つて、榮兄さんは弟や妹に對して、世話をよくしてくれはしたが冷たい人だつたと云ふ風にとられては困ります。榮兄さんは、暖い、熱情的な人でしたが、たゞ肉親の情に溺れたり、親味のものを特別に愛したりすることの出來ない人だつたのだと思ひます。それが榮兄さんの偉い所だつたのではあるまいかと思つてゐます。いつか御飯の時に、私の事で憤然として保子さんをどなり附けてゐる兄さんを見た事がありました。其の時には、『あゝやつぱり親味なのだ！』と、つく〴〵思つたことを今でも覺えて居ります。

私は十六の歳にアメリカの今の夫(橘惣三郎)の許へ嫁ぎました。そして、十八の時に宗一を產み落して、十九の暮に病氣になつて日本へ歸つて參ります時まで、榮兄さんとは一度の文通すらいたしませんでした。しかし、一度の文通もしなかつた私の心持ちはよく了解してゐてくれた樣に思ひます

私が大正七年に日本へ歸りました時には、兄さんの住居は

田端の小さな家でした。

野枝さんには此時初めて會つたので、二人の間には二つになる魔子ちやんが出來てゐました。私の宗一も丁度二つなので、すぐ子供の話しから野枝さんとは親しくなりまして、氣の置けない、親切さうないゝ姉さんだと思ふやうになりました。私はこの家に着きまして、その時やはり遊びに來てゐた進兄さんが、如何にも大平樂な顏附きで座敷の眞ン中に寝轉んだりなんかしてゐるのを見て先づ驚きました。といふのはこの進兄さんなんかも、保子さんの時分にはおつかなさうな顏をして隅つこの方に縮こまつて居たのですから――。それに魔子ちやんと宗坊とを犬や小羊の背に乘せてアツハアツハと嬉しさうに笑つてゐる榮兄さんを時々見ては、私はたゞもう嬉しさで一杯でした。貧乏で困つてはゐられましたが、しかし私は樂しく感じてしばらく一緒に暮らして居りました。

その翌る年の春田端の家が焼けましたので西ケ原に移り、中山へ行き、最後に駒込の曙町へ家を借りて兄さんや同志の人達ちが新らしく雜誌を始められました其の頃、私はまた日本を去つてアメリカへ歸つて行きました。そして、その後ちは折々文通もするやうになりました。野枝さんからは、女らしい注意の行き屆いたお手紙をも貰ふやうになりました。

私は田端に居りました時に、榮兄さん達ちがお正月のお餅も買へなかつた狀態をつくづく見て來て居ますので、せめてお餅代なりともお送りしたいと思つて少しづゝ貯め始めました。いつの年だつたかよく覺えませんがそのお金を送つて、その後しばらくたつてからふと新聞を見ますと『大杉榮は近頃非常な成金になつて逗子へ大きな家を構へた』といふ記事が載つております。それでは、あのお送りしたお金は正月のお餅代にならずに何にかの御馳走になつたことだらうと、私はその新聞を眺めながら獨りでほゝえんだことでした。

同年の四月、私はまた病氣のためにアメリカから宗一を連れて歸つて參りました。が、こんどは榮兄さんはフランスへ行つて居られるお留守で、野枝さん一人で何やかやと親切に世話をして下さいました。病院のことや何にやかやと、眞當に親味の姉も及ばぬごめんどうを見て下さいました。女は女同志――と深く感じました。それらの親切が、胸の底からこみ上げて來る程嬉しく感じました。

あゝ、しかしその野枝さんも今は殺されて了ひました。榮兄さんも殺されて了ひました。可愛い宗坊までが慘しく殺されて了ひました！

――十月十六日夜――

鳳凰は灰燼より甦る

賀川豊彦

大地は波の如く揺れ、山山は大洋のうねりのやうに歩いた。
大地が海より這ひ出たる日、山々が平地より抜き出た日、その日に、之を加勢したものは大地震ではなかつたか？
アラスカの山々は一昨年生きものの如く歩き出して行衛不明になつた。
西藏の山々も三里の道を歩いて突き進んだのは去年の春ではなかつたか？
地球は生きてゐる。山も、河も、水も空氣もみな物を言ひ、進行する。
地震も暴風も、生物としての地球の唇の役目を務め火焔は舌の任務につく。
山の歩く日に私は生れた。相模灘が四十尋陷沒し、横濱は天空に舞ひ上つて行つて了つた。私はその日に生れた。
東京も跳舞して火焔の歌ふ聲を聞いた。地球が發狂したのか？ 地軸をへし折つたのは何人だ？ 大地を支へたネプチユーンはあまりの重荷に地球玉を前方に抛げ出したのか？ 横濱人と、東京人はみな狂倒して、火の中に飛び込んで行つたものもある。
地球は何を物語らんとするか？
語れ、大地よ、我等の聞かねばならぬ言葉はその何事だ？
ノアの洪水のあつて以來、神はかゝる災厄を人間に送ら無いことを約束した筈ではなかつたか。

神は虹を指して誓つた筈ではなかつたか？

凡て肉なる者は再び洪水に絶るゝ事あらじ又地を滅す洪水再びあらざるべし（創世紀九章十一節）

神は水の災厄に就ては約束をしたが、火に洪水に就ては約束を爲なかつたと云ふのであらうか

神は何故日本にのみこの苦難を約束するか？

我等は笑顏をする束の間さへ無いではないか？　天文、慶長、寛文、寶永、安政、大正と打續く本土の苦難に、民は瘦せ、魂は仰き、晴れやらぬおももちに、胸はいつまでも壓せられて居るでは無いか？

「日本では、凡てが無常である」と漂着の詩人ラフカデオ・ハーンをして云はしめた言葉は不幸にしていつまでも、我等の魂を支配すべき格言であるか？

あゝ紅蓮に追ひ立てられ、被服厰に集つた四萬の生靈の爲めに、私は神に謝罪を要求する？　神は火の旋風に就て責任を持たないと云ふのか？

その日に虹は立たなかつたと云ふのか？　日本よ虹がないと云ふのか？　火の中に虹がないと云ふのか？　おゝ健忘性の我が神よ、私は飽迄、あなたの責任ある回答を要求する。

人間一匹の爲めには、天地全部が亡び失せても惜しくないと云つた。人の子の宣言は何處に書かれてあるのか？　紙の上にか萬有の法則の上にか？　神は何故、此際急に耳が遠くなつたのか？

全横濱は五分―にして倒れた。東京は二十四時間の中に半分だけ燒けて了つた。地球はどれだけ人間の血を吸へば肥るのだ？

大地は口を開いて、人間を呑んだ！　鯨でさへそんなに多數の人間を呑むことを遠慮するのに、大地は後々の思慮も無

く幾十萬の生靈を一度に呑み込んで了つた横濱の犬が人間の骨で肥る前に、大地は人間の血で肥るのだ！　その爲めだ、大地が丸々手球のやうに肥えて居るのは。

血に飢えた大地よ、狂氣せる無機物よ、地震と、海嘯と、地辷と雪崩の母よ、何故におまへは、私等人間を地の上に產んだのだ？

それはあまり殘酷な手品であり、必ず落つ可き運命を持つ綱渡りでは無いか！　おまへは我等を綱の上に据ゑ、兩端を一度に切り落す惡戲の主だ！　東京はその宿命の綱の上に置かれる！　百三年目、百三年目にその綱の片端が切られると云ふでは無いか！

宿命の綱が切れる！そして無智なる泥人間はその上から落ちる。泥人形が毀れる。宿命の綱がまた張られる。それは蜘蛛が蠅を捕へる爲めに巢を張るやうに、人の眼に見え無い、時間の上の綱が張られる。その綱までは百三年の距離がある。そこまで泥人形の群が綱渡りをする。そして綱の眞中に都會を建てる！　それを綱上の都會と呼ぶ！空中樓閣もその手品には及ば無い！

綱上の樓閣に泥人形が住む。その泥人形は魂拔きだ！一個一時間三十錢肉の切り賣！そこを新吉原と云ひ洲崎と呼ぶ。そこにはバビロンにも見られな無つた罪惡が巢を組んでゐる。名は吉原！　その名の爲めだけにでも綱は切り落される必要があるかも知れ無いが！

あまり安價な泥人形に、天の使は贖ひを敢てしようともしないのか？　綱上の樓閣が漸く出來上つた頃ほひ、綱は兩方から奇麗に切り落される！

その綱は北緯五十度から、赤道直下まで續く日本列島の帶だ！

日本の帶は火に燒かれ、潮に浸され、豪雨に見舞はれ、天日に暴らされる。暴風の進路は必ず日本の帶の上を傳ひ、太

平洋の狂濤は日本を嘗めることを忘れ無い！　天は何故、日本にのみ不公平であるのだ！　宿命のほ綱、何故日本にのみ張られてあるのだ？

上野の丘に立つて東京を見てみるが善い。そこに何が殘つてゐるか？　殘つて居るものは焦土と赤く燒けた瓦の破片ばかりでは無いか？　人間は何處へ行つた？　山の如く積み上げられた白きものは何だ？　それは人間の骨なのだ！

人間の骨、一荷幾十錢で賣るのか！　それはあまり美しく箱積にせられてあるよ！　あゝそれは吉原の賣女の燒かれた骨だ。

その日東京は噴火した！　百數十所の發火個所は熱風に吹きまくられて、一つの焔となつて了つた。火焔は三萬尺の高空まで達して、雲を呼び集めた！　雲は折り重なつて空を包み、帝都は蒸し燒きの運命を見た！　此日には平常美しき武藏野の眉姿までが反逆した。見捨てられたる東京は、焔の中に蒸發し、横濱は大地に吸ひ取られて了つた。焔の中に四匹の馬が走り廻つた。白馬色靑ざめたる馬、赤馬、黑馬――それらは「死」と、「破壞」と、「飢」と、「傷害」の騎士におつられた馬であつた！

何人もその馬を肉眼では見なかつた。然し天堂を凝視するものには燒え立つ火焔の中に、鬣の搖れる態を見た。

あゝ定められるその日に、現れなければならなかつた四匹の馬よ、おまへは人間の頭の上を驅け廻つて何を見たか？

おゝ、たゞ空しく泥人形が、再び泥に復歸するを見たか？　破壞の先驅よ、宿命の馬よ！

おゝ神よ、あなたは私を泣く爲めに作り、悲しみの子として地上に產みつけた。私はあなたの名の爲めに十四年間を貧

民街の路次で暮した。そして十四年後漸く衣服を配り歩か無くてよくなつた時に、あなたは一度に私の護つた貧民街の幾百倍大きな窮民都市を作り給ふ。

神よ、見給へ、バラックの蔭に泣く嬰兒を見給へ！　彼はあなたが地上に蒔き給ふた花ではありませんか？　それだのにあなたは自分の名の爲めに、彼等をお護りなさらないで、母を彼等よりお奪ひになりました。トタン屋根の下に泣くあの悲しい聲をお聞きにはなりませんか？　私さへぢつとして聞いて居れ無いのに、あなたがチツトして聞いて居られる筈は無いぢやありませんか？

神よ、見給へ、向ふから氣の狂ふた若い母が來ませう。髪を振り亂し、着物を引き裂いておどおどした足どりでこちらに來るではありませんか！　瓦の下、煉瓦石の下を一、一のぞいて居るでせう。子供が燒かれたのです！　それを尋ねて居るのです。あゝ母と、その子に何の罪があつて、あなたはこの災厄をお與へになつたのです？　戰爭の後のインフルエンザに對して、私共はその受く可き罰を受けます。然し、平和の時に罪も無い嬰兒とその母は何の負はなければならぬ責任があつて、この災厄に會ひましたか？　創造主よ、私はあなたに災厄に對する責任を難詰します。

私の友人の中では、私がこんなにあなたに、難詰することをさへ笑つてゐます。彼等は云ひます。第一、私の云ふやうな神なんかありやしないんだ。神とは一種の阿片劑だ、一種の氣休めで、齒痛に頬の皮膚の上から塗るヨヂウムチンキのやうなものだと。

そう云はれても仕方が無いぢやありませんか、私の神よ、こんな大きな災厄に對してあなたが責任を以つて下さら無いとすれば。

あまりに、私の悲しみが大きいから、私はあなたに向つて眼を閉ぢませうか？

そして、無神無靈魂の世界を想像して見ませうか？　秩序も何にも無い、偶然と冷たい法則！　支配する世界を夢の中で

考へて見ませうか？

大地震も、地辷りも、海嘯も、勝手に起つた「偶然」の仕事で、誰れにも責任が無く、誰れも泣く必要が無いのであると私は考へませうか？

世界は始めから「無」で「無」の上に起つた出來事は、無の上に畫いた「無」である爲めに、「無」の上塗であると考へさせて貰ひせうか？　涙も、死も、災厄も、地震も、大火も、被服廠跡の屍も凡てが嘘であつたとしませうか？　さても不思議な夢見であつたとしませうか？　その夢見のことも打忘れて了ひませうか？　凡てを否定し、否定した上に否定して、自分の存在をも否定しませうか？

果てしなき、否定の後に、私は結局、「私」と云ふものだけが「無」と「無」の間に吊り下げられて居ることを發見するのである。

前に進んでも「無」であり、後に退いても「無」その間に苦き宿命の綱が張り渡され、私と幾百萬の生靈が被服廠の火の旋風の中に飛び込む爲めに綱渡りをさせられて居ることを發見するではありませんか？

つまり兩端は始めから、切り落されて居るのでした。その兩端の無い綱の上で私共は逆とんぶりをしたり、手品をしたり、輕業の藝當をしてゐたのでした。

これだけが、凡ての否定から噛み出たのです。そこに私の嘆きがあります。

夢を否定したその夢が私の生靈を脅かします。「無」も悪戯をするにも程があるぢやありませんか？

私は「無」を怖れます。だつて、「無」は「無」だけで承知してゐて呉れ無いぢやありませんか！　「無」の夫婦はいつも「現實」と云ふ私生兒を抱いてゐるぢやありませんか？　やう育てもしない癖に「現實」を抱いて。夢から夢に彷徨するのが乞食の「無」です。乳をも啣くませず、ミルクも貰つてあてがはず「無」は「現實」を産み放しにして嬲り殺しにするのです。

「無」こそシヴ神です。「無」は口に血の滴る人間の首をくわへ、腰に髑髏を數限り無く結びつけ、足には燒け爛れた屍を踏みつけて居ります。

「無」は責任を持つてくれ無いのです。

私の神は、暴虐に對する難詰を受けても責任を回避しやうとはなされない。

わが神、わが主よ、私が、あなたを難詰する理由がおわかりになりましたか？

私が、虚無論者になり得ぬが故に、私が冷たい無神論者になり得ぬが故に、私は煩悶するのです。私は私の魂の中に贖罪を意識する力を作り給ふた神を疑ふことが出來ませぬ。それは實在の力です、それは確かに生き給ふ神です。私はそれを眼を以て見ませぬ。私は耳を以つてそのみ聲をきゝませぬ。

然し、どうして、あなた――私の神――贖罪の神を疑ふことが出來ませうか？　罪をすら贖はんとする大發心の神―それが私の靈の本願の中に燃え立つて居らせられるではありませんか？　私はみ神の姿を外部に見ることが出來ませぬ。然し何と云ふ尊いみ姿でせう。私が正しく立たんとするその刹那よりあなたは眞直に私の後押しをして下さるではありませんか？

その手を强く感じます。私はその御手の强い壓力に堪へ難い程です。それが凡て社會に公義を求むる力であり、人類愛を請求する源ではありませんか？

そのみ手の働きを私は、春先の木々の芽ばえに、水蓮の花に、山に、雪に見出したではありませんか？

それは成長の御力として働き、それは進化の法則として働き給ふ。地上は限りなく、み恩に満ち、天に行く星はみ榮の装飾の如くに考へられました。

然し――突然、あなたは、地をして震ひ動かしめ、海をして嘯かしめ給ふ故に、人の子はまた御指先の働く方向が見え

無くなりました。

いつになれば明瞭に御姿の光榮を拜することが出來ますか？　いつになればあなたは、人間に對する脅(おびやかし)を解除なさいますか？　それをお聞かせ下さい。それで無ければ、私共は安心して地球の上で仕事が出來ませぬ。

そうかと云ふて、私共は自らの責任を回避するものではありませぬ。あなたが地震と火事で人類に對する脅迫をお續けになるのであつても、私共は、あなたに對する反抗は續けませぬ。私――少なくとも私だけはあなたの脅迫に對しては無抵抗で居りませう。

いや、たとひ、わが神が、私に向つて暴力に訴へてお出でになることがあつても、私は愛を以つてあなたに酬ひませう。もう神だと云つて、暴に酬ゆるに暴を以つてする時代は過ぎたのです。私は神に接するに親切でありたい。私は昔流の呪の言葉なんか吐きませぬ。あなたも時折、私共の眼から見れば失敗もあるかも知れませぬ。繰返して申上げます。あなたの御指導のお蔭で、人間も兎に角、一段と進歩いたしましたから、あなただけが暴力を振ふ唯一の特權者でおありなさるか存じませぬが、今度は人間があなたを教育する立場を取らして貰ふかも知れませぬ。

私は亂暴な姿をあなたのお姿をして畫きたくはありませぬ。私の胸に湧いてくる凡てが、あなたから流れて來たものであることを知つて居りますから、私があなたより優越の地位に立つて居るとは決して思ひませぬ。

然し、あなたも御存知の通り、あなたは兩面の神でいらつしやいまして、私の内側にお住ひになる神は、愛と嚮きの神私の理想、私の生命の源の神で居られますのに、私の外側にお出でになる神は、常に進化と成長を掌(つかさど)り給ふ外に、隨分亂暴なさる方のやうに見えるのであります。

私はどちらをあなたの性質としてお選びしませうか？　私は勿論その一つの性質を別々に放して考へたくはありませ

ん。あなたの御性質には、私達の不行儀な、うろたへた魂で御判斷申上げ難い點があると思ひます。

然し、たとひ、後の分が御神の性質の全部でありましても（さうとは思ひませぬが）私達はあなたを殺したく思ひませぬ。反つてあなたを救つて上げませう。かう云ふとをかしな話になりますが、神と宇宙全體を修復する任務を私達人間が負はされてゐると自覺した以上、私達は勇敢に任務につきます。その爲めに私が十字架で死なねばならぬ運命でありましても喜んでそれを選びませう。

然し――

その大きな決心を與へて下さつた方はあなたですから、私はどうしても、あなたが私より以下の惡人であるとは、どうしても考へられないのです。さうすると、神の御手の動きが私共に充分見え無いと云ふことになります。

人間に戰爭と、墮落と、高慢と、無駄が無つたなら、暴風を豫知するやうに、地震を豫知する內部的力を持ち得てゐたかも知れませぬ。

人間はあまりに墮落した爲めに、その高踏の力を失つたのでありませうか？

さうかも知れませぬ。

それにしても、あなたが、もう少し寛容で居て下さいまして、悔改むる期間を今少し長くお延し下さるなら、どんなに幸福であるかも存じませぬ。

私は、あなたが犯罪者を救ふ神で居らせられ、狂人をすら愛してゐて下さる神だと思ひますから、あなたの慈悲に縋りまして、悔改むる時期の今少しく延長せられんことを祈りたくあります。

否、たとひ、悔改むることが出來なくとも、罪なき嬰兒とその母とを同時に火あぶりになさらないやうにお願ひ申します。

たとひ、それが私共人間側の不注意でありましても、どうか、もう少し大眼にみて行つて下さい。甘え序に甘えさして下さい。わが神よ、父よ。

トタン屋根の下から東京は甦る。

銀座には蝗が飛び、丸の内には青草が繁り始めたが、東京は哭き女を傭はぬ中に甦る準備をした。

一樣に平屋のトタン屋根が、曇り日の灰色の空に如何にもふさはしく、一樣に薄青色をし居る。それは太洋の色である。一樣のうねりに、街々が並んで居る。トタン屋根の白く粉のふいたところは波が砕けたところである。

あれ、太陽が雲間より覗く。すると、東京は鱗を逆立て悦ぶ鯱のやうに見えるでは無いか？　大波よ、揺れるが善い！トタン屋根の波よ海嘯を起すが善い。おまへの潮流は何處を流れて居るか、おまへの滿潮時は何時頃だ？　嘗て退潮を知らない、江戸よ、東京よ、おまへは灰燼より束の間に甦るでは無いか？

暴風も、地辷も、呪はれた地震も、おまへを破壞することが出來ないではないか？　火焔の旋風は、おまへの上を通り過ぎる。然しおまへはそれに怖ぢない。おまへは新しい勇氣を以つて海潮を運ぶ。おまへの動力は何處より湧くか？

困苦を怖れない、トタン屋根の精よ、たとひおまへの都を七十五年目毎に一回、全部火焔が嘗め盡しても、おまへはびくとも爲ない強い精神をおまへは持つ。そこに江戸兒の精髄がある。たとひ百四十三年目毎に東京の大地が壞れ落つることがあるとも、悲鳴の一つだに上げ無いところにトタン屋根の下に蟄伏する靈の偉大さがある。

彼等は雨を防ぐ可き用意も無く、篠つく雨に骨の髄まで濡れる。それでも彼等は小屋掛けの下に雨傘さして夜の明くるを待つ不撓の靈である。

疊もなく土べたの上に席を敷き、蒲團も無く、燒き出された日に着て出た衣服その儘で幾十日かそこに横臥して、猶辛膽に堪へ得る靈こそ、トタン屋根の主である。

互助の精神を知りたければ、トタン屋根の主に合つて見るが善い。一椀の汁、一皿の茶でも彼は一人食するを潔としない。三つのトタン屋根はそれを三分して喫する。

トタン屋根を覗けば、そこに日本人に會ふであらう。たとひ、一坪に足らぬむさくろしい小屋でも――犬も一月と住み得ない――奇麗に整理して掃き清めてある。太洋の水は常に澄んで居る。その澄んで居るのは水全體として澄んで居るからではない。一滴の水が澄んで居るからである。見よ、一つのトタン屋根の下に動く靈が、一つの透明なる一滴では無いか！その清浄なる一滴が自分の持場を守る。そして、東京は瞬く間に蘇へる。

九月一日の午後東京を嘗めた火焔は武藏野を焦土に化したと思はれたが、被服廠跡に山と積まれた白骨のまだ處分の充分濟まぬ中に、東京は白骨の中より甦つた。此處にも、彼處にも槌の音が聞える。白木のバラックの棟上げが出來るのだ。

天地に轟く爆音に煙塵がセピア色して天空に捲き上つた。二百尺位い大きな黒い煙筒が砂塵の中に倒れるのが見える。それはあまり心地よく倒れた。見て居る私は見て嬉しかつた。何と上手に倒すことよ。破片も迸らず、爆發もさゝず、それは完全に一本の箸の如く倒れたよ。見て居る私はその天を摩す煙筒が惜しいと思はぬでは無かつた。然しあまりに心持ちよく倒れたことを見てこ躍りした。

あゝ、あそこから東京が甦るのだ。あの爆音の底から新しい日本が甦るのだ。舊い燻ぶつた烟筒を奇麗に片付けて、そこから東京が甦るのだ。爆音が一つ轟く度毎に、私は神田の高い塔からそれを凝視した。そして、その砂塵の中に新しい芽が見えるか否かを覗つて見た。その元氣善い爆發に私は新しき生命の爆音を聞いた。

腐つた建築物はみな去るが善い。新しい東京はトタン屋根の下から甦るのだ。

火焔の旋風に翼を燒き落された鳳凰は灰燼の中より甦る。苦難を通過した鳳凰は火焔を喰ひ盡す術を知つて居る。

おゝ鳳凰は灰燼より甦る！　（一九二三・九）

災誌

規定

新型縦組。

（三）刊行　大正十三年二月申込順により配本。

（四）申込金及期日　豫約申込希望者は、申込金五圓を添へ、來る十二月三十一日迄に申込まれたし。

（五）拂込金及期日

（甲）分拂　第一回分は申込金として五

を要す

市内　十二錢
地方　五十四錢
朝鮮、滿洲、南洋、
樺太、臺灣　八十五錢
支那　九十錢

（七）注意　大取次店小賣店を經て申込まれたる分も十二月三十一日迄に申込金を本社に於て受領するに非ざれば豫約の效を生せず。

（非賣品　本書は非賣品なれば豫約者以外は絶對に購ふこと能はず）

刊行所　東京芝區愛宕下町　振替長野三二八〇　改造社

術

久米正雄
早大教授　片上伸

偉觀を → 見よ

文藝欄



或る男の墮落（遺稿）

伊藤野枝

一

私がYを初めて見たのは、たしか米騷動のあとでか、まだその騷ぎの濟まないうちか、よくは覺えてゐませんが、何しろその時分に仲間の家で開かれてゐた集會の席でした。その時の印象は、たゞ、何となく、今まで集まつて來た人達の話しぶりとは一種の違つた無遠慮さで、自分が見た騷動の話をしてゐましたのと、其の立ち上つて歸る時に見た、お尻の處にダラリと不恰好にいかにも間のぬけたやうにブラ下げた、田舍々々した白縮緬の兵兒帶とが私の頭に殘つてゐました。彼はまだ其の時までは、新宿邊で鍛冶屋の職人をしてゐたのです。

彼が、繁々と私の家に來るやうになつたのは、私共が、田端で火事に焼け出されて、瀧野川の高臺の家に越してからでした。

それ程深い交捗がなく、そして彼が幾分か遠慮をしてゐる間は、私も此の珍らしい、無學な、そして其の割にはなかなか物解りもよささうな勞働者を、興味深く眺めて居りました。同志の間にも、彼の評判は非常によいのでした。が、やが

て、彼がだん／＼に無遠慮のヘメを外づすやうになつて來た頃から、私は何んとなく、Yのすべての行爲の何處かに、少しづつの誇張が伴ひ出して來たのを見のがす事が出來ませんでした。

無遠慮は、むしろ私共が、私共の家に來る人々には望むのでしたが、Yの無遠慮には、何となく私の眉をひそめさす、いやな誇張がありました。

はじめのうち、私はYの行爲に眉をひそめずにはゐられない自分の心持ちを振り返つて、『これは、私の方が無理なのだらうか』と思つて見ました。けれども、私はどうしてもYの行爲を心から許す氣にはなれませんでした。

『Yの無遠慮もいゝけれど、此の頃のやうだと本當に閉口しますわ。』

私はよくOに向つてこぼしました。

『どうして？』

『どうしてつて、火鉢の中にペッ／＼と唾を吐いたり、ワザと泥足で椽側を歩いたり、さういふ意固地な眞似ばかりするんですもの下らない事だから氣にしずにゐようと思ふのですけれど、あの人のやり方は何處か不自然な處があつていやですもの。無邪氣でやるのなら、私そんなに氣になれやしないと思ひますわ。』

『うん、まあそんな處もあるね。だが、他の先生とちがつて、Yは僕等のこんな生活でも時々は矢張り癪に障るんだよ。やつぱり階級的反感さ。まあ出來るだけそんな事は氣にしない事だね。』

『えゝ、氣にしたつて仕樣はありませんけれどね。でも時々は本當に腹が立ちますよ。癪に障るつて云つても、あの人だつて、此處に來てずいぶんいゝ氣持さうな顔をしてゐるんぢやありませんか。』

私は折々Yが、明るい湯殿の中で大きな聲で流行歌などを歌ひながらはいつて、湯から上ると二階の椽側の籐椅子の上に寢ころんでとろけさうな顔をして日向ぼつこをしてゐる姿などを思ひ出しながら云ひました。

「無邪氣な、いゝ男なんだよ。だがあなたの氣にするやうなデリカシイはあの男には持ち合はせがないんだ。あなたのやうな人は、あんな男は、小說の中の人間でも見るようなつもりで、もつと距離をおいて見てゐるんだよ。さうすれば、あの男のいやな處だつて、だん〳〵に許せるようになるよ。あの男は本當の野蠻人だからね。あいつが山羊や、茶ア公とフザケてゐる時を御覽。一番面白さうだよ。すつかり仲間になり切つてゐるからね」

本當にそれは一番の愉快さうな時でした。彼は私の家の庭つゞきの廣い南向きの斜面の原つぱで、私共の大きな飼犬と山羊を相手にころがりまはりました、彼のがつしりした、私には寧ろ恐ろしい程な動物的な感じのする體が眞白な山羊の體と一緖に犬に追はれながら、まるで子供の體のやうにころがりまはるのです。さうしては靑い草の中に一ぱい陽をあびて、ゴロリと橫になつては犬をからかつてゐました。

二

Oは私にYを小說の中の人物の氣で觀てゐろと云ひました。私も稍やそれに似た氣持ちで觀てはゐましたけれど、そして又、彼の無知から來る子供らしい率直さを、充分に知る事は出來ましたけれど、それにも拘はらず彼の中に深く根さされてゐる、傍若無人に振舞つてゐる間にも、必ず他人の心の底を覗かうとする一種の狡猾さと、他の好意につけ込む圖々しさと、執拗さとにはどうしても眼をつぶる譯にはゆきませんでした。

けれども、其の時分、彼は非常な熱心さで運動をしてゐました。彼は同志の人の手を借りて小さなビラ代りの雜誌をつくりました。そして自分の家に南千住あたりの自由勞働者を大勢ひつぱつて來て、集合をしたり、演說會をしたりして、官憲の壓迫に反抗しながら勇敢に宣傳を續けて居りました。

彼の頭はメキ〳〵進みました。自分の姓名さへも滿足に書く事の出來ないYが、何時の間にか、六かしい理窟を、復雜

な言葉で、自由に話すやうになつたのには、誰も彼も感心しました。私共も、彼の執拗な質問にはなやまされましたが、それでも、一度腹に入つた理屈は立派に自分のものにコナしてしまふ頭を彼は持つてゐたのです。彼はどんな一寸した他人の言葉尻でも、決して空には聞き流しませんでした。同志の人達は、彼とは係りなしに話してゐるのに彼が横合から其の言葉尻を捕へて腑に落ちるまで問ひ糺さねばおかないので、大事な話をみなしにされる事がよくありました。けれども彼はその執拗な質問で自分の耳學問を進めて行つたのです。そして彼はその聞き噛つた理屈を自分の過去の生活にあてはめて見る事を忘れませんでした。彼の耳學問はさう云ふ風にしてだん／＼と物になつて來たのです。折々は、聞きかぢりの間違つた言葉や理屈でよく若い同志達に笑はれたりしましたが、それでも彼はそんな事では決して凹みはしませんでした。

當時私共の間には可なり大勢の勞働者達が集まつてゐましたけれど、大抵は印刷工でさうひどい筋肉勞働をする人達でもないし、その知的開發も可なり進んだ處まで受けてゐた人達が多かつたので、私共にはYのやうな、またYが集めるやうな、勞働者は非常に珍らしかつたのです。其の人々の疑は非常に單純で無知でしたけれど、其後私共が多く見て來た勞働者達とおなじやうに、私共の話すことは驚く程よく解るのでした。私共の力では到底及ばないそれ等の人々への宣傳に、Yの力が與つてゐたのは云ふまでもありません。その爲めに彼はOはじめ多くの同志達に充分認められてゐました。皆んなは可なりYを大事にしました。

それが覺て取つた時分から、Yの調子が少しづつ、變つて來たのが私には見えはじめました。彼の無遠慮にますく／＼嫌やな誇張が多くなつて來ました。彼はその頃にはもうわざとあかとあぶらで眞黒な着物を着てはゴロ／＼と疊の上に寢ころぶやうな眞似をし出しました。『虱なんかを嫌がつて、勞働運動もあるものか』と傲語しながらワザとかゆくもない體をボク／＼かくといふやうな誇張をはじめたのです。そして、其の眞面目な運動の話の方面にさへ大分誇張がまじつて

來ました。

新しい興味の多い勞働者への實際に夢中になつてゐる人達には、勿論そんな事はどうでもよく、氣もつかないやうでした。しかし『小説の中の人物のやうに』彼を見ようとして、始終彼に氣持の上の壓迫を受け續けてゐた私には、だん／＼と、彼が、勞働者の同志として、皆んなに大事がられる其の位置に、いゝ氣になり出して來たのが分りました。

三

Yを慢心させ、其後彼れをもつと惡い墮落に陷し入れたもう一つの大きな原因になつてゐるのは『警察が恐くない』といふ實に單純な一つの事實です。

それは、私共が、尾野川の家に越してから間もなくでした。Oは、何かの用事でYの家に行く事になりました。OはY以前に一度其の家へ行つて見て、是非私を其の家に連れてゆかうと云ひ出しました。當時Yは、淺草の田中町の小さな裏長屋に始終彼の啓發者であつたMさんと一緒に住んでゐました。

それは、四疊半一間の家でした。しかも其の四疊半の半分だけは板の間で、其處がまづ臺所と云ふ形で、つきあたりの押入れは半分が押入れで、あとの半分が便所と云ふ住居でした。露路をはいると、何んとも云ひやうのない一種の臭氣に閉口しながらYの家にはいつた私は其處でも、其の臭氣に惱まされ續けました。

話がはづんで、少し遲くなつて歸らうとするとYは泊つてゆけ、と頻りにとめるのです。私は其の無邪氣な申出に驚いてゐました。流石にMさんは、

『こんな處に泊めちや迷惑ぢやないか』

とYをとめてゐましいけれど、Yはそんな事には一向おかまひなしです。『くつつき合つて寢れば八人は寢られる』と彼

はムキになつて主張するのです

『後學の爲めだ、一つ我慢して泊つて見るか。』

とOは私を振りむいて云ひました。

『とんだ後學だなあ』

Mさんも私の顔を見ながら氣の毒さうに苦笑しました。

『此の邊の樣子が、夜でちつとも分らなかつたらう？　明日の朝もつとよく見て行く事にして泊らうか。大分おそくもあるやうだ。』

『えゝ』

私も仕方なしに、泊ることに贊成した。

其の外に私は一と晩中、うすい蒲團の中でゴロ寢の窮屈さと、子供を寒くないやうに窮屈でないやうに眠らす爲めに、寢返りをする事も出來ず、腰が半分しびれるやうな痛さを我慢して、どうして一人でも歸らなかつたらう、と後悔してゐました。

Mさんは早く仕事に出て行つてしまひました。Oも眠れなかつたと見えて子供が少し動くとすぐ振り返りました。Y一人は氣持よささうに眠つてゐました。

Yが起きると私等も帶をしめ直して、顔を洗ひに外に出ました。すらりとならんだ長屋の門なみに、人が立つてゐて私共を不思議さうに見てゐました。私は大急ぎで顔を洗ふと、逃げるやうに家の中にはいりました。

Yが近所の人から聞いた話だと、昨晩から、三人も刑事が露路の中にはいつて來てゐるので、長屋中で騷いでゐると云ふのです。間もなく私共は三人で外に出ました。

通りへ出て少し歩いてゐますと、私共の尾行が、すぐ後ろに三人くつついて來ます。

『尾くのは構はないがね、もう少し後へさがつて尾いて來て貰いたいね』

私はあんまり煩さいので、一人の男にさう云ひました。彼れはぷつと頰をふくらせて私を睨みつけました。私は構はず少し後れてゐたので、急いでYとOにおいつきました。

が、氣がつくと彼等はやはり直ぐ後ろから來ます。

『今云つた事が、お前さん達には分らないのかい？』

私は先刻の男を睨みながら云ひました。

『餘計な指圖は受けない。』

彼は憎々しく私に云ひ返しました。

『餘計な指圖？ お前さん達は、現に尾行をしながら尾行の原則を知らないのかい。尾行の方法を知らないのかい？』

『餘計な事を云はなくてもいゝ』

彼が恐ろしい顔付きをして云ひ終つたか終らないうちにOは其處まで引き返して來てゐました。

『何つ！ もう一ぺん云つて見ろ！ 何が餘計な事だ。貴樣等は他人の迷惑になるやうに尾行しろと云ひつけられたか。』

『迷惑だらうが迷惑であるまいが、此方は職務でやつてゐるんだ。』

彼は蒼くなつて肩を聳かしました。

『よし、貴樣のやうな奴は相手にはしない。來いつ！ 署長に談判してやる！』

Oはいきなり其の男の咽首をつかみました。

『何を亂暴な！』

と叫んだが、彼はもう抵抗し得ませんでした。あとの二人の奴は腑甲斐なく道の兩側に人目を避けるように別れて、オドオドした樣子をしてついて來ました。

往來の人達は、此の奇妙な光景をボンヤリして見てゐました。大抵の人達は、今首をしめられて、引きづられてゆく巡査の顏を見知つてゐるのです。

Ｙは眞青な顏をしてゐました。Ｏに日本堤の警察に案內するようにと云はれて　妙に臆したやうな表情をチラと見せてろくに口もきかず歩きました。それでも途中で一二度知つた人に訊かれると、

『何にね、彼奴が馬鹿だからね、これから警察へしよびいて行つてとつちめるのさ』

と一寸得意らしく說明してゐました。

日本堤署では早いので署長は出てゐませんでした。居合せた警部は、引きずられて來た尾行の顏を見ると逆上つてしまつて、ＯやＹの云ふ事には耳も藉さずに、のつけから檢束するなどとわめき立てました。私はその間にそつと出て、近所で署長の家を訪ねた。直ぐ分つたので、行くと署長はもう出かけようとしてゐる處でした。私は簡單にわけを話して直ぐ署の方に出かけるように促しました。其處にＯとＹが來ました。署長は案外話が分りました。私共は尾行をとりかへて歸つて來ました。

四

Ｙには、此の小さな出來事が、餘程深い感銘を與へたのか、其れから少しの間は絶えず此の事を吹聽して、警察は少しも恐れるに足らない』事を主張しました。皆んなには、これは苦笑の種でしたが、Ｙはそれから警察に對して急に強くなりました。そして一つ警察を凹ませてゆくたびに彼れは持ち前の雄辯を其處に持つてゆきました。彼の住んでゐるあたり

の人達は、世間一般の人達よりは一層警察を恐れる人達でした。其の眞中で、Yは充分に、同志の力を借りては、集會や演說會の度びに群つて來る警官の群を飜弄して見せて得意になつて居りました。みんなは、其の稚氣を、可なり大まかな心持ちで、笑話の種にしてゐました。

が、彼は大眞面目でした。彼は『警察が何んでもない』と云ふ事がどれ程彼等への注意を引くか、と云ふ事を熱心に說きました。彼の話は尤もな點がかなりにありました。彼の云ふ所によりますと、一般の勞働者階級が警察と云ふものにいぢめられてゐるのは、お話の外だ、と云ふのです。それで、彼等は極度に恐れてゐると同時に、極度にまた憎んでゐるのだ、だから、俺達が警察を相手に喧嘩する事は、彼等の興味をひきつける最上の手段だ、と云ふのです。彼はさう信ずると同時に かなり無茶に暴れました。けれども彼がその住んでゐた周圍のその驚異と興味の眼をどれ程得意でゐたかは。容易に想像の出來る事です。

警察は此の無茶な男を手こずり出しました。そして、早速に其の追拂ひの手段を講じかけました。同時に又、尾行の巡査達は此の男の爲めにしくじりを少くする爲めに、いろいろとするいやり方をはじめました。元來が非常に自惚れの强いこのお人好のYはすぐたの尾行のおだてに乘りはじめました。彼れは馬鹿にされ〱、自分だけはえらくなつた氣で威張つてゐました。それと同時に、彼の持つてゐるもう一面の狡猾さで圖々しさが拔目なく働き出して來ました。彼は尾行をおどかし〱電車賃を立替へさせたり、食べ物屋に案內させたりする事を、一人前の仲間になつたやうなつもりで誇り出しました。それと同時に、引き札がはりに撒くやうなその雜誌をつくるようになつて、彼は鍛冶屋を止めました。そしてその印刷費の幾分を廣告によらうとしました。

此の廣告集めは、彼の持つてゐる一面の危險性を知つてゐるOには一つの愛嬌の種でした。

『いゝ男だが、あの惡い方面が多く出て來るやうになると、運動から外れてしまふ』

Oはよくさう云つてゐました。けれども其の當時私共は、到底Yがそれをしないでもすむ程の助力をする事は出來なかつたのです。果して、Yはだん／＼に、其の惡辣な世間師的な圖々しさを發揮して來ました。それは、殊に、警察を彼がなめ切つてからはずん／＼輪をかけてゆきました。

彼が增長し出してから、折々苦い事を云ふのは、始終彼の傍で、彼を教育し、彼を助けて來たMさん、とUだけでした。流石の彼れも、年下でも、自分よりはずつと思慮分別も、知識も勝れたMさんには、一目も二目もおいてゐました。

けれども、やがて其のMさんも、半分さじを投げたやうな無關心の時が來ました。誰も彼れも、彼れの圖々しさにおそれを成して、彼れを避けて遁るやうになりました。が、彼れはこれを、自分のえらくなつたせいにしはじめたのです。其の頃に、彼れはもう、いゝかげん、同志の中の、持てあまされたタイラントでした。もう少し前のやうに、誰れも彼れを大事にするものはありませんでした。

五

丁度其の頃、Yはこの借家のゴタ／＼から問題を起して拘引されました。これは大正八年の夏の事で、勞働運動の盛んに起つて來た年の夏で、警視廳は躍起となつて、此の機運に乘じて運動を起さうとする社會主義者の檢擧に腐心したのです。そしてYと同時に、Oも次から次へと、樣々な罪名で取調べを受けてゐる時でした。Yは、直ぐに起訴されて收監されました。彼の稍や外れかゝつた生活狀態に、多少の疑慮を抱いてゐた同志は、みんないゝ機會が來た事をよろこびました。收監される前に、私が警視廳で會つた時、Yは非常な元氣でした。しかし、私は收監されてからの彼れの事を考へると可愛さうでした。彼は自分の名前をろくに書けないのです。彼はその以前に、私に、自分が姓名もろくに書けないので馬鹿にされる。といふ事を話して、原籍と姓名だけを書けるようになりたいから、チヤンとそのお手本を書いてくれ、と頼

んだ[illegible]があります。けれども、彼れのそのしほらしい試みで書いた私の手本が、恐らくはその日一日も彼れの慰めには落ちつかなかつたらうと云ふ事を、私はよく知つてゐます。彼は、用を辨えるのには熱心で、と云ふよりは寧ろ執拗でしたけれど、自分で本を讀めるようにならうと云ふやうな努力はまるでしませんでした。そんな手數のかゝる事は面倒でしかたがなかつたのです。

そんな彼れでしたから、彼れは同志に宛てたハガキ一枚書く事も出來なければ、また、折角貰つた手紙も讀む事が出來ないのです。そして、少しもだまつてゐる事の出來ない彼が、そのぢつとしてゐるに堪へ切れないその健康すぎる精力に滿ちた體を抱いて小さな檻房の中に押し込まれてゐるのです。その事を思ひやると、本當に可哀そうでした。

よく同志の世話の行き届くGは、彼れの為めにその易しい假名を選んで面會をしては彼れの面倒を見ました。Yには、印刷した假名がやつと讀める事がわかりました。でGは一生懸命に振り假名をした簡易な讀物を入れてやつたりしました。しかし、Yはもうその時にかなり耳學問で識が進んでゐました。それで、彼れによささうな讀物は、どんな初歩のやさしいものでも振假名をした本と云ふのはなかなかないのでした。あまりやさしいものだと、彼れは何んの考へもなく怒りました。

振假名を拾つて大骨を折つてする彼れの讀書の辛らさを思ひやつて、Gは或る時、肩のこらぬ面白さうなものを、と云ふので、講談に近い『西郷隆盛』か何かを差し入れた事がありました。彼れはそれを喜んで讀むかと思ひの外、彼れは非常に怒りました。『講談本なんぞを入れて貰ふと看守共が馬鹿にする。』と云ふのです。彼れの此の子供らしい單純な見榮にはみんなたゞ笑ふより仕方がありませんでした。そんな位なので彼れの讀み物をさがすのは、Gには大きな一つの重荷でした。獄中の同志に書物を差入れると云ふ事は、何んでもない簡單な事のやうに見えて、實はこれ程厄介な骨の折れる事はないのです。どうでもいゝ、たゞ讀むものを入れてやる、と云ふのならばまだしもです。少しでもみになるやうに無駄

をしないやうに、囚人としての心の覺悟から考への中に入れてするのは本當に一と仕事です。その骨の折れる氣入れの仕事でも、Gは『これ程骨の折れる事はない』とよくこぼしてゐました。が、Yは一向無頓着で、云ひたい丈けの我まゝを遠慮なく、と云ふよりはむしろ彼の持ちまへのあまりな騒々しさで押しつけました。彼れは日頃から公言してゐたように、牢にはいれば、同志はどんなにしてでも彼れの世話をしてもいゝ筈だといふ考へしか持つてゐなかつたのです。彼れは未決監にゐる間、出來るだけの我まゝをしつゞけました。

その間にOは捕へられたり放たれたりして、とう〳〵最後のコヂつけで、未決にゐましたが一審が終ると同時に保釋で出ました。が、Yは一審の判決がすむとすぐ既決に下つて中野の監獄に送られました。

彼は其處で六ケ月の刑期を送りました。既決に降つてからは、刑期中は仲間への消息は絶えました。彼れは振りがなの本を讀む事も許されず、手紙も書けませんでしたから。

六

彼が刑期を終へて出て來たのは、其次ぎの年の一月でした。私共は其の前年Oが保釋で出てゐる時にはじめて第一次の『勞働運動』を出してゐました。Oは十二月の末に入獄して留守でしたが、家には三四人の同志の人がゐて雜誌を繼續してゐたのです。出獄した彼は、他に歩く處もないので、暫く置く事にしました。流石のYも青白い牢上りらしい顏色をして、大分痩せて歸つて來ました。でも矢張り元氣よく珍らしかつた牢屋の生活をしきりに皆んなにして聞かせるのでした。その前に私はすでに二人ばかりの出獄者を迎へましたが獄中での生活は、一つ屋根のもとにある規則的な生活であるのにも拘はらず、みんなの話がめい〳〵に、その人らしい特色を強く表はしてゐて面白いのでした。殊に單純なYの、孤獨といふものをまるで知らないYの、強制された生活の感じは特別面白いのでし

た。

彼れは獄舍では、殆んど暴れとほしたと云ふ事でした。その刑期の最後の日まで彼は「減食」の罰を受けてゐたのださうです。しかもその罰は彼れがもう三日ゐなければ、おしまひにはならぬのだと彼は云つてゐました。獄中での唯一の彼れのおしやべりの時間は教誨師の訪問を受ける時でした。教誨師は彼れを頻りに説き伏せようとしました。が、博學な教誨師がいつも無學なYの理窟にまかされたのです。

『だけんど、俺がたつた一つ困つた事があつたんだ』

彼れはさう云つて私に話しました。

『俺のやうな無學な者にまけるもんだから奴よつぽど癪にさはつたんだね。或る時來て云ふには、「お前は、誰も彼れも平等で、他人の命令なんか、人間が聞いちやいけないと云つたな、命令をする奴なんぞがあるのは間違ひだと云つたなあ。だがねえ、例へば、人間の體と云ふものは、頭だの體だの手だの足だの、又體の中にはいろ〳〵な機關がはいつてゐる。そのいろんな部分がどうして働いてゆくかと云へば、腦の中に中樞といふものがあつて、其の命令で働いてゐるんだ。此の世の中だつて、やつぱりそれと同じだよ。命令中樞がなくちや、働かないんだ。」と斯う云ひやがるんだ。成程なあ、俺あそんな體の事なんか知らねえから返事に詰まつちやつたんだ。すると坊主の奴、どうだ、それに違ひないだらう」つてぬかしやがる。俺あ口惜しいけれど、默つてたんだ。すると「よく考へて見ろ、お前の云ふ事は確かに間違つてる」つて行つちまひやがつた。』

『さあ口惜しくてならねえ。斯うなれや仕事もくそもあるもんか。俺あそれから半日夜まで考へてやつと考へついたんだ。それから此度坊主が來た時に俺あ云つてやつた。「俺の云ふ事は間違つてやしねえ。俺は無學で人間の體がどういふ風に働くか知らねえが、うんと歩いてくたびれ切つた時にや、いくら歩かうと思つたつて、足が前に出やしねえ。手が痛い時に

や働かうと思つたつて働かねえや。またいくら食はうと思つて食つたつて、口までは食つたつて胃袋が反しちまふぜ。それでも何んでもかんでも奴の云ふ通りになるのかね。それからまたよしんば、方々で奴の云ふ事聞いて働くにした處でだね、その命令を聞く奴がゐなきあどうするんだい？　足があつての、手があつての、たあ、働くものがあつての中樞とか云ふもんぢやないか。中樞とか云ふ奴の己一人の力ぢやないぢやねえか。なら何處も此處も五分五分ぢやねえか、俺は間違つちやゐねえと思ふ」つて云つてやつたんだ。するとね、此度は坊主の奴が默つてしまひやがつて、其れから何んにも云はなかつた。」

彼れは何時も夢中になつて話すときには誰に向つてもさうであるやうにぞんさいな言葉でさう話しました。

「感心ね。よくでもそんな理屈が考へ出せてねえ」

「そりやもう口惜しいから一生懸命さ。どうです。間違つちやゐないでせう。」

七

彼れは未決にゐるうちにGさんが差し入れてくれた『平民科學』の感銘が深かつた事を頻りに話してゐました。さう云ふ學問の不思議と面白さを初めて知つたのです。同時に學者のえらさを頻りにほめ上げました。

丁度此の頃もう一人私の家には牢屋の中でうんと本をよんでえらくなつて來てゐた若いNといふ同志がゐました。Nは巣鴨の少年監でうんとやはり科學の本を讀んだのです。そして少年の驚くべき記憶力でもつて、大部分讀んだ事を記憶に殘してゐました。Yは此のNの知識を感心して聞いてゐました。

Yが家にゐるようになつたら――と思つて可なり心配した私も、すつかり落ちつゝたYを見て少からず驚きました。

彼れは朝晩代りばんこに皆でやる事になつてゐる炊事を、無料自分で引き受けました。そして牢屋で習慣づけられたと保り

に、雜巾などを擱つて臺所なども、案外きれいに片づけました。そして時々、い丶本があつたら讀んでくれ、と私に頼むのでした。

　けれども、Yに本を讀んでやる事は、誰にも辛抱が出來ませんでした。何故なら、彼はそのきいてゆくうちに疑問が出じてそれを質すまではい丶のですが、途中で何か感じた事があると、もう書物の事は忘れたやうに、三十分でも一時間でもひとりで、とんでもない感想をしやべりまくります。もしそれが年若いNでもあらうものなら、何時の間にか大變な大激論となつてしまひます。さうでなくとも到底、そのおしやべりの終りを待つて、後を讀みつゞけてやると云ふ辛抱は出來ないのです。

　しかし、私の感心は僅かの間に消えてしまひました。Yは健康がよくなると同時に狹い家の中一杯に擴がりはじめました。殊に最初から私共に對して持つてゐるひがみを表はしはじめました。其の頃すつかり健康を悪くして寢たり起きたりの狀態でゐた私が臺所に出られない時には、彼れは露骨に私を嫌がらすやうな、そして誰をも喜ばさない御馳走を傲然と押しつけるのでした。それから彼は又、食べ殘したむし返しの御飯や、食べ殘しものを、近所の安宿の泊客を連れて來てはほどこしをしてやるのです。彼は狹い臺所に胡坐をかいて、汚い乞食のやうな人達に私共は恥かしくて犬にしか出してやれないやうなものを食べさせながら彼は貧乏人の味方の主義を『說いて』聞かすのです。他の同志や私などが、あまりひどい御馳走を施してその上有りがた迷惑なお說教を聞かしたりする事を非難しましても、彼れは決して凹みはしませんでした。そしてその近所の二三軒ある安宿を訪問して、皆んなにお世辭をつかはれてすつかりおさまつてゐるのでした。其の安宿にゐる人達と云ふのは、血氣盛んな若い男なんぞは、藥にしたくもゐないで、みんなもうよぼ〱の便るところのない老人達ばかりでした。

　當時私共の家には四五人の同志がゐて仕事をしてゐましたけれど、私共の經濟は非常に苦しかつたのでした。雜誌も出

るには出ましたが、それで大勢の人が食べてゆく事などは到底出來ないのでした。廣告料や、Oの二三の本の印税や、彼方此方から受ける補助や、でやつとどうにかOの留守中を凌いで行つたのでした。その經濟狀態はみんなによくわかつてゐました。茶の間の茶だんすのひき出しに、何時も、ありがねが入れてありました。みんな、誰でも必要な小づかひは其處から勝手にとる事になつてゐました。が、私共の仲間では、誰れも、一錢も無駄な金を其處から持ち出す人はありませんでした。

私は、子供をひかへて居りますし、餘計な金も使ひますので、小づかひは全く別にして自分で持つてゐました。それも時々ひまをさいて書く原稿料や、印税の一部分や、知人達の補足でやう／＼足りてゆくやうな狀態でした。

Yは、此の經濟狀態の上に、最も露骨に私への反感を示して、自分の煙草代から小遣ひのすべてを、一錢も其の共同の會計からは取らずに、乏しい私の財布のみを常にねらふのでした。私は其の頃はもう、彼れの其の反感を充分に知つてゐましたので、何時も默つて出しました。彼れに云はせれば、私共の處にはいる原稿料や印税は、何んの勞力も拂はない金なのでした。で、彼は平氣で強奪してもかまはないのだと云つてゐました。私共がどれ程骨を折つて物を書いてゐるかなどと云ふ事は彼れの考慮の中には、はいらないのでした。

八

私に對する反感が露骨になつて來た頃から彼はまた同志に對しても、以前の無遠慮をとりかへして來ました。彼と若いNの激論が何日のやうに始まりました。そしてとう／＼彼れは私の家を去りました。

Yは其の時すでに、生活の方法を失つてゐました。彼れは再び鍛冶屋になつて働く氣をもう少しも持つてゐませんでした。止むを得ぬ事情の下におかれて、彼は同志の家で、食客の出來る家を轉々し初めました。三月の末に、Oが三月の刑

期を經へて出獄する頃には、私にはもうYの將來に對する望みは全く失くなつてゐました。が、それでもまだ、それ程ひどく、彼は自分の罪を悔みはづしてゐるようにも見えませんでした。

が、彼が明白にOに對する反感を表はし初めたのは、私共が曉町を引き拂ふのに前後した時分からでした。私はそんないやしい動機が直接の原因を成したとは云ひませんが、少くとも其の時に受けた不快な氣持が前々からの私共の生活に對する反感と一緒になつて、それ以後の私共の生活に對する批難になつたのではないかと云ふ疑問を一つ持つてゐます。

それはOが出獄してから幾日も經たないうちです。牢から出て來ると、彼は今まで極端に押へられた食物に對する慾望を滿す事で夢中でした。で、彼れは、出來るだけうまいものを食べる機會をねらつてゐました。彼れが早速に思ひついたのは、留守の間を働いてくれた人達の慰勞會をする事でした。彼れは私の手料理を望みましたので、その日取りの前日に私はOと一緒にその材料の買ひ出しに出かけました。

食物に飢ゑたOの眼には走りもの丶野菜が殊に眼をひきました。私達は筍や、さやえんどうや、茄子や、胡瓜や、そんなものを可なり買ひ込んで歸つて來ました。Oは、私が料理をするときには何時もするやうに、野菜物の下ごしらへの手つだひをしてゐました。其處にMさんがYを連れて見えました。

其の日招待した客は、内にゐる四五人と、他に雜誌の上に直接の援助を與へてくれた、二三の人達だけでした。それだけでも、私共の狹い家と乏しい器物では多すぎるのでしたが、更に二人のお客がふえた事は大變な番狂はせになります。私はいろ／＼思案をしながら、そして、今日の折角の慰勞會に無遠慮なYに割り込まれるのは困つた事だとおもひながら、働いてゐました。

すると間もなく二人のお客様は歸つてゆきました。

『歸りましたの？』

私に臺所にまたはいつて來たりを見上げながら訊ねました。

『あゝ歸つた。Ｙの奴Ｍが歸らうと云ふと、「三月だと云ふのに物の蔭なんか出て歸れるかい俺ぁ御馳走になつて歸るんだ」と云つたから、今日は君は招待された客ぢやないのだ、御馳走する事は出來ないから歸れつて歸してやつた。』

『困つた人ね』

私はたゞさういふよりほかはありませんでした。それと同時に圖々しいＹに對しては私は助かつた、と云ふ氣がした丈けでしたけれども、Ｍさんには何んとなく濟まない氣がしました。

間もなく私共は一時雜誌を中止して鎌倉へ引越しました。其の冬、第二次の『勞働運動』を初める迄に、二三度遊びに來ましたが、彼はもう何んとなく私共に反感を持つと同時に煙がつてゐました。そして歸りにはきつと乏しいＯの財布をはたかせたり、最後にはその上に着物までも質草に持つて行くやうな眞似をしました。

其の後彼はもう猛烈にＯの惡口を云つてゐる事を私共は知つてゐました。彼れは同志をとほしては、雜誌をはじめると云ふ事を口實に金を要求して來ました。が、Ｏは他人を通じての其の無心には一切耳を傾けませんでした。

Ｏが第二次の勞働運動を創めてからは、明かに敵意を示しはじめました。同時に自分でも雜誌をはじめましたが、それは、遂にＯの豫言どほりに、彼を正面的な運動から外して、一個のゴロツキとする直接の原因になりました。私共には地方の彼方此方の仲間の間まで歩きまはつて、彼が金を集めてゐると云ふ話を聞きました。やがて其の次には、彼がりや仲間を賣つたと云ふいろんな風評を聞くやうになりました。

彼がロシアへ立つ前、仲間の人々に對して働いた言語同斷な悉ゆる振舞ひは、もう人間としての一切の信用を墮すに充分でした。それ以後も、彼れはたゞ、今はもうさうせずには生きてゆく事が出來ない欺瞞で、自他ともに欺きながら生き

てゐるのです。彼はもう今はおそらく仲間や、少くとも仲間の人達が近い關係を持つてゐる人々の處では、何んの信用もつなぐ事の出來ない境遇に追ひ落されてゐます。

しかし、彼れの持ち前の圖々しさと自惚れは、まだ、彼れを其の墮落の淵に目ざめさす事が出來ないのです。私は彼の勇ましかつた、初期の運動に對する熱心さや、彼の持つてゐる、そして今は全く隱されてゐるその場所を思ふ度びに、彼れの爲めに惜しまずにはゐられません。が、邪道にそれた彼れの恥かしい恥知らずな過を、私は決して過失と見すごす事は出來ないのです。



下町娘の日記

加能作次郎

○月×日

矢張り自分はあの人を戀して居るのだらうか？　これが戀といふものだらうか？この變てこな、譯のわからぬ、いら〳〵と腹の立つやうなもどかしい遣瀨のない心持が……？それがみんなあの人を慕つて起つた氣持なのだから不思議でならない。

どうしてこんな氣持になつたのだらう。子供の時分、よく父や母に連れられて芝居に行つたものだが、その時、或る女が或る男に戀をして、それを相手の男には勿論、親にも兄弟にも他の誰にも打明けることが出來ず、ひとり小さな胸に秘めてくよく〳〵と懊惱煩悶し、果ては食は細り身體は瘦せ重い病の床に臥すやうになるといふのを時々見て、自分はどうしてもこんな馬鹿らしいことがあるものか、あれは噓に違ひない、芝居だからだと思はれてならなかつた。實際自分はその頃そんな芝居を見るのが馬鹿らしく、且つ癪に觸つた。第一退屈で、ちつとも面白くなかつた。

『お母さんもう詰らないから歸らうよ、こんな芝居ちつとも面白かないぢやないの、ようお母さん。』

かう言つてよく母を困らせたものだつた。

だが自分は此頃さうした娘の心持が解るやうになつて來た。今ならば、さうした芝居を見ても決して嘘とは思はないだらう、また飽きはしないだらう、もう歸らう、なんて一緒に行つた父や母などを困らすことなど決してないだらう。反對に今自分はさうした芝居を見ることを欲して居る。見ればきつとさうした娘に心から同感し同情し、一緒に泣くであらう。だが此頃どうしたものか、父や母は一寸もさうした芝居に自分を連れて行つて呉れない。のみならず、芝居や小説は若い者にはよくないと言つて、見せも讀ませもして呉れない。

○月×日

『……既にして自分は戀に惱んで居る自分自身を見出した。』といふ文句が、昨日友達の所でこつそり讀んだ小説本の中に書いてあつたが、それはその儘今の自分にあてはまる。やつぱり自分はあの人を戀して居るのだ。思へば恥かしい。寐ても醒めても、自分の眼からあの人の姿が消えない、そればかりか、何處に居ても何をして居ても、あの人の眼が、あのはつきりした涼しい眼が、自分の身のまはりに附きまとうて居るのを感ずる、まるであの人の監視を受けて居るやうに。そしてその眼に魅せられ引きつけられて、自分は殆ど身動きも出來ない……自分は本當にあの人を戀して居るのだ。

でも不思議なことだ、何時から何うして自分はあの人をばこんな風に懷しく思ふやうになつたのだらう。あの人は川向ふの油屋の一人息子、自分は、こちら側の紙屋の一人娘、子供の時分は、お互に仲の好い遊び友達、學校友達で、川の兩側をつないで居る小さな木の橋の上や川縁の柳の木の下などで、健ちやん美代ちやんと言つて仲好く遊んだのは事實だけれど、その時分はたゞ優しい善い人とばかり自分の胸に映つて居たに過ぎなかつた。それが年經て、あの人が何處やらの商業學

校へ行き、自分がお裁縫やお琴の師匠やへ通ふやうになつてからは、一緒に遊ぶことなどは言ふまでもなく、互に顔を合せ言葉を交すことも殆ど無くなつて、幾年といふものゝ間、自分の胸の鏡に、あの人の影など映つたこともなかつたのに……。

午後になると、朝から薄曇りして居た灰色の空から、白い粉雪が降り出した。急に寒くなつた。父と母とは奥の間に炬燵に入つて、世間話をして居た。自分はそれを幸にそつと二階へ上つた。そして靜かに、誰にもさとられまいとする隠した心持で、往來に面した格子窓の障子を細目に開けた。そして向ひの油屋の店先を見やつた。雪は徐々淡く、さら〳〵と庇の先などに音を立てゝ亂れ降つた。そして見る間に屋根の上も、地面の上も薄白くなつた。油屋の店には客もない様子で小僧が一人ぼんの店先の所にきちんと坐つて、ぼんやり外を眺めて居るきりであつた。小僧は時々大きな欠伸をしてゐた。あの人はどうしたらう、今日は、こんな雪降りの寒い日で客も少からうから、店へ出ないかも知れない。あゝ焦れつたい一寸位顔を見せて呉れてもよいに。何處かへ出掛けて居るのかしら？　そんな風に思ひながら、長い間格子にくつゝいて息をひそめるやうにして、ぢつと油屋の店先を見つめて居た。

はつとした。急に全身の血が湧きかへつて、顔が眞赤になつたのを感じた。あの人が奥から出て來たのだつた。そして、いつものやうに、先づこちらの、この自分の居る二階の方をぢつと見つめて、自分がかうして覗いて居るのを知るや知らずや、につこりと微笑して、それからセルか何かの鼠色の前掛をあてた着物の小褄を一寸はたくやうにして、帳場の前の火鉢の側に坐つた。色白の、鼻のつんと高い、細面のきりつとした顔、商人の息子らしく髪も短かく刈り込み、番頭か何かのやうに地味な質素な服装をして居るのも、如何にも好ましい。

あの人――健さん――は小僧に何か言つたやうだつた。小僧はすぐ立つて土間傳ひに奥の方へ入つて行つた。その後で

あの人は、片手を火鉢にかざしながら帳簿を調べ始めた。あゝその落付、た板についた様子のよさ！　自分は、赤いてがらの丸髷に、八丈か何かの荒い黄色棒縞の綿入を着た、すらつとした粋な容姿の女をその傍に描き並べて見た。奥の方との仕切の細い格子障子の蔭からそつと店へ出て來て、あの火鉢に白い兩手をかざし、しなやかな身體を稍々斜めに、火鉢にもたれるやうな姿態で、あの人の顔を覗きながら、嬉しさうに恥しさうににつこり笑ふ。……あゝ若しこの自分がさうだつたら何といふ幸福だらう！でもまあ、何といふ恥づべき妄想を描いたことだらう……！

あの人は長い間帳簿の頁をかへしたり算盤を彈いたりして居た。時々考へるやうに手を休めて、雪の降る往來を見やるのみで、この自分の方へ一度も眼を向けては呉れなかつた。自分がこゝにこんなにして、あの人のことを思ひながら身動きもしないで覗いて居るのを知らないのだから止むを得ないとしても、「さるにても心なのあの人よな」と恨みも言ひたい位だつた。どうかして自分を氣附かせる工風もがなといろ／＼考へた末に、袂から紙を取り出して、彈き玉ほどの礫を澤山作つた。

外には相變らず雪が降つて居た。自分はその紙礫を手にして、ぢつと油屋の店先を注視しながら、あの人が外の方を眺めた時に、それを往來に投げようといふ積りで、その機會を狙ひ待つて居た。二三度そんな機會が來たので、自分は慌てゝ格子の間から力任せに投げた。けれどもその紙礫が、ちら／＼と降る白い雪片に交つて、力弱く庇屋根の向ふへ落ちて行く頃には、あの人はもうまた元の様に帳簿の上に眼を移して居るので、いつかな眼に入る様子もなかつた。終に自分は情ないやら焦れつたいやらで、殘りの紙礫をやけ半分に、あの人の様子に關はず、續けさまに投げた。すると五つか六つ目の頃、ふとあの人は眼をあげてこちらを見た。私は驚き慌てゝ手を止めた、そして自分のしたことのあまりにはしたなさに自ら耻ぢて、胸をどき／＼させながら窓敷居の下に頭をかくした。あの人が自分のしたことに氣がついたらうか、更にまたその意味が通じたらうか、そんなことを思ふ暇もなかつた。

『千代や、千代や。』

この時階下から母の呼ぶ聲がした。自分は惡事をして居たところを見附けられでもしたやうに、自分にも可笑しな程慌てゝ階下へ降りて行つた。

『この寒いのに二階なんかに何をしてゐたんだい？ さつきから呼んでるのに返事もしないで。呼んだら返事をするもんだよ。』

『さう？ 一寸も聞えなかつたわ、何か用？』

自分は努めて平氣を裝うて答へた。

『おやつを買つて來たから食べな。』

母はやさしく言つた。自分はほつと胸を撫で下して炬燵に入つた。

○月×日

昨夜はどうしても眠られなかつた。眠らう〳〵とあせればあせるほど眠られなかつた。夜明頃にうと〳〵としたと思つたら、もう朝になつて居た、その爲でか、頭が石でも載せて居るやうに重く眼がチカ〳〵と痛んだ。自分はやけになつて上の毛を矢鱈にむしつた。簪の先で、頭の中心をチク〳〵と突つつくのが却つて氣持がよかつた。焦々して來て、ひとりでに歯が食ひしばられ、「イヽ」と言つて腦味噌の中までぐさと突き刺したくなつた位だつた。

朝飯がまづくてならなかつた。いつもおいしく食べる味噌汁が、妙に辛らつぽく、何となく無性に腹が立つた。

「今朝の御飯は隨分まづいのね、焚きそこなつたんぢやないの— それにお味噌汁が、いやに辛らつぽくて仕様がないわ」

と自分はぷり〳〵して言つた。

『まづけりや食べなければいゝぢやないか』と母がむつとしたやうに言つた。その答が一層自分を怒らした。そして益々不機嫌になつた。

『ぢや食べないわ。』

御飯も味噌汁も半分手をつけたまゝに自分はかたつと投げるやうに箸を捨てた。

『何んですそのざまは。赤ん坊ぢやあるまいし、食ひ殘すといふことがありますか。』と母はきつとなつてたしなめた。

『だつて食べられませんもの、不味けりや食なくていゝとお母さんも言つたぢやありませんか。』と自分は反抗的に言つた。

父は眞赤になつて怒り出した。

『馬鹿ツー　母樣それでいゝのか、そんな出鱈目な我儘を言つていゝつもりかー』

大きな恐しい眼で睨めつけて、今にも毆りつけさうな權幕だつた。

『綺麗に食べて了ひなさい。』

母は嚴かな中にも優しく、賺すやうに、父から自分を庇ふやうに言つた。

『だつて嫌なものを食べなんて無理ぢやありませんか。』と口まで出かゝつたのを無理に抑へつけて、自分は默つて、ぷり〳〵しながら茶をぶつかけて大急ぎでかき込んだ。

父は苦りきつた顏をして默つて睨んで居た。母も矢張り無言で、憫れ顏で見てゐた。

自分は逃げるやうに二階へ駈けあがつた。そして座布團を二枚敷き並べてその上に寢轉んだ。たゞ何かなしに悲しく情なく、そして無暗に癪に觸つた。蟀谷のところが、づきん〳〵と痛んだ、わつと大聲で泣きたいやうな、喚き叫びたいやうな氣持で、何度も〳〵髮の毛をかきむしつた。

いきなり自分は起き上つた。そして机の上から硯箱と紙とを取りおろし、筆に墨をたつぷりつけて、『馬鹿』と大きくなすりつけた。尚は續けて、(馬鹿、馬鹿、馬鹿……)と幾つも〳〵やけになつて書きなぐつた。と幾らか氣持が靜まつた。

ふと氣がつくと、自分はいつの間にか、あの人の名前を、紙一ぱいに無數に書いて居るのだつた。

(健さん、健さん、戀しき健造さま、淸水、淸水、淸水、淸水健造、千代、千代、千代子、淸水千代子、淸水健造妻千代子……)

そんな風に書いて居るのだつた。少しの餘白もなく、書いた上に又書き〳〵して、遂に紙一面に眞黑になるまで書きつぶした。

いつの間にか眠つたと見える。ふと眼がさめると、何だか身體が重くなつて居るのを感じた。氣がつくと、夜具が二枚かゝつて居た。

『母がかけて與れたのだ。』

さう氣がつくと、自分は有難さに、思はず淚がこぼれた。そして今朝の自分の我儘を濟まなくも思ひ、恥かしくも思つた。もうお晝だつた。

『今朝はほんとうに我儘言つて濟まなかつたわね、どうしてあんな氣になつたか自分でも解らないのよ、氣を惡くしないで御忍して頂戴ね。』

自分は階下へ行つて素直に謝まつた。

『寢るのなら、ちやんと寢床を敷いて暖くして寢なけりやいけないよ。あんなところにうたゝねして居ては風を引くもとだよ。』

母はさう優しく言つた。父もすつかり機嫌が直つて居た。

晝飯がおいしく食べられた。

○月×日

……だがどうしたらいゝだらう。この辛い切ない燃ゆる思ひを、あの人に知られることもなく、自分一人の小さな胸に秘めて悶えて居らねばならぬとは！ 片戀とはこのことを言ふのであらうか？ 何とかしてこの切ない戀の情を打ち明けることは出來ないものだらうか……

だが、あゝ駄目、駄目、あの人は一人息子、自分は一人娘、到底添ひ遂げることの出來る互の身ではないのだもの……

あゝ胸が痛む 張り裂けるほどに痛む。

○月×日

まあ、何といふ恐しい、併しまた嬉しい光景であつたらう。前後(あとさき)のことはまるで分らない、何でも恐しい大地震に續いて大火災が起り、東京全市が瞬く間に一面の燒野原になつて了つた。自分は何處を何う逃げまどうて居たものか、二日二晩も飲まず食はず、へと／＼に疲れきつて、何處とも知らず無我夢中にさまよひ歩いて居た。もう東京から十里も二十里も離れた遠くへ來て居たらしかつた。そしてもうどうにも動けなくなつて、ある工場の下に打ち倒れた。背後は見上げるやうに高い大きな崖が無限に續いて居り、前にはその崖に沿うて鐵道線路が横はり、その向うが見渡す限りの廣い曠野になつて居て、その曠野の果てが東京らしく、炎々たる火焰が眞赤に物凄く天を焦して居た。

自分は只一人だつた 父も母も居なかつた。二人とも燒け死んで了つたのであつた。地震と同時に自分は夢中で裸のまま往來へ飛び出した。そして前 電線の柳の木につかまつてやつと身を支へ、ふと後を振り返ると、家がぺしやんこになつて倒れて了つて居た。そして潰れた家の屋根の下の方から、恐らく父母等の救ひを求める聲であらう、何とも言へない

氣味の惡るい物凄い叫聲が聞えて居た。自分の家ばかりでなく、あたり近所の家々が皆な同じやうに倒潰して、濛々たる土煙が空に立ち罩め、そこら中から同じやうな悲鳴が、まるで旋風のやうに起つて居た。自分はあまりの恐しさに却つて泣けもせず、只だ狂人の如く地團駄を踏んでそこらを駈けめぐるだけだつたが　その中すぐ隣家から火が起つて、瞬く間にそこに炎々たる紅蓮の焔がぺらぺらと自分の家を包め盡し、見る間にそこら一面火の海と化して了つた。自分は最早どうすることも出來ず、父や母のことを思ふ暇もなく、裸足のまゝ無我夢中に焔の下を潜り、煙に巻かれながら行先も知らずに此處まで逃げのびたのであつた。

自分は失神狀態になつてぽかんとして居た。無慘に壓し潰され且つ燒死した父のことも母のことも頭にはなかつた。殊に恐しいことも何ともなかつた。只だ何がなしに寂しく悲しかつた。

それから何うして何うなつたか少しも分らないが、ふと自分は見知らぬ一人の若い男の人と一緒に、矢張り廣い野原の一部だつたが、何處とも知れず歩いて居る自分を見出した、と思ふと、不思議にもその若い男の人は、いつの間にか川向ふの花屋の健造さんになつて居るではないか！　自分は夢かとばかり驚喜して、思はず健造さんに抱きついた。健造さんも嬉しいと言つて自分を堅く抱きしめて吳れた。健造さんは今迄隨分自分を探し廻つて步いたのだと言つた。見渡す限り一面の焦土に燒け盡した東京の市中を、尋ね人の札を立てゝ二日二晩、夜も晝も寢もせず休みもせずに探し步いたが、どうしてもめぐり會はず、もう到底駄目だと諦めて、田舍の親類を頼つて行くところだと言つた。健造さんの家も、健造さん一人逃げ出したきりで、他の人は皆な死んで了つたといふことだつた。

『どうしませう。』と私は言つた。

『どうしようもない。あんたの家も、私の家も、皆な燒け死んで了つて、あんたと私とだけになつた、死んだ者は今更幾ら悲しんでも惜しんでも生き返つても來ず、追付きもしたいから、これから私達は一緒になつて、兩方の家を始めから建

て直しませう。』と健造さんが言つた。

『一緒と仰有ると……？』私は耻らひながら尋ねた。

『そりや……そりや言ふまでもないぢやありませんか。』と健造さんはにこつと笑ひながら私の手を固く握りしめた。

『本當ですか？』

『本當ですとも！　だからこそあんたを二日二晩も寝ずに探して歩いたんぢやありませんか。』

『まあ嬉しい。そんなに私のことを思つて居て下すつたんですか。』

『えゝ。』

『私も隨分あなたを思つて居りましたのよ。嬉しいわ、やつと思が……』

『私も……』

自分達は恐しい地震のことも火事のことも、互の兩親達のことも忘れて、互に緊く／＼相抱擁した。そして自分の唇の上に、全身の血が湧き立つやうな、ぼうと酔はされるやうな、何とも言へない甘い微妙な觸感が感ぜられた……

と思つた瞬間に、自分は仄暗い二燭の電燈のあかりの下に、天鵞絨の夜着の襟に顔を埋めて寝て居る自分に氣がついた。

『まあ嫌だ、夢だつたのか。』と自分は尚ほ夢とも思はれぬやうな氣持で、ぼんやり部屋中を見廻した。だが矢張り夢だつた。いつもの二階の部屋で一人寝て居るのに違ひなかつた。自分は長い間その奇怪な、そして恐しい而も嬉しい夢の後を追うた。前半の物凄い恐しい光景が段々消えて行つて、後半ばかりが、益々濃く自分の眼の前に描き出された。そして夢の覺め際に味つた、あの何とも言ひ知れぬ心をときめかし身をとろかすやうな微妙な唇頭の觸感を、もう一度現實に味つて見たいとの欲求に驅られて、自分は眼を閉ぢ頭を後に垂れて、自分自身で夢見心地になるやうに努めながら、夜着の天鵞絨の襟をそつと唇の上に當てゝ見た。だが何等の感觸もなかつた。自分は馬鹿らしくなり腹が立ち、無性に焦立しくな

つて、身體を左右にのた打ちまはらしながら、強く／＼太股をつねりつけた。

だがあの夢のやうなことが本當に起つたらどうだらう、父も母も家の下敷になつて、燒け死んで了ふなんて、あんな恐しいことが夢であつて與れて、本當に難有いと思つた。が同時に後の半分を思ふと、夢であつたことが此上もなく殘念でもあつた。どうせ自分とあの人とはあんな異常な大災にでもなければ、とても添ひ遂げられない間柄なのだ、さう思ふとたまらなく悲しく情なかつた。そしてあゝした恐しい災厄が起つても、この自分の秘めたる戀が遂げられることが望ましいやうな氣にもなつた。

○月×日

もう幾日も／＼あの人の顏を見ない。毎日々々二階の窓格子の間から覗いて居るけれど、どうしたものか、あの人は一寸も店へ姿をあらはさない、若しや病氣でもして居るのではないかしら？ 何だか心配だ、たとひ物が言へなくとも こちらの心が通じなくても、顏さへ姿さへ見られれば、嬉しいのだがそれで心が、安まるのだが、もう十日ばかりといふもの、お互に掛け違ふのか、一度もあの店先へあの人の出て居るのを見たことがない。樣子を知りたくも、それと打ち明けて聞くわけにもいかず、實際苦しい。昨日もぼんやりと心を奪はれたやうに外を覗いて居ると、いつの間にか二階へ上つて來たのか小僧の繁三がすぐ耳元で、『お千代さん、階下でお內儀さんがお呼びです。』と言はれたので、思はずぎよつとして振り返ると、繁三も自分の只ならぬ樣子に吃驚して、『どうなさつたんです』とおろ／＼聲で尋ねた、『どうもしないよ、どうして！』と、言ふと『何だかお顏の色が眞蒼ですから。』と言はれたほどだつた。

夕方から、どうも氣分がすぐれないので床を取つて寢た。母が心配して、どうしたのか、何處がどう惡いのかと尋ねた自分は何處も何ともない、只だ少し氣分がすぐれないだけだと答へた。でも母はそれ位で中々安心せず、いろ／＼と執こく

容態を尋ねた。そして醫者に診て貰ふことを勸めた。自分は極力それを斷つた。
『お前は此頃どうかしてやしないか、何か心配なことか氣にかゝることがあるのぢやないかね。』と母が尋ねた。
『いゝえ、一寸もそんなことありやしないわ。』と自分はどきつとしながら答へた。
『でも、何だか顔色も惡いし、始終ぼんやりと考へ込んでばかり居るからさ。』
『さう？　そんなことないわ。何でもないのよ、心配しないで頂戴よ。』
『そんならいゝけれど、氣をつけてお呉れよ。若し何か心配なことでもあるなら、母さんにそつと言つた方がいゝよ。』
自分は、自分が懸に惱んで居るのを既に父にも母にもさとられて居るやうな氣がした。そして恥しくて顔も上げ得なかつた。
『父さんも、此頃お前の樣子が變つて居るので、何處か惡るいのではないかと心配して居なさるよ、父さんは、お前の前ではあゝ嚴しくして居なさるけれど、あれで仲々お前を思つて居なさるのだよ。これまでどもお前が少し病氣でもすると、大變心配して、やれ葡萄酒でも飮ませの、スープを取つてやれの、玉子を食べさせのと、それは〳〵煩さい位私に世話を燒くんだよ、だからね、何處か惡るいなら、お醫者に來て貰ふとか何とかして、父さんにも安心させて呉れなけりや困るよ。』と母はしみ〳〵とした調子で言つた。
私は涙を流した。

○月×日
今日も朝から寐て居た。朝、お粥を少し食べたきりで、晝飯も晩飯も食べなかつた。夕飯の時母が生玉子を二個持つて來て、

『ちやお前の好きな玉子を持つて來たから生で一つおあがりな。』と勸めた。そして早速その一つを割らうとした。

『いゝえ、欲しくありません。』と自分は遮ぎつた。

『そんなこと言はないで、厭でも無理に一つおあがりよ、ちつとは何か食べないと、身體が弱つて了ふよ。さあ、好い子だから、一つだけおあがり。』と母は恰も子供をあやすやうに言ひながら玉子一つ小皿の上に割つた。

『いや　食べたくない、』

自分は素氣なく刎ねつけた。それでも母は頻りに勸めた。自分は母の親切が却つて煩さくてならなかつた。そして母が強いて小皿を自分の口元へ持つて來かけたので、急にむか〳〵腹が立つて來て、

『煩さいッ！　食べたくないつたら食べたくないことよ！』

さう言ひさま　殆ど無意識に力を入れて母の手を拂つた。小皿は飛んで、枕元に近い壁にぶつかつた。生玉子は母の膝頭から疊の上にかけて、どろつとこぼれた。自分は眼がくら〳〵とした。もう夢中だつた。母は物も言はずに果然と口を開けたまゝ自分を見つめた。だが決して怒らなかつた。自分は母の眼に大きな涙を見た。

『勘忍して下さい。』

自分はさう言つて頭からすつぽり夜具を被つた。そして泣き出した。止め度なく泣いた。母は何かぶつ〳〵言ひながら階下へ降りて行つた。

自分は遣瀬なく悲しかつた。

『お前は幾ら悶えても苦しんでも泣いても、到底お前の戀は遂げられないよ。お前がどんなにあの男を思つて居ても、さきではちつともお前のことなんか思つてやしないよ。お前が一人娘で、あの男一人息子で、尋常には添ふことが出來ないばかりか、あの男は外に言ひ交した女があるんだよ。いつまでもくよ〳〵思つて居ないで、好い加減に斷念めて、了へ、

なけりや死んで了へ。』

　とから心の中で一つの聲が言つた。

『いや／＼さうぢやない、熱心一つだ、お前があの男とどうしても夫婦にならずには置かないと、死ぬ位の堅い決心と熱情とを以てぶつかつて行けば、きつとあの男はお前のものになるのだ。一人で悶え苦しんで居ないで、大膽に打ち明けよ、愚圖々々して居ると逃げてしまふぞ。』

　斯う別の聲が激勵した。自分は後の聲の方に餘計耳を傾けた。だがどうしてあの人に打明けることが出來よう？　もとより自分の口から父や母にそれと打明けられるものではなし、あゝ、こんな時に、昔の芝居に見るやうに、よく氣心を知つた乳母か何かゞ居て、自分の心を察して戀つと二人の戀の手引をして、呉れたなら……などとまで空想した。

○月×日

　食慾は益々なくなり、眠られぬ夜が夜に續いた。自分は段々痩せ細つて來た。それが自分にもよく分つた。そして毎日ぶら／＼と、大方は力なく夜着の中に身を埋めて居た。自分は最早あの人のことで今迄のやうに苦しみ悶えはしなかつた。只默つて、痩せ細つて行く自分の胸を眺めて居るだけになつた。だがその痩せて行く胸に、あの人の影が、姿が、益々濃く濃くなつて行くのは言ふまでもなかつた。

　自分は本當に戀病に罹つて居るのだ。

『一體あの子はどうしたんでせうね。此頃はちつとも御飯も食べないで、何處が惡るいといふのでもなく、只だあゝしてぶら／＼して居ますがどうしたらいゝでせうね。』

　母が心配さうに父に言つて居た。

『俺もそれについて内々心配して居るのだが、どうしたのか、さつぱり樣子が分らないな。』

『お醫者さんに診て貰へと言つても肯かないし、私にも一向樣子が分らないので心配でなりません、たつた一人しか無い子ですから、若しものことがあつたりしては大變ですわ。』

『まさかそんなこともあるまいが……』

そんな會話を聞くと、自分の痩せた胸は更に別樣の痛みを覺えた。こんなことで兩親にまで心配をかけて居るのが濟まないと思つた。無理に起きて、元氣を裝はうとしても駄目だつた。

自分は漠然と死を豫想した。この儘死んで了ふやうな氣がした。そしてそれを恐れも悲しみもしなかつた。寧ろそれを望みさへした。父や母の嘆き悲しみを思ひやると、たまらない氣がしたが、誰にも打ち明けることが出來ず、こんなに一人で苦しんで居るよりは、いつそ死んだ方がましだと思つた。

だが自分は何といふ馬鹿な女だらう。戀を打ち明けて、それが容れられないで、つまり失戀でもして苦しんで居るのならまだいいが、こちらの心を知らせもせず、また先方の心も知らずに、只だ自分勝手に一人でくよ／＼悶え苦しんで居るなんて、こんな馬鹿氣たことがあらうか。殊に互に一人息子と一人娘で到底駄目だらうなどを悲觀して居るなんて、今時こんな小膽な舊式な考へに囚はれて居る女なんか、此の廣い世界中に自分の外に一人もあるまい。今時の新しいハイカラな教育を受けた女は、恐らく自由に大膽に男と交際もし、戀もし、またその戀を思のまゝに實行することであらう。かうと思ひ込んだら世間の思惑などに頓着なく、どんな犧牲を拂つても、その思を遂げずに居ないのが本當ではあるまいか。けれども、けれども、自分には到底そんなことが出來ない。こないだ夢に見たやうな、あんな恐しい異常な天災でも起らなければ……

夕方突然醫者が來て自分を面食はせた。併し脈で應でも診察を受けねばならない羽目になつた。自分は横になつたまゝ醫者の言ふまゝに手を出したり舌を出したり胸をはだけたりした。醫者は自分に容態をちつとも訊ねなかつた。恐らくそれは父や母から何もかも話したのであらう。それは自分にとつては好都合だつた。醫者は默つたまゝ丁寧に身體中を診た。たゞ一言『お通じは？』と尋ねたゞけだつた。それに對して、自分は只だ『はあ、あります』と答へたゞけだつた。

『はゝあ、なるほど。』

醫者は最後にかう獨りうなづいて、にたつと薄氣味の惡るい笑を漏らした。そして手早く聽診器などを黑い手鞄の中へしまひ込んで隣室へ退いた。

一體あの醫者は自分の病氣を何と診斷したらう。脈を見たり聽診器を胸に當てたり、背中を叩いたりお腹を押へたりした位で、この胸の心の秘密が分るのかしら？　自分は可笑しいやうな恐しいやうな氣がした。

父や母の、自分の容態について聽いて居るらしい聲が、ぼそ〳〵と隣室から聞えた。自分は耳を欹てたが、醫者の聲が小さくてはつきり聞き取れなかつた。

『まあ、併しさう御心配なさるやうなことはあるまいと思ひます。なるべく呑氣に、氣を平にしていらつしやるやうに。

醫者は終ひにかう稍々大きな聲で言つて辭し去つた。

型の如く水藥と散藥とが二日分宛持ち來された。別に夜眠られない時に服めといつて頓服の粉藥が三包添へてあつたこんな藥位で治る位ならと、自分は頭から馬鹿にして、進んで服まうといふ氣にはなれなかつた。けれども母がやかましく強いるので、その氣休めに、毒にもなるまいと思つて水藥をぐつと一口服んだ。苦いやうな酸つぱいやうな、これといつて捉へどころのない、何とも得體の知れない變てこな、また頼ない味だつた。

自分は急に情なくなつて、聲をあげて泣き出したくなつた。

（大正十二年十月）



蜘蛛と蜻蜓（童話）

廣津和郎

ある眞夏の午後のことでした。

頭の上から照りつける暑い日光に、道は乾き切つて、人が通る度毎に、綿のやうな埃がぽてぽてと足にまつはるやうな日でした

水を撒いても地面は一寸も濕らず、その撒かれた水が蓮の葉に溜る露のやうに、小さな薄黒い玉となつて、乾いた砂埃の上にぴよこりぴよこりと轉がつてゐました。

人通りが杜絶えて、時々頭に帽子をかぶされた驢馬が、埃にまみれながら、荷車を引いて行くのが、チラリホラリと見えるばかり。……そしてその荷車の上には、歩き疲れた馬曳がだらりと兩足を垂れながら腰をかけて、車の動く度に、こくりこくりと居眠りした頭を振つてゐます。

それ位に暑い眞夏の午後のことでした。

或池の縁の櫻の並木の凉しい葉蔭で、一尾の緋鯉が晝寝をしてゐました。

恐らく他の鯉達もみんな晝寝をしてゐるのでせう。食ひ荒された金魚麩が、處々にとぼけ

たやうに浮んでゐるだけで、魚らしい姿は、廣い池の面の何處にも見えませんでした。

それだから、ほんたうに運が好かつたと云はなければなりません。丁度その時、一匹のげじげじがその池の中に落ち込んで、今にも溺れ死なうとしてゐたのです。若し鯉や緋鯉の群に見つかつたら、げじげじは忽ちの中に、魚共の腹中に呑み込まれてしまふに相違ありません。

げじげじは苦し紛れに、

『助けて呉れえ！　助けて呉れえ！』と聲を限りに叫びながら、救ひを求めてゐました。

何しろ物みなが靜まり返つた眞夏の午後です。誰ひとり助けて呉れる者はありません。返事をして呉れる者もありません。がぶりがぶりと水を呑む度に、げじげじの救ひを求める聲は、哀れや次第に弱く、次第にか細くなつて行きました。

死んでなるものか、さう思つてげじげじは一生懸命でした。

時々水の上を渡る微風が、げじげじの苦しみなどは知らん顔をして、冷淡なさらさらと云ふ音を、櫻の葉に立てゝゐました。

何處かに藻でも浮いてゐないかと、苦しい間にもげじげじは四邊を見まはして見ましたが、何處にもそれらしいものはありません。唯水の底の方には、何やら水草が深く薄氣味惡く茂つてゐて、それがゆらりゆらりと動いてゐましたが、それはげじげじには見るから物凄いものでした。今にもその蔭から恐ろしいものが現れ出て來て、一口に自分を呑んでしまひさうな氣がしました。

と、丁度その時、ギラギラ光る水の面に、銀のやうな細皺の小波が立つたかと思ふと、その波紋がすうつと、勢よくこつちへ走つて來ました。一陣の風が颯と強く吹いたのです。櫻の梢がひと頻り烈しくさわめきました。と思ふ間もなく二三枚の葉がひらひらと水の面に落ちて來ました。

突然起つた風と小波とに、げじげじは不意を喰つて、水の中に潜り込んで、苦しい喘ぎを續けてゐましたが、漸く浮び上つて見ると、自分の眼の直ぐ前に、一枚の櫻の葉が浮いてゐるのが見えました。そこで無我夢中でその方へ泳ぎ出しました。

烈しい風の去つた後には、その名殘りの微風がそよそよ吹いてゐます。可哀さうに、げじげじの泳ぐ早さよりも、その微風に吹かれて水の上を走る櫻の葉の方が、もつと早かつたのです。いくら泳いでも、櫻の葉がだんだん自分から遠ざかつて行くのを見ると。げじげじは心細くて堪まりませんでした。折角の助け船に出會ひながら、それに縋りつく事が出來ないとは、何と云ふ情ない事だらう。——げじげじはもうすつかり絶望してしまひました。が、此處でへこたれてしまつてなるものかと、無理にも勇氣を出して、尙も葉の後を追つて行きました。

すると好い鹽梅に、水草の頭が一寸水の面に浮び出てゐるところがありました。それにぶつかると、今まで走つてゐた櫻の葉が、急にぴたり立止つてしまひました。——げじげじは一生懸命の努力の後で、たうとうその櫻の葉に縋りつく事か出來ました。そしてその上に這ひ上つて、やれ嬉しやと思ふと、今まで張りつめてゐた氣がゆるんだものか、そのまま茫ッと氣が遠くなつてしまひました。

水草の頭から離れて、再び櫻の葉が微風のまにまに水面の上を動き始めても、げじげじは氣がつきませんでした。

それから彼是一時間以上も經つたでせう。

ぢりぢりと燒きつくやうな暑氣のために、ふと我に返つたげじげじは、物珍しげに四邊を見まはしました。頭が未だぼんやりしてゐました。何でも自分が、緣の草の上を歩いてゐる中に、急に足を滑らして、池の中に落ちこんだ事ははつきりしてゐますが、その後が遠い世界の事のやうにすつかりぼんやりしてしまつて、何が何やら解りませんでした。自分がどうして櫻の葉の上に乘つて、水の上を漂つてゐるのか、それが不思議な氣がしました。何しろ、助かつたのは何より嬉

しいと思ひました。

けれども、見渡すと、そこは岸から遠く離れた水面です。櫻の葉は微風のまにまに動いてゐて、思ふやうに岸の方へは行つて呉れません。どうして岸に辿りついたらいいだらう、と云ふ心配が、又もやげじげじの心を惱まし始めました。おまけに、頭がはつきりして來るにつれて、ひどく空腹を感じ始めました。考へて見ると、朝から未だ何も食べないのでした。そして空腹と共に、身體は綿のやうに疲れを覺えて來ました。

こんな風にして、日が暮れでもしたら、どんなに心細いだらうと思ひました。今はもう何時頃だらうと、不圖頭を上げて太陽を見上げました。するとその拍子に、自分の頭の上の方に櫻の梢が垂れ下つてゐるのが眼に入りました。それは池の縁の並木の中でも最も大きい老木で、岸から遠く離れたこんなところにまで、その梢を擴げてゐるのでした。どうかしてあの梢に飛びうつれないものかと思つて、げじげじはぢつと下から見上げてゐましたが、三尺も離れてゐるところまで飛び上る術は、げじげじにはありませんでした。――無念さうに暫く梢を見上げてゐたげじげじは、その梢にまん丸く網を擴げてゐる蜘蛛の巣を見つけました。

そよそよと風が渡る度に、蜘蛛の巣はかすかに搖れて、銀色に光りました。

『締めたぞ！　ひとつ此奴を利用して、梢に上つてやらう。梢に上ればもう大丈夫だ。枝から幹を傳はつて行けば、容易く岸に歸ることが出來る。――そして場合によつたら、あの蜘蛛の奴を食つてやらう。丁度お腹もぺこぺこだ。暫く蜘蛛の御馳走にも有りつかないから、今日は久しぶりでうんと腹を肥やしてやらう！』

げじげじは心ひそかにかう思ふと、非常に愉快になつて來ました。だが、根が狡猾なげじげじの事ですから、そんな事は色にも出さず、如何にも憐れつぽい聲を出して、

『もうし、もうし、蜘蛛さん！　もうし、もうし、蜘蛛さん！　どうか後生ですからお助け下さい！』と呼びかけました

併し蜘蛛も亦負けず劣らずに狡猾なので、すつかり承知してゐながら返事をしませんでした。返事をしないどころか、葉蔭に隠れてしまつて、そこからぢつとげじげじの樣子を窺つてゐました。

そして親蜘蛛が囁くやうに子蜘蛛達にこんな事を云ひました。

『たうとうあの間拔な奴も氣がついたやうだね。あの憐れつぽい聲はどうだい。いつでも俺達の邪魔をして、俺達の領分の小虫を橫取りしてしまふ癖をして、今更助けて呉れもないものだ。虫が好いとは彼奴のことだ。――だが、お前達はどう思ふ? 可哀さうだから助けてやらうか。それともあのまま見殺しにしてやらうか。ええ、子供達、お前達の意見を聞かして呉れ!』

三匹の子蜘蛛達は口々に呟きました。

『あんな奴、助けてやつて堪るもんですか』と一番兄の子蜘蛛が云ひました、

『この前も網にかからうとした蚊を、側からぴよいとちよつかいを出して取つてしまつたのは、彼奴ですよ。生かして置いて堪るもんですか?』と二番目の子蜘蛛が云ひました。

三番目の末つ子の子蜘蛛は、兄弟中で一番腕白者でした。

『お父さん。僕はげじげじが食べたいな。だつて、僕お腹が空つて堪らないんだもの。僕にげじげじ食べさせて頂戴よ。よう、よう!』から云つてせがみました。

それを聞いた二匹の子蜘蛛も、急に勇み立つて、

『さうだ、それが一番好いや。お父さん、僕も食べたい!』

『僕も食べたい。よう、食べさせてよう! ほんたうに暫くげじげじ食べないんだもの。だから今日はげじげじを御馳走してよう!』

三匹の子蜘蛛達、せがむのを聞くと、親蜘蛛もその氣になりました。

『よしよし、そんなに食べたければ、今日はげじげじの御馳走と極めよう。――あれ一匹あれば家中で食べられるから、他の餌食を探す世話がなくなつて丁度好い!』

丁度その時、又、

『もうし、もうし、蜘蛛さん、深切な蜘蛛さん! どうかお助け下さい。後でお禮は何なりと致します。御恩は一生忘れません!』

と憐れげに叫んでゐるげじげじの聲が聞えました。

『行け、行け、やつつけろ!』と血氣にはやる子蜘蛛達は立騒ぎました。

『そんなに騒いだつて駄目だよ。お前達は騒がずに、默つて此處で見てゐで、お父さんがこれから行つて、うまく此處に引つぱつて來るからね。呼ばない限りは下りて來るんぢやないよ』

蜘蛛はかう云つて子蜘蛛達をなだめてから、げじげじに向つて、

『今助けに行つて上げるから、待つてなさい!』

さう云つたかと思ふと、身を翻して、尾からするすると銀色の糸を出しながら、水面に漂ふ櫻の葉の上に下りて行きました。

『一寸どうしたんです? 大變な事でしたね。でもまあ、助かつて結構です。さあ、早く早く私の肩にお乗りなさい。ほんたうにあなたは好運ですよ。全く命拾ひをしましたね』

梢の上の子蜘蛛達は、此事件の成行を固唾を飲んで見守つてゐました。

『ほんとうに有難うございます。何とお禮の申しやうもありません。では失禮させて頂きます』

げじげじはさも有難いと云ふやうな聲を出して、そのまま蜘蛛の肩に乘りました。蜘蛛の肉の匂ひがぷんと鼻に來ました。何しろ腹がへつてゐるから堪りません。お腹の中がぐいぐいと鳴ります。――それで初めは蜘蛛に負はれて梢までは連れて行つて貰つて、その上で蜘蛛を食つてしまふつもりでゐましたが、もう我慢がならなくなりました。それにもう一つは、うかうかと梢まで上つて行つても、うつかり蜘蛛の巣の中に入つてしまつたら、それこそ不自由です。巣の中に入ると、蜘蛛と云ふ奴は縱横自在で、力が十倍にも二十倍にもなりますから、到底敵ひません。――今は此池の中からどうして岸に脱れるかと云ふ事は第二の問題になつてしまつて、何しろ此處で蜘蛛に不意打は喰はして、自分のお腹を肥さうと云ふ事の方が、急務になつてしまひました。

それで、丁度蜘蛛が、

『あなたは大分重いやうですから、一つ私の子供達を呼んで、手傳つて貰ふ事にしませう。だから、一寸待つて下さい』

かう云つて、梢にゐる子蜘蛛達を呼ぶために上を向いた隙を狙つて、げじげじの澤山の手は、いきなり蜘蛛の喉を締めつけました。吃驚して蜘蛛が飛び上ると、げじげじは隙かさず蜘蛛の糸を切つてしまひました。

切られた蜘蛛の糸は、風にゆらゆらと搖れながら、銀色に光つてゐます。

『何をするんだ！』と蜘蛛は喘ぎ喘ぎ叫びました。

『間拔野郎奴！　貴樣等の晝寢をうかがつて櫻の木に昇つたのを知らないのか。うつかり滑つて池に落ちなけりや、今頃は貴樣等あ皆殺しだつたんだ！』かうげじげじは威丈高になつてたんかを切りました。

『何を拔かしやがるんだ、恩知らず奴。人が助けてやらうとする深切も辨へないで、よくもよくも不意打を喰はせやがつたな。――かうなつてはもう勘辨出來ない。さあ、尋常に勝負をしろ！』と蜘蛛も六本の足をしつかと踏み締めながら怒鳴り返しました。

二匹の虫は、一枚の櫻の葉の端と端とに陣取つて互に身構へました。――互に睨み合つて隙を窺つてゐますが、さて兩方ともなかなか隙がない。一體なら蜘蛛一匹ぐらゐに負ける自分ではないんだと思つても、すつかり手足が疲れ切つてゐるので、げじげじは自分から仕かけようとする氣力がない。蜘蛛は自分の巣の網の中なら、それこそどんな敵でも屁とも思はないが、巣の外では、何だか勝手が惡い。殊に相手は名にし負ふ荒武者のげじげじです。――迂濶に手出しをしたらどんな目に會はないとも限らない。

そこで、相手におくれを取るまいと思つて互に張り合ふのは、言葉ばかりです。

『おい、げじげじの野郎！ 手前もそんな卑怯な男とは今の今まで思はなかつた。憐れつぽい聲で、助けて呉れえ、助けて呉れえと人に油斷をさせて置いて、いきなり後から不意打とは、なめくじにも劣つた女々しい野郎だ！』と蜘蛛が云へば、

『ふざけた事拔しやがるねえ。手前こそ網なんか張りやがつて、罪もなく戯れ飛んでる蝶々や蟬を騙し討ちにしやがるぢやねえか。――この娑婆の戰場に生れて、どだい不意打もへちまもあるもんか。腹が空つたら餌食を探すのが娑婆の掟なんだ。こんな池の中に漂流してゐては、いつ岸に辿りつけるやも解らない。手前一匹食つて置けば、後一日や二日は命がつゞくと云ふものだ。その中には助ける神も現はれて來るだらう。それもどうだか解りやしないが、――此櫻の葉の上でアテもない救ひを待つ身の上を考へて見ろ。若し空を飛びまはる燕にでも見つかつたら、忽ち引攫はれねえとも限らねえどうせ燕の餌食になるかも知れねえ身の上で、何で慈悲もへちまもあるものか。――まあ、俺の眼に留つたのが手前の身の不運だと觀念して、下手にぢたばた足搔かずに往生しろ！』とげじげじ。

蜘蛛はせせら笑つて、

『云はせて置けば、小癪な事を！ 手前こそ身の程知らねえうつけ者だ！ いいか、そんなら俺も俺の魂膽を聞かせてや

らうか。どうせ手前の命は風前のともしびだ。よく耳をほじくつて、死後の思ひ出に聞いて置け。――手前を救つてやら

* * *

食はうと云ふのが、俺達の腹なんだ。げじげじの御馳走にも暫くあずからねえと云つて、俺の可愛い子供達は、それ、あの梢の上で鼻をひくひくさせてゐらあ。――手前は今どうせ燕に食はれる身の上だと云ひやがつたが、それや好い覺悟だそれだけ覺悟が出來てゐれば、燕に食はれようと、俺達に食はれようと、食はれるお前には變りはあるめえ……』

『ははは』とげじげじは笑ひ出した。『手前だつて、燕に食はれる身をしやがつて、何を云つてやがるんだ。――かうして互に怒鳴り合つてゐる間にも、燕が來れば、お前も俺も同じ運命だ。――だが、そんな事はどうでも好い、さあ、食はれるか食はれねえか、手前と俺との一勝負だ！』

と云ふより早く、げじげじは千本の手を揃へて、一時にぴよいと蜘蛛の上に襲ひかかつて行きました。が、蜘蛛もさる者、輕く身をかはしながら、

『下りて來い！　下りて來い！』と上の梢に待つてゐる子蜘蛛達に大聲に怒鳴つて、それから六本の足でげじげじの上に躍りかかりました。二匹は上になり下になりして、櫻の葉の上で戰つてゐます。――櫻の葉はひらひらと搖れて、小さな波紋がその動搖から、四方に擴がつて行きます。

子蜘蛛達は親蜘蛛の聲を聞くと、降つて來るやうに下りて來ました。が、丁度風が吹いて來たので、三匹ともそれに吹かれて、なかなか思ふやうに櫻の葉の上に行く事が出來ません。何しろ身が輕過ぎるので、いくら櫻の下に下りやうと思つても、それから三尺も四尺も離れたところに飛ばされて行つてしまひます。でも、やつとの事で、その中の一匹が櫻の葉の上に、うまく取付かうとした時でした。

水の面が薄赤くなつて來たと思ふと、ぷくりと眞赤な緋鯉が浮き出しました。それは大きな大きな緋鯉でした。

『折角人が晝寢をしてゐるのに、煩い奴等だなあ。たうとう眼を覺まさせやがつた！』こんな事を呟き呟き、櫻の葉の上を一寸覗くやうにしましたが、『ははあ、蜘蛛とげじげじの喧嘩か。馬鹿野郎共だなあ！』

そして櫻の葉の周圍を二三回廻りました。けれども、夢中になつて爭てゐる二匹の敵味方には、それが氣がつきませんでした。併し、やがて二匹はそれを知ると、戰も忘れたやうに、櫻の葉の上で縮み上つてしまひました。

『お前が馬鹿だからさ。お前がこんな騷ぎを起すからさ』と蜘蛛が云ひました。

『馬鹿云へ、お前が騷ぐからだ』とげじげじは忌々しさうに云ひました。だが二匹はもう生きてゐる色もなく、悄氣切つてしまひました。

『緋鯉さん、緋鯉さん、げじげじが餘り慾深だからこんな事になつたのです。どうか私の命はお助け下さい。どうかお願ひですからお見逃し下さい』と蜘蛛は六本の足を縮まらしながら、緋鯉に哀願しました。

『いえ、いえ、違ひます、違ひます。この蜘蛛が馬鹿だからこんな事になつたのです。緋鯉さん、私だけはどうか食べないで下さい。どんな事でも致します。御恩は一生忘れません』とげじげじは長い身體をくるくると丸くして恐縮しながら涙聲で言ひました。

緋鯉は冷淡な顔をして、悠々と尙も二回ほど櫻の葉のまはりを廻つてゐましたが、

『お前達は何と言ふ馬鹿野郎共だ！　腹が空つてゐるのはお前達や燕ばかりぢやないんだぜ。この俺だつて腹が空つてるんだ。――さあ、馬鹿者共、覺悟をしろッ！』と言つたかと思ふと、ぐいと一口に、櫻の葉ごとげじげじと蜘蛛とを呑んでしまひました。そして大きく波紋を描いて水が搖れたかと思ふと、そのまま緋鯉の姿は水底深く消えて行つてしまひました。

三匹の子蜘蛛は、餘りにその出來事が唐突(だしぬけ)で意外だつたので、呆氣に取られたまま默つて水面を見つめてゐました。何

だか夢のやうな氣がして、ほんとうの事ではなく、何か嘘事のやうな心持がしました。今にも自分達の父親が、水底から浮び上つて來るやうな氣がしてなりませんでした。

水面は再びもとの鏡のやうな靜けさに返りました。暫くすると、ぶくぶくと小さな水泡が底の方から昇つて來て、それにつゞいて櫻の葉がひらりと水面に浮き上つて來ました。

子蜘蛛共は、その葉が浮いたのを見ると、急に眼頭が熱くなつて來ました。今更のやうに事實がはつきり解つて來ました。

『お父さんは緋鯉に食べられてしまつたのかしら？』

一番小さな子蜘蛛が獨言のやうにかう言つて、しくしく泣き出しました。が他の二匹の子蜘蛛は何とも返事をしないで梢から垂れ下つてゐる銀色の糸を傳はつて、靜かに靜かに上へ昇つて行きました。――ぼんやりと水面に浮んでゐる櫻の葉を怨めしさうに眺めながら……。（終）



休職看護長

加藤一夫

一

夏はもう酣であつた。

方々の學校は休みになり、會社員も短くはあるが、休暇を與へられ、高位の官吏は勿論、どんな下級な事務員も五日や十日の休暇は與へられた。學生はその間を利用して、山に登つたり、海に遊んだりして、研究と健康との兩方を獲得しようとし、さうでないものは、暑くるしい塵埃だらけの都會を去つて、空氣の清げな、周圍の靜寂な、そして父母兄妹親戚の住むで居る鄕里に歸つて、殺風景な下宿生活から溫い家庭生活に荒みゆく心を潤ほし慰めようとし、會社の重役や官廳の高位顯官達は膚もまだ冷たい時分から家族をひつくるめて、娯樂や遊藝の設備の備つて居る避暑地に暑さを忘れ、それ丈の餘裕のないものも――比較的地位のある官吏、會社員、そ

れから富裕な商人、恩給で生きて居る遊民、地主、家主、金貸等――六疊一間の間代が二十圓、三十圓、五十圓、百圓とする樣な海水浴場に先を爭つて避暑し、もつと下級な事務員格のものも、解放された僅かばかりの時を何うかして有効に使ひ度いと云ふ心から、又、平生は日の目も見ない大きな薄暗い建物の中に執務して、損はれる丈け損つた健康を快復したいと云ふ願ひから、成るべく金のかゝらぬ、人の行かない、よい健康地を覓めてそこに出かけたり、近縣の山岳めぐりをしたりなどするのであつた。

休職看護長西脇進の務めて居る傳染病研究所の博士技師達も、避暑と云ふ程の事は出來ないにしても、各々受持ちの研究を、成るべく涼しい山奧や海岸に於いて進めるやうにと出かけて行つたものも少くはなかつた。

けれど、その年は殊の外傳染病の流行が猖獗で、入院患者の治療や黴菌の檢査や血精の製造やに追はれて、大部分は休暇さへ取れずに、毎日のやうに此の研究所に通はねばならなかつた。ことに、博士や博士候補者達の下に居て、その仕事のアッシスタントをして居る下級醫員や、技手や事務員の忙しさは想像の外だつた。彼等は、暑さのためにふやけ切つた肉體と精神とに鞭打つて、朝は七時八時から、晩は五時六時までも、暑いさかりを、酷烈な夏の日のさす窓下や、風通しのわるい蒸しいきれのする事務室で、帳面をつけなり、博士達の研究材料となる――そして彼等自身にとつては何の必要もなければ興味もないところの――幾種かの黴菌を培養したり、それを顯微鏡下におさめたり、それに彩色を施したりしなければならなかつた。

毎日のやうに患者は入院させられた。毎日のやうに幾人かの人命が失はれた。そしてその度に之等下級吏員の仕事はふやされた。

「何て蒸し暑いんだらうなあ、今日も亦」

「こんな暑い日に仕事をさせられちやたまつたもんぢやないなあ」

「馬鹿にしてやがらあ。世間の奴等はみな、海水浴だとか温泉浴だとか云つてしやれ込んで居るのに、我々ばかり此處蒸し熱いところで死人のお世話や傳染病患者をいぢらされてばかり居るんだよ」

「まかり間違つて、病氣に感染でもして地獄のお伴でもさせられちや、完全に云ひ分はないや」

こんな風の會話が、あちらでもこちらでも取りかはされた。けれど、彼等はそれを何うにもする事が出來なかつた。彼等の口を乾上がらさないためには、可愛い妻子に憂き眼を見さゝないためには、たとひどんな厭な仕事にも、どんな苦しい仕事にでも、追ひたてられる牛馬のやうにたゞ默々として從はねばならなかつた。

流行病は何時まで經つても撲滅されなかつた。彼等の勞苦は增やされる一方であつた。今に休暇がとれる、今に休暇がとれる、と云つた儚い希望も、今はもう絕對に駄目だと思はねばならなくなつた。

失望と不滿と運命に對する反感とが、彼等の心の中でもく〳〵と成長して行つた。けれど、彼等の中には誰一人敢然起つて此の內心の憤りを爆發させ得るものはなかつた。そしてその結果、彼等の元氣と精勵とが殺がれて行くばかりであつた。

二

しかし、厭々ながら仕事をつゞけて居るのは決して彼等ばかりではなかつた。彼等の上に立つて、一切の仕事を處理して行く者も、病人の治療に從ふものも、折角の休みを臺なしにされてしまつた事に、仕方がないのだと云ふ事は、重々承知して居ながら、考へると馬鹿臭くつて仕様がなかつた。たゞ、これ等の病人のうちに自分の研究に重大なる價値をもつた資料を見出した博士達ばかりは、面に些少の厭惡をも見せないばかりでなく、緊張した精力と昂奮した神經とをもつて、暑さも忘れ研究に沒頭して居るのだつた。そして、自分の仕事を扶ける筈の助手や技手や看護婦達の怠慢とだらけ切つた

動作とを見る度に腹を立てた。

彼等は時々、顯微鏡下の黴菌の彩色が間違つて居るのを見た。記錄がとづけもなく誤つて居るのに出くはした。病人の手當てが彼等の命じた樣に行はれて居ないのを知つた。そしてその度に彼等は、彼等の助手達が、自分等には何の興味もなく利益もない仕事を、當然休まれ得る時間さへ奪はれて、たゞ彼等のためにして居るのだと云つた樣な事には少しの理解もなく、同情もなく、たゞ彼等が職務に忠實でないと云ふ事を怒つた。

「そんな不忠實な事ぢや仕方がないぢやないか。これ位の暑さが何です。研究のためには、人はどんな危險と勞苦をでも拂はねば駄目だ。これ位の事にヘコたれる樣な事では迚も駄目だ」

こんな風に彼等はその部下を叱つた。しかしその叱咤は部下を刺戟する事はなかつた。——何だ、研究とは何だ。一體誰のための研究だ。かう云つた考へが、意識的にも無意識的にもその下級者達の心の中に在つた。そして、依然、彼等はブツ〳〵呟きながら怠けて居た。中には、それは兎も角、病人がかうして病氣に苦しむで居るのだから、一生懸命、それ等のものゝ爲めに働かなければならん、と思つて、有りつたけの精力をしぼつて働かうとするものがあつても、彼は既に餘りに此の暑氣の中に働きすぎて居た。そして、さうした力はもう彼等の中から湧き立つて來ないのだつた。

所長や部長や博士達は、躍起となつて仕事の成績を上げようとした。けれど、凡ては皆徒勞だつた。

或る日彼等は、所員達がみんな一日の勞苦を終へて歸つて行つた後で、圖らずもみんな一つの醫員室に落ち合つた。そしてお互に、此頃の仕事の成績のあがらない事を喞ち初めた。

「此の一番大切な時に此麼ことでは仕樣がない。第一これでは患者に對してすまない、また、我々の研究はすつかり無駄になつてしまふ」

と、そのうちの一人が云つた。

「此頃の者は皆　眞の向上心がないんだね。從つて努力と云ふ事もないんだよ」

と他の一人が云つた、するとまた、一人の年とつた博士が、憤慨してそれに附加へた。

「いや、これは謂ゆる新思想家だとか、社會運動者だとか云ふものがいけないんだ。彼等は人間の能力の差別を認めないで、何でも彼もで平等々々と云ふものだから、此頃の勞働者だとか事務員だとかの低劣な頭の所有者達までもつけ上つて來て、不平を云ひ出し、實際また不滿でたまらないんだね。それで、我々の所員もそれにかぶれてしまつたんだよ。……何うもいかん。平等を語るのはいゝが、惡平等は眞平だよ」

優れた能力の所有者たる學者達の多くは彼の說に贊成した。そして只管に新思想の惡用を痛罵した。

しかし其處に、たつた一人、彼等の談論には仲間入りをしないで、他の者なら他人にやらせる仕事を自分でやつて居た眉目清秀の若い博士が、その時、急ぎペンを擱いて彼等の談論の中に加つて

「僕はさう思はないねえ」と出し拔けに云つて皆の顏をのぞき込んだ。「彼等の怠慢は僕から云はせれば當り前だね。第一此の暑いのに彼等の仕事と云つたら平生の二倍も三倍もあるぢやないか。君等の云ふ事は無理だよ。餘り虫がよすぎるよ」

若い博士の言葉には確信があつた。そして彼が自分の意見を吐露する時には常に、どこまでもそれを通さずには置かない癖があつた。それを知つて居た他の博士達は成るべく彼等を敬遠して彼の意見にはさからはない事にして居た。彼等は云ひ合せた樣に此の若い博士の議論には正面からぶつからなかつた。

「やあ、また例のM君の人道主義かね」

と彼と向ひ合せになつて居た博士がカラカウ樣に云つた。

「いや、M君はもう、人道主義を通り超して社會主義だよ。今に過激派の主領にでもなるかも知れないよ」

と、何時も一番よくMと議論を鬪はせる、Mとは大分違つた方面の研究をして居る、今一人の若い博士が、それに附け

加へた。

Mはそれ等の反對論にめげずに、堂々と大膽に彼の所信を述べ、助手や事務員のために氣焰を吐いた。そして彼は、最後の結論として云つた。

「要するにお互ひに疲れすぎて居るんだ。しかし今のところ休暇を取ると云ふ事はお互に誰も出來ない。だから僕は思ふんだ。せめて一日なりとも、みんなに慰勞の宴でも開いてやるといゝと。そんな事をしても何にもならんと云へばならんが精神的に幾分かいゝ結果を得られないとも限らん」

「それはいゝだらう」と、Mに一番楯をついてゐた博士が和した。

博士達も實はたまにはさうした息抜かしを必要として居た。ことに彼等のうちには、時たま赤坂や新橋に遊びに行く連中すらもあつた。

議は容易に纏つた。

「さう決まつたら成るべく早い方がいゝな。善はいそげだ」

所長もそれに贊成して云つた。

三

土曜日だつた。

その日は朝から人夫が來て、研究所構内の廣ツ場に――そこにはポプラの並木が緑濃い葉をひろげて居た。そしてその下には毛氈を敷きつめた様な美しい芝が密生して居た――杭が打込まれ、大きな、幾つかの天幕が張られた。ビールだとかサイダアだとかが幾箱となく運ばれた。果物や氷の店も芝生の上に張られた。

事務室や病室では、助手達や技手達、事務員等が朝からゴタ〳〵と物せわしく立ち働いて居た。博士達も、病室の受持ちの者の外は、自分の研究をお晝までに打ち切る手筈をきめてかゝつて居た。

所長は時々天幕の張られてあるところへ出かけて行つて、自ら此處は何うしろとか、彼處は何うしろとか命令した。

おひる時になると、所長始め、博士技師達から事務員小使に至るまで、みんなが、その宴會場へと繰り出して行つた。

「やあ、これは涼しさうに出來た」

と風に飄る幕や、チリン〳〵となつて居る硝子の簾を張つた氷店などを見て、口々にかう叫び合つた。

どの顔にもどの顔にも、喜ばしさうな晴々とした色が浮んでゐた。

近處の料理屋からは、夏向きのさつぱりとした小料理が運ばれて來た。そしてそれを廣い芝生の上にずらツと並べてまはつた。

强烈な夏の日はカン〳〵と照つて居た。薄暗い室内にばかり閉ぢこもつて居る彼等には、その光が强すぎた。ことに屋根瓦や樹々の綠葉に反射する光は、神經衰弱にかゝつた彼等の眼を痛々しく感ぜしめた。けれど、この日は風がひつきりなしに吹いたので、暑さを感ずる事は少なかつた。

「いゝ風ですなあ」

「實にいゝ氣持ですなあ」

「しかしこれが街中だつたらたまらないぜ。塵埃がたつて……」

みんな晴々とした顔で、まだ十分に準備の出來てない會場をあちこちと歩きまはりながら話し合つた。

白金の高臺には、近來めつきり人家が增えたが、まだ〳〵幽邃な感じを與へる大樹の森は破壞されずに殘つて居た。轉づる小鳥の眠さうな聲がそこから洩れて來た。小さな窪地と池とを隔てた向ふ側の丘からは、S女學院の何とも言へぬ細い

柔かな響きを傳へる鐘が傳つて來た。

「明日は日曜だな、何處かへ遊びに行かないか」

「うむ行かう。何處へ行かう。いつそ今日から行つたら何うだ」

「馬鹿に景氣のいゝ事を言ふね、おごるなら行くぞ」

「二三日前が月給日だつたぢやないか。」

「月給が二三日も懐の中にとまつて居てたまるもんか」

こんな事を話し合つて居る群もあつた。

ビールの大瓶が運ばれた。瓶詰の日本酒も運ばれた、食事の準備はすつかり成つた。そのうち、七八名の濃化粧した紅裙連もやつて來た。

みんなは芝生の上に安樂をかいて坐つた。若い妓達(をんな)はビールや酒を注いでまはつた。

「おビールに致しませうか、御酒に致しませうか」

藝者達は訊いた。

「駒勇は今日は何うした？」

かなりもうお馴みになつて居る若い博士が自分のところへ來た妓に訊いた。

「姉さんは今日、少し加減がわるいの、Yさんによろしくつて言つて居ましたわ」

と妓は答へた。

「やあ、お安くないねえ、Y」

と傍から誰かゞからかつた。

「ぢやあ、月子姉さんに來て呉れつて言つて來い。あのHさんが待つて居ますからつて……」

とYは復讐的に言つた。

一通り酌がすむと、藝者達は自然と若い博士達の側へ集つて行つた。助手達の群もかなり賑つて居た。けれど、休職看護長西脇なんかの、身窄らしい風をした中年者のところへは寄りつきもしなかつた。

西脇は獨り寂しさうに好きな日本酒を取りよせて獨酌で飲んだ。そして、あまりいけない周圍の連中にも強いた。

「西脇さんは大分いけさうですねえ」

西脇と一緒に血精製造の手傳ひをさゝれて居る若い男が言つた。

「もう駄目でさあ、若い時には隨分やりましたがねえ。」と西脇は人のいゝ顔をあげてそれに答へた「貧乏をして居ちや酒ものめないんで　仕方なしに飲まないで居ると、何時の間にか量が落ちてしまひました。もつとも身體の弱つた所依もありませうがねえ」

「でも、西脇さんは好きなんでせう」

と他の者が訊いた。

「好きですねえ。何しろ親讓りですからねえ。」

「晩酌をやりますか」

「晩酌なんかやつて溜りますか、さうでなくてさへ不足勝ちですもの」

「ぢや、隨分苦しいでせう」

「此頃ぢやもう諦めたが、それでもやつぱり斯うした機會に出くはすと喉から手が出さうですよ」

「それぢや、まあしつかりお飲りなさい」と若い仲間が正宗の瓶を取り上げて西脇に酌をした。酌をしながら彼は附加へ

た。「私のやうなものぢやお氣に入らないでせうが……まあ一杯うけて下さい。そのうち美しいのが來ますよ」

「馬鹿にしてやがるなあ、本當に」ともう大分醉がまはつた西脇は、藝者たちに取り捲かれて、何か盛んに笑ひさゞめいて居る博士達や助手達の群の方を睨みながら、吐き出すやうに云つた。

「あんな偉さうな顔をして居ても女には直ぐ參つてしまふんだなあ　ざまあないや」と今一人の若い男がそれに贊成した

「そりやさうだよ」と西脇は鄭く眼で相手を覗き込みながら、ニヤ〳〵する上半身をのしかゝる樣に前につき出して言つた「博士だつて我々だつて生地のまゝぢや些つとも變つた事はない。たゞ、あの連中は財産があつて學校に行けて、何一つ心配なしに勉强が出來たから博士になれたまでだよ。俺達だつて、若しあの連中のやうに勉强が出來さへすりや、もつと偉くなれて居るんだよ」

「要するに我々は運がわるいんですねえ。こんな風にもつて生れたんですから」

「そこでぢや」と西脇は更に、昂奮して續けた「苟もたゞ運のいゝか拙いかによるものであつて、我々のして居る仕事が同樣に大切なものであつて見れば、我々だつても、と尊重されていゝ筈ぢやないかな」

　また二三人の藝者がやつて來て、西脇等の前を通つた。それに眼がつくと西脇はすかさず

「姐さん」

と聲をかけた。

　妓達はちよつと顔をその一群に向けたが、何も答へずにサツサともつと奧の方へ、他の妓達の集つて居るところへと過ぎて行つた。

「おい姐さん」と西脇は一段聲をはり上げて叫んだ「そつちの方にやもう行く必要がないんだ。ちつたあ此方へも來てお酌してくんな」

「今、直ぐに」

十五六の雛妓らしいのが、いゝ加減な返事をした。そしてそのまゝ足を早めて若い博士達の方へ行つてしまつた、

「こんな身穿らしい風をして居ちや、ふられますよ西脇さん」と若い仲間が慰める様に言つた。それよりも西脇さん、好きな酒でもちびり〳〵やる方が氣がきいてますぜ」

「全くだ。何、俺だつてあんな者に來てもらはない方がいゝんだよ。たゞ、癪だから言つたまでだよ」と西脇はまた身體をグニヤ〳〵させて答へた「だが何だな、兎に角、こんな事つぢや、俺なんかは迚も食つて行けないが、何うだ、一つみんなして月給の增額をせまらうぢやないか。此頃はやるストライキのやうによ」

「さうだな、やつてもいゝな」「西脇さんに一つ賴むんだな」

こんな風に、色々の答が仲間からもれた。けれど誰も本氣に西脇に同意して、運動を始めようとするものがない様に見えた。

西脇はそれを見てガツカリした。——何と言ふ弱虫等だらう。上官の機嫌ばかり取つて引き上げてもらはふと言ふ卑劣な奴等め、と彼は心の中で憤つた。そして、憎惡に充ちた口調で言ひ放つた。

「同じ仕事をして居るんぢやないか。博士の仕事が重要なら我々の仕事だつて同じぢやないか。それでも君等は默つてるつもりか、意氣地なし奴」

「博士の仕事と我々の仕事との重要さは違ふよ」

西脇と同年輩位の男が言つた。

「違ふものか。違つてたまるものか。第一君等は、博士の仕事と、我々の仕事とを、別々の樣な事を言ふが、決して別々ぢやないぞ。我々はみな博士達と同じ仕事をして居るんだぞ。だから、我々が彼等のために働いてやらない限り、彼等の

仕事は出來ないんだぞ。何を云つてるんだい、馬鹿が！」

「西脇さんは偉いよ。博士と同等だ相だからな」

仲間は口々に罵つた。そして、西脇が段々と醉がまはつて兇暴になりかけたのを見て、それを避けるために一人減り二人減りして次第に彼の周圍を離れてしまつた。

「馬鹿が、意氣地なし奴が！」

西脇はかう口の中で呟きながら、正宗の瓶を引きよせて更に獨酌でチビリ／＼と飮んだ。そしてグニャ／＼とする首を膝の上に立てた左の手でうけて、眼をつぶりながら何か考へて居る樣だつたが、やがて又急に思ひついた樣に、左手に盃を持ち、右手に瓶をさげて、ヨチ／＼とした足取りで事務員達の群の居るところへと出かけて行つた。

彼はその盃を、そのうちで一番よく識り合つて居る者にさした。そして「何うです、大いに飮らうぢやありませんか」とロレツのまはらぬ口調で喋り始めた。

西脇は茲でも、自分達の地位の哀れな事、しかし自分達の仕事は重要である事、そして如何に自分達が輕ぜられ虐待されて居るかと云ふ事を繰り返し／＼說いてきかせた。

そして最後にまた、「一つ月給增額の要求をしようぢやないか」とみんなの顏を見まはしながら云つた。

しかし、此處でも彼の遊說は成功しなかつた。誰一人として本氣に彼の說に耳を傾けるものはなかつた。のみならず、大分もう時が經つて居たので、仲間はそろ／＼と歸り初めた。

「何うだい、西脇さん、歸らないかい」最初よく彼の相手をして居た一人の若い男が彼を誘ひに來た。けれども彼は歸らなかつた。

彼は、今ある懷の金では、今月末の拂ひの半分にも足りないと云ふ事を考へて居た。下痢をし吐瀉をした妻が、骸骨の

やうになつてやつと起き上つて居る事や、同じ樣に腸を痛めた乳呑兒が、母がよくなつても少しもよくならないばかりか神經を痛めたのか、夜も晝も頭がガンガンして來るまで泣き喚く光景を思ひ浮べて居た。

自分の家に比べて此處は何と云ふ美はしい晴やかな家だらう、此處に比べて、自分の家は如何に陰氣臭くて醜かしくて地獄だらうと彼は考へた。

「も少し居よう。みんなが歸つてしまふまで居よう。そして一つ自分だけで所長さんに訴へて見よう」

心の中で彼はかう決心した。そこで彼は、默つてその儘、芝生の上に寢ころんだ。寢ころんだかと思ふと、直ぐ樣そこへ子供の樣に他愛もなく眠つてしまつた。

四

日はまだ高かつた。けれど、夏の日の事だから時はもう餘程經つて居た。

下戶のものはもう餘程前から歸つて行き、上戶のものも今はもうみんな散會してしまつて居た。

おふるまひの酒にすつかり上機嫌になつて居た小使達はしかし、散會した後の會場を、その日のうちに掃除し片付けて置かねばならなかつた。

小使室に集つて居た四五人の小使達のうちには、醉ひつぶれてぐうぐう眠つて居るものもあつた。久しぶりの骨休みに兩肩脫いで將棊を鬪はして居る仲間もあつた。

だが、そのうち、一人の年取つた男が急に頭をあげて、柱にかゝつて居る時計を見ながら、

「おゝ、もう六時だよ、早く片付けてゆつくり休むべえか」

と仲間のものゝ顏に見入つた。

「さうだ〳〵。早くやるべえ」

相手はもう立ち上つて居た。

「音松の奴、寝やがつたな、起してやらうか」

他の一人のものが云つた。

「可哀相によせや。さあ行かう」

みんなは勢ひなく出かけた。そして會場に行つて狼籍たる宴會の後の光景を見て、一層に身體のだらけきつて來るのを覺えた。

「まあ、その瓶を集めろよ」

と一人の男が云つた。

「折箱は何うしようか」

と若いのが訊いた。

「大きな籠をもつて來て、その中に掻き集めるんだな」と年取つたのが答へたが、急に彼は、會場の一隅に一人の男のつツぷして居るのに目がついて「おや、あそこに誰かくたばつてるぞ」と指をさした。

「西脇さんだよ」と若いのが驚きもせず答へて「起してやらうか」と訊いた。

「うむ、さうしなよ。もう門限だ」

と年長の小使が答へて、自分もその醉ひつぶれの側に行つて起した。

「うむ、うむ」と西脇は唸る様に答へて、ヨダレの出る口元を二三度白洋服の袖で拭うたかと思ふと、また眠つてしまつた。そしてその後はもう、何としても起きて來ようとはしなかつた。

「困つたもんだなあ、これは」年長の小使は云つて「先生達はもう歸つたか」と訊いた。
「いや、まだだ。醫員室に集つてる」と若いのが答へた。
「誰の部下だね、これは？」
「M先生の部下だよ」
「ぢや手前、ちよつくらM先生を呼んで來いよ」
若い小使は醫員室へ驅け出して行つた。そして暫くして、背の高い、顏の細面な、溫かさうな眼をして居ながら何處から犯し難い威厳を備へた若いM博士をつれて來た。
Mは默つて、醉ひつぶて居る西脇の側に行つた。そして、腰をかゞめて、手づから西脇の肩のあたりに手を置いて、
「おい、西脇君、起きないか、起きないか。みんなもう歸つちまつたよ」
と搖り起した。
その聲に西脇は鈍い眼をあけて、自分を起して居る者の顏を瞶めたが、それが自分の方の部長さんであるのを知つて、急に恐縮してしまつたらしく、急ぎ起き上つてキツパリとした調子になつて云つた。
「いや、何うも先生、思はず澤山頂きすぎまして……」
「何うだね、氣分がわるいかね」とMは尙も西脇を瞶めながら訊いた。
「いや、何、大した事はありません……」と西脇は益々恐縮してしまつた。
「まあ、こつちへ來給へ。そしてお茶でも呑み給へ」
Mは徐ろに立ち上つて云つた。その言葉には、何うしてもそれを拒む事の出來ない樣な逼迫力がこもつて居た。云はれるまゝに西脇は彼の後に蹤いて行つた。

醫員室には所長のN博士を始めとして多くの博士學士が、あちらの隅、こちらの窓下、と云つた風に、三々五々、椅子を並べて、打ちくつろいで何か話し合つて居た。そして、西脇がMに蹤いてその部屋の中に這入ると、みんなの視線は一度に西脇に向けられて、嘲るやうな微笑がその唇の上に洩れた。

それに氣がつくと、西脇はさつき、盛んに博士達を罵倒して居つた事も忘れた樣に、いや、そんな事があつたので尚更小さく縮こまらねばならぬ程壓迫されるのを覺えた。

「まあそこに掛け給へ」

Mは彼を一つの卓子の脇の椅子に坐らせて、自分で彼に茶を注いでやつた。

「君は大分好きらしいねえ」

とHと云ふ若い博士が揶揄ふ樣に西脇に云つた。

「ええ、何しろ親譲りですからなあ」

と西脇は軍隊で教へ込まれた習慣に從つて、上官の前に出た時の禮を取るために、起立して直立不動の姿勢で答へた。

「大分いけるかね、毎晩　晩酌でもやるかね」

とその側から年のとつた博士が訊いた。

「いやもう駄目で御座います。すぐやられてしまひますので……」

「晩酌は何うだね」

「いや晩酌どころの騒ぎぢやありませんです」

一方の片隅に集つて居る一群の博士達は、切りに何か獨逸語を挿みながら、六ケ敷い學術上の話しをして居るらしく、他の一方では、M博士の下で、解剖した屍體の寫生をし、刻々に變化して行く色彩をその畫面に塗る事を仕事として居る一人の青年畫家を取り圍んで、盛んに畫論を鬪はせて居た。

その光景を見ると、西脇は、今更ながら自分が、物質生活の上にも精神生活の上にも、如何に身窄らしい貧しい生活をして居るかと言ふ事を沁々と感じないわけには行かなかつた。自分は到底彼等とは一列には置かれない　幾段も幾段も彼等の下に置かるべき、全く種類の違つた人間に過ぎないとしか思はれなかつた。また、此の研究所に於ても、彼等は如何に重要な人物であり、自分が如何に不重要な端役をつとめて居る人物に過ぎないかをも、常々よりは一層痛切に感じないわけには行かなかつた。

彼はしかし、まだすつかり醉ひからさめては居なかつた。また、さつきから言はふ〳〵と腹の中できめて居た事を忘れては居なかつた。その思ひが、さながら生き物かなんかの樣に腹の中でモヂ〳〵と動きまはつて、口の中から飛び出さうと飛び出さうと跪いて居るのを感じた。そして彼は、その思ひを口から解放してやる事の出來る機會を待ち狙つた。

「君のとこには子供があるかね」

Hはまた彼に話しかけた。

「えゝ、ありますとも。うよ〳〵する程御座います」

「幾人あるね」

「五人あります、男が二人と女が三人」

「うむ　それぢや中々並大抵ぢやないねえ」

「えゝ」と西脇は答へたが、何だか何うも自分が哀れでならない樣な氣がし出して來た。

一種の感情が、酒で歪められて居る彼の神經の端にまで傳つて行つた。その感情を傳へる言葉が泉のやうに彼の口から流れ出すのを彼は覺えた。

「先生方には、私達がどんなに慘めな暮しをして居るかは話したつておわかりにならんでせうが」と彼は感傷的な聲で云ひ初めた「私はこゝで月五十圓の月給を頂いて居ります、けれど、それ丈けでは普通なら米代だけにも足りません、さうでせう、私の家は七人家內ですからなあ、ですが、私は否でも應でもそれ丈けでやつて行かにやならんのです。まあ考へて見て下さい。私達は何うして生きて行けるんですよ」

西脇が斯うした演說口調でしやべり初めると、みんなの眼は次第に彼の方に向けられた。そして今まで思ひ〳〵に話して居た話しをピッタリとやめて、彼のこの演說をきゝ初めた。

「私達は近頃、滅多に米の飯を頂いた事は御座いません。いや、飯を食べると云ふ事が一體ないんですなあ、朝もおひるも晩もみなお粥ばかりなんです、たゞ、私だけは見つともないですから、米の飯の辨當をもつて來ますがね。これは家內が特別にユキヒラで焚いて辨當箱につめて呉れるんです。しかし先生方、そんなにまでして持つて來た辨當は中々咽もとを通りませんな。自分一人だけ米の飯を食べるんだと思ふと、針を呑む樣な氣がしますからなあ。で、私は何時もそれをみんな食べないで　幾らかづつ殘して歸るんです。そしてそれを子供等にわけてやるんです……」

西脇はそこで言葉をとぎらした。さながらこみあげて來る感情を無理に抑へようとでも努めて居る樣に、しばし眼を白黑さして居た。

「それは氣の毒だ」と云ふものがあつた。

「家內でも內職さしたら何うだ」と云ふものもあつた。

「勿論それはやらして居ります。それがなかつたら、それこそ私達は一日も生きては行かれませんよ」と西脇はやつとで

それに答へる事が出來た。「實は私も、もつと實入りのある仕事をしたいと思ひまして色々と考へても見ますし、人に頼んでも見ましたが、何しろ自分に力もなし資本もなしするのですから何一つ有利な仕事を始めると云ふ事も出來ませんし、さればと言つて何處へ勤めようとしても履歴らしい履歴を持つて居ないんですから、とても月給の七十圓も八十圓も呉れる樣なところへ勤めると言ふ事も出來ないんです。此所に這入るんでさへ、いゝ手蔓があつたればこそ這入れた樣なものの、さうでなかつたら、恐らくそれさへ出來なかつたんですよ……」

「此所へ來るまで、君は何をして居たんだね」

Mは同情の眼を注ぎながら訊いた。

「何もしないで遊んで居ました。その前は軍隊に居ました」

「軍隊では何をして居たんだね」

「看護隊に居ました。私は看護長です」

「看護長と言ふと？　兵卒かね、將校かね」

「下士の最上級です。まづ普通の兵で言ふなら曹長位のところですなあ。私は十四五年間軍隊に居ましたが、これより以上の官には何うしても昇れないんです。何故と言ふに、私はたゞの一兵卒として入隊したんですからなあ」

醫員達のうちにはそんな愚痴はきゝたくない」と言つた風に、再びまた彼から顔をそむけて小さな聲で何かコソ／＼と話し合ふものが出來て來た。けれど彼はそれには氣をとめないで續けた。

「私は田舍の貧乏な百姓家に生れたんです。私はしかし小さい時から學問が好きで、頭も相等いゝ方だつたので、生意氣にも何ですなあ、田舍で一生百姓をして打ち果てゝしまふのが厭だ、何うかして學問もし、都會にも出て立身出世をしたいものだとばかり考へて居ましたもんですよ。けれど貧乏な私にはその望みは遂げられませんので、仕方なしに私は親や

兄を助けて少しばかりの田を耕したり荷物を運んだりして日を送つて居たんです。ところがさうして居るうちに愈々私は徴兵適齢になつたんです。そして私は甲種で合格して入營したんです。兵隊になると私は、こゝに俺は出世の緒を見つけたと思つて實にうれしかつたものですよ。私の村なんかでは兵隊が威張ります。今までは三太郎八太郎であつたものも、兵隊から歸つて來ると、丁度先生方が西洋へでもいらつしやつてお歸りになつた樣に、何か非常なみがきをかけられて來た樣に、村のものが先づ彼等を尊敬するのです。そして兵隊自身も亦、そんなに思つて威張るんです。威張つては村の者をいぢめたり、ゴロつきになつたりしまして、すぐ惡い風習を村に輸入するんです。ですが勿論その時分私は、そんな惡弊なんかに氣がつく道理はありません。私も世間並みに兵隊になつた事を非常に名譽な事と思ひましてね、そして、此所で一つ一生懸命に勉强して立派なものになつてやらうと決心したんです。そこで、私は、ひまを偸んでは本を讀みました。ことに看護隊にまはされてからは、勤務も割に樂ではありますし、職掌柄色々な事を知つて置かねばなりませんので一生懸命勉强しました。隊へ一年志願でいらした大學卒業の方にお賴みして英語を敎はつたりなども致しました。私は勿論、滿期になつても歸りませんでした。そしてそれから、ずつと十五年間軍隊につとめました。」

「それぢや君は別に醫學の方の勉强をしたと言ふわけぢやないんだね、看護隊に居る間に實地で練習したんだね」

一人の博士が訊いた。

「さうだ、しかし中々うまいもんだよ君」とMはそれに附け加へた。

「うまくはありませんが、お蔭で色々な事を敎はりました」と西脇は尚もつゞけた。「曹長になつて軍隊の外に寢泊してもいゝ樣になりましたので、私は妻を娶りました。そしてこれから尚軍隊につとめて行くつもりで居ましたんですが、その時になつて私は、到頭、軍隊から出されてしまつたんです。」

「何うしてだね」

「何うしてつて言ふ事はありません。たゞもう老朽になつたんですね。實際私は、首をきられて初めて自分が如何に年をとつたかと言ふ事に氣がつきました。何の素養もなしに、四十近くにもなつて社會に出るのは餘りにおそすぎます。私はもう二十圓や二十五圓の月給をもらつて居ては私の家族を養つては行けませんし、さりとて、私のやうなものに十分な俸給を與れるところは何處にだつてありません。それに私は、如何に曹長位なものだとは言へ、兵隊としては最高級の地位に在つたんですから、何時の間にか氣位が高くなつて居まして、餘り下級な職業には首をつッ込まない様にと考へました。そしてそんな事で一層に職がなく、隨分永く私は遊びました。初めて私はあたら人生を軍隊の中で臺なしにされたと云ふ事に氣がつきまして齒がみをしましたが、時はもう遲う御座いました」

「だつて、君はまだ若いぢやないか。幾つだね、四十かね、もつと行つてるかね」

年のつ博士は此時また側から口を入れた。

「四十五歳です。こゝへ入れてもらつてからもう七年になります、まだ若いつておつしやいますけれど、私みたいな才能ない者は早う役に立たなくなります。迚もうこれから何うしようなど云ふ元氣もなし力もないんです。まあ、考へて見て下さい、私がこゝへ參つた時分にはまだM先生もいらつしやいませんでしたし、H先生もいらつしやいませんでした。勿論、KさんやSさんなんかは(と彼はMの下に居る實家や、若い學生を指しながら)それからずつと後に御見えになつたんです。それでも、先生方はみな立派な素養が御ありになるんですから直に御出世なさいまして、博士になられたり、部長になられましたり致します。それだのに此の私は何うです？　何時まで經つても同じ地位、同じ仕事、同じ血精の製造で御座います。こんな事を申しますとさもしい様では御座いますが、俸給なんかも十年殆んど進境なしと云つても差支へがないんで御座います。それでも、先生方のやうに、お仕事がそのまゝ御自身のためになるのならまだしも辛抱が出來ますが私達の仕事と來てはそれこそ極りきつた判を捺したやうなものなんですから、これでは迚もやりきれやしませんや」

こゝまで言つて來た時、西脇は何とも言へぬ寂しさを自分の胸のうちに感じた。かうした境遇に置かれ、かうした仕事をさせられ、かうした生活をして居る自分の一生は一體何んだらうと言つた樣な、そのためにヤキモキして働いたり考へたり工夫をしたりして、それが何になるんだらうと言つた樣な、平常から心の隅つこに嘲笑ふ樣に巣喰つて居た心が、今やすゝり泣きたい樣な悲しさで彼を一ぱいにするのだつた。

彼はもう、これ以上何も言ふ氣にはなれなかつた。俸給を上げて呉れる樣に嘆願しようと思つた最初の志なんぞは、何時の間にかすつかり消えてしまつて、そんな事をする努力さへが馬鹿らしくつてたまらなくなつた。

そこで、急に氣がついた樣に「いや何うも先生方の前で失禮な事ばかり申しました」と、彼はドッカと椅子に腰をおろした。そして、てれ隱しに茶碗に茶を注いでグイと飲んだ、

「いや、西脇君の演說は大變に面白く拜聽したよ」とH博士は薄笑ひをその口もとに浮べながらギヨロ〳〵と彼の顏を瞶めつゝ言つた「だが君、そりや成程つまらないのはつまらないに違ひなからうが　さう君凡ての人が平等になるわけには行かないよ。人各々もつて生れた天分ありさ。天分が平等でない限り、生活も平等であり得ないよ」

西脇は何とも答へなかつた。彼はもう、先き程宴會の場でした樣に、――それは天分の差ではない、境遇の差だ、社會制度の不公平だ――と言つた樣な抗議を持ち出しもしなければ、そんな事を頭の中に思ひ浮べもしなかつた。打ちのめされた牡犬かなんかのやうに、元氣なく首垂れて、彼はそこ〳〵に其處を立ち去つた。

六

西脇が去つた時、みんなは默つて顏を見合せた。

「面白い男もあればあつたものだなあ」

と頭をかゝへながら舌を出して笑つた者があつた。

「先生一體何の爲めにあんな事を言つたんだらう」

と精神病的研究を續けて居る若い學士がさながらいゝ材料を見つけたと言つた風に輝く眼を瞬りながらみんなの顏を見まはした。

「大方、月給でも上げてもらひ度かつたんだらう」

とN所長は吐き出すやうに言つた。

「だつて虫がいゝやね、自分に才能も素養もない癖に樂をしようとは……」

H博士はかう言つてハツ、ハツ、ハツ、……と笑つた。他の職員達も一緒にそれについて同じやうに笑つた。

何時の間にかもう醫員室には電燈がつき、眞紅な夕陽が燃ゆるやうな光を、森の樹の間から窓の硝子戸に投げつけて居た。

「おゝもう八時だ。西脇の演說にウツトリとして居たもんだから馬鹿に遲くなつた。さあ歸らうや」

と年長の博士がやほら立ち上つた。

外のものもそれに倣つた。

カアーカアーと塒に歸る烏が醫員室を出た博士連の頭の上をかすめて飛び過ぎた。



餘震時々の手記

河井醉茗

□

二軒あつた家が一軒になつた。

今まで淋しい云つても、私の家で話し聲がやむと、隣りの家で話し聲が聞える。今は私の家で話し聲がやむと、何處からも人の聲が聞えて來ない。二時間でも三時間でも、いや時としては半日でも一日でも。

九時頃に山羊の乳を配りにくるおとなしい若い人と、正午すぎに新聞を持つてくる小僧さんと、正午から夕方に兎に角一回は來るやうになつた郵便配夫と、一日に人の顔を見るのが以上三人限りのこともある。

少し遠く離れて見える人影は、向ふの細道を通る百姓か、漁師か、麥を蒔くこしらへに、知つてる百姓が砂畠に來てゐるくらゐだ。

半町ばかり先に家は二三軒見えてるけれど、いつも空家のやうに淋しい。地震此のかた猶ほ淋しくなつたやうだ。

この砂丘の上には、初めから二軒しか家が建つてなかつた。その一軒が地震の瞬

間に平づぶれにつぶれて、あとはうちだけがほんたうの一軒家になつてしまつた。

隣家の主人公はよく旅行に出かけて大抵は不在だつた。家族は主婦と、文學の話などの分る息子さんと、外に四人の男女の子供が居て、ふだんは賑やかな家だつた。殊に八月中は町の若い人達が代る〳〵遊びに來て、夜も遲くまで歌つたり話したりしてゐた。砂丘の上も海岸の夏場らしい氣分があつた。

八月の末に主人公は信州から歸つてきた。歸つてくるとよく私の家にも遊びに來るのだが、一日も朝から來て十二時少し前に歸つたかと思ふと例の大地震、お父さんを助けて下さいといふ子供達の叫び聲は、今〻私の耳に殘つてゐるが、何しろ六疊と八疊の棟木になつてゐた太い梁の眞下になつたのだから、よし何んなに早く手をかしたにしても、何うしやうもなかつた。細君が天井裏を破つて出てきたのは、まだしも幸ひであつた。

倒壞する時には一分間たつか、たゝないうちに倒壞したのだが、さて片付けるとなると容易でない。家族達に内の一室を貸して半月許り居たが、別に家を見つけて皆引上げた後、五六日してやつと家主から片づけに來た、六人の人夫が五日ほどかゝつたやうだ。瓦の取り除けから初めて、床下の土まできれいにするにはそれ位はかゝるのだ

それでもまだ井戸の屋根、玄關の踏石など少しのものは殘つてゐる。屋根の下になつた花壇の菊、また家の周圍の松、櫻。柿の木など、家を持つて行かれた淋しさに立つてゐる。

有つた家が跡方もなくなつたのは淋しい、而かも私の家一軒だけ殘つたのだから、その淋しさつたらない。

今の私の住居は、まるで人間から離れて自然と直面してゐるのだ。foxtrot 慇威を逞ふしてまだ日もたゝない自然と對し合つて私達はその日〳〵を過してるのだ。

その間に氣になつた颱風は二度も來た。餘震は毎日のやうに絕へない。馬入川の川の音は荒々しい日が多く、相模灘の波の音はすつかりリズムが變調を來してゐる。

此の上、何んな天災が來ても仕やうはないけれど、矢張波の音に耳を傾けたり、何ともない空の色を見上げたりして、自分だけの氣休めにしてゐる。

それにまだ米はある上に買つて置け、蠟燭は十本以上具へて置けといふやうなことから、罐詰は何が取つてあるかとか、鰹節はまだ何の位あるかといふやうなことまで氣にして、子供が咳一つしても、アスピリンの十日分も買はせて置くといふ始末 そんな事は平生だつて心掛けてゐるべき筈で、所謂この際だからとてそんなに緊張振りを發揮するにも及ぶまいと思はれるが、何うも人間の弱さは所謂この際だけに遺憾なく發露されるやうだ。

人間の弱さばかりではない、かういふ場所に居るといふこともある。私は自然を愛するからかういふ場所にも居るのだが、またそれだけに自然を恐れる。自然の威力の前には人間は全く無力だ、如何なる抵抗も甲斐のないことではあるが、自然を最善に愛するだけ、自然を最善に恐れたい。不用意に恐れ、痩我慢に恐れ、見榮に恐れたくない。つまり自然の威力を尋常に受容れて、少しもごまかしたくないのである。

□

都會の人は地震と同時に火を恐れた。そして火のために燒かれた。

われ〳〵は火よりも水を恐れたが、水は遂にわれ〳〵を流さなかつた。

自分の家から火を出しさへしなければ、火事には安全無比の地に住まつてゐるとはいふものゝ、町が燒けたら矢張困るところだつた。

今私の飮んでゐる牛久葡萄酒だつて、壞れた土藏の下から堀り出されたのだ。もし町が燒けてゐたら此んなものは影も形もなからう。レツテルが汚れてゐても、壜に土が附いてゐても、葡萄酒の味に變りはない。

縣下で主だつた町は大抵火を失した。厚木、秦野などいふ山際に近い町も火事で大半燒けた。伊勢原も火事があつた。

小田原と横須賀市は焼野原になつた。藤澤も焼けた、茅ケ崎も少し焼けた。鎌倉は火とれに責められた。火事で焼けなかつたのは大磯と、此の平塚町だけらくゐのものだらう。

最も直ぐ二三ケ所から火の手は揚つた。町の人は必死に消し止めた。かういふ時だから先づ小火ぐらゐなもので済んだと云つてよからう。

町の恢復の早いのも焼けなかつたからで、堀り出したら煙草でもキャラメルでも出てくるのだ。繃帶や絆創膏の類は何よりも早速堀り出して役に立てたやうだ。

火事の起らなかつたのは何んなに仕合せだつたか知れない。その當時ばかりでなく、あと〳〵までも比較的食料の缺乏を感じなかつたのも何んなに大仕合せだつたらう。

その代り水では心配した。相模灘の海の水でも心配し、馬入川の川の水でも心配した。

砂丘の家までは傳はらなかつたけれど、町では流言蜚語の一種として海嘯來は幾度も町の人を脅かしたらしい。また流言蜚語でなく、ほんたうに馬入川が増水して洪水の恐れに町では幾度も荷物を片づけて、逃げる支度をしたやうた。

地震後は海も河も荒れてゐる。相模灘の中央が百尋も凹んで、そこが地震の火元だといふのだから、波の荒れるのも尤もで、激震當時にそれが判然と分つてゐたら、われ〳〵はもつと恐怖を感じたらう。却て餘震時代に入つてから波の音に心配するのは、少し後れ馳だけれど、町の人達は矢張不安は不安だと見えて、海岸の方で空いてゐる家があつても一軒も引越して來る者はなかつた。

波の音の高い日に濱へ出てみると、音は高いけれど波の丈はそれほど高くはない。勿論震後一月以上もたつてるのだから濱も穏かにはなつたのだらう。陸地が何尺とか隆起したさうだが、砂濱だからそれも素人目には分らない、以前と同じ場所で波が打つてるやうだ。たゞ馬入の水が混入してゐるので、土色に濁つた波が音高く捲き返してるのだ。

これでは魚も捕れまいと思ふ。網を曳いたところで、流木が掛つてくるくらゐなもので、磯近くには魚も居ないだらう。

天氣がいゝと沖は平らに蒼々として、あんな大地震の震源地があの海の底にあらうとは全く噓のやうだ。波のリズムは變つたといへ、陸地の激震に比べて、相模灘の水は平穩に近いやうだ。さう思つて水の心配は取消しておくのだが、すると又意地わるく幾度も颱風が來さうになつて、實際九月の廿四日と十月の十日との二回、夜半に二十五米突以上の風風がやつてきた。たゞさへ揺れてゐる海は何んな大波を起してくるかと、心配しないではゐられなかつたが、好い鹽梅に風は眞北から吹きつのるばかりで、東へも南へも廻らない。波も風に逆行して來ないと見え、海邊は安全のやうだつた。

馬入川の水は假令洪水になつても、町との交通を斷たれるくらゐで、砂丘の上までは來ないと想はれた。生命や住居の心配はなくても、町との交通が二日でも三日でも斷たれたら、矢張われ〳〵は難澁する。心細い、なるべくなら堤が決れないようにと願はれた。

堤は龜裂し崩壞してゐる。且大山の山くづれ、水源地の山くづれで流木は幾らでも流れてくる、二抱え三抱えの大木はもんどり打つて濁流を降つてゆくのだ。増水量が四五尺の間だからよかつたやうなものゝ、水量が多かつたらわけなく堤は決れたらう。

私の家は川口に近いので、無數の流木が海に躍り込む音が大砲でも打つたやうに段々として聞えてゐた。それも二三日で止んだ。

もう秋もコスモスの咲く十月の中旬だ、さう〳〵颱風の心配もなからう。山津浪の恐れもなからう。秋日和になると水の心配も忘れたやうになくなる。

火の心配がない代りに水の心配、若し山に近く住んでゐたら山くづれの心配があるだらう。何處にだつて心配もあり不

安心ある、餘震はをり〳〵忘れないやうにと警告してくれる。

□

所謂流言蜚語は砂丘の上にも飛んできた。

大震三日目の夕方、町から歸つてきた若い人達が皆手に手に竹槍を持つてゐた。報告に曰く、××數十名の一團はA町の方へ逃げ込んだらしく、A町では町を擧げて女子供を避難させ、男ばかり殘つて防衛に當つてゐる。平塚へは一人も入れないつもりで、馬入川の向岸で喰ひ止めることになつたが、川を泳いで四人ばかり逃げ込んだ、海岸方面へも逃げ込んだか知れないので、若し來たらこれで突き殺すのだと、竹槍をする〳〵とすごいてみせる。その切先は鋭く尖つてゐる。

若い人達といふのは、前から隣家へ遊びに來る青年で、隣家の家族が同居して以來、私の家をも併せて警戒してくれるのだ。H君兄弟、M君、Y君、S君など畫の好きな人、文學の好きな人、新派歌人といふ顔觸だから、腕や身體は細くきやしやだけれど、兎に角若いだけに向ふ意氣は旺い。

私は報告を聞いて此の際ありさうなことだと思つた。ありさうなことだが東京で起つた騷擾が二十里も延長されるほど大きい騷擾だとも信じられない。來ても落武者だ、落武者を追究するのは無謀なる冒險だ、なるべく默つて逃してやるか、實否をよく確めた上でないと、うつかり竹槍は向けられないと思つた。

寧ろそんな危險な武器は、床の下深く隱して置く方が安全だらうと思はれたが、若い人達はなか〳〵承知しない、そんなことを云つて爆彈でも投げられたら何うするかと、大いに防戰の覺悟らしい。

何れにしても砂丘の上は賑やかになつた。その氣勢だけでも先づ落武者などは近よるまい。

私は獨で考へた。何處で取つてきたか知らぬが青々とした太い竹槍の切先を、切先だけそッと鋸で切つておからうか知ら

と。でもそんな暇はなかつた。

提灯の火影に松の木を對手にして竹槍で突く稽古をしてゐるのがある。危くて仕樣がない。

餘震の夜は十時近くなつた。東京の空は薄あかるい不安な光りでぼうとしてゐる。

暗い松林の間から火光が一つ見えた、二つになり三つになつた。

來た、來たと誰かゞ云つた。稍遠かつた火光はだん／＼近づいてきた、此方へ來るらしい。

聲を出す者は一人もない、皆片唾を呑んで縁側へかたまつてゐる。

私は砂原へ下りてよく見ると、提灯をぶらり／＼振つて來る樣子が、落武者にしては餘りにのろい。

提灯は砂丘を上つてきた。「今晩は」と聲かけて暗中から現はれたのは、日日と朝日に關係のある赤壁君だ。君は自ら率先して海岸自警團を組織し、武裝した青年の一團を引つてれわざ／＼訪ねてくれたのだ。番茶など出してねぎらふた。

自警團は大いに威勢を示して歸つて行つた、それでまた砂丘の家の人心は強うなつた。

あかりを消して皆寢てしまつた。

その夜は何の事もなかつたが、あけて四日目の朝、まだ七時頃だつたらう、日の光があざやかに射す向ふの松林に、凡そ四五十人の人が並んだ、松林を包圍してゐるのだ、私達は何事が起つたかと思つて驚いた。

松林を取りまいたのは町の人ではなく村の人だ。昨夜事件が愈よほんものになつたのかと思つたが、まだ何の事とも分らない。人は松原の中を往つたり來たりしてゐたが、やがて二十分もたつたかと思ふ頃、そろ／＼村の方へ歸り出した。

その内の大半が砂丘のまはりの方へ來て、何ものかを物色をしながら歩いて行くやうだから、その人達に何事が起つたのか聞いてみた。

今朝早く村の派出所へ駈け込んだ一人の男、その男が松林を通ると刄物を持つた××に逐駈けられたので、派出所へ救ひを求めに來たといふ話だ。村では總出で松林を包圍したわけだが

それこそ草を分けて探したが、怪しいものは見つからなかつたさうだ。別の松林の方へ逃たのでは、もう手が及ばないから引返すのだと分つた。

馬入川口の小さな村から、朝早く迅速によく此れだけの人が揃つて出たものだ。勿論漁師と農夫ばかりだ。一人として無手の者がない、何かしらえものを提げてゐる、青竹槍、日本刀、竹切、木切は當り前だが、釘抜、やつとこ、竹鋸などは何ういふつもりか、錨の爪はさすがに漁師らしいが、スコップは馬入川の砂でも堀るものらしい。こんな大げさな騷ぎをして、落武者一人を包圍しようとするのは人心も餘程昂奮してゐる證據だ。えものゝ手前彼等は手持無沙汰に村へ歸つて行くのだつた。

それから二三日して後、私は內にあつた竹槍の切先を皆鋸で切り落した。

□

地震以來、一週間ほどゝいふもの、全く小鳥の影を見かつなた。その聲も聞かなかつた。何處かで飼つてある鷄だけが時もかまはずに鳴きつゞけた、餘震の不安を感じて鳴くものだらう。

十日ほど經つてから、ある朝、珍しく雀の鳴き聲を聞いた。いつも聞きなれてると何でもないやうだが、斯んな天變の後で聞くと、朝の雀の鳴聲は如何にも平和を語つてるやうでいゝものだ。

□

震後へ直ぐ何うしても私の安否を知人に知らさうかと思つた。電報電話の不通は分つてゐる、よし通じだしても一私人の打電など何時とどくやら分らない。最も好い方法は、東京なら陸路を歩いて行つて訪問するか、關西方面なら箱根を越

えて沼津邊から汽車で行くことだ。併しあの不安な道中を私には出來さうもなかつた。

郵便が最良だと思つた。電報は柱を立て線を架け機械をなほすのに時間がかゝる。郵便なら陸路遞送してもいゝのだらか遲いやうでも却て早く着くだらう、さう思つて手紙を書いた。

その郵便がなか〳〵開通しない。已むを得ず六日の日に東京へ行く人に托して東京で出してもらつた。また同じ日に沼津へ行く人があつたから關西方面への手紙を賴んだ。だから關西方面では比較的早く私の安否が知れてゐた。出すのはそれとしても、來る郵便がなか〳〵來ない。

東京からの人も、京阪地方の人からも、どし〳〵東海道の街道を通るのに、郵便だけ來ない筈はなからうと、五日待ち、六日待ち、七日待つても矢張り來ない。とう〳〵待ち疲れてあきらめてゐると、十五日の午後に初めて郵便が來た。而かもその郵便は北海道から來た、トラピスト修道院にゐる三木露風氏からの見舞狀で、災後の第一信であつた。

郵便の途は開けたけれど、後れることは非常なものらしい。東京からはきれ〳〵に來るやうになつたが、西からは一通も來ない。漸く廿四日になつて京都大阪奈良伊勢福岡などの郵便が一緒に着いた。同じ地方からでも前に出してあるものほど却て後れて着いた。

一日に私の家を出て東京へ使ひに行つたきり行方不明だつた義妹が、無事に埼玉縣の越ケ谷に居るといふハガキを受取つたのは十九日だ、ハガキは五日に出てゐるのだ。

延着の最も甚しいのは、泉州堺を一日に出た見舞狀が、何處を何う廻つたものか三十日に着いた。同所から同日に打つた電報は遂に着かずじまひだ。

現在でも未だ郵便は常態に復してないやうだ。その上ハガキも切手も品切れになつた。

郵便が變調になつて容易に恢復しないのも、亦餘災の一つだらう。

運が好いとか惡いとかいふことも、言はばその時の廻り合せで、偶然のやうな必然のやうなものだ。私は今まで運が好かつたと思ふやうな事件には殆ど出會しなかつたが、今度だけは運が好かつたのかナとも思ふ。

私は地震の前日、三十一日には東京に居た。その前から一週間ほど居る間に、暑さと、雷に惱まされ、いよ〳〵今日は平塚へ歸るのだと思ひながら、神田の通りや銀座の通りで買物をして、晝飯は白木屋の食堂で食べた。翌日ならちやうど地震の時間だ。而してその日の四時半の汽車で歸つた。思へばそれが繁華な東京の見納めだつた。

私は神田局で受取らなければならぬ振替を持つてゐたが、三十一日は祭日で取れなかつた。よツぽど一日の朝出かけやうかと思つたが、夕立が來さうだし、例の雷が氣になつて出かけるのを逡巡してゐると、義妹が私でもよければ取つてきますと云つて、幸ひ外に用事もあるからと氣輕に支度くして出掛けてくれた。義妹は須田町の局で待ち合してゐる間に地震に遭ひ、二日二夜大川の船の中で幾度も死ぬやうなめにあつて、怪我はしなかつたもの〻二十日も内へ歸れなかつた。

私が若し行つてゐたら何んなめにあつたか分らない。その金を受取る必要のあつたのも、實は九月の三日から私は關西の方へ旅行することに決めてゐたからで、その金が若し早く手に入つてゐたら私は一日にも旅行に出かけたか知れない。地震に遭はないで好いやうなもの〻、内と旅行先とで可なり餘計な心痛をしたに違ひない。それもよかつた。

旅行先へのお土産に山本の海苔、ニンベンの鰹節、榮太郎の梅干、白木屋のタヲルなどが餘震の際大いに役に立つた。地震の最中、味附海苔の罐詰を幾つも開けるなど甚しく贅澤なやうだが、實は外に食料品が乏しかつたので、餘儀なくお土産ものは全部流用してしまつた。ありがたい避難者だ。

一日といふ日がちやうど私が内に居るはめになつたのは右の次第だが、内に居ても家が倒れ〻ば運の好い方でもなからう。内の倒れなかつたのはトタン屋根だからだ。

馬入川沿岸の沖積層の被害の甚しかつたのは勿論だらうが、この海岸の砂地では瓦屋根といふ瓦屋根の家は一軒殘らず倒れたといつてもいゝ、瓦一枚落す暇もなくほんたうの瞬間にぺたつぶれになつた。藁屋根の家も割に倒れてゐた。殘つた家は殆んど言ひ合したやうにトタン屋根か、コケラ葺の家ばかりだ。

東京から此家へ移つた時、私の心持には出來るだけ簡易な生活といふ目標があつた。室が少なからうが、假別莊だらうが、トタン屋根だらうが雨露さへ凌げばよいのだと思つて、滿足して住んでゐた。

地震が來ると、トタン屋根の輕い小さな家は幾度も幾度も家ごと躍り上つたやうだ。砂地もその通りに動いたやうだ、無抵抗の家は遂に倒れなかつた。

トタン屋根の家も亦運の好い家だ、そして私の一家に幸ひした。



逃れ來りて

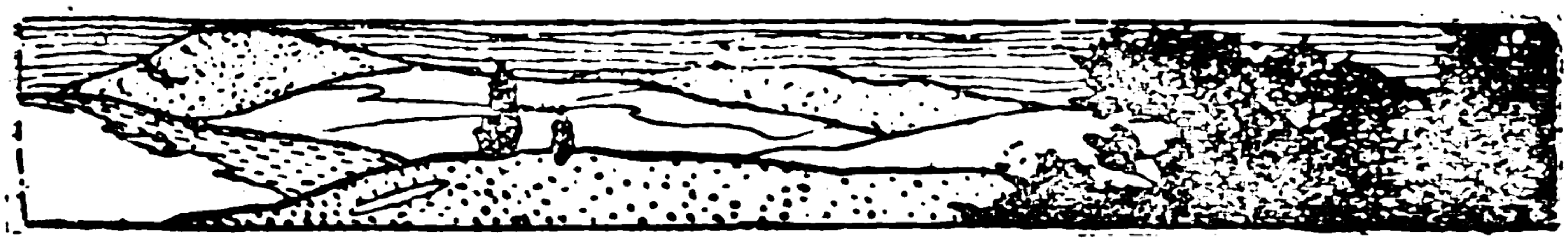
岡本かの子

○避難し來れば米子野坂氏直ちにめでたき梨の實をわれらに與ふ。

燒原のひんがしゆ來て忝な玲玉の梨の熟實を受けつ

手にとりつ眼にすかし見つ玲玉の梨の熟實をよろこびにけり

天地のものみな燒けつとおもひきやこの燭する玲玉梨の實



形あるものみな砕けし國ゆ來てわきて珍らし眞玉梨の實

○出雲に來りて

出雲なるおほやしろ神かにかくに先づ東路にみたま馳せさせ

東の民草のなやみきこしませわが拍手の拙くはあれ

この小田の八坂の稻穂ひんがしの同胞たちに刈り掛けてまし

ひんがしに今餓ゑてある同胞よこの里の秋は蚊さへ肥ゆるを

この里にのがれては來つれひんがしに飢ふるひとらをおもひて辛し



出世五人男

（長篇小說）

宇野浩二

赤木阿珂丸の當時の心の狀態では、彼と同じ志を志とし、彼と同じ趣味を趣味としてゐるところの、牛込の三階建の下宿屋の友達連中など、悉く鬼に攫はれてしまへ！　と思つてゐたことであつた。さう思ふ後から、彼は一日のうちで何度のそ〱と立上つて、その牛込の、卽ち一ケ月前までは彼自身もその渦卷の中の一分子に外ならなかつた場所へ、歩き出さうと發心したか知れなかつた。が、あの部屋の中の煙草の烟の混亂、牛のやうにごろ〱寢轉がつてゐる人々の神經衰弱的な目付、欠伸と溜息と呻り聲と――それ等は然し阿珂丸自身の昨日までの故鄕に外ならなかつたのであるが、今、彼はそれに對して限りない懷しさと、同時に限りない憎みとを抱いてゐるのである。「あゝ、いかん、いかん。」彼は斯う心の中で叫んで、大袈裟な仕草で、目の前の空氣をでも叩くやうな風に、激しく手を振つた。

さうかと言つて、然し、彼のやうな寂しがり屋が、斯うして二週間近くも一人の

友達の顔も見ないで過ごすといふことは、もうこれ以上我慢してゐることは、身體が破裂してしまひはしないかと思はれる程の苦痛であつた。さうだ、彼はもう二週間近くの間、人らしい人と、物を言つたことがなかつた、お蘭と、厨戸との外には誰とも！　あゝ、物を言はぬといふことは、ロビンソン、クルウソオならずとも、何といふ苦痛であらう！

その時、彼はふと、最早や夏場所も近い頃であるから、多分地方の巡業から歸つて來てゐるに違ひない、大淀の伊能猪之吉を思ひ出した。おゝ、伊能猪之吉、いや、今は大淀猪之吉か。大淀猪之吉！　中々立派な名前だぞ。ハロオ、大淀、未來の大關！　角力は上達したか。將來の望みはあるか。いつ迄も褌擔ぎでゐるやうなことはないか。やつてくれ、しつかりやつてくれ。俺の今の友達は怠け者ばかりで、十二時のドンが鳴つても顏に膏を一ぱい浮かして、口を開いて寢てゐる者や、俺より二歳も年下で、十九歳にしかならない癖に毎晩寢がけに二合づつ酒を飲んで、その空瓶と古雜誌とを枕元に轉がして得意になつてゐたり、そして起きてゐる間は食ふことと、飲むことと、煙草を吹かすことと、雜談することとで時間を潰してゐる。そして俺もその仲間の一人だつたのだ。然し、今の俺はどうかしてそんな泥水から足を洗はうとしてゐるのだ。――斯う彼は自分と自分に言つて、「暫く會はないがどうして居る。多分もう東京に歸つて來て居る時分だらう、と思つてこの葉書を書く。暇に一度遊びに來ないか、表記のところへ。別嬪の娘がゐるよ。」斯ういふ葉書を大淀の伊能に宛てて認めて、それを錢湯に行く途でポストに投げ入れた。

そして、阿珂丸が手拭を下げて下宿の方へ歸つて來ると、向うから髯むじやらな顏に不似合ひな學生帽を被つた、樽のやうに太つた身體の男が一臺の荷車を引いて來るのに出遭つた。彼は初めは何の氣もなしに、近頃引越車の車屋を雇ふことさへ儉約してゐるらしい奇特な、その太つた、而も老年らしい學生體の男を、外に見るものがないので、見ながら近づいて行くと、近づくに從つて彼方の視線と此方の視線とがぴつたりと合つたまゝ、次第に執着し出した。はて？　と阿珂丸が思ふ前に、相手の方が先に阿珂丸が誰であるかを悟つたらしかつた。が、次に阿珂丸も忽ち思ひ出した。三年ほど見

なかつた間にあんまり顔が髯だらけになつたので、つい見反れたのであるが、それは同郷で、同窓だつた己武良夫の外のものではなかつた。

「やあ、」と阿珂丸の方から聲をかけた。

「失敬、」と武良夫は答へたまゝ、然し車を引つ張つてゐる力を少しもゆるめなかつた。だから、若しその時それの後押しをしてゐた厨戸が、

「おゝ、赤木さん、」と叫んで、後押しを止めて彼の傍へ來なかつたら、己はそのまゝ車を引きつゞけて行き過ぎてしまつたかも知れなかつた。お人好しの厨戸はその時わざ〳〵己に向つて、

「己さん、赤木さんですよ、」と紹介の勞までとつた。

「引越しか?」と阿珂丸は己に言つた。「君があそこにゐたんだつてね、厨戸さんから此間聞いたが。」

「あゝ、」と己は車の轅棒を持つたまゝで、迷惑さうに立ち止まつて言つた。相變らず、目の中が痒いのでさうするのかと思へる程、目をくしや〳〵としば叩く癖が先づ阿珂丸の注意を引いた。相變らずの男だな、と阿珂丸は考へた。

たしか阿珂丸よりも武良夫の方が三歳位年上であつたが、國の中學では彼等は同級であつた。だから、無論顔見知りではあり、十度や二十度は言葉を交した間柄でもあつた。然し、五年間の中學の同窓でありながら、彼等が同じ車に乘り合はした客同志よりも親密でなかつたといふ不思議な關係の主な理由は、武良夫の方に多分の責があつた。彼は土佐の產で貧しい漁夫の二男であつた。高等小學校の四年を卒業した時、學課が餘りよく出來るので、敎師が彼の兩親にすゝめて、是非中學校に入れた方がいゝだらうと言つた。尋常小學校を卒業した時も矢張り同じやうな事があつて、兩親は不承々々に高等小學校にやることになつた位だから、その時はどうしても敎師の忠告に從はなかつたが、受持敎師は更に校長と一緒に幾度も彼の家を尋ねて來て、家の方で學資が出せなければ、大阪あたりへ出して、人の家の書生に住みこますなり、

苦學をさせるなりしても、何とかこの子には學問させた方がいゝ、その方が乾度この子を成功させるからと熱心に勸めたが、親の方では、今は學資を出す出さぬといふやうな呑氣な話ではなくて、家の助けをさせるかさせないかの問題である、もうこの年になつて稼がさないでは、家の暮しも困るし、近所の物笑ひでもあるからと言つて、どうしても聞かなかつた。で、武良夫は一年の間といふもの、父や兄やに從つて、船を漕いだり、網を引いたりしたものである。だが、それから一年目に、小學校の校長が彼の友人で、今度大阪の中學校に校長として赴任して來た人があつて、その人から是非秀才の書生を一人置きたいからと頼まれた話を己の家に持つて來て、そこで到頭彼は十六歳の春、大阪に出ることになつたのである。そして、彼が大阪の或府立中學の一年生になつた時、高等小學校の二年を終つて、同じ中學に這入つて來た赤木阿珂丸と同窓になつた譯である。

さて、阿珂丸の中學時代の樣子は前に述べたが、更に變つてゐたのは武良夫のそれであつた。それは彼の境遇であつたところの、校長の家の書生であつたといふことも一つの理由ではあらうが、然し、何と言つても大部分は彼の性格に依らねばならなかつた。彼は五年の間唯の一度も遲刻や欠席をしたことがなかつたし、授業前や、授業と授業の間の他の生徒たちが雜談をしたり、運動をしたり、遊戲をしたりしてゐる時間は、決してその仲間に加はつたことがなかつた　彼はいつの時でも控所の隅で學校の教科書の面に、その近眼の目を擦りつけるやうにして讀んでゐるか、或ひは例の目をくしやくしとしばたきながら、空を見上げて何か口の中で叫ぶことに依つて暗記してゐるかであつた。殊に、外の學生たちの注意を引いたのは、彼の持つてゐるどのノートブックの表紙にも、太い筆の字で『一心』とか『不屈』とか、『螢雪』とかいふ題の外に、その前後左右に稍々細い字で、『精神一到』云々とか『男子一度郷關を出づれば』云々とか、『時は金』云々とか、さういふ格言が無數に認められてあつたことだ。そしてその持主はそれを他の者がどんなに笑はうとも、少しも恥ぢる色なしに例へば教室で英作文を課せられて、それの答案を教師に命じられて黒板に書きつける時など、例の『不屈』と書いたノートの

表紙が數多の席にある生徒たちの方に見えるので、彼等がそれを指さして笑ふのを少しも知らぬ顔で、悠々としてチョークを運んだものである。

そんな風だつたから、彼は自然同級の生徒たちと無駄口をきく事などは全然なかつた代りに、教室で手を上げて疑問を教師に正すことなどは、親の讎を狙ふよりももつと執心に見えた。そして、その時分から彼は今のやうに太つてゐた。が胸や腹の邊が丸々と肥り、尻や腰の邊が同じやうに太つてゐるのに、その中間の胴の邊がくびれたやうに細かつたので、一見フラスコのやうに不體裁であつた。從つて、さういふ變り者の彼のことだから、綽名が無數にあつた。言ふのは、「質問屋。」言ふのは、「乞食書生。」言ふのは、「フラスコ。」言ふのは「格言集。」等。等。

だから、己武良夫は五年の間百人近い同級生たちの誰とも殆ど無關係で、沒交渉であつた、無論その同級生の一人である我々の赤木阿珂丸とも。實際、己には學問の勉强といふ外に、中學校の建物も、そこにゐる學生たちも全然眼中になかつたに違ひなかつた。同級生たちの方でも亦、己のやうな教科書の虫のやうな男を相手にする必要はなかつた、外に百人のもつと人間らしい同級生の友達があつたから。が、中で己と赤木との間にだけは唯一つ外の生徒たちの關係しない問題があつた、それは學課の成績の順番のことであつた。五年間の間に、一年二年三年と恐く赤木が一番であつた。それから四年級の時は己が一番で赤木が二番になつた、そして五年の卒業試驗の際は己が一番で、赤木が五番に落ちた。つまり、三年級までは、赤木は試驗の勉强など殆どやらない位でゐながら、彼はいつでも易々と一番の成績をとつてゐたのである。だから、彼には己など眼中になかつたが、己には赤木に勝つことがその三年間の唯一の目標であつた。彼は彼自身がそんなに激しい勉强をしてゐるのに、一向勉强らしい勉强もしない赤木にいつも負けてゐることは我慢のならないことであつた或時は彼を魔物のやうに恐ろしく思つた、又別の時は、彼が呑氣に遊んでゐるやうな顏をしてゐながら、實は隱れて勉强しゐるのではないかと思つた、更に別の時は結局遊んで居る彼に、自分がこれ程迄に勉强しながら勝てないとは！　天才

と凡才とを持つて生れた者は斯うまで違ふのか、と自殺したいほど悲觀に陷つたこともあつた。

けれども、そんな赤木にしても、流石に四年五年となつて來た時には、到頭勉強してゐるものにかなはなくなつた證據に、四年級の時初めて彼は第一席を己に讓つて、彼自身第二席に落ちなければならなかつた。彼にしてもそれ迄始終彼を競爭の敵にして居る己の存在に無關心である譯はなかつたが、彼自身の才分をたのむ心から、相手を輕蔑し切つてゐた。四年級の時、初めて彼と此と席順が變つた時でさへ、「ふん、何かの拍子で俺よりも半點位多かつたのだらう、」としか考へなかつた。そして彼は矢張り己を眼中におかうとはしなかつた。が、卒業試驗の成績が發表された時から、その時も決して彼を輕蔑する心は消えなかつたが、幾分、あんな虫のやうな男でも、一心は恐ろしいものだ位に考へない譯に行かなくなつた。

一方、己武良夫は中學を卒業すると、彼が五年間世話になつた校長の意見で、高等師範に這入ることになつた。彼はその英語科を志願することにした。彼は恩人の意志を尊重して、一先づ中學校の英語敎員になるつもりではゐたが、行く行くは英語學者、或ひは英語文學者とならうと決心してゐた。それには無論これ迄より以上の勉强をして、日本一とならないまでも、日本有數位の大學者になりたいと思つてゐた。彼はひよつとするとそれになれるやうな氣がした。然し心細くなることも屢々であつた。そして、そんな時彼は、彼自身不愉快で仕樣がなかつたが、中學時代の强敵であつた赤木阿珂丸の存在を思ひ出さない譯には行かなかつた。そして結論としては日本中に赤木のやうな人間が一人しかゐないとなら、彼は安心が出來るのであるが、廣い日本中には何人何十人の赤木がゐるかも知れないと思ふと、机の上にペンを叩きつけたいやうな氣持になるのであつた。殊に、彼は彼の唯一の友人である、彼の恩人の子で、そして彼等と同じ中學の二年程下級にゐた男から、或時聞いたところでは、赤木が文學者になりたい志望であるといふことが、彼の氣持を一層不安にした。何故と言つて、己は、彼は無論尾崎紅葉とか、高山樗牛とか言つた風な純文學者になれるとは夢にも思はなかつたし、又

そんな望みもなかつたが、英語文學者と言へば、全然純文學者と關係がないとは言へない、それが若し赤木が一流の文學者になつてゐるのに、自分が一介の世に知られない英語教師として埋もれるやうなことになつたら、と考へない譯に行かなつたからである。それにつけても、彼は自分にも人並に資力のある親があつて、高等師範などでなく、高等學校から大學に進むことが出來たなら、と地駄太踏みたいほど悄けない氣がした。

そのうちに、彼が多少氣安めに思つたことが起つた。それは赤木阿珂丸が中學時代から關係してゐたところの、彼の家が色町にあつたところから、幼な馴染でもあつたところの藝者と駈落して、半年程田舍で小學校の代用教員をして暮してゐるといふ話が、矢張り彼の恩人の中學校長の息子から彼のところへ何かの手紙の次手に書かれて來たことであつた。その話を讀んだ時、どうせあの男はそんな事をやりさうな奴だつた、あゝいふ才走つた男は必ず身を過まつて、到底成功しないものである、よし、俺はこの際一層勉强しようと己は決心した。然し、その後赤木は女と引離されたといふ話であつたし、それから半年目に——卽ち中學卒業後一年目に、彼が上京して來て、早稻田大學の文科に這入つたと聞いた時は、己は再び敵愾心を刺戟されたが、それはもう中學時代のそれのやうな白熱的なものではなかつた。彼と自分では全然違つた道を歩いてゐるといふことを己は十分意識するやうになつてゐたからであらう。

そして、赤木阿珂丸の上京後の生活は先にあつたやうな次第であるが、己武良夫には更に己武良夫らしい曲折があつた。それは前者の生活がその主人公を益々下落さして行つたやうに見える反對に　後者のはその主人公を益々煉磨するやうに見える事件であつた。といふのは、前にも述べられたやうに、己は高等師範在學中にも一等の成績をつゞけてゐたが、或時、教師に不正な行爲があつてその爲に學生間に騷が起つて、結局その教師は休職になり、騷いだ學生の重なものが處罰を受けることになつた時、例の通り無口で、中學時代の通り他の學生たちと殆ど交際してゐなかつた彼が、突然自分が今度の騷ぎの張本人だと名乘つて出て、學生たちと教師たちとを驚かした。そして彼は自分で退校届を出したのである。無論

その爲には、彼は中學以來長い恩顧を受けてゐる、故郷の中學校長とも別れなければならないことになつた。彼は恩人に宛てゝ長い詫の手紙に、これから改めて高等學校の英文科の試驗を受けて、どんな苦學をしてゞも、大學を卒業する迄自分一人の力でやり遂げた上で、此度のお詫をしたいと書いた。そして師範の寄宿舍から今の下宿の入井の家に引越して來た次第である。

　赤木阿珂丸が錢湯の歸り途で、引越車を引いて來た巳武良夫に會つた時、後者の方では前者の中學卒業後から當時までの經歷の概略を、そんな風にして聞く機會を持つたが、赤木の方は巳の境遇に就いて殆ど知るところがなかつた。が、要するに何方の一方も他の何方の一方の經歷に興味を持つてゐなかつたので、その際兩方ともそんなところで會つて、厨戸が仲に這入つた爲に、用事ありげに立止まらせられたことに、少なからぬ迷惑を感じなければならなかつた。が、それは一瞬間のことであつた。

「失敬」と言ふなり、巳は忽ち轅棒に力を入れて前進し始めた。

「あゝさよなら、」と言つて、赤木も反對の方に手拭を振り振り歩き出したが、彼はその時非常に不機嫌になつてゐた。それは何故かといふと、巳に會つたことではなくて、巳に先を越されて「失敬」と言つて歩き出されたことであつた。無論その場合一刻も早く別れる外はなかつたのであるが、別れ際に相手に先を越された氣持は、中學四年の時に一番の席を彼に取られた時よりもつと惡い氣持であつた。呆氣にとられた厨戸が進行し出した車を後から片手で押しながら、「さよなら、」と如何にも濟まなさうに挨拶したのに、彼は唯「あゝ」と口の中で言つて頭を振つたゞけで答に代へた。

　それから二三日の間、赤木阿珂丸は大淀の伊能猪之吉が尋ねて來るのを朝から晩まで心待ちに待つてゐた。元より、さ

ういふ事がなくても、學校へ行くことなどはなかつたが、それでも斯うして人を待つてゐると、學校にも出ず、散歩にも行かずにといふ氣がして、彼は何とも言へぬ苛々した氣持になつた。それと同じ理屈で、これ迄は自分の方から尋ねたこともなく、又先方からやつて來ることもなく、それどころか顔を合はすことさへなかつたとしても、少なくとも己とか厨戸とかいふ知り合ひの人間が、この同じ下宿の中に住んでゐるといふことだけで、幾分か心强い氣がしてゐたが、今は完全にこの下宿中で孤獨の位置であるといふことが痛感されると、それも彼の心持を妙に寂しくすることに役立つた。彼は又朝から晩まで寢轉んでゐては讀み、立上つては障子を細目に開けて、外の景色を見ては暮した。が、空地の向う側の、日に日に靑葉を飾り出した木々を透かして見えるところの細道から、到頭ちよん髷を結つた大淀の姿の現れるのを見出すことが出來なかつた。

果は彼は猪之吉にあんな人懷かしい手紙を出したのを後悔するやうな氣持にさへなつた。猪之吉は矢張り昔ながらののつそりした、それは感情といふものがないかと思はれるやうな、それで心の底に變に狡いところのある、一口に言ふとあの目付が濁つてゐるやうに、濁つたところのある猪之吉なのであらう。それから思ふと、あの牛込の三階建の下宿にゐる連中は皆が皆正直で、そして感情そのもののやうな人たちである。「寂しいな」と一人が叫ぶと、ものゝ響が反響するやうに、「然り、寂しい、酒でも飮まうか、」と來る、「歌はうか?」と一人が言ふと、「歌はう。——友を選まば書を讀んで、六分の狂氣四分の熱……」と忽ち他の者が一緒になつて歌ひ出す、——さういふ人たちである。が、大淀の猪之吉はその反對の性質であつた。

阿珂丸はあんまりつまらないので、或朝ふと思ひついて二ケ月ばかり休んでゐた學校を覗いて見る氣になつた、無論何と何との講義がある日だかさへ知らなかつた。十時少し前で、敎場に這入つて行くと、中にゐた學生たちが一勢に阿珂丸の方を、外國人でも迎へるやうに見ると思へた。彼は若しかすると、その時間は彼の級はどこか別の講堂へでも行くこと

になつてゐたんぢやないかと不安になつたが、なあに、違つてゐたら法律の講義でも、經濟の講義でも、あるがまゝのものを聞いてやらうと腑を固めて、外の人たちから餘り離れないところで、然し机にして二つ三つばかり離れたところを選んで腰を下ろした。そして暫く頭痛でもするやうな恰好を装つて頭に手をやつて俯向いてゐた。

そのうちに、大抵他の學生たちの注意が醒めたと思ふ時分に、彼は顔を上げて、少しづつ四邊の人々を物色して見た。すると、中には全く見覺えのないのもあつたが、大部分は言葉こそ交したことはないが一度や二度は見た覺えのある、彼の同級生たちに違ひなかつたので、これで先づ政治や商業の講義を聞かされる心配はないと安心した。もつとも何處の大學でも大抵さうであらうが、こゝでも文學科の教室で文學の講義を聞くことは、寺で宗教の眞理を聞かうとするよりも無駄なことに違ひなかつた。こゝでは與太な語學の智識しか持たない講師から、英語で書かれた文學書の拔萃の、その又一部の譯讀を聞かされるのが關の山であつた。だから、それが謂はゞ生意氣な學生である阿珂丸や、彼がそこで言葉を交すやうになつた學生——つまり牛込の三階建の下宿に居るやうな連中が、段々この教場を輕蔑して、遠ざかつた所以でもあるのだ。

「やあ、」と言つて、その時阿珂丸の傍へ寄つて來た學生があつた。こんなやくざな教室に集つて居る人間の中で、俺に聲をかけて來る者がある筈がないが……、若しかすると例の三階建の下宿の連中の一人でもが、丁度今日の俺のやうにふらりと氣まぐれにやつて來て、俺の來て居るのを見付けたのか知ら……誰だらう?——咄嗟の間にそれだけの考へが阿珂丸の頭の中に閃いたが、それは見覺えのあるやうな、見覺えのないやうな、一度位口をきいた事があるやうな、ないやうな……と考へる間もなく、あゝ、反子牛四郎かと彼は氣がついた。

阿珂丸はいつこの男と知り合ひになつたか覺へてゐない。度々言つたやうに、彼はこの學校に入學した初め二週間ばかりの間は外の學生たちと同じやうに、時間割に依つて教室に出て來たので、その間にいつとなく、所謂同氣相求める五六

人の人たちと友達になつた、さういふ五六人の仲間が彼方にも此方にも一とかたまりづゝ出來て、何といふことなく城郭を築いて、張り合ふやうになることは、中學校でも大學校でも、或ひは工場でも兵營でも、凡そ多人數の者が寄り合ふところに見る現象である。中には割合に自由な仲間もあるし、かと思ふと黨派心の強い組もあるし、又箇人々々としても、開放的な男もあれば、排他的な氣持の强い人間もある。そして、赤木阿珂丸は黨派としても、箇人としても、内心は兎も角、見たところ後者に屬してゐた。それが、いつの間にさういふ彼の仲間に屬しない反子半四郎と知り合ひになつたか、その後この事を考へる度に彼は不思議な氣がすることであつた。多分、半四郎は先の人間別で言ふと、阿珂丸と正反對の性質であつたに違ひない。

だが、相手の色の白い、斯ういふ亂雜な私立大學の古着屋のやうな汚い教場の中で見る、と大袈裟に言ふと貴公子にでもあるやうに見える目鼻立の整つた、小奇麗な紺絣の着物に、稍々派手なセル地の袴を穿いた姿を見た時、彼は忽ちこの男に就いての過去の一つの印象を思ひ出さない譯に行かなかつた。それは半年ほど前のことであつたが、神田の或牛肉屋の二階にクラス會といふものが開かれた。赤木はその頃例の牛込の三階建の下宿屋に、彼の仲間の友達と住んでゐたが、彼等は所謂世紀末文學に溺れてゐた時だつたから、さういふ團體的の會合や、交歡的な催しに加はることを恥としてゐたのだがどういふ風の吹き廻しだつたか、一體どんな馬鹿な事をやるのか、退屈しのぎに出かけて見ようぢやないか、と誰が言ひ出したともなく相談が纏まつて、行つて見たことがあつた。

それは別に變つた會合でも何でもなくて、集まつた者たちが思ひ思ひに牛鍋を突つつき合つて、その間に有志の者が演說をしたり、手品をやつたり、さては詩吟や、落語などと、思ひ思ひの餘興をしたり、見たり、聞いたりする種類のものであつた。ところが、その最後の大餘興として、本式は鬘衣裳をつけた芝居があるから、皆さんそれを見てから歸つて下さい、といふ觸れが廻つて來た。赤木たちの仲間が、然しどうせ碌でもない、下手な飜譯劇でもやるんだらう、つまらな

いから歸らうか、と言ひ合つて居る間もなく、素早く正面に幕が引かれて、木が鳴つて、その幕が開いて、そこに一人の女房が針仕事をして、夫か兄かの歸りを待つて居る場面が現れた。その女房に扮してゐる男は平常脚本家になると自稱してゐる男で、現に何かの同人雜誌で脚本を二三篇發表して居たのを、赤木たちも讀んで知つてゐた。「おいおい、大變なものが始まつたぞ。」と赤木の仲間の者たちは、鼻に皺を寄せて輕蔑の表情をしながら囁き合つた。その時、遲れ走せにその日の餘興の世話をしてゐた學生の一人が、『淸水一角』と書いた紙片を、傍の柱に貼りつけた。すると、そこへ、又別の世話役の一人が、牛鍋の間にごろ〳〵してゐた學生たちの中を、「一寸途を開けてくれ給へ、一寸途を……」といふ先觸れをして來て、そこへ張物板か何かを一直線に舞臺の方に向つて敷き詰めた。即ちそれが花道となつて、そこへ蹣跚とした足取で、銘酊した淸水一角が、突然後の唐紙を開いて、下駄を鳴らしながら現れたのである。だが、この一角は、見物たちに輕蔑させる暇を與へなかつた、何故と言つて、彼は張物板の花道を下駄で鳴らしながら市川左團次張りの白(せりふ)を可成り上手に模倣して、科などの點でも中々隅に置けない巧みさをもつて、赤木阿珂丸の仲間の世紀末派をさへ驚かした程であつた。殊に、彼が、やがて色々とあつて、最後に槍の立廻りを演ずる場面などは、本式の芝居の立廻りの眞似と、學生らしい勇敢さとが一致して、見物に手に汗さした程潑剌たるものであつた。そして、この淸水一角に扮したのが、即ち反子牛四郎だつたのである。」

「あんな奴、文學など止して、役者の弟子にでもなればいゝのに。」赤木の仲間は言つた。

「丁度新劇が流行り出してる時だからいゝだらう。」

「だけど、肝腎の脚本を理解する力があるまい。」

「顔は然し役者向きだね。」

「けど、如何にも分が薄いといふ感じだね、つまり淺薄な顔だね。」

ところで、その反子と赤木とが物を言ひ合つたのは、その一角の芝居より前だつだか、後だかもはつきりしない、現に角敎室の入口か何かでひよつこり顏を見合はし時、反子の方から「お早う、」とでも聲をかけたのだらう、そして「お早う」と赤木が答へたのであらう、がそれ以上の彼等は親密な間柄でなかつたことだけは確かだつた。――

「暫く、」と言つて、反子は何と思つたのか、赤木のすぐ傍のベンチに腰かけた。

「失敬、」と赤木は答へた。丁度場合が場合だつたので、彼はその時の反子に妙に人懷かしさを感じた。「どう、君はずつと學校へ出てるの？　今度、何の時間？」

「シエークスピアだ」

「シエークスピアか。」

氣がつくと、反子は柄になく窓の外の靑葉などを眺めながら、妙に物思ひに耽つてゐるやうに見えた。「どうかしたの？」と赤木は聞かうと思つたが、默つて煙草に火をつけてゐると、

「赤木君、僕は今煩悶してるんだがね、」と相手は何を思つたのか、突然こんな風に話しかけたのである。

「どうしたんだい、出し拔けに？」

「僕は君等と違つてとても文學の方では望みがないと思ふんだ。」と彼は始めた、阿珂丸が文學の方でどの位の才があるか知らない癖に、牛四郎は如何にも當然のことのやうにそんな風に言つた。「それで、僕はいつそのことH――博士の演藝學校へ這入りたいと思ふんだが……。」

「這入つたらいゝぢやないか、こんな偏り文科に居るよりか、」と赤木は言つた。「文學なんて、君、中々大變なものだよ、それに、君は芝居の方がうまいぢやないか。よし給へ、よし給へ、こんな學校。」と、今度は阿珂丸の方で、牛四郎の文學の才を試したこともない癖に、そんな風に斷定して言つた。

「然し、僕の母さんが學校を止しちやあいけないといふんだ、學校の片手間に行くんだつたらかまはないといふんだけど……」

こんな大きな身體をして、「母さん」なんて可笑しい奴だな、と思ひながら、赤木は彼一流の考へ方で、「そんな事、君、何でもないぢやないか。母さんなんて、毎日學校へ行つてるやうに見せて誤間化しておいて、演藝學校の方へだけ行くことにしたらいゝぢやないか？」

「あゝ。だけど……」

その時、始業の鈴が鳴つたので、二人は話はそのまゝで途切れなければならなかつた。

「君、僕は本を持つて居ないんだが、一緒に見せてくれないか？」と赤木は言つた。

「あゝ、いゝとも、」と反子は答へた。「ぢやあ、こゝで並んで見よう。」

そして、反子が風呂敷包の中から取出した教科書を赤木は手にとつて　今どこいらをやつて居るんだ？　と聞く必要がなかつた。何故と言つて、『シムベリン』の初めの頁から第何頁かまで、そこは活字で刷られた英文の餘白のある限りの部分に「さうです、戀しい殿御よ」とか、「あなたは本當に優しい心を持つて居る、」などといふ、どんな中學生の學力でも讀める文章にまで、悉く振假名が附けられてあつた。卽ちその振假名のない部分から今日の講義が始まるものと見て差支へなかつた。なる程、これは隨分劣等學生だな、とそれを見ながら赤木は心の中で叫んだ。「然し、この教室の中に這入つて居る凡そ四五十個の頭は、多分みなこの位の程度なんぢやないかな。矢張り俺はこんな教室へ出て來る必要がなかつた譯だ。試驗の時だけ出れば澤山だ。」と、そこで彼は彼の心の持病であるところの、輕蔑癖をもつて考へた。

「君の下宿は何處？」とその時何と思つたか反子はこんな事を尋ねた。そこで、赤木が今の入井の家を答へると、「そのうち一遍遊びに行つてもいゝ？」

「あゝ、來給へ。」

その時、扉が開いて、シエークスピアの講師である、六十歳のH—博士が這入つて來た。——

その日、赤木阿珂丸がシエークスピアの講義を一時間だけ聞いて、下宿に歸つて來ると、机の上に大淀猪之吉の、小學生のやうな拙い筆蹟の葉書を發見した。「お手紙有難う。すぐに返事を出す筈だつたが、夏場所の始まる前で、つい忙しくて失禮しました。然し、近いうちに一度お目にかゝりたい、行きます。」斯う鉛筆で認めてあつた。

（つゞく）

讀者諸姉へ

◇東京及震災地一帶もだんだん復舊してまゐります、しかし電燈がついても電車が走るやうになつても何にしろ帝都の中樞が悉く假小屋のやうなトタン葺き、板葺きなので八月までの東京に思ひ比べて涙がこぼれます。そしてそこには一枚の蒲團もない同胞がごろ〱しているのには全く泣かされます。今年の年越しが思ひやられてなりません。

◇「女性改造」も今月でほぼ復舊しました。殊に本月號には野枝さんの最後の作で、女史近來の力作と稱せらるる遺稿や、殺された宗一少年の母である橘あやめ女史のとどろく胸を打ちおさへつゝ追憶の筆を執つて下さつた原稿、大杉夫妻の若き日の燃ゆるやうな戀文、我一流作家たる野上女史の追悼記などは他の雑誌には見られぬ異彩あるものであります。

◇それから賀川さんの散文、菊池氏の恩師厨川氏に對する思ひでも呼びものの一つでありますが、澤田正二郎君の遭難記は一風變つたものです。

◇「女性改造」の災震號は賣切れとなりました。本月から「復興畫報」として毎號「女性改造」で新東京の復興狀態を御紹介いたすことになりました。それで本誌の購讀者は坐ながらにして復興しつつある帝都のありさまを知ることが出來ます。

◇讀者諸姉より募集しました短篇小說はいよ〱正月號より發表します。今後もドシドシ御投稿下さることを希望します。

◇十二月號の婦人雜誌は總て休刊のことになりました。これは全國の婦人雜誌が悉く休むのですから私どもは其規約に從つて正月號でウント力瘤をいれて諸姉に相見えることにいたします。

・・・

◇ことしは之でお別れといたします。どうか力強い齡を迎へて下さい。意義ある計畫を樹てて新春を迎へて下さい。

◇本誌御注文の方々は爲替にして下さい、當分振替が中止されていますから。そして十月廿日から本社は從前の場所にバラックを建設して引越しました。

◇十月號に掲載するつもりで震災四日前に催した「女性改造の談話會」は原稿整理の都合で止むなく延引しましたが新年號から堂々復興しますからこれも期待してゐて下さい。

女性改造 定價表

冊數	定價	郵稅
壹冊	五十錢	壹錢五厘
六冊	參圓	郵稅共
十二冊	六圓	郵稅共

註文の注意

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵稅拾六錢を申受く(但し支那を除く)
◇見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌一頁廣告料 一等百圓 二等七拾圓

◎本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

大正十二年十月十三日印刷納本
大正十二年十一月一日發行
(十一月號金八十錢)

編輯兼發行 印刷者 東京市芝區愛宕下町一ノ一 平田貫一郎
印刷所 東京市牛込區山吹町一・一 株式會社秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話高輪二九七一
振替長野三二八〇

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可 大正十二年十月十三日印刷納本
十一月號 定價八拾錢（送料）

